―また別のマビノギ―

タルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―また別のマビノギ―

【Ｎコード】
Ｎ５７８４Ｓ

【作者名】
タルキ

【あらすじ】
　オンラインゲーム「マビノギ」を元した二次創作の小説です。実際にゲーム内にいるＮＰＣやオリジナルキャラクター達が織り成すストーリーとなっております。挿絵は描けないので文章により描写説明が多い書き方をしています。未熟者ですのでご満足して頂ける内容に仕上がっているか判別つきませんが、少しでもお目を通してくれた方々が楽しい時間を過ごせることを祈っております。
　『注意点』一章がものすごく長いです。一章１万文字（四百字原稿用紙、二十五枚分）くらいが普通にあります。読むのに時間が掛

かるのが苦手という御方にはあまりお勧め出来ません。
『注意点2』実際のゲーム内のＮＰＣや地名、装備名などは同じでありますが、ゲームとは全然違う物語です。実際のゲームはこんな感じではないので勘違いなさいませんように願います。

初めに『お読み頂く前の注意点』（前書き）

【強い注意点】

あらすじにも書きましたが、実際のゲームとはほとんど違います。
勘違いまさいませんように願います。

初めに『お読み頂く前の注意点』

『お読み頂く前の注意点』（読みたい方だけどうぞ。必須ではありません）

○若干、マビノギをプレイした方以外だと分かり辛い描写があるかもしれません。ご容赦（ようしゃ）ください。

○この物語は実際の公式設定と、創作設定の入り混じって織り成されるストーリーとなっております。

○本小説では、実際は「ミレシアン」ですが、異世界から来た者を「ミレンシア」と描写（びょうしゃ）しております。

○この物語の中ではミレンシアは世界にほんの数人程度しかいない設定となっております。故に元々エリン（舞台となる世界の名前）にいるトゥアハ・デ・ダナン（ゲーム内でのＮＰＣ達のこと）のオリジナルキャラクターと、本来ゲーム内にいるＮＰＣ達が出てくる構成となっております。

○挿絵はありません。

○筆者は完全に素人であります。文章が読み難いことや、変な文法を使っている部分があるかも致しませんがご容赦して頂ければ幸いです。

○この物語の中ではＮＰＣ達の性格は創作設定と公式設定が混じっております。そのため「このキャラはこんなキャラじゃないっ！！」と、こだわりのある御方はお読みにならない方が良いかと思われます。

○二次創作なので‘メアリースー’に該当するのは当たり前ですが筆者はそれを踏まえた上で物語を展開していきます。受け付けないという御方は読まれない方が良いかと思われます。

○詠唱呪文は全てウェールズ語表記となっております。ケルト神話の舞台は三つほどありますが、マビの大部分は「ウェールズ神話」を題材とされているようなので。文法に少し怪しい点もありますが、

生暖かく見てやって頂けたら幸いです。

ちなみにウェールズ語は一部英語と同じ表現があります。

例……学校

（英語）……Ｓｃｈｏｏｌ

（ウェールズ語）……Ｙｓｇｏｌｉｏｎ

例……攻撃

（英語）……Ａｔｔａｃｋ

（ウェールズ語）……Ａｔｔａｃｋ

○以上のことが大丈夫、と言われる御方だけお読み頂くことを強くお薦(すす)めします。

では、お読み頂ける方々へ。少しでも楽しい時間が訪れることを未熟者ながら祈っております。

―序章―（前書き）

そこはどこか分からない世界で、どこか分からない空間だった。

―序章―

そこは白かった。

白い床と、真っ青な空。空にはハトが無数に飛びまわっていた。だが、何かが違った。そのハトは生きて飛んでいるようだが実体がないようにうっすらとした体をしていた。

白い虚無空間。そんな言葉が思い浮かんだ。あの世とはこんなところのような感じだろうか。

自分自身にも実体がないような感覚で、ぼんやりと虚像のようなハトの飛び回っている空を見上げていると黒い女性が空から、いや突然現れて舞い降りてきた。

綺麗な女性だった。絹糸のような銀色の髪をツインテールにまとめていた。そして、どこか悲しそうな憂いを帯び透き通るような青い目をしていた。

その女性はふわりと、重力などないような軽やかさで地面に降り立った。

もしかしたら、この白い世界には本当に重力なんてものはないのかもしれない。もしくは、この女性はそんなものに束縛されない存在なのか。

まるで女神のような女性を呆然と見つめていると、先ほどの疑問が伝わったのか。くすり、と。その女性は口に指を当てて魅惑的な笑みを見せた。

そして、自分自身に変化が起こっていたことに気がつく。

先ほどまでは、ぼんやりとしか感じられなかった世界が急に、眠りから覚醒するときに感じるような感覚で世界を実感し始めていた。

困惑しているといつの間にか目の前まで来ていた女性が、優しく微笑んだ。そして、魅惑的な笑みを浮かべたままその女性は言葉を発した。

「わたしは――」

それが全ての始まりだった。

―第一章―　ティルコネイルのミレンシア（前書き）

補足

〇人物紹介の部分がくどいかもしれません。より細かく説明を入れていますので。そういう作風ですので、軽く流すかくどいのがお嫌いという場合はお読みになられない方が良いかも致しません。

―第一章―　ティルコネイルのミレンシア

そこはエリンと呼ばれる世界。そして場所はティルコネイルという村。

ウルラ大陸北西にある北に雪深いシドスネッター、南に伐採キャンプトゥガルドアイルへの道を持つ山間の村である。坂道が多く、自給自足を行なうティルコネイルの印象は小ぢんまりとした平穏という言葉を具現化したようなのどかで小さな村。

最近は魔族が動物を魔符（まふ）で凶暴化させる事件が各地で多く起こっている。だが、まだまだティルコネイルのような辺境の地にはあまり多くの凶暴化された動物はなく、平穏である。

「キャィンッ！」

一人の青年が剣の腹で見舞った一撃で、一匹のオオカミが殴り飛ばされて気絶した。

「……Ｙｒ　ｗｙｆ　ｙｎ　ｇｗｅｌｌａ　ｉ　ｃｈｉ，　ｕｎｌｅａｓｈ（我は汝を癒し、解き放つ）」

呪文を唱えてマナを操り、オオカミを癒す。そして、オオカミの中から薄っすら暗い光を放つ魔符が浮かび上がった。

それを手に取るとオオカミは目を覚まし青年を見て怯え、森のほうへ逃げて行った。魔符からの光も消える。

「ふぅ……」

一仕事を終え、青年は一息もらす

青年の名前はコウサカ。ただの人間ではなく異世界から現れた存在『ミレンシア』である。

年齢は十九歳。無駄のないがっしりとした筋肉質の身体で背は百八十四ｃｍ。短い藍色（あいいろ）の髪をオールバックにしてまとめ、鋭く光ら

せている瞳の色は茶色。
　アリッシュアシュビンアーマーという全身を覆う服のように上下に着られるチェーンメイルにその上から肩まで覆う胸鎧、前腕から指を除いて覆うガントレット、膝まで包むグリーブ、口元以外を覆い隠す兜でその身を固めている。
　ただこの世界に来たせいか、元からなかったのか記憶がない。

　ソウルストリームと呼ばれる異世界とエリンの狭間（はざま）にある世界より引導者ナオに導かれるままにティルコネイルへと降り立ち、コウサカは今現在ティルコネイルの自警団の団員として、またモンスターハンターとして生計を立てている。
　自警団に入っているのはダンカン村長の厚意でそのほうが村の者とも自然と交流が生まれるからと、コウサカは下げた頭が上げられない思いである。
　またダンカン村長より魔族により操られた動物から魔符を引き剥がす魔法を教えてもらってあるため、無駄な殺戮（さつりく）を行なわずに魔符の回収を行なえる。
　今日も日課である魔符によって凶暴化させられた動物「魔操獣（まそうじゅう）」と化した動物から魔符を回収していた。
　魔操獣とは「魔族に操られた獣」の意である。操られたからと言って強くなっているわけではないが恐怖心というものが一切失せており、ただ無差別に殺戮を行なう。特に積極的に人間を襲うようになっている。
「……最近、増えたな」
　誰にともなくコウサカは言う。
『ホントにねぇ～……。おかげであたしはボロボロよっ！　まったくっ！！』
　と周りに誰もいないはずが少女の声が聞こえる。それはコウサカの握った刃渡り百五十ｃｍほどもある大剣クレイモアから発せられていた。

「愚痴を言うな、朔絆。増えたものは仕方がない」
そうコウサカは全く驚く様子もなく、握った剣を背中の厚手の皮で作られた鞘に戻しながら話しかける。

精霊武器と呼ばれる武器に宿る精霊、朔絆。精霊石と呼ばれる希少なものをドルイドと呼ばれる魔法的に高度な技術を有する僧侶に契約してもらい以後、コウサカの相棒となった。
外見はせいぜい十三、十四で背が百四十四ｃｍほどの少女であるが精霊の外見年齢など当てにならない。茶色と肌色を基調とした胸当てに、どこか鋭角的なデザインのスカートに身を包み、スカートの中が見えてもいいように黒いスパッツのようなものを穿いている。
強気そうな深緋色の瞳、金茶色の肩を少し超える髪をちょこんとツインテールにまとめていた。ただ、その背には剣の羽があり、頭には複雑な紋様の刻まれた金属製であろう三角の形をしたものがまるで耳のように二つあった。ちなみに、本来の耳はある。
スリーサイズはＢ７５・Ｗ５９・Ｈ７８くらいである。
身体の大きさを自由に調整して剣の中から現れることが出来るらしく、実体化が三十ｃｍほどの背丈で現れること、完全実体化を本来の背丈で現れることと言っている。

『まったくぅ～……。ホント、どうなってんのよ』
「あとで食べ物やるから、機嫌を直せ」
コウサカは周りに敵意を感じないことを確認して、村へ向かう。
「ふむ。しかし、確かに最近の出没頻度は少し異常だな」
今日、魔符を剥がしたオオカミの数は十匹ほど。先月は一日でせいぜい多くて四匹がいいところだった。
コウサカにとって魔符は、主な収入源である。モンスターハンターもやってはいるが、ほとんど自警団としての仕事が多いためそちらでの収入は全くない。そもそも、ギルドがあるのはティルコネイルから遠く離れたダンバートンである。そうそう軽々いけるもので

はない。それは時間的な意味もあるが、いまは動けない別の理由もあった。

（俺が離れたら自警団が厳しくなるだろうからな……）

ティルコネイルの村には、だいたい八十人程度の人が住んでいる。それで自警団がコウサカも含め十五人程度。しかも、その中でまともに正面きって戦えるのは、トレボー、レイナルド先生、コウサカ程度だ。他は全くの素人と言っていい。

そしてそんな中、魔操獣が多くなってきてしまっている。

「俺としては、商売繁盛なのだが……」

と、コウサカが小さく冗談がましく言うと。

『冗談じゃないわよっ！！』

そう怒鳴った朔絆は、いまは剣から出て肩に乗れるくらいの大きさになってコウサカの目の前に浮かんでいる。

『毎回、毎回使われるあたしの身にもなってよねっ！？』

まあ分からないことはない、とコウサカは心中で苦笑する。生き血を浴びているわけではないにせよ、相手に力いっぱい叩きつけられるのだから。

「わかった。今度からお前は使わない」

『……え？』

朔絆がきょとん、とした。

「カイトシールドと、銀行に預けている剣でも引っ張り出すとする」

コウサカは、さも特に何も気にしていないように言う。

『あ、え、えっと……。あ、あたしね？　別にそんなにイヤじゃないんだよ？　でも、やっぱり無駄に使われるのはイヤって言うか……』

と、さっきの威勢はどこへやら。朔絆はしどろもどろに、早口で言い募る。

「ふ、ふふ……」

コウサカは堪えきれずに吹き出した。

『あ……、あんたねぇーっ！！』

からかわれていたのがわかって、朔絆は顔を真っ赤にしてコウサカの眼前に飛び出てくる。コウサカは足を止めた。
「はは。いや、すまない。つい何となくな」
『なんじゃそりゃーっ！！』
大激怒。付き合いの長いコウサカはここら辺が引き際であると判断する。
「まあ、もう少しお前を大事にすることにする」
手を伸ばして、指の腹で優しく朔絆の頭を撫でる。
『そうやって、いっつも誤魔化す……』
そうは言いながらも朔絆は別段抵抗もせず、怒りのボルテージも急激に下がっていく。
「まあ、誤魔化しでもあるのは否定しない」
『あんたのそういう正直なところ、結構スキだわ……』
いきなり、がっくりと肩を朔絆は落とした。
「そう落ち込むな。大事にするという部分も本心だ」
『え？』
顔を上げてまたきょとん、とする朔絆。
「あの程度の相手にお前を使うまでもない。今度からはカイトシールドと……バスタードソードでもあれば十分だ」
コウサカは指の腹でもう一度、朔絆の頭を撫でる。
「俺は朔絆、お前を単なる使い捨ての武器として見てはいない」
コウサカは真っ直ぐ、眼前にいる朔絆の目を見つめてそう言った。
『え、あ、あぅ……。い、いきなり何いってんのよっ！　バ、バカぁっ！！』
朔絆は顔を真っ赤にして、姿を消した。剣の中に戻ったのだろう。
（……こうして話して、触れて、笑っている女の子を単なる武器として見られるわけがないだろう）
一度、コウサカは空を見上げた。
（……心は残っているのだろう）
そうコウサカは心の中で呟き、再び村を目指して歩き出す。

旅館。
「村長が？」
「ええ。ついさっき、こちらに来られて」
コウサカは自分が部屋を貸してもらっている旅館に帰ってきて、すぐに旅館の主人から村長の伝言を聞いた。
「ふむ。わかりました。わざわざ感謝でした」
「いえいえ。では、いってらっしゃい」
帰ってきてすぐに鎧姿のまま旅館を後にする。

村長の家。
「ダンカン村長」
「おお、コウサカ。よく来てくれた」
コウサカが村長の家に入ると、ロッキングチェアに腰掛けていた村長が立ち上がって出迎えてくれた。

ダンカン村長は百七十ｃｍほどの背に顎には白くなった髭を蓄え、背にかかるくらいの白髪に、茶色の瞳の高齢であるが背の真っ直ぐ伸びた御仁である。若かりし頃は弓の名手として知られ、過去に人間と魔族の争った第二次モイトゥラ戦争にも参加した古強者である。
だが今はティルコネイルの村長として村人に慕われながら、悠々自適な隠居生活を送っている。

「ああ、そのままで構いません」
「いや、ちょっと付き合ってほしいことがあってね」
そう言って村長は、出入り口まで上がってくる。
「？　なんです、一体」
「まあ、とりあえずついて来なさい」

「ふむ。わかりました」
そう言った村長が歩き出したので、コウサカもそれに続いて歩き出す。
「何か問題が？」
「問題と言えば、問題だね……」
村長の顔が曇った。
「……そんなに深刻なんですか？」
「いや、一概（いちがい）にそうとも言い切れないのだが」
「……要領を得ないですね。何なのです？」
「いや、とりあえず来てくれ。話はそれからしよう」
釈然（しゃくぜん）としなかったが、コウサカはやはり見た方が早いと村長に続いた。

聖堂。
「お邪魔するよ」
「あら、ダンカンさん。それにコウサカさんまで？」
聖堂の中に入ると、背の中ほどまでかかる黒髪に茶色の瞳をして女性用の司祭服に身を包んだエンデリオン司祭が二人を出迎えた。

エンデリオン司祭はティルコネイルの聖堂の女性司祭である。優しく、美しく、また気遣いも出来る。故に村で人気の司祭である。いつも優しく微笑んでいて、そして本当に心から優しい女性である。背は百六十ｃｍほどでスリーサイズはＢ８２・Ｗ５７・Ｈ８３くらいである。

「あの子の様子はどうかね？」
「ああ、それでコウサカさんを連れて来られたのですね」
「どういうことですか？」
二人は事情を知っているようだが、コウサカには全く事情がわか

らない。
「こっちに来なさい」
そう言って村長は聖堂の中にある一室へ入っていく。コウサカがエンデリオン司祭の方を見ると、頷かれたので村長に続いて部屋に入る。
「コウサカ。この娘を見て、どう思うかね？」
村長がそう言って示した方を見ると、一人の見知らぬ少女がベッドの上に寝かされていた。
セミロングの触り心地の良さそうなサラサラとした金色の髪をした少女で、白いポポワンピースがよく似合っている。
「知らない子ですが、迷子か何かですか？」
コウサカがそう言った途端、村長は溜息を吐いた。
「……そうではない。この子から何か感じるものはないかね？」
「感じるもの？」
そう言われて、コウサカは改めて安らかに眠っている少女をまじまじと観察する。すると、村長やエンデリオン司祭たちとは全く異質な気配を感じ取った。
「……この子、ミレンシアですか」
「やはり、そうなのか……」
村長が目を瞑って唸った。
「ナオからは何も？」
コウサカはソウルストリームの引導者の名前を口にする。
「いや、送り届けてきたのはナオだね。しかし、困惑していたな」
「ふむ……」
ということは全く予想外のことだったのだろう、とコウサカは考える。
ミレンシアとはどこか異世界よりソウルストリームを通ってエリンに降り立った者のことを指し示すが、それはその者自身の意思で来るわけではない。前にいた世界のころを全て忘れソウルストリームにいるのである。または召喚される場合もある。ナオはそれを感

じ取ってだいたい来ることが分かると言うのだが、今回はそれが一切なかったということになる。
「……とりあえず、俺ではわかりません。様子を見ましょう」
「やはり、同じだからと言って何かが分かるわけではなかったか……」
「残念ながらそのようです。俺もミレンシアに会ったのは初めてですが」
口にはしないが、もしかしたら魔族の活動が活発になっていることにも何か関係あるかもしれない。
（これは、何か起こるかもしれない）
コウサカは何となく、そんな悪い予感を感じ取った。
「では、村長。俺は失礼しますよ。魔操獣の数も増えてきているので、レイナルド先生と相談して守りを堅くしてきます」
「お、おお。わかった。すまないね」
「お気になさらずに。俺がやるのが一番でしょうから」
そう言ってコウサカは少女の眠っている部屋を後にする。
「あら、おかえりですか？」
堂内で何か仕事をしていたエンデリオン司祭がコウサカに気付いて、近寄って行った。
「ええ。少し村の防備を堅くしようと」
堅くすると言っても限界はあるが、とコウサカは心中で付け足しながらそう言った。
「……あまり無理し過ぎないでくださいね。あなたを心配する人も大勢いるのですから」
「俺が一番強いのですから、それ相応に働かないと。他が危険なことも、俺には大したこともない」
「……そうやっていつも無理をするんですね」
エンデリオン司祭に悲しそうな表情が見て取れる。
「エンデリオン司祭はお優しいですね。だからこそ、こちらも命を張って守る気になるというものです」

「……」

エンデリオン司祭は何かを堪えるように俯いた。コウサカとエンデリオン司祭はよくこの問答をしている。暖簾に腕押しではあるが。だからコウサカはここら辺が引き際だと判断をする。

「では、俺はこれで」

コウサカは多少、後ろ髪を引かれながらも聖堂を後にする。

「……神よ、どうかコウサカさんをお守りください。お願い、します……」

一人。それは司祭ではなく、少女のような顔で表情を曇らせたエンデリオン司祭が閉まる扉を見つめていた。

『あんたってさ～、ホントにバカだよねぇ』

「いきなり何だ？」

落ち着いたのか、また軽口を叩きに朔絆が出てきた。

『ミレンシアってのを抜いても、かなりすごい奴なんだけどなぁ～……人生経験がまだまだ……』

「お前には言われたくはないな」

コウサカとしては知識をくれと言って毎回毎回、物を強請られている身としてそれだけは言いたかった。

『なんか心の中で余計なこと言った？』

「いや別に」

朔絆は契約のせいかどうか分からないが、たまにコウサカの心を読んだようなことを言う。

『まあ、鈍感だから誰にもなびかないからいいけどさ……』

「？　何だそれは」

『な、なんでもないっ！　ないっ！！』

「最近のお前は何か面白いな」

すぐに赤くなってあたふたするところとか。言ったら確実に怒るからコウサカは口にしないが。

「まあ、何故鈍感なのかはよくわからないが、いまは強さだけで十分だ」
いまコウサカが必要としているのは、全てを守り切れるだけの力である。
「……強くなければ、守れない」
それはどんな世界。時間。場所。全てにおいて変わらない。
『……あんまり……気負い過ぎても失敗するよ』
「わかっている。その程度の初歩を忘れはしない」
コウサカは自分を英雄だ、特別だとくだらない勘違いはしていない。
「だが、いまは俺しかいない」
ただ、この村を守りきれる最も有力な力として自分の持てる力を行使しようとしているだけである。

ティルコネイルの学校。
「足が狭いっ！　もっと開いて、地面に踏ん張って力を込めろっ！！　そこぉっ！　気合が足りん、気合がっ！！　声を出せぃっ！！」
学校は聖堂のある丘を下ったところにあり、まだ聖堂から結構距離があるはずがコウサカの耳にはレイナルド先生の怒声が聞こえてきた。

レイナルド先生は百七十七ｃｍほどの背で藍鉄色（あいてついろ）の背中にかかる髪を後ろで縛り、力強い濃藍色（こいあいいろ）の瞳をした中年の中ほどの男性である。自警団の一員としても活動しているが、その戦闘における知識と技術を学校の先生として、ティルコネイルの学校で剣術や体術を教えている。戦うことの意味、強くなるとはどういうことかということも同時に教えている。勇敢な戦士として数々の噂を持つ。
「やっていますね、先生」

生徒――と言っても成人男子から子供までいるのだが――の前で声を張り上げていた先生に、コウサカは声をかける。
「ああ、コウサカか。よく来たな。各自、自由っ！」
先生がそう言っても皆、木刀を振るうのを止めない。皆、大事なもの、人がいるのだ。そして、自分達が弱いことをよく自覚している。だからこそ、いまこの瞬間に一生懸命に少しはマシになろうと頑張っている。
「……将来有望ですね」
「まだまだ心意気だけだがな」
そう厳しく評価する先生の顔は、しかし嬉しそうだった。
「先生。少し村の防備のことで相談したいことが」
「わかった。中で話そう。茶くらいは出すぞ」
「わかりました」
二人は平建ての校舎にある教室に入る。本当に習うための設備しかないため、客間などはない。
「ちょっと待っていろ」
「お構いなく」
そう言って先生は、校舎に併設（へいせつ）している自宅へと向かった。
「そこまで時間が経ったわけではないが、懐かしいものだな……」
コウサカは少し老化した校舎と少し痛んだ椅子と机、使い込まれて白く汚れた黒板しかない味気のない教室を見回す。コウサカがここで習ったのは六ヵ月ほど前で、たった一週間ほどで一通りのことをクリアして自警団へ入団したが、すでにここで習っていた者達と一緒に励んだことを思い出し束の間の感慨（かんがい）に耽（ふけ）った。
「あ、コウサカじゃん。ご無沙汰（ぶさた）～！」
コウサカが感慨に耽っているとラサ先生に発見されてしまった。
ラサ先生は百六十四ｃｍのほどの背で紅赤色（べにあかいろ）のウェーブのかかった背中の中ほどの長さの髪に、少しイタズラっぽい赤銅色（しゃくどういろ）の瞳をしている。

魔法の素質に恵まれ、湖畔（こはん）都市イメンハマで魔法を学んできた女性である。またティルコネイルの学校で魔法も教えている。実用的な魔法を丁寧に分かりやすく教えてくれるため、彼女を訪れる生徒は尽きることが無い。そのはずなのだが、コウサカにとっては授業中によくいじられたため、人をからかうのが大好きな人物でもあると認識されている。ちなみに酒癖が悪い。

スリーサイズはＢ８４・Ｗ５９・Ｈ８２くらいである。

「なに？　なんか不満でも？」

「いえ、別に」

この人に正論を言っても利かないことはよく理解しているので、コウサカは特に何も言わない。授業なのか、いじられたのかよくわからない魔法についての講義を受けさせられたのをよく覚えているからである。

「もお～、相変わらず釣れないなぁー」

そう言ってラサ先生は、コウサカの後ろから腕を回して、抱き着いた。コウサカは鎧姿であるから、何も感触は伝わって来ないため一切効果がない。鎧が無くても利かないが、コウサカには。

「むぅー……鎧とはひきょうな～」

「意味がわかりませんが」

「だったら、そりゃっ！」

ラサ先生は勝手にコウサカの兜を取った。おまけに頬ずりをした。

「うりうり～、いい匂いでしょ～」

得意げに頬ずりをされるコウサカだが、しかし。

「……はぁ」

「なんで溜息っ！？」

もうコウサカは散々やられているので、慣れてしまっている。もはや、鈍感とかそんなレベルではない。

コウサカは誰かに好意を抱いたり、異性との接触で緊張したりと、そういうことがその感情部分だけが欠落しているのではないかと思

えるほど異常に反応しない。ただ無愛想ではあるが、基本的に親切でお人良しだったりするので感情がないというわけでもない。

「そういうのはもっと純情なやつにやってください」

「つまんなーい。コウサカ、つまんなーいっ！」

「つまらなくて結構です」

コウサカはこれで本当に年上かと思いながら、ふと思う。

「そういう先生は変わりませんね」

「そりゃそうよー。変わる必要ないんだもん～」

「なるほど」

コウサカはこういうことをさらっと言って仕舞えるあたり、そこは羨ましいと思った。

「……ねぇ、コウサカ」

急にラサ先生は真剣な声色になった。

「なんですか。珍しい声色使って」

少し間をおいて、珍しくどもりながら口を開く。

「……あ、あのね――」

「……。なにをしているんですか、ラサ先生」

「……っ！」

面白いタイミングでレイナルド先生が戻ってきた。

「やれやれ……。相変わらず、コウサカに絡んでいるのですか」

そう言って溜息ひとつ。その辺にあった椅子と机を引っ張ってきてコウサカの対面に座る。そして、持ってきたポットからカップに茶を注ぐ。とうもろこし茶である。

ティルコネイルは山間の村だが、この村のあるここだけがちょうどぽっかりと開いた平地も多く、日当たりもよく、奥にはシドスネッターがあるわりには温暖である。ゆえに、とうもろこしも少し小振りではあるが育成も可能なのである。

「な、なんですか！　いいじゃありませんかっ！　わたしの楽しみのひとつなんですからっ！」

コウサカは傍迷惑な、と思ったが口には出さなかった。余計に面

倒なことになるのがわかっていたからである。
「先生。とりあえず、離れてください。話の邪魔です」
「……もおー」
コウサカが身体に回してきているラサ先生の腕を軽く叩くと、素直に離してくれた。コウサカは心底レイナルド先生がいて助かったと思った。
「それで、今度はどんな問題だ？」
すでに、とうもろこし茶を一口つけたレイナルド先生が事が落ち着いたと判断したか、話を促した。ラサ先生も椅子に座った。
「魔操獣の数がこのところ激増しています」
「ほぅ……」
レイナルド先生の目が鋭く細まった。反対にラサ先生の顔色が変わる。
「先月は一日だいたい多くても五、六匹がいいところだったのが、今日は十匹以上いました」
「やれやれ……。まだ新人どもの教育が終わっていないのだがな」
「まだ俺だけで十分持たせられるので、時間はあります。ただ夜は少し怖いかもしれません」
「そうか。夜の見回りを増やした方がいいな。新人共も知らせ役程度なら出来るだろう」
「そうですね。俺ももう少し巡回時間を増やしますよ」
ティルコネイルには、アデリア川という小川を挟んで村側と南の平原から続く東の道に木の板を使って銃眼付きの防護壁を作ってある。板の厚みは一ｃｍほどのものを二枚合わせて立ててあり、高さが一ｍほどのものをつなぎ合わせて二・五ｍを超えるほどの高さ。勿論、簡単には折れない、倒れないように細工も施してある。
「ち、ちょっと待ってっ！」
ラサ先生が慌てたような声を上げた。
「なんです？」
「コウサカ、大丈夫なの……？」

不安そうな、それでいて心底心配そうな顔でラサ先生が詰め寄ってくる。
「どういう意味ですか？」
「君、いっつも無理するから……」
コウサカは自分が強いことをよく知っている故に、周りから見ると明らかにオーバーワークと見えるほどのことをよく行なっている。本人としては無理という程の負担にならなくとも。ラサ先生もそれをよく見てきているため、心配なのである。
「いまは余裕です。しかし、今後はわからない。そんな状況です」
「今後って……」
「もしかしたら、ひと嵐が来るかもしれない。そういうことです」
コウサカはとうもろこし茶を一口飲む。コウサカの口内にとうもろこしの香ばしい香りが広がった。
「なんで……」
「……ズズ」
キッと顔を上げたラサ先生の顔には怒りのような不安のような、そんなものが入り混じったものが浮かんでいた。
「なんで、そんなに他人事みたいにしていられるのっ……！」
それは怒声、というよりは悲鳴のような声だった。
「慌てても仕方がありません。いまのところは間引きを続けるくらいしか手がない」
「死ぬかもしれないのに」
「守りきって死ねるなら本望です」
ラサ先生の言葉を遮って、コウサカは言葉を口にする。その声はあまりにも達観としていた。
「俺はいま出来ることをするだけです。それ以外、出来ることもないので」
そう言ってコウサカはもう一口、とうもろこし茶を飲む。
「……バカっ！」
とうもろこし茶の香りが広がった教室から、ラサ先生は走り出て

行った。たぶん泣きながら。
「……全く。あれで年上だと言うのは無理があるでしょうに」
「もう少し……言い方があったと思うがな」
一部始終を見ていたレイナルド先生から、コウサカは嗜められた。
「いいんですよ。それにほとんどは事実です」
その言葉にとうもろこし茶の入ったカップを口に運んでいたレイナルド先生の手が止まった。
「お前がいても……、キツイのか？」
「恐らくは。だんだんと多くの動物を使役できる力をつけてきているのだと思いますよ、魔符を使っている魔族も」
その生き物の全てをコントロールするには、多大な精神力と魔符が必要である。魔符はまだ簡単に作れるとしても、一度に多くを使役するための精神力は早々つけられるものではない。もし失敗したら、使役した動物たちの思考と憎悪に飲まれて、精神崩壊を起こしかねない。
「こういう場合は元凶を叩くのが一番ですが、如何せん。その元凶がどこにいるか全くわからない。ですが」
「考えはあるのか」
「たぶん、圧倒的な戦力を整えたらそいつも一緒に攻めに来ると思いますよ。こういう姑息な手を使う輩は、自分の成し得る結果を見に来たがるものです」
それについては、ほとんどコウサカの勘ではあるが。
「つまり、いまは待つだけか」
「その通りです」
またコウサカは、とうもろこし茶を一口。
「新人の育成をお願いします。せめて、弓をしっかりと引けるレベルで構いません」
「俺を見くびるな。それよりはずっとマシにしてやる」
とうもろこし茶を飲み干して見せたレイナルド先生の顔は、挑戦的に笑っていた。

「お願いします」
コウサカはとうもろこし茶を飲み干して、取られた兜を脇に抱えて席を立つ。
「任せておけ」
コウサカは虚勢ではなく、本気でそう言える先生を心から尊敬できると思った。

ティルコネイル北、鎮守の森。
ティルコネイルには村長の家のある小高い丘から少し上がったところに墓場がある。鎮守の森はそのさらに奥にあり、その更に奥には、過去の大戦時に山自体をくり抜いて作られた大要塞・大迷宮の地下要塞ラフが存在する。いまはアルビダンジョンと呼ばれているそこは、魔族や野生動物たちの巣窟（そうくつ）と化している。ある仕掛けで入り口は封じてあるため、そこから何かが這い出て村に危害をもたらすことはない。
鎮守の森には、大きな朽ち果てた巨木がある。村人たちは、その木を「神の木」と呼んでいる。
その由来は、その巨木を護って住み着いているクモたちにある。
以前、アルビダクモたちの魔符が消し飛んだと言う。さらに、クモたちを率いていた赤いクモは人語を解せるようになり、テレパシーで対話も行なえるようになったという。
「全くどんな仕掛けなんだか」
『・・・・あたしに聞かれてもわかんないよ』
「独り言だ。気にするな」
鎮守の森に住み着いているクモたちは、とにかく巨大である。ボスの赤いクモは成人男子ほどもある。クモ嫌いの人間にとってはまさに地獄のような場所だろう。
巨大ゆえにクモの巣を張ることは出来なくなってしまっているが、上質の糸が取れるため村人はよくここへ来て糸の採取を行なってい

る。その礼として村人は食料の提供や住処作りの手伝いを行なっているため、村とは共同体のような関係にある。

　このクモ達もまた、ティルコネイルの守り手を担っている。

「朔絆、お前も精霊であるならあの木から何か感じないか？」

　コウサカは実体化して肩に乗って足をぶらぶらさせている朔絆に聞いてみる。

『も、ってところが気になるけど……。あたしは何も感じないよ？』

「ふむ……」

　コウサカも木には神が宿ると聞くことはある。だがそれは果てしない年月を生き、生命を感じさせる大木であるならである。朽ち果てて葉の一枚も残っていない枯れ木に神が宿るなど聞いたことが無い。

『あんま気にしても仕方ないと思うよ～？　あの木が何で不思議なんだ、って考え始めると限（きり）がないよ』

「哲学（てつがく）に果ては無い、か……」

　確かにその通りだとコウサカは思う。何で、何でと考えていてはどれだけ時間があっても足りはしない。

「それもそうだな。不思議なものは不思議だ」

『あいっかわらず、切り替えはやっ……』

　朔絆が呆れて溜息をついているがコウサカは気にせずに、過去の大戦やこの村で亡くなっていった人々の眠る墓地を過ぎて、鎮守の森へと向かう。

　コウサカが白クモ達がかさかさ、わさわさして村の人達が糸を分けてもらっている中を過ぎていくと「神の木」が見えた。何故かこの木の周りだけ木々が避けているように少し開けた空間が広がっている。「神の木」のすぐに下には目立つ赤い色をした巨大なクモが一匹いた。

「ボス」

　コウサカが声をかけると赤いクモが振り向き、いやその場で旋回

してこちらに向き直った。
《……貴様カ》
ボス。モンスター間には、もしくはクモの社会には名前をつける習慣や必要がないのか、名前のない赤いボスクモ。
人語を解し、村とのパイプ役も勤めていて、一族と共に「神の木」を守っている。性格は鉄板のような真面目。
伝わってくる言葉が微妙におかしいのは、人間とモンスターでは波長が完全一致しないからだとか。
ボスに表情はないが、コウサカには嫌々というような感情が伝わってきた。
「ご挨拶だな」
何故かは知らないが、コウサカはボスにひどく嫌われている。人間が嫌いというわけではなく、ただ単にコウサカ個人が気に入らないだけらしいが。
《何のヨウだ》
このボスには冗談や軽口が一切通じないため、コウサカはすぐに本題を話す。
「最近、オオカミの数が増えてきている。そっちはどうだ？」
《同ジだ》
今度はコウサカに真剣な感情が伝わってきた。そういえば、とコウサカは通ってきた中で見たクモ達の中で成人、というか成体の白クモ達の数がいつもより少しだけ少ない気がした。
「恐らくだが、ひと嵐来ることになるだろう。村に防備を堅めるのを手伝ってもらえないか？」
《……いいダろウ》
「ずいぶんとあっさりだな」
《……》
ボスは森の中で遊んでいる人間の子供達と、白クモをちらりと見

た。
《貴様ハきらイだが》
「はっきりだな」
《子供ガ笑っテいらレる世界は守リたイ》
「……そうだな」
このボスも、このクモたちの長なのだ。未来が何を意味するのかよくわかっている。
「なら、頼んだ。俺はもう少し巡回を行なう」
《村長ヤ村ノ者には、世話ニなっテいる。任セろ》
単なる実力社会だと思っていたが動物、いやモンスターの世界にも長の資格というものがあるようだ、とそうコウサカは思った。
コウサカは踵(きびす)を返すと、村中心部へと足を向けた。

―第一章―　ティルコネイルのミレンシア（後書き）

ちょっと余談を。

朔絆とは筆者の創作漢字であります。朔は、陰暦で月のはじまりを意味し、絆はそのまま。このふたつで「はじまりのきずな」という意味で、両漢字の頭を取って「朔絆」です。実際にはないので、勘違いなさいませんよう。

―第二章―　変わらないはずだった日常（前書き）

『補足』

○本文中で出てくるギルド『ダンブレテン』は現実に存在するイギリス、スコットランド中西部の工業都市ダンバートン（Ｄｕｍｂａｒｔｏｎ）がある地名のダンブレテンより取らせて頂きました。この地名はゲール語のＤｕｎｂｒｅａｔａｉｎ（「ブリトンの要塞都市」の意）に由来致します。

―第二章―　変わらないはずだった日常

食料品店。

腹が減っては、戦は出来ぬ。その言葉の通り、いくらミレンシアであるコウサカとてスタミナが無尽蔵にあるわけではない。腹は空くし、常人よりは遥(はる)かに少ない時間とはいえ、睡眠も必要である。

「ケイティンさん、腹が減った」

それがコウサカの店に入って開口一番の言葉。

『あんた、バッカだよねぇ……』

朔絆(さき)が何か言うがコウサカは無視した。

「くすくす。あらあら、ちょっと待っていてくださいね」

昼食の時間も過ぎて、ガラガラの店内で店番をしていたケイティンは笑いながら店に並べられていた食品をいくつか手に取って奥に引っ込む。軽く料理をしに向かったのだ。

ケイティンは母と二人で食料品店を経営する女性で、素朴な味わいが人気のポポスカートというロングスカートの上にエプロン姿がトレードマークの食料品店の看板娘である。また病気で床の伏せっている祖母をいつも案じている優しい女性でもある。店の食品を使ってその場で軽い軽食も作っており、その場で食べられるように店内には小さな卓と椅子を置いている。最近、少し体重が気になるご様子。

スリーサイズはＢ８３・Ｗ６９・Ｈ９０くらいである。

『ねー、あたしのゴハンはー？』

「……」

コウサカは黙って、店の隅に置いてある収納箱を指し示す。ケイティンの厚意で、朔絆の食料もここにおいてあるのだ。食料というか、武器や道具類が。置く量は少量に止めて邪魔にならないように

している。
「そこの箱から勝手に取って、食べていろ」
『わ～いっ』
朔絆は声と同時に完全実体化を行なって、店の隅に置いてある木製の収納箱に向かって行って物色を始めた。
「やれやれ……。いつもは自分で子供扱いするなと言うものを」
コウサカには、元気な女の子が無邪気に収納箱を漁っているようにしか見えない。
「まあ、あれがなければ、だが……」
背中から羽のように生えている剣と頭の飾りのようなものがなければ、本当に普通の少女と変わらない。
「……ふぅ」
コウサカはクレイモアとカイトシールドを壁に立て掛け、店内においてある小さな卓に向かって行き、椅子を引き寄せ腰かける。
と、コウサカの鼻孔が何かを焼く香ばしい匂いを感じた。厚意であり商売で行なってもらっていることではあるが、コウサカは毎度申し訳なくなる。
『～♪　～♪』
コウサカが妙にご機嫌な鼻歌がしてくる方を見ると、朔絆が両手いっぱいに食べ物（鎌や短剣、パズルキューブなど）を持って来て、コウサカの隣に座った。
「……怪我するなよ」
『剣の精霊にする心配じゃないって、それ』
コウサカもそれはわかってはいるのだが、言わずには居られないのは性分（しょうぶん）だろうか。
『いっただっきま～すっ♪』
「……」
コウサカは暇つぶしに幸せそうに食べ物（無機物）を口に運ぶ朔絆を観察してみる。
武器の精霊たる朔絆が食べるのは武器や雑貨、農具などそう言っ

たものである。精霊が道具や武器などを食べる時にバリバキ、ボキとそんな音がするわけではない。その物体の構成分子を分解させて吸収しているとか何とか。とりあえず、口に入れたところで入れた部分が消失して、光の粒子となったそれを吸収している。という程度の理解しかない。

「お待たせしました」

「いつも申し訳ない」

幸せそうに、たぶんわざと美味そうに食べる朔絆を見ていて、コウサカもいよいよ本当に空腹になってきた頃、ケイティンが軽食を持って戻ってきた。

「大丈夫ですよ。こういう売り方もしていますからね」

「しかし、これだけしてもらって、この価格というのは……」

ほとんど材料代程度である。その場で調理を行なって売っていると言っても、ここ価格では採算が取れないだろう。

「あなたは、自警団としてこの村を守ってくれていますから。このくらいは当たり前ですよっ！」

「他の奴等もいますが」

コウサカは他の奴等から、こんなサービスをしてくれるとは聞いたことがない。

「あなたは特に頑張ってくれていますから。特別です」

「……ふむ」

コウサカは特別扱いが嫌いな性格だが、せっかくの厚意を無下（むげ）にするのも忍びないとも思う。

「あ、そんなことより暖かいうちに食べてしまってくださいね？」

「有難く頂きます」

まあ、厚意は素直に受け取っておくもの。恩着せでもないので断る理由もない、とコウサカは半分無理やり納得した。

作ってきた軽食と水の入ったコップを卓の上に置いて、ケイティンも座った。

「今日は溶けたチーズを乗せたベーコンエッグを野菜とパンで挟ん

でみました」
「美味いです」
簡単な軽食だがやはり出来たては美味い、とコウサカは思う。そして、わざわざ簡単にでも料理をしてくれるケイティンに感謝だ、とも。
「……ふふ」
「？　なんですか」
先ほどから、食べるコウサカを微笑みながらケイティンが見つめている。
「いえ、なんかいいなぁ。って」
「なんのことです？」
ガツガツと食べながらコウサカが聞く。
『どんか～ん……』
同じくガツガツと食べていた朔絆が、いきなり横からコウサカに呆れたように言う。
「なんだ？」
『べっつに～』
と、何故か朔絆はふてくされた感じで返事を返した。
「朔絆ちゃんも、相変わらずねぇ」
そう言って朔絆の頭を撫でようとケイティンは手を伸ばした。
『気安く触んなっ！』
と、朔絆は伸びてきた手を払い除けた。
「あらあら」
そんな朔絆の行為にも、ケイティンは笑って見ている。
「おい、朔絆」
さすがにコウサカも見かねて諌(いさ)めようとするが。
「いいんですよ。ふふ」
「む。しかし……」
「い・い・ん・で・す」
「ふむ……」

コウサカもこう言われては引き下がるしかないが、朔絆にはあとで注意しておこうと心に誓った。

『……ふんっ！』

朔絆は残った食べ物（鉄の残骸）を口に放り込んで、剣に戻ってしまった。

「はぁ……。すみません」

「いいんですよ。ムキになって可愛いですから」

「なんですか、それは？」

「あなたには、たぶん言ってもわからないと思いますよ？」

コウサカは、ケイティンの悪戯っぽく笑っている表情を見て、聞き出すのを諦めた。

「ご馳走様です」

「はい、お粗末さまです」

コウサカは最後に水を飲み干して席を立つ。と、手がベタベタになってしまっていることに気付いてカバンから手ぬぐいを引っ張り出そうとするが、ケイティンがそれを制止させる。

「これ、使ってください」

そう言ってケイティンがコウサカに水で湿らせた手ぬぐいを渡した。

「……何から何まで、本当に感謝です」

「いえいえ。ふふ」

コウサカは手ぬぐいを使って、手を拭う。

「では、俺は巡回に戻ります」

コウサカは金貨袋から代金を取り出し、卓に上に置く。

「はい、いってらっしゃい。お腹が空いたらまたいつでも来てくださいね？」

「感謝です」

コウサカは悪戯っぽい笑みを浮かべたままのケイティンにお礼を述べてから、装備を持って店から出る。

「無理……しないでね」

残ったケイティンは、不安そうな表情を浮かべて小さくそう言った。

「おい、朔絆」

『……』

まだ不貞腐れているのか、朔絆は返事すらしない。

「おいって」

もう一度、声をかけるがやはり返事はない。

「やれやれ……」

これはしばらく放っておいた方がいい、とコウサカは判断して構わないことにした。

「さて、巡回するにしても装備を出しておくか……」

小さく呟くとコウサカは食料品店を出たそのまま、同じく村の広場にある銀行へ向かう。

広場では、村の中心部にある巨木に登ったり、駆け回ったりと遊んでいる子供達とそれを見守りながら談笑に興じる母親たちがいた。

と、一人の男の子がコウサカに気付いた。

「あー、コウにぃだっ！」

そう言いながら嬉しげにコウサカに飛びついてきた。

「今日も元気だな」

コウサカがその子供の頭に手を乗せていると、その声に気がついた他の子供達も我も我もと駆け寄ってきた。

「って、おいおい……」

好かれて飛びつかれるのはコウサカも問題ないが、何人も飛びついてくるわ、登って兜は捕まれるわ、さらに蹴られるわでコウサカも対処が出来ない。約百八十ｃｍ以上の背丈のコウサカは登り甲斐があるだろう。

「親御さん、どうにかしてくれ……」

そうコウサカが助けを求めるとその光景を微笑みながら見ていた母親たちが、しょうがないわねぇ、と笑いながら子供を回収していった。だが、引っ付いて離れない子供もいた。

「ほらほら、あんまりコウサカさんを困らせては駄目よ」

「いーやーだーっ！」

これが一人ではないから、余計にコウサカは困る。

「……俺はこれから、巡回に出ないといけないんだって」

「あそぶーっ！」

「コウにぃ、あそんでーっ！」

「やっぱり、ボクもーっ！」

と、わいわいとまた戻ってくる始末。

「だから……、忙しいと」

割と本気でコウサカは言っているが全く効き目はない。

「いい加減、回収してくれっ」

そうコウサカは母親たちに言ってみるが、今度は面白そうに微笑みを返されただけだった。

コウサカは、村人達から鎧姿と類稀（たぐいまれ）な戦闘力から尊敬と畏敬の対象として見られている。だが本人は別として、それを含めても村の全員が良い人だと認めて好かれている。しっかりとした気遣いも出来、子供の面倒見も良いため、強くて怖い人と言うよりは、良いお兄さんと認識している者がほとんどである。

「……っと、おい飛びつくな。倒れたら背中にいるやつが危な……蹴るな……」

だから、コウサカが身体をよじ登れられたり、メチャクチャにされて困っていたとしても。

「あらあら。あんなに懐いちゃって」

「普段はあんなにクールなのに、子供たちには敵わないのねぇ。可愛いわぁ、うふふ」

「うちの子なんて、コウサカくんと遊んだ日にはずっと同じことばかり話すのよ？」

「うちの子は、コウサカさんのお嫁さんになるんだー。って、うふふ」
「何っ！？　コウサカ、娘はやらんぞっ！？」
「あーあー、私ももう少し若かったらなぁ」
「なにぃっ……！？　てめぇっ、コウサカっ！」
「子供に好かれてるってことが、一番その人がどんな人物か表しているよなー」
「じゃなぁ。全くこんな将来有望な若者が村にいて嬉しいことじゃて」
「ジイさん、それ死亡フラグっぽいぞ」
「なんじゃとっ！？　わしゃまだまだ現役じゃいっ！」
「そんだけ元気がありゃ、まだまだだな～」
「「「「あははは～」」」」
「いい加減、助けてくれ！」
と。こんな状態で、わいわい村の人が集まってきてしまう始末。
母親や村の年長の子供達が小さい子達を回収していつの間にか集まってきていた村人達が解散したのは、ここから数十分後のことだった。

「はぁぁ……。なんで、ただ銀行に行くだけだったはずがこんなに疲れているんだ……」
普段は冷静なコウサカも子供達には敵わない。今は広場にある腰掛けのひとつに腰を下ろしてげっそりしている。コウサカをボロボロにして満足した子供たちは、まだまだ元気に広場で遊んでいる。
『……バッカじゃない』
「ようやく機嫌を直したか、我がまま娘」
剣から出ては来なかったが、朔絆がようやく口を開いた。
「今回はどうした？」
『……別に。何でもないもん』

この場合は、深く突っ込まない方が賢明かと、コウサカは思う
「まあ、言いたくないならいい」
『……バカ』
拗ねたような声で返事をした。
「さて、銀行で装備を出してくるか」
コウサカが立ち上がりながら別の装備のことを口にすると、背中のクレイモアの光が戸惑ったように一瞬大きく波打った。
「安心しろ。お前は俺の唯一無二の相棒だ」
『何も…言っていないもん……』
言葉とは裏腹にその声には安堵したような、それでいて泣きそうな感情が混じっていた。
「それは、すまない」
謝っている割には、コウサカの口は少し笑っていた。
「邪魔するぞ」
コウサカが銀行の扉を押し開けて入ると、カウンターで暇そうな顔していた少女の顔が華やいだ。
「あ、コウじゃんっ！」
「相変わらず、暇そうな顔で商売をやっているな。ベビン」

ベビン。十七、十八歳の少女で、珊瑚色の背中に届くストレートの髪に薄花桜色の瞳をしたティルコネイルにあるアスティン銀行支店を受け持っている少女である。持ち前の記憶力の良さで銀行業務をこなしつつ、噂話の収拾も忘れない。明瞭活発な性格で仕事もしっかり行なうのだが、いつも暇そうにカウンターに頬杖を着いている。
スリーサイズはＢ８０・Ｗ５８・Ｈ８３くらいである。

「だって、人なんて来ないもーん」
「まあ、それはそうだろうな」
ティルコネイルは辺境の山間の村である。そして、ほとんどの家

は自給自足である。故にダンバートンから来る隊商と村の農産物やクモの糸などを取引するとき以外は、外貨の流入はなく、金銭は特に増えず減らずに村の中で動くだけである。

だから、銀行には村の金をまとめて預けることはあっても、個人が銀行に預金をしに来ることはほぼないのである。

「楽してお金もらえるのはいいけど、ヒマすぎぃ～……」

ベビンはカウンターに疲れたように突っ伏した。

「本当に何故、ティルコネイルにまで支店を出そうとしたんだろうな」

「ほんとにね～」

そう頭を捻っていたが、コウサカは当初の目的を思い出した。

「ああ、そうだ。忘れていたが、ベビン」

「ん、何？　あ、もしかしてデートのお誘いっ！？」

ベビンは見当違いな答えを口に出しながら目を輝かせる。しかし、何の逡巡もなくコウサカは返す。

「いや、違うが」

「うーわー、即答だよ～。ベビンちゃん傷ついた～」

「なに、なんのことだ？」

その限りない鈍感に対して、ベビンと元に戻った相棒は。

「コウのバ～カ」

『バーカ』

ベビンは明らかに傷ついたとは思えない意地の悪い笑い方をして、朔絆は完全実体化をしてベビンの横で楽しげな笑みを浮かべコウサカを罵った。

「……はぁ、やれやれ。ドウモスミマセンデシタ……」

「わ～い、勝ったー」

『鈍感バカに勝った～』

そう言って二人でハイタッチをしている始末。この二人は妙に仲が良い。いつもコウサカと朔絆は一緒にいるため、ベビンが秘密の話が出来なくてよく残念がっている。

「……はぁ。ベビン装備を出してくれ」
もう面倒になり、溜息をつきながらコウサカは勝った、勝ったとはしゃいでいるベビンにそう言った。
「え、装備？　朔絆ちゃんがいるじゃん」
「事情が変わってな」
ベビンはハイタッチを交わした朔絆を見ると、朔絆はちょっと嬉しそうな悲しそうな、そんなものが入り混じったような表情で苦笑を見せた。
「……もしかして、コウ。朔絆ちゃんを――」
『わぁーっ！　わぁあああーっ！』
ベビンが複雑そうな表情で何かを言いかけたところ、何かに気付いた朔絆が大声を上げて両手を振り回して遮った。
「なんだ？　何か言いかけたようだが――」
『あんたは、気にしなくていいのっ！！』
朔絆が怒鳴りつけられて、これは口を開かないほうが得策だと判断してコウサカは押し黙る。
『べ、ベビンっ！　いきなり何てこと言うのよっ！？』
「おっかしぃな～？。言う途中で遮られちゃったから、まだ何も言ってないんだけどな～？」
ベビンは飛びっきり意地の悪いニヤニヤとした笑みを朔絆に向けた。
『うっ、バ、バカぁ～……』
「あっはははっ！」
「……あ～、そろそろ剣を出してほしいんだが」
この二人が揃うと毎回こんな感じになるため、いつ頃声をかければいいか鈍感なコウサカでも予想できるようになっていた。
「ああ、はいはい。ちょっと待っててね～」
そう言って、奥の倉庫に行こうとするベビンにコウサカは声をかけた。
「ベビン、怪我するなよ」

「あっははっ。鞘に収まっている剣で、どうやったら怪我できるの～？」
「む、それもそうだな。無駄なお節介だった」
「だね～。……でも、ありがと」
ベビンはそう微笑んで、今度こそ奥の倉庫へ向かった。
「やれやれ。何でお前等は毎回こうなんだ」
『……あんたが、バカ過ぎるからだよ』
「さっぱり分からん理由だな」
『バカ』
「言われないでもわかっている」
『バカバカバカバカっ！』
「同じことばかり言ってどうする……」
「仲が良いよね～。相変わらず」
そう呆れたような顔で倉庫から剣を持って戻ってきたベビンが言った。
「喧嘩も出来ないほど、表面での付き合いしかできない奴を相棒とは呼べない」
『……バカ』
さも当然のようにそう言うコウサカと、呆れたような嬉しそうな顔で苦笑する朔絆を見ながらベビンは剣をコウサカに渡す。
「羨ましいな～」
「精霊か？　だが、精霊石が手持ちにあったとしても、出来るなら普通の人間が持たないほうがいいぞ」
「大外れ～」
「ん？　ふむ？」
頭に？を浮かべながら剣を受け取ったコウサカは、剣を腰のベルトに差した。
「コウには絶対わからないから、考えるだけ無駄～」
「ふむ。まあならいいか」
あっさりと思考を中断して、コウサカは朔絆に声をかけた。

「朔絆。巡回に戻るから、そろそろ戻れ」
『はいはーい』
すっかり満足したのか、素直に幻のように朔絆の姿が消える。
「巡回？　あれ、昼もやっていたっけ？」
「巡回時間を増やした。それだけだ」
「……なんかヤバイことになっているの？」
わざわざ馬鹿正直に言うところがコウサカらしいが、当然ベビンはそれを聞いて表情を曇らせた。
「いや、そこまで問題でもない。俺一人で事足りる」
「それって、コウが無理するってことだよね……？」
ベビンは更に表情を曇らせ、カウンターから身を乗り出してコウサカに詰め寄る。
「いや、それも違うが。ただ暇だから巡回時間を増やしてみるだけだ」
「え、そなの……？　はぁー……、もう心配させないでよ～」
ベビンは力が抜けたようにカウンターの向こうにある椅子に腰を下ろして、溜息をついた。
「まあ、そういうことだ。ではな」
「ん。まったね～」
ベビンは手を振りながら、コウサカが出て行くのを見ていた。そして、コウサカの姿が消えてから、ふと思い至る。
「あれ、でもコウって他にも色々やって忙しいのに何もないなら巡回時間って増やさないよね……？」
翼々《よくよく》思い直して考えてそう呟（つぶや）いたベビンは、急に背中が冷たくなるのを感じて慌ててコウサカを追いかけた。

「さて。とりあえず南の平原にでも行くか」
そう呟いて、コウサカが広場から見て西側の道から平原に向かおうと歩き出そうとした時。

「コウっ……！」

ベビンが慌てて銀行から飛び出てきた。慌てすぎて足元が見えていなかったのか、銀行の入り口にある小さな階段で足を踏み外した。

「わわっ！？」

「っと、と」

コウサカが腕を伸ばして、ベビンの肩を抱くような形で受け止めた。

「どうした。慌てたら危ないぞ」

そんなコウサカの忠告も聞こえてないかのように、ベビンは必死の顔でコウサカを見た。

「ねえ、コウ……。さっきのって――」

ベビンが何か言いかけたそこで、ティルコネイル始まって以来の最悪の出来事が起こる。

しかし、それは始まりでもあった。

「ギャアアアアアアアアアーっっ！！」

大音声だった。それもただ嫌なものを見つけて、思わず上げる悲鳴とは全く違う。生命の危険から発せられる絶叫だった。

「っ！」

その絶叫を聞いたコウサカは目の前のベビンに構わず、刹那の逡巡もなく走り出す。

身体を深く前に倒したかと思うと、右足で地面を蹴りつけた。蹴りつけたとき地面をグリーブが深く抉り、その蹴りつけた力だけでコウサカの身体は前方に飛び出す。

全身フルアーマーで完全装備。自重も含め総重量で百二十ｋｇを超えるというのに、飛び出した勢いをそのままに凄まじい速度で駆け出した。

地面を駆け抜ける度、地面にグリーブの足跡をくっきりと残しながら距離にして二百ｍほどを僅か十秒足らずで駆け抜ける。

コウサカは駆け抜けてくる際に聖堂のある丘の前の坂を下りながら平原を見て、隊商の馬車がおびただしい数のオオカミに襲われていたのをはっきりと目視していた。

コウサカは坂を下りきってから、直線の道でさらに増速した。坂から学校を通り過ぎるまで約百ｍを数秒掛からず駆け抜け真っ直ぐに進む。そして、アデリア川が眼前に迫った時、腰に付けた道具入れのカバンを外して落としながら思い切り足に力を込める。

そして、異常なまでの高さを跳躍した。

身軽な格好をした常人にもまず不可能な、総重量五十ｋｇ以上の完全装備をその身に纏っているなら絶対的に不可能な高さだった。二ｍ以上はある防護壁を飛び越え、さらに川幅が二ｍはあるアデリア川まで越えてティルコネイル南の平原に飛び込んだ。

それは目視距離だけでも軽く五ｍ以上の距離であった。しかも横ではなく、縦方向への。縦横含めれば十ｍは飛んでいるだろう。

その跳躍の時にコウサカが思い切り踏めしめた地面が深く円形状に抉れていた。コウサカは無意識的にエリンに生きるモノ全てに内在されているマナと呼ばれる魔力を操り、足に集中させ地面を思い切り踏みしめた瞬間に爆発させ、その衝撃も利用して跳躍したのである。

コウサカは平原に着地する。その時、両足に奔った衝撃は常人なら足が骨折するほどだったはずが平然としていた。そして、一瞬で力を溜め、また凄まじい速度で馬車へ向かって駆け出す。馬車は四百ｍほど先に迫っていた。

駆けながらコウサカは意識を集中させイメージする。イメージはアイスボルトという氷塊を形作る魔法。マナを操りイメージ通りの工程を実践させていき空気中の水分を集約し氷結させていく。

「……Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉˈ　ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）っ……！」

最後に魔法を発現させる呪文を口にする。それと同時、先の鋭く尖った二十ｃｍほどの大きさの氷塊、アイスボルトが完成する。

「Ａｔｔａｃｋ（往け）っ……！」
その号令一下、超速で駆けるコウサカの倍以上の速度で五つのアイスボルトが馬車を襲っているオオカミに飛翔（ひしょう）していく。コウサカもそれに続くように更に加速した。
襲われている馬車はすでに目の前に迫っていた。

時は少し戻る。
それはティルコネイルに向かっているオオカミたちに襲撃を受ける前の隊商の馬車の中。
「ここはまだまだ平和だな」
そう言ったのはダンバートンに拠点を置くギルド『ダンブレテン』に所属する、馬車の幌（ほろ）の中から後ろを見ている一人の男性ハンターの言葉。いつものようにティルコネイルまで行く隊商の馬車の護衛を務めている一人である。
「何言ってやがる。途中で倒したオオカミどもの数をもう忘れたのか？」
そう言うのは馬車の護衛パーティーのリーダーを務めている男だ。
「頭（かしら）ぁ、そいつは鳥頭なんすよ。だからすぐに忘れちまう」
そう軽口を開いた男も護衛パーティーの一人である。この男と頭と呼ばれた男、それに鳥頭と呼ばれた男の三人で護衛を務めている。
この三人は元々三人で動いているパーティーで、よくティルコネイルへ行く隊商の護衛のクエストを好んで引き受けている。故にティルコネイルの村人や隊商の商人たちとは顔見知りである。
三人はティルコネイルの出身ではなくダンバートン出身であるが、ティルコネイルに漂うのんびりとした雰囲気が好きだと二つ目の故郷のように想っていた。
「なるほど。がははは！」
「うはははっ！」
軽口を言った男と頭と呼ばれた男は大笑いをし、矢面（やおもて）に立たされ

た鳥頭と呼ばれた男は苦笑を浮かべた。それを聞いた隊商の商人たちまで笑い出し、馬車は楽しげな笑い声で包まれていた。

それはいつも変わらない光景であった。そう笑いながら時折、馬車を襲ってくる数匹の魔操獣と化したオオカミを蹴散らして、そしてティルコネイルに到着して、いつものように懐かしい故郷のような村に住む温かい村人たちと談笑に興じるのだ。

そのはずだった。ただ少し敵の数が多いな、と思うくらいの日になるはずだったのだ。

そのはずは、何の慈悲もなく奪われることになる。

「……おい」

後ろを見ていた鳥頭と呼ばれた男が声を上げた。その目は大きく見開かれていた。

「がははは！」

「うははは！」

だが、声が小さく周りには聞こえない。

「おいっ！！」

男の腹の底から出した大音声に、馬車の中が静まった。

「……あれは、なんだっ！？」

手綱を握っている者以外、後ろを見た。

「マジかよ……」

さっきまで陽気に笑っていた頭と呼ばれた護衛頭の男がそう呟いた。

馬車から五百mほど後方から、真っ黒に染まった何かが迫って来ていた。いまは真っ昼間で、森の中というわけでもない。

よく目を凝らしてみると、それは一つ一つが何かの生物だということがわかる。

オオカミである。

だが、ただのオオカミならハンターが恐れることは有り得ない。

その数が異常だった。群れが全て襲ってきたなどと言うような、そんな生易(なまやさ)しい数ではない。数十匹、もしかしたら五十匹を超えるかもしれない数のオオカミが馬車を目指して走り迫っていた。

「う、うわぁあああああああぁぁぁぁーっ！」

商人の一人がパニックを起こして、叫んだ。

「……はっ、呆けている場合じゃねぇっ！　あんた等は出来るだけ前に詰めろっ！　そのパニック野郎は押さえておけっ！　いま馬車から落ちたら確実に死ぬぞっ！！」

我に返った護衛頭が大声を上げる。その声にまだ呆けていたハンター二人も我に返った。二人が我に返ってすぐに何かの発射音が聞こえた。

「とっとと撃ちやがれっ！　時間稼ぎだけでも出来れば十分だっ！」

ティルコネイルには、あのミレンシアの坊主と先生がいるっ！！」

「り、了解っ！」

「わ、わかりやしたっ！」

二人もクロスボウを構えて、矢をオオカミ達に撃つ。

クロスボウは専用の矢を板ばねの力で、これに張られた弦に引っ掛けて発射する武器である。引き金を持ち、狙いが定めやすい。だが、弦を戻すのは人力では難しいため、一般的にウィンドラス（簡単に言うと手動の弦巻き上げ機）を使って再装填を行なう。これをなしにクロスボウの再装填を行なえるのは余程の怪力の持ち主である。

クロスボウは再装填にウィンドラスを用いるため時間が掛かる。一撃必殺の時以外は滅多に使わない三人にとっては切り札的なものであるが、相手との距離が開きすぎているためクロスボウを使うしかないのだ。

比較的連射の利くショートボウの最大射程は曲射をしてもせいぜい百ｍを少し超える程度で、有効射程は五十ｍといったところである。ショートボウが届く距離まで待っていては手遅れになる。ゆえに使い難く連射も利かないクロスボウを使うしかないのである。ク

ロスボウの最大射程は四百五十m、有効射程は百五十m。短い矢を使っているため安定性に欠けてしまうが、真っ黒な塊となって迫ってくる集団には狙いなどつける必要は無い。

鎧も何も着けていない毛皮だけのオオカミならばクロスボウの最大射程内に入れば十分である。この場合、殺傷能力がほとんど無くなったとしても当たった部分を痛めて走れなくすれば、それだけでいいのである。

「重いぜ、くっそっ……！」

三人とも撃ち終えて、馬車の中に置いてあるウィンドラスをひったくる様な勢いで手に取り、クロスボウの弦を引き始めた。

その間にも、明らかに魔操獣と化しているオオカミたちがぐんぐんと走り迫ってくる。

オオカミの最大速度は時速七十ｋｍほどと言われているがせいぜい二十分程度でスタミナが尽きる。だが、時速三十ｋｍ前後ほどまで速度を落とせば一晩中獲物を追い続けるほどのスタミナを持っている。当然、その時速三十ｋｍだとしても普通の人間は簡単に追いつかれる。

隊商の馬車は重種二頭立ての四輪馬車である。重種は平均で一トンを超えるほどの大きさで他にはない力強さがあるが他の馬と比べて足が遅いため、これだけ大きいモノを牽(ひ)いていなくとも身軽なオオカミから逃げ切ることは不可能である。おまけにいまは緩やかな坂道であるため余計に馬の足が鈍る。

撃つ。装填する。撃つ。装填する。

そんなことを数回繰り返したとき、護衛頭が叫んだ。

「装填したら、撃たずにショート（ショートボウ）に持ち換えろっ！！」

オオカミたちはすでに、ショートボウの届く百m圏内にまで迫っていた。

「了解っ！」

「うぃっすっ！」

護衛頭に続いて二人は切り札としてしかあまり使わないクロスボウを離し、愛用しているそれぞれのショートボウに持ち換えて、クロスボウの時の何倍もの早さで矢を撃ち始める。

百m圏内までに走り迫っていたオオカミ達だが、ここに来て一気に足が鈍り始める。撃たれ倒れるオオカミの数に増えるにつれ避けきれずに激突したり、飛び越えてもまた別のオオカミが倒れていて一旦足を止めねばならないからである。

護衛の三人は弓矢の名手というわけではないが、剣で戦いより弓矢で戦うこと得意としている。なかなかに洗練された動作で矢を放ち、番えてまた放つ。さらに今回は狙う必要はないため、矢を番えながらすでに弓に角度を合わせたまま引き絞ってまた即放つ。

倒れるオオカミの数が増えるにつれ、護衛の三人の顔から徐々に絶望感が消えていった。

「村までもう少しなんだっ！　絶対、持たせるぞっ！　いいなっ！」

「当たり前ですよっ！」

「あっし等の底力、見せ付けてやりましょうぜっ！」

三人のハンターが少しずつ絶望の中に希望を見出しながら奮闘しているのは、ティルコネイルの南の平原のもうすぐ目の前だった。

疾走したコウサカが馬車にたどり着いた。

「Ａｔｔａｃｋ（往け）っ……！」

コウサカは全力で疾走しているというのに、絶叫に近い大音声を張り上げた。

その声に馬車に取り付いていたオオカミ達の動きが止まり、一斉にオオカミ達の目がコウサカに向いた。

「グルル――キャインっ！？」

目が向いたのとほぼ同時、馬車からパニックを起こして降りて来てしまった商人達を襲っていたオオカミを、五つのアイスボルトが

突き刺さりながら弾き飛ばした。
（……すまない。手加減している暇がないっ）
コウサカは心の中で操られているだけのオオカミたちに詫びた。
「ぜあああっ！」
疾走した速度そのまま、商人の一人の腕に噛み付いているオオカミに蹴りを放つ。
「キャインっ！」
その蹴りがオオカミに当たった瞬間、グリーブ越しに骨が折れる感触、そして内臓を潰す感触が伝わってきた。
「グルワァァっ！」
「ギャンっ！？」
その蹴りの威力は凄まじく、蹴り飛ばしたオオカミはそのまま何匹ものオオカミを巻き込みながら飛んで往った。
コウサカは蹴った勢いを利用しその場で素早く一回転しながら、腰のベルトから刃渡り八十ｃｍほどの刀剣バスタードソードを右手で抜き、左手で縦に長い楕円形の盾カイトシールドを構える。蹴りを放ったままの体勢だと、動きが止まってしまうためである。
「時間は稼ぐっ、村へ走れっ！」
その声に、商人達は呆けたように目を白黒させた。運悪く、腕を深く噛まれて痛みで泣き叫ぶ者以外。
「走れっ！！」
コウサカの発した大音声に、商人たちは足をもつれさせながら怪我人に肩を貸すとよろよろと走っていった。
「よし、これで――」
「せりゃぁっ！」
馬車の反対側から声が聞こえた。それも悲鳴ではなく、戦う者の声が。
「……護衛のハンター達か」
馬車に繋がれたままの馬の拘束を剣で叩き斬りながら、コウサカは呟く。

「……邪魔をするな」

コウサカが馬を逃がしてから馬車の反対側へ向かおうとすると、オオカミたちが襲い掛かって邪魔をしてくる。その中の一匹をカイトシールドの横薙ぎにした一撃で弾き飛ばしながら、オオカミの中に斬り込む。

バスタードソードは片手剣の部類に入るが、それでも一・八ｋｇ前後はある（ちなみに実際にある一般的な日本刀は重くても一・五ｋｇ程度である）。それを右手だけの膂力（りょりょく）でコウサカは縦横無尽（じゅうおうむじん）に走らせながらオオカミ達を切り倒していく。一刀が通り過ぎる度にオオカミは真っ二つに切断され鮮血が飛び散り、鎧が真っ赤に染まっていくがコウサカは全く気にせずに次々とオオカミ達を、操られているだけのオオカミ達に心中で詫びながら絶命させていく。

「大丈夫かっ？」

コウサカは僅か十数秒で十以上のオオカミの中を切り抜けて馬車の反対側へ行き着く。

「ミレンシアの坊主かっ！」

その行き着いた場所には、ライトレザーメイルをオオカミに喰らいつかれながらも刃渡り六十ｃｍほどの刀剣フルートショートソードと円形で軽量の盾スモールシールドでオオカミと戦っている血だらけのハンター達がいた。だが、まだ戦えているところを見ると致命傷は負っていないようだ。

このハンターたちは、コウサカも知っている。よく隊商の護衛として村に来るため、何度か話をしたことがある。

「……やはり、あんた達か。走れるか？」

「なんとかなっ！」

護衛頭が飛び掛ってきた一匹を真正面からスモールシールドで受け、オオカミの横腹をフルートショートソードで一突きにした。他の二人も足は負傷していないようだった。おそらく逃げるために足だけは庇（かば）いながら戦っていたのだ。

「さすがだな。村の自警団もそろそろ出てきているはず。殿（しんがり）は引

き受けるから、先に」
「わかったっ！　おい、行くぞてめぇらっ！」
「「おうっ！」」
三人は一人ずつ村の方へ走って行き、護衛頭も離れたところでコウサカも動こうとする。だが。
「獲物が一つになれば、狙われて当たり前か……」
残った二十匹以上のオオカミが一斉にコウサカを目掛けて、四方八方から襲ってきた。
『コウサカ、あたしをっ――――』
「……すでに剣を抜いている暇などない」
それは嘘である。
コウサカなら襲われながら背中の剣を抜くことも可能であり、確かに朔絆を使えばこの程度の数は一瞬で倒せるだろう。だが、朔絆が生き血に塗れるのは避けたかったのだ。甘い考えだろうが、その馬鹿な考えを命がけで通すの馬鹿がコウサカなのである。
コウサカはオオカミと戦いながら少しずつ、後ろに下がり始める。だが四方八方から襲われているため、下がれない。真後ろからの攻撃にはさすがに対処できず、すでに体はオオカミに喰らいつかれている。
アリッシュアシュビンアーマーの布のような部分でも鎖帷子（くさりかたびら）が縫い込まれている為、オオカミの牙は通らない。だが、顎（あご）の力で絞めつけ続けられているため、だんだんと血流が滞（とどこお）ってくる。そして動きも阻害される。だがしかし。
「はああっ！」
オオカミに喰いつかれたままの腕を振るって、真正面から飛び掛ってきたオオカミを殴り飛ばす。前に突き出した腕を横薙ぎにして、数匹のオオカミを弾き飛ばす。だが、それでも足元までは手が回らずグリーブを着けた足に喰いつかれ始め、コウサカのバランスを崩そうとオオカミは足を目掛けて体当たりをしてきた。
一方的にやられているように見えるが、完全武装したコウサカが

硬過ぎて、また重過ぎてオオカミ達は一行に引きずり倒せずに攻めあぐねる。
と。コウサカに真横から飛びかかろうとしたオオカミの一匹に矢が突き刺さる。
「ミレンシアの坊主っ！　次は俺達が助けてやらぁっ！！」
先に逃がしたハンター達だった。逃げずに弓矢で援護を始めたのだ。さらに続けて飛んできた矢がさらに数匹のオオカミにも突き刺さる。
「コウサカっ！」
「貴様だけにいい格好はさせんぞっ！」
新たに二人の声が響く。レイナルド先生と、レイナルド先生の教え子で自警団の中でもまともに戦えるトレボーである。ガーディアンヘルムに、スリーベルトレザーメイル、ガントレット、鉄のグリーブという格好ゆえである。
「よしっ！　俺達も行くぞっ！！」
「りょーかいっ！」
「うぃすっ！」
護衛の三人も走ってくる音がした。
「ギャンっ！？」
コウサカの真横から飛びかかろうとしていた一匹のオオカミが斬り伏せられた。
「全く無茶をするな、お前はっ！」
レイナルド先生がバスタードソードを一刀流に構えながら、コウサカの左横に並ぶ。
「貴様っ！　自分だけ格好つければポイントを稼げるなどと……勘違いも甚だしいっ！」
トレボーがいつものように馬鹿なことを言いながら、刃渡り六十ｃｍ程度の最も標準的な刀剣ショートソードを構えながらレイナルド先生の横へ並ぶ。コウサカはあとでコイツだけは殴ろうと心に決めた。

「ミレンシアだっつっても、やっぱり無敵じゃねぇようだなっ！
あ〝あ〝っ？　坊主っ！？」
護衛頭が精悍（せいかん）な笑みを浮かべながら、コウサカの右横へ並んだ。
「元々馬車の護衛は我々の仕事だっ！　我々が戦わなければ面目（めんもく）が立たんっ！」
「その通りっ！　あっし等の底力――ってこれ、さっき言っちまったっ！」
他の二人のハンターも頭の隣に並ぶ。
「おいおい……」
一人、コウサカだけは溜息をついた。が、
「……まあ、こういうのも嫌いじゃない」
体に喰らいついていたオオカミは周りが倒してくれたので、再びコウサカは自由になる。全身に再び力を込め、意識を強く集中させる。
「Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉ' ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）っ！」
コウサカは剣と盾を構えたまま、アイスボルトを詠唱する。水分を集約している時間が短いため小振りな氷塊が二つしか出来なかったが十分である。
「Ａｔｔａｃｋ（往け）っ！！」
アイスボルトを放ちながら、一番にコウサカが斬りこむ。
「あ、この俺が一番最初に行こうと――」
「せぃっ！」
トレボーが言いかけたところ、レイナルド先生がトレボーの真横に剣を走らせた。
「ギャウっ！」
トレボーに真横から忍び寄っていた一匹のオオカミが切り伏せられて絶命した。
「戦闘中に無駄口を叩くなっ！」
レイナルド先生がトレボーを振り向きもせずに、怒声を上げる。
「は、はいっ……！　すみませんっ！」

その怒声にトレボーは改めて構え直し、オオカミに斬りかかる。
「ずいぶんと余裕かましてやがるなぁ、おい……」
「キャンっ！？」
護衛頭が呆れたように言いながら、飛び掛ってきたオオカミにスモールシールドを真っ直ぐに突き出して、オオカミの顔にぶつけた。
「しかし、トレボーはともかく、あの先生とミレンシアは強いですよっ！」
鳥頭と呼ばれた男の至近距離から放ったショートボウの矢をまともに喰らって、オオカミが吹き飛ぶ。
「あっし等じゃ、とても真似できねぇ。ああ、くそっ。外れたっ！」
「グルギャァっ！」
軽口の男が真横から仕掛けようとしたオオカミに向かって矢を放つが、外れてオオカミの目の前あたりの地面に突き刺さった。それを見てオオカミが走りこんでくる。
「なめてんじゃねぇっ！」
軽口の男は弓を放してスモールシールドと短剣を抜くと、オオカミに向かって行った。
弓を収めてスモールシールドと短剣を抜いてオオカミに向かって行った。
「まあ、これなら退(しりぞ)けられるな」
護衛頭がニヤリとそう言いながら見つめる先には、ほとんど二人だけで残ったオオカミの群れを蹴散らすミレンシアの青年と、熟練(じゅくれん)した戦士がいた。

そんな撃退戦がティルコネイルの南の平原で行なわれている時と同時刻、聖堂の一室。
「……ん」
白いポポワンピースを着て、金色の髪をした少女が目を覚ましていた。

その少女は部屋の窓から外を望(のぞ)む。南の平原が見えることは無いが、鶏やひよこが闊歩(かっぽ)している長閑(のどか)な風景が広がっていた。

「……きれい」

呆けたような表情を浮かべながらミレンシアの少女はそう言った。

ミレンシアの少女が目を覚ましていた頃、オオカミを撃退したコウサカ達は、一旦防護壁の内側に下がっていた。

「感謝だ、ディリスさん」

コウサカは道中で落としたカバンをベルトに付け直しながら礼を言う。

「全くあなたは……Ｏｓ　ｇｗｅｌｗｃｈ　ｙｎ　ｄｄａ　ｇｗｅｌａ'ｎ　ｙ　ｄｙｎ　ｈｗｎ（この者に癒しを）」

そうぼやきながら護衛を務めてきた三人に手当てを行なっている女性はティルコネイル唯一のヒーラー、ディリスである。

ディリス。

茶色がかったショートカットの黒髪に、茶色の瞳をした女性である。ティルコネイルのヒーラーで、人だけではなく羊などの治療も行なうすごい人である。ラサと魔法を学びにイメンハマに留学したが、医学に興味を持ち、ヒーラーの道へと進んだ。イメンハマで修行後、故郷であるティルコネイルに帰ってからヒーラーとして開業をした。家を建てるにはいろいろあったらしく、村のはずれにあるのをちょっと残念がっているとか。

少しだけ男性不信気味で、美しい自分の容姿にも自身が持てないでいる様子。

スリーサイズはＢ８５・Ｗ６１・Ｈ８５くらいである。

ティルコネイル南西のアデリア川に架かった西側の橋から渡った防護壁の内側で、他の自警団と共にディリスが待機をしていた。商

人達もすでに自警団に保護され、いまは護衛で来ていた三人の手当てを行なっている。

「Ｈｅａｌ、Ｈｅａｌ」

ディリスがヒーリングの魔法を詠唱し、光球が護衛の三人に当たると流血が止まった。

ヒーリングの魔法は決して何でも治せるというような便利な魔法ではない。対象の自然治癒力を引き上げる、細胞の活性化を促進させる魔法なのである。

かすり傷程度の軽いものなら一瞬で跡形（あとかた）もなく消えるが、深い傷になると血は止まり傷口も塞がるがそれだけである。それは表面だけを塞いだだけで治ったわけではない。ヒーリングを受ければ通常よりは遥かに少ない手間と時間で済むとは言え、しっかりとした手当てと休養を行なわなければ治り切らない。

またヒーリングの魔法は高位魔法に分類され、術者の精神をひどく消費する。ゆえに、あまり多用の利くものではないのである。

「……ふぅ。はい、おしまい」

若干、疲れた色を見せながら護衛頭に包帯を巻き終わったディリスが立ち上がった。

「すまん、お嬢さん」

「いえ、これがわたしの仕事ですから。治り切るまでは無理な運動は控えてくださいね」

「ああ、わかった」

座ったままの護衛頭と他の二人も頭を下げると、ディリスは小さく微笑んだ。

「さて、それでは馬車を見てくるとします」

「ち、ちょっとっ！　あなたは大丈夫なの？」

鎧の表面の至る所がズタズタになり、オオカミの返り血で赤く染まった鎧のまま馬車を見に行こうとするコウサカをディリスが引き止める。

「問題ありません。鎧のおかげで怪我と呼べるほどのものは一切負

っていませんし、スタミナの点でもまだまだ余裕です」
総距離にして約一ｋｍ以上の距離を全力疾走し、そのまま戦闘を行なった後だというのにコウサカは息切れのひとつもしていなかった。
「全くもう……」
ディリスは少し俯(うつむ)いて頭に手を当てながら溜息をついた。
「まあ、とりあえず行って来ます」
「はいはい、怪我しないようにね」
ディリスはおざなり言い方をしたが、コウサカはそれに気を悪くした様子もなく小さく肩をすくめて歩いて行った。
「あの～、ディリスさん。俺も手当てを――」「うるさいっ！！」
「は、はひっ！！」
下心丸見えでディリスに話しかけたトレボーは、ディリスの怒鳴った剣幕を受けビクッとして腰を引かせて小さくなった。
「ったく、男ってのは……」
小さくなったトレボーを横目で一睨みしたディリスは、のんびりと馬車に歩いて近づいていくコウサカを見つめた。
「ほんと……、男ってのは……」
トレボーに言った声色とは全く違う、小さな声色でそう呟いた。

コウサカは馬車の後ろ側から中に入って品物の状態を確認していた。納入箱などの影になって村側からは見えない。
『……なんで、あたしを使わなかったのさ』
「背中の剣を抜いている余裕がなかった」
『嘘、あんたはそんなに弱くない』
「だから――」『あんたが、……さ……』
尚も同じことを繰り返そうとしたコウサカの言葉を、朔絆が遮(さえぎ)る。
『あたしを、とっても大事にしているのはわかっているよ。たぶん、あんた自身が大怪我負うような時になってもあたしを使わないだろ

うってことも……』

「分かっているなら無駄なことを言――」『ふざけないでよっ！！』

朔絆が叫ぶ。

コウサカが振り返ると、完全な実体化を行なって本来の背丈で泣きそうな顔をした朔絆がいた。

『ふざけ……ないでよっ……！　あたしは武器なのっ！　それなのに武器として主人に使われないあたしって、なんなのっ！？』

「俺はお前が――」『自分で何かを斬り殺されて、血を被ったあたしのことを考えているってっ！？』

コウサカが続けようとした言葉を朔絆が先に言う。

『じゃあ……。じゃあ、あんたはあたしの気持ちを考えたことがあるのっ……！？』

朔絆がコウサカの腹部あたりに額を押し付けるようにして、抱き付く。

『あんたがあたしを大事にしているように……あたしだって、……あんたが傷付くとこなんて見たくないよっ！！』

コウサカは、もう何も言わずに静かに朔絆を見下ろした。

『あんたが無駄な殺しを嫌っているは知ってるよっ！　あたしをただの武器としてじゃなくて、ちゃんとした一人の人格だって見ていることもわかっているよっ……！！』

コウサカと朔絆は三ヶ月程度の付き合いである。だが、四六時中いつも同じ場所にいて、話して、笑って、喧嘩をしてきた。

『あたしは大丈夫だよっ……！　だから危ないときは使ってよっ……！！　何もしないまま、あんたが死ぬところを見るなんてイヤだよぉっ……。ぅ……うぁ、うわぁ～んっ！！』

朔絆は泣いた。泣きじゃくった。

精霊だとか人外だとか、武器だとか。そんなことは一切感じさせず、そこには大事なパートナーを心から案じて泣く一人の少女がいた。

「……」
コウサカは泣きじゃくる朔絆を、静かに見下ろしていた。と、ひとつ溜息をついた。
「……はぁ、俺の負けだ」
『…へぁ……？　……グス』
泣きじゃくったせいで、涙や鼻水と鎧に飛び散っている血糊（ちのり）で顔がすごいことになっている朔絆がコウサカを見上げると、兜を取って諦めたような表情を浮かべながら藍色の髪をオールバックにした頭をガシガシと掻いていた。
「やれやれ、俺もまだまだだな……。結局、自分しか見えていないままか」
『ぇ…ぁの、ぐす……な、に…？』
泣くのを止めた朔絆はコウサカが何を言っているのか分からず、首を傾げた。そんな朔絆にお構いなしにコウサカは片手をカバンに突っ込む。
『わぷっ！？』
「動くな。色々とすごいことになっているぞ、お前」
先ほど付け直した腰のカバンから手ぬぐいを取り出して、コウサカは朔絆の色々とベタベタになっている顔を拭った。
「あ～……、駄目だな。Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉ-ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）」
コウサカはアイスボルトを詠唱する。が、水を集約させた段階で詠唱を中断してその水を手ぬぐいに染み込ませた。魔法とは、別に攻撃するだけにあるのではない。
「ああ、これなら良い感じだな」
『ひゃぅっ！？』
今度は水が染み込んでいるため、朔絆の顔の色々とベタベタしたものを拭い取れた。いきなり好き勝手された朔絆は堪らず、コウサカから離れた。
「ついでに、と」

コウサカは鎧についた血糊を適当に拭い取った。
『いきなり、なにすんのよっ！？』
朔絆は濡れた顔を猫が顔を洗うように手で湿り気を拭いながら、コウサカに食って掛かった。
「綺麗にしてやったと言うのに、ひどい言い草だな」
『するにしても、もっと優しくやってよねっ！？』
コウサカがやれやれと溜息をつくと、朔絆が怒鳴った。
「ああ、朔絆」
『なにさっ！』
「危ないと感じたら、何も言わずにお前を使うから。そのつもりでいろよ」
『……はぃ？』
いきなり訳の分からないことを言われて、朔絆がキョトンとする。
「お前の想いは理解した。だから今度からお前をいつも使う。例え相手を殺さなければならない場合でも、お前を問答無用で使う。それでいいな？」
『……へ？』
「違うのか？」
間違えたか？と言う表情を浮かべながらコウサカは、朔絆を見た。
『え……あ……、いいっ！』
「そうか。ならガンガン使わせてもらうぞ、相棒」
『うんっ！』
その時見せた朔絆の笑顔は、天真爛漫とした嬉しさと幸せという言葉をそのまま表情したような笑顔であった。

馬車から出たコウサカは、手振りで大丈夫だと待機している自警団に合図を送った。朔絆はコウサカの肩に乗れるほどの大きさになっている。
「やれやれ、これは一度洗わないとな……」

コウサカは拭ったがまだ血糊が残るアリッシュアリュビンアーマーや他の部位を、兜を脱いで見下ろした。
『錆びるかもね』
「錆びるわけがないだろうが」
コウサカの鎧にはラサ先生によって魔法がかけられている。防錆は勿論のこと、鎧として使われている金属自体の強度を上げるものや魔法耐性も若干ながら上げるものまで。すでにこの鎧はアリッシュアシュビンアーマーとは外見は同じでも中身は別ものとなっている。
ちなみに、ラサ先生は数日かけてこの魔法を染み込ませた。その恩もあるため、コウサカはラサ先生にあまり強くものを言えない。
『あ、そうだ。さっき、あんた何か上から目線で偉そうだったよね』
「……なんだと？」
『あたしに偉そうに命令してんじゃないわよっ！』
「おい、待て。何でそうなる」
いきなり朔絆が先ほどのことを掘り返した。だが、かなり自分勝手な言い分になっているためコウサカが戸惑ったような声を上げる。
『バカっ！』
勿論、これが朔絆の今更ながら恥ずかしくなった照れ隠しだとコウサカが気付くわけがない。
「さっきのは、お前が泣いて――」『バっ！？　バカ、なにいってんのっ！！』
事実をそのまま口にしようとするコウサカに、朔絆が顔を真っ赤にして怒鳴る。
「いや、実際そうだったろう」
『……こんの、鈍感バカぁっ！！！』
そんな二人の言い合いを、逃げた馬と商人達を連れて馬車に近づいてきた自警団達が見て、大笑いをした。
それを見て、さらに顔を赤くしてコウサカに食って掛かる朔絆と、その怒っている理由がよくわからずに首をかしげながら朔絆の相手

をするコウサカを見て、また更に大きな笑い声がティルコネイルに響き渡った。

その光景を聖堂のある丘から眺めている金色の髪をした少女と、その傍らには心配そうな顔でいるエンデリオン司祭がいた。

「あの……司祭さん。あの方はどなたなのですか？」

不思議そうな表情をした少女は笑いの種の中心となっているコウサカを指差して、エンデリオン司祭に問うた。

「あの人……？　コウサカさんのことですか？」

エンデリオン司祭は少女の指差した先で、トレボーを殴っているコウサカを見た。

「コウサカ、さん……ですか」

そう呟き真っ直ぐにコウサカだけを見つめた少女の瞳は、綺麗な翡翠色（ひすいいろ）をしていた。

―第二章―　変わらないはずだった日常（後書き）

ちょっと余談を。

最大射程とは命中精度等を考慮せず単純に銃の弾丸、火砲の砲弾、ミサイルなどが飛翔できる最大の距離のことです。榴弾砲など一部の例外を除いて、実質的にほとんど意味（殺傷能力や実用性など）がありません。

有効射程とは銃の弾丸、火砲の砲弾、ミサイルなどが飛翔し、本来の命中精度を維持したり、目標を捉えたりすることができる距離のことです。飛翔距離＝射程ではありません。

―第三章―　その少女の名は（前書き）

補足

○本章内で出てくるミレンシアの少女の外見は身長百五十二ｃｍで、癖のない真っ直ぐな金色のセミロングの髪に、優しそうな翡翠色の瞳をしていて性格は穏やか。いまは真っ白なポポワンピースというワンピース姿にロングサンダル姿です。歳は十六歳くらいの童顔。スリーサイズはＢ８３・Ｗ５８Ｈ８２くらい。

―第三章―　その少女の名は

「坊主。おい、坊主っ！」
「ん……、交代時間か……」
「そういうこった。とっとと起きやがれ」
「ああ。あんたは傷が治っていないんだから、ゆっくり休めよ」
「言われねぇでも、そうすらぁ。じゃあ、あとは任せたぞ」
「ああ」
手をひらひらさせながら、護衛頭は寝床に潜った。
「……ふぅ」
学校の教室の床に直に敷かれた布団から、コウサカは這い出る。
「今夜はもう何もないかもしれないな……」
まだ覚醒し切っていない頭を片手で押さえ軽く振りながら、コウサカは呟いた。
コウサカは少し待ち頭が覚醒したことを感じてから、傍らに置いてある装備を付け始める。兜を被り、最後に輝きを放つクレイモアを背中に背負った。
『……おはよ』
「まだ深夜だがな」
背負われた振動で朔絆（さき）が目を覚ました。
精霊も眠るのである。
精霊も人間と同じように意識を保っていると疲れるのだと言う。これは実体化していようが、剣に宿ったまま意識を保っていようが疲れる度合いは同じで、どちらの状態で休もうとも回復量は変わらないらしい。食欲があるのだから睡眠欲があったとしても不思議ではないのだが、それでも不思議な現象である。宿った武器があれば、自由に実体化を行なって人間と遜色（そんしょく）ないような姿形でそこに存在する精霊は、もしかしたら人間と変わりない存在なのかもしれない。
寝惚（ねぼ）けている朔絆に交代のことを告げながらコウサカは外へ出た。

そして、ふと空を見上げる。
「月が綺麗だな……」
『昼間にあんなことがあったてのに……のんきだよね～』
雲ひとつ無い空に満月のイウェカとラデカが隣に寄り添うように煌々としている様を見上げながらコウサカが呟くと、朔絆が呆れたように返した。
「四六時中、殺気立っていても仕方がないだろう。力を入れすぎても疲れるだけだ」
『まあ、それはそうなんだけど……』
剣に入ったままの朔絆と話しながら、コウサカは村南西部の西側の橋にある防護壁へと向かう。防護壁には橋の前だけ通過用に木製の門が備え付けられている。
コウサカは急ごしらえで立てられた二つの見張り小屋の内、右側は護衛頭が引き上げて無人となっているためそちらへ入った。左側にはまだ当直している者がいる。だが、コウサカが来たことを知ると軽く手を上げて挨拶をし、引き上げていった。
ミレンシアたるコウサカには強靭（きょうじん）な精神力と、無尽蔵とも思えるほどの体力がある。それに普通の人間よりも夜目（よめ）も利く。だから、コウサカは深夜から朝方までの見張りを一人だけで引き受けたのだ。
「ふぅ」
小屋の中には申し訳程度に設けられた卓と椅子があった。コウサカは椅子に腰を下ろし、防護壁に開いた銃眼から南の平原にある馬車が通ってきた街道を見る。
幸い、月明かりにより明るく照らされているため街道はよく見えた。これが月のない夜であったら松明（たいまつ）を焚き、いちいち薪を入れに小屋から動かなくてはならなくなる。ただ手間がかかるだけなら問題はないが、人間は動物ほど夜目が利かない。もし新しく松明を焚きに出て行ったところを襲われたら、最悪の事態になる。
「今日だけで……色々変わったな」
『うん、そだね……』

コウサカは月明かりに照らされて今は静かな街道を睨み付けるように凝視しながら、今日あったことを思い出した。

オオカミを撃退したその日の夕方。

「表面にやすりでも掛けた方が早いか、これは……」

『かもね～』

今のコウサカは鎧の下に着込む灰色のアンダーウェアに、半ズボン姿だった。

コウサカは鍛冶屋の前の川で水を汲み、水に塗らした雑巾で血糊により赤く汚れた鎧を拭っていた。ガントレットや兜も脱いで、傍らに置いてある。

「おい、コウサカ。やっぱりワシが――」「結構です」

コウサカは鍛冶屋の主、ファーガスの申し出を一蹴した。

ファーガス。別名、破壊神（道具や武器の）。

ティルコネイルの鍛冶屋の主である。百六十六ｃｍの背、黒い短髪に豊かな顎鬚、赤い瞳の中年の男性。但し、作るのは得意だが修理するのは苦手という鍛冶師としてどうかと思う極端な人物である。コウサカは一度も修理を頼んだことは無く、全てコウサカ自身が行なっている。ただ腕はともかく知識は大したもので、修理で行き詰ったところでコウサカもよく助言を受けている。ぶっきらぼうなところもあるが、基本的に親身になってくれる人である。

「修理が下手なのは不本意ながら同意するが」

「なら、黙っていてください。これは替えが利かないのです」

失敗されたらまた別のを使う、という手は使えない。そもそもこのアリッシュアシュビンアーマー自体、ティルコネイルより南にある都市ダンバートンのさらに南、ウルラ大陸南端の都市バンホールで扱われているものを商人がダンバートンに仕入れているもので、

それを隊商の頼んで持って来てもらったものである。価格もさることながら、いまの状態で届くまで待つなどと悠長なことはしていられない。

「やれやれ……」

不貞腐れたように鍛冶屋の奥にファーガスは引っ込む。

「気合で頑張るか……」

そう覚悟を決め、コウサカは鎧を擦る手に力を込めた。

コウサカが血糊と格闘すること二時間。ようやく拭い切れ、今度はチェーンメイルを覆う生地の表面がズタズタになり、赤く染まってしまったアリッシュアリュビンアーマーを旅館の前のベンチに座りながら染み抜きや破れた部分を縫い始めた。

「そうやっていると、いつもと違ってカッコ悪いですね～」

「自分でも情けないと思うから、言われないでもわかっている……」

まるで主夫のような作業に取り掛かっているコウサカを見て、からから笑っているのは旅館の看板娘ノラである。

ノラ。百五十六ｃｍほどの背に、飴色の癖毛のショートヘア、青碧色の瞳をした旅館の看板娘で元気印の少女である。性格は明瞭快活で、いつも楽しげにしている。裁縫が出来るが、少し腕には不安があるらしい。

「きっと良い主夫になれますよっ！」

「トドメをどうも……」

情けなさをひしひしと感じさせながら、コウサカは縫い続ける。

「でも、ほんとに何でも出来るんですね～」

「これでも裁縫は苦手な部類だがな……」

コウサカは先ほどから指を針で何回も刺しながら縫っている。

『ホント、なさけな～……』

コウサカの肩に留まりながら、チクチクと裁縫をする相棒に呆れたように溜息を吐く朔絆。

「言うな。余計に虚(むな)しくなる」

コウサカが溜息をひとつ吐いて、また裁縫に取り掛かっていると来客があった。

「あれ、見ない人ですね～？　……もしかして、旅行者さんですかっ！？　なら、是非(ぜひ)っ！　是非是非、うちの旅館をご贔屓(ひいき)をっ！」

「へっ……！？　あ、あの、違いますよっ？　わたしは旅行者さんじゃない、です……」

妙に戸惑って、押しに弱そうな声がコウサカの耳に届く。聞いたことのない声だった。

（隊商の商人……はないな。押しに弱くては商人なんて務まらないだろう）

チクチクと指を刺しながらしていた裁縫の手を止めて、コウサカはノラと話している人物を見た。

「……例の女の子か」

コウサカが目を向けると数時間ほど前、聖堂で眠っているところを見た金色の髪の少女がいた。今はノラと話しているが、オロオロしているばかりである。

「まあ、俺の客でないならいいか」

ノラかピルアスさんを尋ねてきたものと判断し、コウサカは嫌々作業に戻る。

『あれって、絶対違うよね……』

一人、朔絆だけは現状を一番理解していた。

「是非、是非うちにっ！」

ノラは目を輝かせながら、金色の髪をした少女に詰め寄り。

「あ、あの、あの……えぅ……」

その少女は、オロオロとし。

「痛っ……」

指を何回も刺しながらコウサカは裁縫をし。
『……バッカらし』
朔絆は溜息を吐いて、呆れていた。
「おお、こんなところにいたのかね」
そんな中、ダンカン村長が現れた。
「村長？」
再び手を止めたコウサカは、旅館右側の坂から降りてくるダンカン村長に視線を向けた。
「おぉ、コウサカか。ちょうどいい」
コウサカを見たダンカン村長はそう言いながら、ノラに詰め寄られている少女の下へと向かう。
「身体に問題はないようだね」
「あ、村長さんっ」
ずっとオロオロしていただけだった少女が村長を見て、安堵（あんど）したような表情を見せた。
「ノラ、程々にしておかないと逆効果だよ。あとこの子は聖堂で保護をしているから旅館には泊まらないよ」
「えぇ～……、そんなー……」
見るからにがっくりするノラ。どう考えてもあの言い方では客は泊まらないだろう、とコウサカは心の中で突っ込んだ。
「さて、二人ともちょっと私の家まで来てくれ。話したいことがある」
「……わかりました」
コウサカは村長の目に、厳しい光が灯っているのを見逃さなかった。
「さて、行こうかね」
「あ、はい」
村長がゆっくり踵を返し、家に向かうため歩き出すと少女も歩き出した。
「ノラ、置いておくから見ておいてくれ」

「あ、ならわたしが縫って――」「触ったら許さない」
コウサカが予想していたことと全く同じことをノラが口にしたため、最後まで聞かずに遮る。
「しゅん……」
見るからに小さくなったノラを尻目に、コウサカはクレイモアだけを持って村長の後に続いた。

村長の家。
「とりあえず、適当に座ってくれ」
村長がいつも座っているロッキングチェアに腰掛け、他の二人もその対面に座る。
「さて、何から話そうか――」「村長」
村長が何かを言うより先に、コウサカが口を開く。
「その前に、この子のことを話してほしいのですが」
「ああ、それもそうだね」
当の本人の少女は、よく分かっていない様子で目を瞬いた。
「この子の名前は、ナユキと言うそうだ。ただ記憶がないらしい」
「……記憶がない？」
「うむ……」
村長は難しい顔で頷く。
「君、ソウルストリームは知っているか？」
「？　いえ……わからないです」
ナユキと言う名の少女は否定をする。到底、嘘を言っているようには思えない無邪気な顔で首を傾げていた。
「コウサカ、どう思う？」
「どう思うと言われましても……」
ミレンシアだからと言って、全く別の人間のことはさすがにコウサカには分からない。だが、コウサカはソウルストリームやエリンについての知識は知って、この世界に降り立った。

「実際にミレンシアに会ったのはこれが初めてですから、何とも言えないですが……」
　コウサカ自身はそうだとしても、他がどうかはわからない。
「まあ、もしかしたら一時的なものなのかもしれませんし、ミレンシアには本当に元々記憶がないのかもしれません」
「ふむ……そうだね」
「え、っと……？」
　結局少女については名前以外何も分からなかったが、コウサカ自身も自分のことをよくわかっていないため話を変えることにした。
「村長、それで何かあったのですか？」
「お、おお。そうだね、そっちを話そうか」
「？」
　何のことか分からずナユキは首を傾げる。
「ダンバートンへ襲撃が遭ったことをフクロウ便で知らせ、ハンターを派遣してくれないかと頼んでみたのだが却下されたよ」
「……やはりですか」
「ああ。街道の安全が確認できていない以上、下手にハンターを派遣しても犠牲者を出すだけだと。ただ、ダンバートン側から探りは入れてくれるらしい」
　たぶん魔族の潜んでいるのは、ティルコネイルとダンバートンの中間にある伐採キャンプトゥガルドアイル西にあるウレイドの森だろう、とコウサカは推測している。森は森だが、広大すぎるというわけの広さでもないため、時間が経てば経つほど魔族の見つかる可能性は上がっていく。
「敵が炙り出されているのが先か、ティルコネイルに攻めて来るのが先か……ですか」
「コウサカ、君の考えはどうかね？」
「十中八九、攻めて来るかと」
「やはりか……」
　コウサカがそう推論を挙げると、村長は答えが分かっていたよう

に溜息をついた。
「君にばかり頼り切ってすまないが、村を頼む」
「お気になさらずに。俺がやるしかないでしょうから」
村長の言葉を受け、コウサカはより一層気を引き締めた。
「……？　……？？」
ナユキだけが終始、首を捻っていた。

村長の家を出ると、もう日が暮れ掛かり夜になろうとしていた。
「あ、あの……さっきの縫い物、わたしがやりましょうか……？　お、お裁縫は得意みたいですから」
聖堂まで送ろう、とコウサカが提案しようとしたところナユキが先に口を開いた。
「得意って……、記憶がないと聞いた気がするが」
「……わかりません。でも、出来るような気がするんです」
頭で覚えていなくても、身体で覚えたことは忘れないことが多いと言うが、それだろうか。とコウサカは思った。
「もう夜になるが」
「大丈夫です」
何を根拠に、とコウサカは言葉を続けようとしたが、ナユキのどこか必死さの感じられる表情を見て考えを改める。
「……なら、頼む」
「あ、はいっ。任せてください！」
ナユキが何故、いきなりこんなことを言い出したかをコウサカが知るのはまだ先のこととなる。

「……」
ナユキは最後に残った糸を歯で切った。コウサカはそれを呆然と見つめている。

「できましたっ」
「あ、ああ……」
コウサカは呆然としたまま信じられないといった表情で、縫い終わったアリッシュアシュビンアーマーを受け取った。
「どんな魔法だ……」
『ただ単に手先の器用さの問題だと思うけどね～』
わずか数分である。
わずか数分でナユキは至る所が裂けた表面を縫い直した。それも神がかりなほど綺麗に。実際に魔法を使えるはずがコウサカは、信じられない魔法を見たという表情になり、朔絆はそれに冷静に突っ込む。
「えっ。こ、声……？　ど、どこ……？」
コウサカとしてはいつものことだが、ナユキには精霊武器などと言うものが分からず正体不明な声に怯えた。
「ああ、精霊なんて知らないか。朔絆、頼む」
『え～、しょうがないな～』
朔絆がしょうがないというよりは、頼まれてまんざらでもなさそうな表情で姿を現した。大きさはコウサカの肩に乗れる程度である。
「えっ……？　い、いまこの子どこから？」
突然、宙空に小さな少女が現れたことに目に見えて狼狽えるナユキ。
「どこから、という質問にはここからだな」
コウサカはクレイモアを掲げて示す。
「それで、これが精霊だ――痛っ」
『誰がこれだっ！』
朔絆が兜をしていない無防備なコウサカの頭に、ドロップキックを見舞った。
「……訂正する。俺の相棒で、剣の精霊の朔絆だ」
『……ふんっ！』
蹴れた部分を片手で押さえながら、コウサカが朔絆を紹介する。

「せ、精霊さん……？　絵本とかで見たことあるけど……」
改めて朔絆を恐々と見つめるナユキ。
「絵本のような精霊ではなく、もっと性格が――――」『ふんっ！！』
言わなければいいものを、コウサカが絵本の精霊と朔絆を悪く比較しようとすると、朔絆の滑空ドロップキックがコウサカの側頭部に炸裂した。
「ぐ……ぉ……ぉお～……」
膝を折って本気で痛がりながら頭を押さえ、コウサカはうずくまった。
「あ、あの……だ、大丈夫、ですか？」
ナユキがオロオロしながら膝を着き、うずくまったコウサカを心配する。
『……バッカじゃない』
その光景を朔絆は面白く無さそうに一瞥（いちべつ）すると姿を消した。
「言葉を間違えたか……」
ズキズキと鈍痛のする頭を押さえながら、コウサカが立ち上がる。
「だ、大丈夫なんですか……？」
「ああ、大丈夫だ」
心配するナユキにそう言いながら、コウサカは手をふらふらとさせた。
「それより、修繕（しゅうぜん）をありがとう」
「あ、い、いえっ」
コウサカが礼を言うと、ナユキは顔を赤くした。
「聖堂まで送ろう。中で少し待っていてくれ」
「あ、はい」
二人は旅館の中に入り、コウサカは装備を抱えながら旅館二階の自室へと階段を上がっていった。
「……」
ナユキは何となく旅館の中を見回す。カウンターには誰もいなく、入り口から右の方の部屋からは美味しそうな匂いが漂ってきていた。

おそらく、臨時に旅館へ泊まる事となった商人達、旅館の主人とノラ両人の夕食を作っているのだろう。
「待たせた」
「あ、いえ。全然待ってないです」
コウサカが兜を脇に抱えて、ガントレットを嵌めながら降りてきた。
「では、行こうか」
「はい」
二人は、もうすっかり暗くなってしまった外へ出た。
「あの……コウサカ、さん」
「呼びにくいならコウサカで構わない。何か聞きたいことでも？」
聖堂まで歩き出してすぐに、ナユキが口を開いた。
「ミレンシア……て、なんですか？」
「……やはり、そこに来るか」
コウサカは一度、気難しげに目を瞑り、ゆっくりと息を吐いた。
「ただ、とてつもない力を持って存在する者のことだ」
「抽象的すぎますよ……」
「細かいことは知らないほうがいい。だが、いま言ったような存在なのは確かだ」
ナユキは釈然としないようだが、コウサカはそれ以上何も言わなかった。
ミレンシアとは、『星から来た者』の意である。最も破壊神に近くて遠く、最も救世主に近くて遠い存在である。但し、コウサカはこのことを村長にも話していない。エリンに降り立つと同時に頭の中にこの言葉が響いて刻み込まれただけなため、信憑性が全くないのだ。話したところで混乱を招くだけだと判断している。
「あの……」
「聞くから、落ち着いて話すといい」
ナユキは意を決したように口を開いた。
「あの……わたし、夢の中で女神さまに会った

んです」
「……女神？　いや、まさか……どんな外見をしていた？」
精霊、モンスターと言ったものを聞き慣れたコウサカでも、思わず足を止め聞き返した。
「長い黒髪で、真っ黒な翼をした綺麗な女神さまでした……」
どこか呆けたように、またうっとりとした表情をしながらナユキは女神の外見を話した。
「戦の女神モリアン……」
どこか呆然（ぼうぜん）としたコウサカはその女神の名前を口に出した。
「モリアン様、と言うのですか？」
ナユキはやっと分からなかったことを知れた嬉しさで、顔が華やいだ。
「……いや、だが何故俺だけに話す？　さっき村長といた時に話して然（しか）りではないか？」
「女神さまが、そのうちミレンシアの青年に会うからその青年にだけ話しなさいって……」
「なんだと……？」
そこで、ふと思い至る。
「もしや、裁縫をすると言い出したのは……」
「……はい、そうです。コウサカさんと二人っきりになるためです」
コウサカは目の前にいる気弱そうな少女を、改めて観察する。
（女神の介入……いや、しかし）
女神モリアンとは過去にあった人間と魔族の戦争、第一次モイトゥラ戦争の折、人間を助けるために魔族をダンジョンに封じ込め、その後自身も肉体を失い封印されたと言われている女神である。
「女神は、何と……？」
「ティルナノイが破壊されようとしているって……あの、ティルナノイって何ですか？」
「ティルナノイは、理想郷であり楽園のことだが……」

ティルナノイとは、「若さの地」「永遠の楽園」と言う意味を冠(かん)している楽園と称される場所のことである。伝承にだけ残っており、誰もそこには行ったことが無いのだという。

「理想郷……」

「だが、ティルナノイが存在するなどと……。そんなことは一度も聞いたことがない」

「そう……ですか……」

コウサカの言葉を受け、ナユキは明らかに落胆(らくたん)して俯(うつむ)いた。

「もし、ティルナノイに行けたとして……それで、どうする気だ？」

「女神さまを助けたいですっ！」

「助けるって……」

コウサカを見つめるナユキの目は真剣そのものだった。その目から理由は分からないが脅迫めいた必死さが伝わって来ていた。

「……力を貸してやりたいが、いまは余裕がない」

「そうです、よね……」

ナユキは一旦力強く上げた顔をまた俯(うつむ)かせた。

「……まあ、いま起こっている事態が落ち着いたら手を貸そう」

「ほ、本当ですかっ！？」

コウサカがそう言った途端、ナユキは勢いよく顔を上げた。

「……もしかしたら、魔族の行動が活発になっていることと関係があるかもしれないからな。それに」

「それに……？」

「……いや、何でもない。とにかく今やるべきことをやる。話はそれからだ」

「は、はいっ。がんばりますっ！」

一体何を頑張るのか、と心の中で呟きながらコウサカは再び歩き出した。

「行こう。もうすっかり暗くなってしまった」

「あ、そうですね。すみません」

「謝られても困るが」
「すみ――」「謝られても困るだけだ。気にしなくて良い」
謝ることが癖にでもなっているのか、ナユキが再び謝ろうとするのをコウサカが遮った。
「え、っと……あっ。ありがとうございますっ」
「……どういたしまして」
「はいっ」
ナユキは急に元気になって少し前を歩いていたコウサカの隣に並び、二人は軽い雑談を交わしながら聖堂まで歩いて行った。

それが今日起こったことで一番コウサカの記憶に色濃く残っている出来事。ナユキのことを話していると朔絆が不機嫌になり始めていることをコウサカは感じていた。
『あの女は――』「朔絆。ちょっと出て話してくれ。完全な実体化をしてくれ」
妙にイライラしている朔絆に、コウサカはそう言った。
『……わかった』
案の定、姿を現した朔絆の顔は不機嫌を通り越して険悪(けんあく)そうだった。
「まずは肩の力を抜け」
コウサカはそう言うと、傍らに姿を現した朔絆の頭を優しく撫で始めた。すると徐々に朔絆の顔から険悪な色が薄れていった。
「よし、いい顔になったな」
『……バカ』
険悪さは消え、拗(す)ねたような表情になった朔絆に、コウサカは改めて続きを促す。
「それで、あの子がどうした?」
『あのナユキ、って子……。あんま信用しないほうがいい』
「ふむ……?」

朔絆がここまで、はっきりと誰かを訝しむのは珍しい。苦手な者の前では姿を現さなかったり、口を開かなかったりすることは多いが。

「何故、そう思う？」

『わっかんないよ……。でも、何か嫌な感じがする。えと……その……嫉妬とかじゃなくて』

「嫌な、感じ……？」

朔絆が恥ずかしそうに言った最後の部分は、コウサカの耳には届いていなかった。嫌な感じとは、コウサカもナユキと対面したときに感じたからである。

『うん……、なんだろ。たぶん関わると、とんでもないことになりそうな……そんな感じ』

「……それは俺も感じた」

『ねえ、止めようよ……あんなこと言っちゃったけど、今なら謝れば大丈夫だと思うから……』

朔絆は座っているコウサカの右腕を不安そうに両手で掴んだ。その手は微かに震えていた。

「……」

コウサカは腕に触れている朔絆の手の上に優しく手を重ねながら、静かに黙考した。

「……今は、とにかく目の前のことを片付けよう。考えをまとめるのは、それからでも遅くない」

『……わかった』

珍しく答えを先送りにしたコウサカの顔に苦渋の色が滲んでいた事を見た朔絆は、一抹の不安を覚えながらも小さく頷いた。

「お前はもう少し休んでいろ。今からはじっと虚空を眺めているだけの時間だ」

『……うん。また後、でね』

不安そうな表情のまま朔絆の姿が消える。クレイモアから発せられている光は心なしが小さくなっていた。

「……」

一人、コウサカは山道を睨み付けながらも、静かに深く黙考を始めた。

『……ねえ、そういえばさ』

コウサカが黙考を始めて一時間ほど経った時、実体化せず朔絆がコウサカに話しかけた。先ほどの不安は薄れたような声色（こわいろ）だった。

「どうした」

端から見れば座ったまま眠っているように見えるコウサカが、微動だにせずはっきりとした声で答えた。

『あの子と話している時に言いかけたのって、何だったの？』

「魔族の行動が活発になっていることと関係が、と言ったその後のことか」

コウサカは数時間前のことを、少しの逡巡（しゅんじゅん）もなく口にする。

「それに女神なら俺、いやミレンシアという存在が何なのか。それを答えてくれそうだからな。そう続けようとした」

『ミレンシアという存在……？』

「俺が何故こんなに化け物じみているのか。そして何故、この世界に来たのか……少し前から考えるようになってな」

そこまで言ってから、コウサカは一度深く息を吐き出した。

『あんたは、あんたじゃん……関係ないよ』

「例えば、自分の出生の理由を知らずに生きていると、その理由を知りたくなる。そんな程度の思いだ」

『……ホントにそれだけ？』

コウサカが話し終えると、朔絆が不安そうに口を開いた。

「それだけ、とは？」

『元いた世界に帰りたいんじゃないの……？』

「……」

いつの間にか、再び朔絆が完全な実体化をしていた。泣きそうで、

儚げな表情をしながら核心を突くような問い掛けをコウサカにする。
『ねえ……そうなの？』
「……」
コウサカは答えない。ただ静かに目を伏せただけだった。
『なんとか言ってよ……？　ねえっ……！』
コウサカは右腕を強く掴まれる。
朔絆にとってコウサカは、精霊石の中から目を覚まして唯一この世界で心から信じられる相手である。父親でも、兄でも、親友でも、または……。とりあえず、例えは何でもいい。朔絆にとってコウサカとはそんな存在なのである。
『お願いだよ……何か言ってよぉっ……！』
朔絆が不安から泣きながらコウサカに訴えかけていると、コウサカの手が朔絆の手の上に置かれた。
「……今はまだ、わからないとしか言えない」
『なにそれ……なにそれぇっ……！』
コウサカの煮え切らない答えを受け、朔絆はコウサカの腕に抱きつくように頭を押し付けた。
「……すまない。だが、今はこの答えしか与えてはやれない」
自分の腕に抱きつき、ぐずぐずと泣き出した朔絆の頭を優しく撫でながらコウサカは詫びた。そして、少し目を伏せ考えると口を開いた。
「実はな、俺にも記憶がない」
『へぁ……？』
コウサカの口にした言葉の意味がわからず、朔絆が顔を上げる。
「記憶がない。前にも話したようにソウルストリームやこの世界のこと、それに好み程度なら覚えている」
コウサカはもう一度同じ言葉を繰り返して、自分に起こっていることの全てを朔絆に話し出した。
「だが、もっと根幹（こんかん）の俺が誰で、何故ここにいて、前にいたはずの世界がどんな世界か、どんな人物が近くにいたか、どんな生活をし

ていたか。そう言ったことが忘れているという感覚ではなく、文字通り一切記憶から消えている」

『ぐずっ……だから、わからない、って……？』

「ああ。それ以外、答えようがない」

コウサカはそう言うと、カバンから手ぬぐいを引っ張り出した。そして意識を集中させる。

「……Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉˈ　ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）。ほら、これで顔を拭け」

『ぐす……うん、ありがとう』

コウサカはアイスボルトの詠唱を中断し、集約した水を手ぬぐいに湿らせたものを朔絆に渡した。朔絆はそれで、顔を拭う。

「朔絆」

『……？』

朔絆は顔を拭いながら、コウサカの言葉を聞いた。

「俺の記憶が戻ったら帰るかどうかは分からない。だが、何も言わずに去ることは絶対にしない。今のところは、それで納得してくれ」

『うん……わかった。あたしは、あんたを信じてる』

「……ありがとうな、相棒」

コウサカは傍らで顔を拭っている朔絆の頭を、珍しく嬉しげにくしゃくしゃと撫でた。

『えへへ……』

コウサカの見せた珍しくしっかりと感情を乗せた行動に、朔絆は嬉しげに笑った。

「そういえば、朔絆」

『ん、なに？』

朔絆の頭を撫でる手を止めて、ふと思い至ったようにコウサカが朔絆を見る。

「お前、泣き虫になったな」

『なっ……！』

コウサカのその言葉に、朔絆は言葉を無くした。

「今日だけで二回目だな。前に一度だけ泣いたところを見た時以来か。確かあれは――――」『わぁぁぁーっ!?　わぁぁぁぁぁぁっ！！』

コウサカが思い出して口にしようとしたことを、朔絆は真っ赤になりながら遮る。

『バ、バッカっ！　せっかく良い雰囲気だったのに、いきなり何言い出すのよっ!?』

「いや、思い出したから話してみようと思っただけだが」

朔絆の頭から手を離し、コウサカは再び思い出そうとする。

『だ、ダメぇーっ！　それは思い出さないでっ!!』

「何故だ。俺とお前が初めて出会った時の思い出だったと思うが」

『そうだけど、ダメっ!!　絶対、ダメだかんねっ!?』

「わかった、わかった」

そう言って思い出そうとすることを本当に止めてしまうのは、コウサカの性分(しょうぶん)である。

「やれやれ。まあ、しっかりと見張りをすることにするか」

『そうしなさいっ！　ああ、全くもう……』

そう言う朔絆は、頭痛でもするように頭を押さえていた。

「く……くくく……ははは」

その光景を見ていたコウサカは、突然笑い出した。

『……なに笑ってんのさ』

笑うコウサカを、憮然(ぶぜん)とした表情を浮かべながら朔絆が睨(にら)む。

「は、はは……ふぅ。いや、よく分からない。よくは分からないが、急に可笑(おか)しくなってな」

『なにそれ……』

「朔絆、お前が相棒でよかったと改めて思ったよ」

『なっ……！』

いきなりそんなことを口にするコウサカに、さっきとは違う理由で絶句し赤くなる朔絆。

『い、いきなり何言ってんのさっ！　バ、バカぁっ!!』

それだけ真っ赤になりながら叫ぶと、朔絆は剣に戻ってしまった。
「やれやれ」
再び静かになった小屋の中で、コウサカは山道を睨みつける。
「……俺と朔絆に勝てると思うな」
街道の更に奥、遥か先のどこかにいるだろう相手に向かって、鋭く細めた目を光らせたコウサカはそう呟いた。

―第三章―　その少女の名は（後書き）

「マビノギ」をやったことがあるお方へ。
本文中で出てくるティルコネイルの鍛冶屋は、ゲームとは違い村から見て川向こうではなく、旅館の隣あたりにある設定となっております。

―第四章―　静かな旅立ち

日が昇り始め月が沈みかけている朝方、ティルコネイルに警鐘（けいしょう）の音が鳴り響いた。

村は人々の駆け出す足音で騒がしくなり、門が堅く閉ざされコウサカが夜通し見張りを行なっていた小屋の周りには自警団とまだ怪我が痛む護衛の三人の男達が集まってくる。今頃は東側にクモ達が罠を仕掛けながら展開している。

「案外、炙（あぶ）り出しが早かったですね」

「……ああ、そのようだな」

コウサカの軽口にレイナルド先生は眼光を鋭くしながらも答える。その眼光の先には、真っ黒な塊が街道から四百ｍほど向こうより近づいて来ていた。

「コウサカ……ひとつだけ徹底しろ」

「なんでしょうか？」

レイナルド先生は視線を街道に向けたまま言う。

「魔族が来たら、たぶん戦えるのはお前だけだろう。オオカミは俺達に任せて何があっても魔族を倒そうとしろ。いいな？」

「……わかりました」

少し間を空けてコウサカが頷く。

「ふ……よし。来たぞっ、放てぇっ！」

距離にして百ｍほど。全員が矢を放つ。ロングボウの訓練が間に合わなかったためショートボウで。

最大射程四百ｍを誇るロングボウを扱えればよかったのだが、引き絞るためには四十五ｋｇ以上の力が必要であり、ただ弦を引く力以外にも放つ時でも高度な技術が必要なため、素人が扱うには困難な弓なのである。

数にして約二十人が一斉に放った矢がオオカミの塊に飛んでゆき、次々とオオカミ達を貫いていく。

「今回はまた多いな……」

昨日来たオオカミ達も多かったが、今度は百近い数のオオカミの大群だった。何十と矢の応酬が続くが、オオカミ達はその数を減らしながらじわじわと距離を詰めてくる。

ティルコネイルの村に入るには二つのルートがある。ひとつはコウサカ達が今守り、オオカミ達が一直線に目指して進んで来ている山道から真っ直ぐ北にある橋のある道。二つ目は東側から回り込んでいくルートである。

予想としてオオカミ達はこの東側にも流れていくと思われていた。だが、実際はただ愚直に橋を目指して殺到してきている。だが、これがもしかしたら陽動かもしれないため、クモ達を東側から動かすわけにもいかない。

「うわっ！？」

一人の男が驚愕したような声を上げた。何事かと他の者がその男に目を向ける前に、男が驚愕した理由を全員が知る。

「あれもオオカミなのか……？」

そこには異様がいた。

外見こそオオカミであるが、普通のオオカミの数倍は巨大で、額に魔族の紋章が浮かび上がり真っ黒な毛皮をしていた。あまりにも異様なモノを見たため、ほとんども者が弓を引く手を緩めかかった。

「手を止めるなっ！」

そこでレイナルド先生の一喝が響く。全員が、はっと我に返り弓を引く手に力を込めようとしたその時、

「ぎゃっ……！」

前方から飛んできた火球によって防護壁のひとつが吹き飛ぶ。銃眼から狙いをつけていた一人が吹き飛んだ防護壁にぶつかり後方に弾き飛んで気を失った。

「ファイアボルト、だとっ……！？」

レイナルド先生が驚愕し叫ぶ。ただ自然界で生きているだけのオオカミに魔法という高度なものを扱えるわけがない。だが、いまそ

れが起こったのだから驚いて当然であろう。
「……いえ、多分いまのはあれが放ったんでしょう」
素早く防護壁の穴が空いた部分に移動していたコウサカは、飛び込んで来ようとしてくるオオカミに強烈な蹴りを見舞いながら前方を見据えて言う。
「何が……はっ！　全員、白兵用意っ！！」
疑問を口にしようとしたレイナルド先生は今すべきことの優先順位にすぐ気付いて、自ら剣を抜きながら号令を発する。
「俺の後ろに何人かっ！」
一身だけで防護壁代わりにオオカミ達を防いでいるコウサカが叫ぶ。
後続のオオカミが次々と空いた穴を目掛けて来ているため、さすがに一人では対処しきれず抜けたオオカミ対策に数人をコウサカの後ろに配置。
「せぃっ！」
コウサカは渾身（こんしん）の力でバスタードソードで突きを放ち、そのまま手を離す。串刺しにされたオオカミは剣が突き刺さったまま後ろに吹き飛び、後続のオオカミ達にぶつかり一瞬だが流れが止まる。
「やるぞ。朔絆」
『おっけーいっ！』
その一瞬でコウサカはクレイモアを背中から抜きながら、大上段に構える。抜いたクレイモアの刀身は金色の光で包まれ、光輝いていた。
「ぜあぁっ！」
『吹っ飛べぇーっ！！』
大上段から振り下ろしたクレイモアから光が放たれる。その光は空いた穴に殺到していたオオカミ達を巻き込み、真っ直ぐに大地を削りながら進んだ。
その光は数にして三十余りものオオカミを巻き込み粉砕して往（い）った。そして、そこでオオカミ達の攻撃が止む。

「何者だ？」
　コウサカは川幅が二ｍほどあるアデリア川を完全装備のまま軽々と飛び越え、南の平原に降り立つ。眼前には巨大な黒いオオカミとそれを取り囲む四十ほどまで減ったオオカミ達、それとその陰にもうひとつの異様がいた。
「化け物め……やはりミレンシアの噂は本当だったか」
　その異様は人間のような背格好で赤黒いローブを身にまとい顔を隠していた。そのローブにははっきりと魔族の紋章が描かれていた。
「……ブラックウィザードというタイプの魔族か」
　魔族の言葉に反応せずコウサカをそう呟く。ブラックウィザードは主に魔法に長けたタイプだと文献にある。
『誰が化け物よっ！　そっちの方がよっぽど――――』
「朔絆、ちょっと黙っていろ」
　朔絆が怒鳴るが、コウサカは口を閉じろという。
『……わかった』
「すまない」
　朔絆に詫びながらコウサカは相手の一挙手一投足を見逃さないように注視する。
「攻撃を止めた、と言うことは何か話すことがあるんだな？」
「ふん……その通りだ。ミレンシア」
　魔族（声からして男）は、傲然と腕を組む。
「魔族に知り合いはいないはずだ」
「そうだとも。だが、我等の主は貴様を知っている」
「主？　なんだそれは？」
「女神モリアン様のことだ」
「なに……？」
　魔族の男が発した名前を聞いてコウサカは眉をひそめる。
「……女神が魔族を操っているだと？」
「その通りだ。私はお前を迎えに来たのだ」
　そして、次に魔族の男が発した言葉の意味が分からず、コウサカ

は二の句が継げられなくなる。
「我等はこの世界を救うため、人間と争っている」
「救うだと……？　どういうことだ？」
「それは我等の下へ来れば教えてやろう」
「……」
コウサカは黙り込む。魔族の男が一体何を言っているのか理解できないためだ。
『ねえ……』
「……大丈夫だ。鵜呑みになどしない」
朔絆の不安そうな声を聞き、コウサカは混乱した頭を冷静に戻す。いま自分がやるべきことも改めて思い至る。
「ひとつだけ聞かせろ」
「いいだろう。言ってみろ」
コウサカの目には透明な光が宿っていた。
「オオカミ達を操りけしかけたのは何故だ？」
「そんなもの決まっている」
コウサカの注視する魔族の男は、薄ら笑いを浮かべながらこう言った。
「人間どもを駆逐するために決まっているだろう？」
「……よく、わかった」
コウサカの頭の中でカチリと音が鳴る。それが何なのか記憶のないコウサカには分からない。だが、意識が切り替わる。ただ、ひとつの目的のためだけに。
「貴様は……殺す」
その目は捕食者のような、それ以上に情け容赦の一切ないモノ。ただ殺すためだけに意識が研ぎ澄まされていく。しかし、魔族の男はそれに全く怯んだ様子もなく溜息を吐いた。
「やれやれ……人間ども風情に飼いならされて」
魔族の男は組んだ腕を解くと、片腕を軽く挙げた。
「ミレンシアは滅多なことでは死なん。半殺しにして連れ帰るぞ」

そう言いながら、腕を前に振る。
「誰がお前などに……なにっ」
オオカミ達が一斉に駆け出す。だが、全てコウサカを避けて防護壁の穴を目指していく。それにコウサカは、はっと我に返る。
「どの道、人間どもは根絶やしにする予定だからな」
「合図を、クモ達を――――」
コウサカはそう叫びながら振り向き援護に向かおうとしたが、何かが身体にぶつかってコウサカは弾き飛ばされ防護壁の門に激突して橋の上に落ちる。
「が、ぁっ……！」
『コウサカっ!?』
火球を作り出してそれを放つ魔法、ファイアボルトを背後から喰らったのだ。だが、強化された胸鎧の背中に当たったため表面が少し炭化しただけで、激突した衝撃以外はダメージはなかった。
「ほぉ……普通の鎧とは違うようだな。並の奴なら今の一撃で全身黒焦げになるんだが」
「……っ！」
コウサカは飛び上がるように起き上がると、魔族の男に向き直る。レイナルド先生の言葉が頭の中で再生される。
「お前とそこのでかいのを倒さないと援護にも行けないようだな……」
「出来もしないことを言わないほうがいいぞ」
巨大な黒オオカミが前へ歩み出てコウサカと睨み合う。だが、その目には生き物としての光は宿っていなかった。
『ぜったい許さないっ！』
コウサカがクレイモアを構えようとしたところ、朔絆が叫ぶ。それに呼応するようにクレイモアの刀身に帯びている光が強くなった。
「ほぉ。大した力を持つ精霊だな」
魔族の男は関心したようにクレイモアから激しく放たれている金色の光を見る。そして、無造作に手を前に振る。

「殺れ。首は喰い千切るなよ」
「グオォォォンッ！」
「ちっ……！」
コウサカは真っ直ぐ走り迫ってくる巨大黒オオカミを、ひとまず横っ飛びで避けようと素早く横向きになろうとする。そこで朔絆が叫んだ。
『あたしをあいつに叩きつけなさいっ！』
「いや、さすがにあの質量を――」
『信じてよっ！』
「……ああ。わかったっ！」
コウサカは横へ向こうとした勢いをそのままクレイモアを重心に一瞬で一回転をし、光輝くクレイモアを巨大オオカミの体躯（たいく）に叩き付けた。
「グギャォンッ……！？」
巨大黒オオカミは重量にして、完全武装したコウサカの三倍以上。大きさでも倍以上をした巨大な体躯を持つ。
そんな巨大なものが数mも真横へ弾き飛ぶ。ただ立っているところを弾き飛ばしたのではない。真っ直ぐに飛び掛って来ているのだ。自重以上もの力が掛かりながら飛び掛って来ているものを易々《やすやす》と真横に弾き飛ばした。
弾き飛ばされた巨大黒オオカミは起き上がらない。クレイモアが叩き付けられた場所は首である。斬り裂かれたわけではないにせよ、巨大な体躯を弾き飛ばすほどの力が首にかかったのである。当然、首の骨は折れるか砕けたのだろう。
「案外、その精霊は掘り出し物かもしれないな。これはいい、ククッ」
取り巻きをあっさりと倒されたというのに魔族の男は顔色ひとつ変えず、むしろ朔絆により興味が増した表情を浮かべていた。
「Ｙｍｄｄａｎｇｏｓｉａｄ（出でよ）。Ｄｉｏｇｅｌｕ　ｆｉ（我を守護せよ）」

魔族の男が何かの呪文を唱えると、周りに微かに脈動（みゃくどう）する四つの光球が現れた。
「いい土産を見つけた」
「……笑えない冗談だな」
コウサカは改めて剣の切っ先を魔族の男に向ける。その顔は一切の表情が消えていた。
「貴様はどうせ意識が消えるのだ。その後のことなど気にする必要ない」
「……再確認した。お前は確実に殺さなければならない」
そして、ただ殺すということを透明に、凄まじい殺気を全身から発していた。だが、何故か先程よりは意識は研ぎ澄まされていなかった。
「ふん、ほざけ」
その言葉と同時に魔族の男は手を振る。すると四体のウィスプはライトニングボルトを放つ。
「……くっ」
コウサカは横っ飛びをして指向性のある雷撃を放つ魔法ライトニングボルトを避ける。だが、着地点にすぐ次のライトニングボルトが放たれてくる。コウサカはそれを空いている左手だけ体を支え側転をしてまた避ける。
ウィスプ達は一体が撃ったら別の一体が次を撃ち、撃ったものが詠唱し直しまた撃つ。そんな方法で絶えずライトニングボルトを連射してきていた。
「くっ、くくく……さっきの大口はどうした？」
さらに魔族の男は悠々とファイアボルトを詠唱し放ってくる。いまコウサカがいるのは隠れる場所が何もないただっ広い平原である。圧倒的に不利だった。ライトニングボルト程度ならカイトシールドでも防ぐことが出来るが防戦一方なところにトドメに威力の高いファイアボルトが飛んでくるのが目に見えているため、逃げ回るしかない。

『ねえ』
「ぐっ……、なんだっ！？」
少しでも距離を取ろうと、緩やかな円を描くようにコウサカは疾走しながら叫ぶ。
『あたし、あれ多分斬れるよ？』
「本当かっ！？　……いやだが、前は刀身が壊れると言っていなかったか？」
『うん。でも、今なら大丈夫……よくわかんないけど大丈夫っ！』
「……曖昧（あいまい）だな。行くぞっ！」
『りょーかいっ！』
朔絆の言葉に疑問すら浮かべずに疾走していたコウサカは急停止をし、放たれてきたライトニングボルトに切っ先を向ける。擬似的な雷を発現させているため実際の雷とは比べられないほど遅い。だがそれでも秒速百m以上の速度（実際はそこまで飛ばないが）で迫ってくるそれをはっきりと目視する。
「はっ！」
精霊の力とは想いである。強力であるが一般に扱われていない理由は精霊石が希少だからだけではない。使う者と精霊。これが互いに信じ合う真のパートナーでなければ力を発揮し切らないのである。不安定ゆえに、まず使われない武器であるが使いこなせることが出来れば……。
「なっ……！？」
バシン、と音と共にクレイモアで斬られたライトニングボルトが掻き消える。魔族の男はそれに驚愕した。
「これはっ……いいぞ、朔絆っ！」
続けて放たれてきたライトニングボルトをさらに弾き消したコウサカは、決定的な勝利の確信を深めて魔族の男に向かって走り始める。
「なんだ、あの精霊はっ……！？」
ライトニングボルトを弾き消しながら疾走してくるコウサカに、

魔族の男は動揺しながらファイアボルトではなく連射の利くライトニングボルトを詠唱し、ウィスプ達と同じように連射を始める。

「……」

コウサカはクレイモアを体の前に真横にしながら疾走する。放たれたライトニングボルトをほんの少し、コンマ秒の間に僅(わず)かにクレイモアの角度の修正を加えながら弾き続ける。

「……Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉ' ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）……」

コウサカは弾きながらアイスボルトを詠唱し呼び出す。

コンマ秒の間にライトニングボルトを弾きながらアイスボルトを詠唱することは、並大抵の集中力ではない。何十桁もの暗算をしながら、格闘技の試合で相手の拳を見切り一瞬で避け続けているようなものである。

「Ａｔｔａｃｋ（往け）っ！」

疾走中なため、集約があまり上手くいかず少し小振りな氷塊であるが、出来たアイスボルト二つをウィスプ達に浴びせる。詠唱し直している最中のウィスプを狙ったため動けず、二体のウィスプがアイスボルトの直撃を受けて光を四散させながら消える。

「くそっ……！　化け物めっ！」

魔族の男はそう吐き捨てると、懐から何かを取り出し詠唱を始める。足元には魔法陣が浮かび上がる。

「……逃がさん」

酷薄(こくはく)に言い放ったコウサカはいつの間にか残り二体のウィスプも倒し、ただ殺すだけの目をして魔族の男の目の前まで迫っていた。

だが、魔族の男は魔法陣から溢(あふ)れ始めた眩(まばゆ)いほどの光に包まれ始めていた。それにコウサカの目は少し眩(くら)み、目を細めて突進の勢いをそのまま神速の突きを放つ。

「がぇっ……！？　で、Ｄｙｃｈｗｅｌｙｄ（帰還）っ！」

「……外したか」

コウサカの突きは魔族の男の右肩を貫いていたが、それだけだっ

た。光の包まれた魔族の男は次第に半透明になっていき、突き刺している手ごたえもなくなる。
「許さん・・・許さんぞぉっ！？　我等の崇高（すうこう）なる使命を理解出来もしない、ミレンシア風情がああああああああああっ……！！」
そう怨嗟（えんさ）の叫びを残して、魔族の男の姿は完全に消え去った。それと同時、ふっとコウサカの殺気も霧散する。
「……」
コウサカは赤く血に塗れたクレイモアを一振りし血を払う。それでもこびり付く血を懐から拭い紙を出して拭い取る。そして、刀身に帯びる光が弱まっていることに気付く。
「……朔絆？」
『ごめん、何かいつもより疲れちゃって……』
「……無理せず休め」
『ごめん……』
最後に朔絆は弱々しく言い、それきり黙りこんだ。コウサカはクレイモアを背中に戻し、代わりに片手に素手よりはマシと腰のベルトから抜いた短剣を持ち、カイトシールドを構える
急いで戻ろうとコウサカが振り向くと、三十ほどまでに減ってしまったオオカミ達が向かってきていた。だが、コウサカは構えを解く。
「……殺さなくても呪縛（じゅばく）は解けるのか」
オオカミ達には明らかに敵意はなく、怯えて逃げているだけだった。それが証拠にコウサカを避けてそのまま走り去っていく。
コウサカの周りには土煙（つちけむり）と血の匂いと、オオカミ達の死骸（しがい）だけが残っていた。
「人間に死傷者はなし、か……。だが……」
腕や体を噛まれ、引っ掻かれといった者は多いが致命的な傷は誰

も負っていなかった。首や大きな血管の走っている部位は全員がプロテクターを付け、守っていたためだ。

だが、クモ達は違う。頭部が、つまり致命的な部位が低い位置にあるためオオカミに噛まれただけでもかなり致命的な傷になる。そのせいで、クモの死骸もオオカミの死骸に混ざっていた。

「ひとまず、傷の手当が最優先だ。全員、無理して動くな。コウサカ、ディリスさんを呼んできてくれ」

「……わかりました」

レイナルド先生自身もかなりの傷を負っていた。致命傷ではないにせよ、噛み千切られた部分から血が流れ続けている。他の者はそれ以下とは言え、体中から血を流している。

ただ、苦痛に顔をしかめながらも涙を浮かべながらクモの死骸に黙祷をしている者が多かった。モンスターではあるが、村の人々とクモ達は持ちつ持たれつと共同体であった。言葉は通じずとも村の隣人であり、自分達と同じく村の守り手であった。

コウサカが村人達が避難所として集まっている聖堂に向かい中に入ると、村人達は背中に受けたファイアボルト以外に目立った傷を受けていないコウサカを見て、安堵の表情を浮かべた。コウサカはディリスを見つけると声をかけた。

「ディリスさん、怪我人の手当てをお願いします」

「わかったわ」

と、ふとコウサカはナユキと目が合った。事情は村人達から聞いたのだろう、コウサカを見ると安心したように微笑んだ。

「……」

コウサカはとりあえず、小さく頷いておいた。不思議な少女なため、まだ扱い方がわかっていないためだ。

「怪我人はどのくらいいるの？」

「あ、ああ。それは――」

コウサカはナユキから視線を外すと、ディリスと共に外へ出た。

「何だ、これは……」
手当ても一段落した頃、異様なことが起こった。
魔操獣と化していたオオカミ達の死骸が一気に腐敗を始め、あっという間に骨すらも風化して何も残さず消滅した。
「昨日のオオカミ達の死骸も消えている……。魔族の支配が解けたせいか？」
クモ達の死骸はしっかりと残っていることから、魔符が関係しているということがわかる。
「……とにかく、怪我人を早く運びましょう」
目の前で起こった異様に全員が茫然としている中、コウサカがそう言う。それに傷の軽い者が肩を貸して、怪我人を運び始めた。クモ達は何とか自力で動けるようだった。
「俺は、残って警戒をしておきます」
「ああ、頼む。……すまんな、お前にばかり負担をかけて」
肩を貸してもらい立ち上がったレイナルド先生が、すまなそうに言う。
「いえ。まともに動けるのが俺しかいない以上、俺がやるしかないでしょう」
「……すまない」
もう一度、レイナルド先生は詫びて聖堂に歩いて行った。他の者も同じように詫びながら聖堂に向かって行った。
《……頼ンダぞ》
「……ああ、任せろ」
体中から体液を流しながらボスクモも、そう詫びを入れる。いつもの不快な感情は一切伝わってこなかった。
痛々しい自警団とクモ達を見送ってからコウサカは南の平原に行き、飛ばしたバスタードソードを回収した。不気味に赤い血だけが刀身には残っていた。
コウサカは防護壁の前にある橋の上に行きそこからアデリア川の

水で手ぬぐいを濡らして、腰を下ろすとクレイモアを背中から下ろし刀身を拭い始めた。先ほど一応は拭い取ったがやはり完全に拭いきれておらず、刀身には微かに血の痕が残っていた。

「朔絆、大丈夫か？」

刀身を丁寧（ていねい）に拭いながら、コウサカは朔絆に声をかける。さっきから一切声を発しないため、心配なのだ。

『……』

「朔絆？」

『ん……あっ。ごめん、何？』

「……いや、ゆっくり休め」

『うん……』

朔絆の声には深い疲労の色が見えた。魔法すらも弾き飛ばすほどの力を解放したのだ。それだけ消耗がいつもの比ではないのだろう。

川のせせらぎと、風に揺れる草の音だけが静かに場を支配していた。さっき起こったことも幻と思えるほどにのどかな時間だった。

「……よし」

刀身を綺麗にし終わり湿気を乾いた手ぬぐいで丁寧に拭いきり、クレイモアを背中に戻したコウサカはふと、寂しく思う。

いつもなら刀身を拭っていると朔絆が口うるさく出て来るからだ。今はそんなことを気にすることが出来ないほど消耗してしまっているのだろう。

「……」

そのことに、コウサカは思う。おそらくは、もう今までの平穏な日常を送ることは出来ないだろうと。

それに、ともうひとつ思う。自分はどういうわけか魔族に目をつけられている。自分がいるだけが要因ではないだろうが、少なくとも自分がいることで確実に敵の目はティルコネイルに向いてしまう。

（それならば……）

コウサカはひとつの考えに行き着く。だが、行き着くと同時に顔をしかめる。自惚れ《うぬぼ》をしているわけではないが、たぶん

自分がいなくなれば村人達は悲しむだろうと思ったからだ。礼に失するが、ひとつの方法をコウサカは思いついた。

「……まさに、か」

馬鹿馬鹿しい方法であるが、それしかないとコウサカは思いながら拭い終わったクレイモアの刀身を優しく撫でる。

そして、自分の無意識に発した殺気。あれで恐らく……。

『……なに考えてるか知んないけど』

姿は現さず、朔絆が声を上げる。

「無理は――」

『してないよ。たぶん、今ひどい顔してるから出て行けないけど……』

「……そうか」

あまりにもいつもと比べ弱々しい朔絆にコウサカは、今更ながら後悔の念を抱く。だが、信頼すると言った以上それを口にするのは裏切り行為に等しい。その考えを打ち消し、コウサカは話の続きを朔絆に促す。

「ところで、話の続きは？」

『あ、あぁ、うん。え、っと……』

「ないなら、休んでおけ。無理をしても疲れを引きずる」

『……はぁ、そうする。タイミング外しちゃったし……』

朔絆の呆れたような溜息が聞こえた。

「？」

コウサカの頭の上には？マークがいくつも浮かんでいたが、それっきり朔絆は静かになった。朔絆に答える意思がないと分かるとコウサカは疑問をすぐに放棄して、静かに街道を警戒することにした。兜を脱ぎ傍らに置き、今後のことに思案を深めながら。

日は昇りきり、正午になった頃。橋の上に腰を下ろしたままのコ

ウサカは後ろから近づいてくる足音を感じ取る。明らかに素人の足運びだとわかる。
「あの……」
「君か」
コウサカは振り返りもせずに声だけで相手が誰なのかわかった。聞き覚えのない声であるため逆に分かり易かったのである。ナユキである。何やらランチバスケットと思われるものを二つ手に持っている。
「何か用でも?」
「皆さん、朝から何も食べていなかったので……」
コウサカは半身を捻ってナユキを見る。ナユキは手に持ったランチバスケットのひとつを重そうに地面に下ろすと、もうひとつのランチボックスの中からナプキンに包まれたサンドイッチを取り出した。
「ああ、なるほど」
色々と考えていたせいか気付かず、思い出した途端に腹の虫が鳴いた。
「くす……。はい、どうぞ」
「ああ、ありがとう」
「あ。あと、精霊さんにも」
コウサカにサンドイッチを手渡し、ナユキはもうひとつのバスケットを開ける。中には雑貨類や武器類といった、要するに朔絆の食べ物が入っていた。
『……ありがと』
朔絆は素直に礼を言った。普段からすればとても珍しい。それだけ余裕がないということだろう。朔絆は実体化をして、バスケットの中に入った。一瞬見えた顔には疲れの色が残っていた。
「じゃあ、わたしはこれで――」
「待った」
聖堂の方に戻ろうとしたナユキをコウサカは呼び止めた。

「君には話しておいた方がいいと思ってな」
「？　はい、なんでしょうか？」
ナユキは不思議そうに首を傾げた。
「女神のことだ」
「……っ！」
ナユキは目を見開き、言葉もなく驚いた様子だった。
「なにか女神様のことがわかったんですかっ！？」
「……俺は女神を探しに、いや多分助けに行こうと思っている」
「え？」
「……君が見た女神の夢想（むそう）は、単なる夢ではないのだろう。探しに行くのなら君も連れて行かなくてはならないだと思う。どこにあるかわからないが、おそらく魔族の本拠地に行くことになる。そんな危険な旅になるが君は来たいと思うか？」
「はいっ！　当たり前ですっ！」
コウサカは静かに目を伏せる。
「……そうか。ただし、他言無用だ。近いうちに出るから、もう少しマシな格好を用意しておいてくれ」
「はい、わかりました」
「引き止めて悪かった」
「いえ、では」
そう言うとナユキは小走りに聖堂に向かって行った。
『なんで、あの子を？』
それまで黙っていた朔絆が口を開いた。食べて元気が出たのだろう、声に張りが戻っていた。声にいつもの棘（とげ）がある。
「勘でしかないが、たぶん魔族の本拠地を見つけるにはあの子が必要なんだと思う……そんな目で見るな。俺だって、外道な方法だと思っている」
『あたしが言ったのはそういう意味だけじゃないんだけど……。ま、いいか』
「どういうことだ？」

『べつに。まあ、とにかく……その』
食べ終わった朔絆がバスケットの中から、ひょこっと出てきて最後に言い辛そうにひとつだけ付け足した。
『あたしはあんたを信じてどこまでも付いて行く』
「……ああ、俺も信頼しているよ。相棒」
コウサカは目を瞑り、少し嬉しそうにそう言った。
『え、えっと……それ、それだけっ！』
朔絆は真っ赤になりながら姿を消した。そんな朔絆のいつもの姿を見て、コウサカは今まで送ってきたティルコネイルの日常を思い出す。
「……やはり、寂しいものだな」
たった数ヶ月だが、平穏なティルコネイルで送ってきた日常がコウサカの頭の中を通り過ぎる。コウサカは立ち上がり、村長の家へと向かった。

「本当にいいのか？　何度も言うが危険だ」
「大丈夫です。わたしは女神様に会うんです」
「……わかった」
ナユキのその言葉を確認すると、コウサカは深夜にも関わらず見送りに来てくれた村長に向き直る。
「すみません。勝手に決めてしまって」
「いや、構わないよ。コウサカ、君には助けられてばかりだった。このくらいの我がままは安いよ」
「……本当にすみません」
コウサカは深々と村長に頭を下げる。
「この村には護衛で来ていたあの三人が残ってくれると言う。ダンバートン側もそれを了承（りょうしょう）した。大丈夫だから安心して行っておいで。……村の者達は悲しむだろうがね」
「……事情云々（うんぬん）はお願いします」

「ああ、勿論。何とか説得してみるよ。まあ、君の書いた手紙だけで納得してくれると思うがね」

コウサカは村人、八十二人全員に向けて手紙を書いた。一人ひとりとの出会いから始まり、今まであった各々との出来事を詳細に書き出して、最後にはお礼で締めくくってある。特にお世話になった村長や、朔絆と仲の良かったベビンへの手紙は長文となった。

「ダンバートンにはすでにフクロウ便で伝えてある。この書状を官庁の受付に見せなさい」

村長は一通の手紙をコウサカに渡す。

「……何から何まで、本当にありがとうございます」

「いやいや。言っただろう、君には助けられてばかりだ。このぐらいは安い」

そして、村長は少し寂しそうな表情を浮かべる。

「では、達者でね。……皆で待っているよ」

「はい。必ず戻ってきます」

最後に村長と握手をして、コウサカも馬車に乗り込む。乗り込んだことを確認すると馬車は出発した。

「村の人たち、すごく良い人ばかりでしたね……。たった数日だけでしたが、とてもお世話になりました」

「……そうだな」

コウサカが乗り込むとナユキが話しかけてきた。村人達とはすでにかなり仲良くなっていたようだった。それだけに何も言わずにいなくなることを申し訳なく思っているのだろう。と、朔絆が実体化して出てくる。

『……なにいってんの。終わらせて戻ってきたら謝ればいいでしょうが』

「それも、そうですね……。ありがとう、精霊さん。気にしてくれて」

『べっ、べつにそういうわけじゃ……』

「くすくす……」

『な、なに笑ってんのよっ！』
　コウサカはすっかり仲良くなった（？）二人を見て、小さく微笑んだ。実際は実体化した朔絆がナユキに食って掛かっているだけだが。
「あ、コウサカさん」
「？」
　コウサカの視線に気付いてナユキが向き直った。
「頑張りましょうねっ！」
「……あ、ああ。そうだな、頑張るとしよう」
「はいっ！」
　コウサカは一瞬ポカンとしたが、そう答えた。それにナユキは満面の笑みを浮かべて答えた。
『……』
　一方、朔絆は苦々《にがにが》しくコウサカを睨んだ。と、コウサカが手を伸ばして朔絆の頭に手を乗せた。
「頼りにしているぞ、相棒」
『……バーカ』
　一転して恥ずかしそうな表情になった朔絆はそう言い残して姿を消した。
「あれ、精霊さんは？」
「ああ、色々あったからな。疲れて寝たんだろう。君も寝るといい。ダンバートンまでは半日以上かかるからな」
「？　はい。なら、そうさせてもらいます」
　ガタゴトと揺れる馬車で素人が早々寝られるわけがないのだが、ナユキはあっという間に寝息を立て始めた。村の中で色々と手伝っていたようだったから、だいぶ疲れていたのかもしれない。
　ナユキの寝顔を見て、コウサカは思った。世界がどうとかは実感が沸かないが、ティルコネイルの人々がこういう安らかに眠れる場所を護るために戦おうと改めて思い至る。そして、戦いが終わったら必ず戻ってこようとも。

「……帰ってきたら散々怒られるだろうがな」
コウサカはそう呟いて声には出さず笑った。寂しげに、悲しげに、申し訳なさそうに。
ダンバートンを目指し、馬車は多少揺れながら走って行った。

―第五章―　城郭都市ダンバートン

深夜の街道を揺れながら馬車が走っている。コウサカの身体もそれに合わして右へ左へと少し傾く。

御者台（ぎょしゃだい）に灯るランプ以外には、月明かりしか光源のない薄暗い荷台の中で一人コウサカだけが起きていた。そして、自分の手をただじっと見つめていた。

（あの男を殺すと言った、その後……俺は確かに……）

ぐっ、とコウサカは拳（こぶし）を握る。だが、何も起こらない。何も思い出されない。

（……止めよう。記憶のない俺には詮無いことだ）

考えを振り払って、コウサカは向かべき場所のヒントをくれたタルラークのことを思い出した。

コウサカがティルコネイルを出発する前、手紙を書く以外にも行なったことがある。それは村長に会いに行った時のこと。

「三戦士……、ですか？」

「そう。君も知っているタルラークという男のことだよ」

村長には話しておこうと村長の家に訪れたコウサカは、村長に魔族と女神のことを話していると村長からその言葉が出た。

タルラーク。

理想郷ティルナノイを求めて旅立ち、消えた三戦士のドルイド。

魔導士としての才能が豊かで若くしてドルイドの高僧であった。以前、とある事件によって瀕死の重傷を負い、その傷を癒すため今もマナハーブというマナを内在したハーブを摂取しなければならない身体になった。

マナハーブの摂取時はクマの姿へとどういう魔法か分からないが

変身する。それは、マナハーブは適切に処置してから服用しないと人間の身体では害を及ぼす薬草で、拒絶反応を起こすためである。何故、クマの姿を選んだのかは不明。

「……以前、とある二人と共に各地のダンジョンを巡り、旅を続けながら魔族のことを調べていた。たぶん、話を聞いておいて損はないよ」

一瞬、村長の顔に物憂げな表情が見えたがすぐに消えた。

「……しかし、話すでしょうか。あの様子では、とても話すとは思えないのですが……」

コウサカは以前、村長の頼みでタルラークの住むティルコネイルより更に北、雪深いシドスネッターの奥にある山小屋までマナハーブを届けに行ったことがある。その時に見たタルラークの様相はまるで世捨て人のそれだった。朔絆の契約の時も。

「・・・これを」

村長は表情を曇らせながら一通の、少し色褪せた手紙をコウサカに渡す。

「・・・おそらくタルラークもこれを見れば、協力してくれるだろう」

コウサカは手紙の表裏を見てみるが宛名や差出人の名前などはなく、ただ裏に何かの絵のような下手な文字のような、よくわからない記号のようなものだけがあった。

「・・・本当にいいのですか？　かなり大事な手紙のようですが」

「構わないよ。あの子も、きっと・・・・・」

「あの子・・・？」

「ああ、いや。こっちの話だよ。気にしないで」

村長の顔に苦しげな表情が一瞬浮かんだことをコウサカは見逃さなかった。

「・・・わかりました」

コウサカはこの事は今後、口にしないように心に誓った。今まで

村長のこんなに苦しげな表情を見たことがなかった。
「タルラークさんの下へ行って見ます」
「ああ、そうか。話を聞けるといいね」
コウサカは椅子から立ち上がると村長に一礼し、シドスネッターへと向かった。

「・・・確か、マナハーブの補充にはまだ日があったと思いますが」
タルラークはコウサカと認めると、山小屋の中に入れた。
「いえ、今回は違う目的で来ました」
「・・・違う目的、ですか？」
「これを」
「・・・？」
コウサカはタルラークにダンカンから預かった手紙を渡す。タルラークもコウサカが行なったように何となく表裏を確認する。
「・・・っ！　これは・・・」
タルラークは裏にあったよく分からない記号を見て、目を見開いた。コウサカはタルラークから初めて感情らしい感情を目にした。
「これを、どこで・・・？」
「ダンカン村長より預かりました」
「そうですか・・・・ダンカンさんが」
タルラークは沈痛（ちんつう）な面持ちとなった。
「・・・こんなものをわざわざ私に渡すということは、何か頼み事があるのですね？」
「はい。タルラークさんは、以前魔族について調べていたと村長より聞きました。魔族の本拠地について何かわかりませんか？」
魔族の本拠地、という言葉でタルラークの顔色が変わった。目を細め、厳しい表情を浮かべる。
「・・・一体、何故そんなことを聞くのですか？」
「それは」

コウサカは魔族の襲撃と女神、それにナユキの夢について話した。
「・・・ティルナノイ。確かに心当たりはあります」
「それは一体・・・？」
タルラークはさっきよりも沈痛そうで、苦しげな表情を浮かべながら話す。
「・・・私はティルナノイという場所に行ったことがあります。最も、あそこは到底楽園などと言えるものではなかったですが・・・・」
「・・・そこに行く方法は？」
「・・・・・少し、待っていてください」
そう言うとタルラークは奥にある卓に向かうと、その上で何かを書き始めた。
「ダンバートンの聖堂にクリステルという女性がいます。その女性にこの手紙を。あと聖堂のメイブン司祭にはこの手紙を。これはあなたに」
タルラークはそう言って三通の手紙をコウサカに手渡した。
「・・・あなたなら、もしかしたら」
「？　何です？」
「・・・いえ。それともうひとつ。グラスギブネンという巨人についてです」
「グラス、ギブネン・・・？」
「魔族の召喚しようとしていた太古の怪物ですよ・・・」
大きさは約七m前後、四本の腕を持ち、二本足で立つ魔導生命体だと言う。
その昔、現エイリフ王国の建国するよりも遥か以前、古（いにしえ）のウレイド王国を治め、強力な力を持っていた人間族パルホロンと魔族ポウォールとの戦いでその姿が確認され、現在ウルラ大陸に住むトゥアハ・デ・ダナン族よりも遥かに強かったパルホロン族がたった一体のグラスギブネンを打ち倒すのに数万人の犠牲を払った。だが、グラスギブネンの息絶えながら吐き出された毒と暗黒のマナにより、

今でも戦いの舞台となったセンマイ平原は人の住めない土地なってしまった。そして、その戦いで壊滅的打撃を受けたパルホロン族は、強大だった力のほとんどを失い滅んだとされている。

そうタルラークは深刻な表情で語った。

「・・・なるほど。もし魔族の本拠地・・・ティルナノイまで行けたとしてもそいつと戦わなければならない・・・。そういうことですか」

「・・・はっきり言って、いくらあなたがミレンシアと言っても勝ち目はないでしょう。それでも行くのですか？」

タルラークの目には光りがあった。修羅場を経験し、生死の境を見た者だけが持つそれだ。

「大層な大儀や志はないですが・・・。ただ、襲撃してきた魔族の男・・・奴だけは野放しに出来ない・・・。それと女神と会いたがっている子の願いを叶えついでに、俺も聞いてみたいことがあるので」

「・・・そんな理由で命をかけると？」

「それともうひとつ。・・・ティルコネイルの人たちには世話になりましたから、その人たちを守りたい。まあ、俺にやれることがあるならやり切ってから死にたいのです」

コウサカは最後の部分に笑みを見せながら言い放った。

「そう、ですか・・・」

タルラークは一度目を伏せると、ゆっくりと息を吐き出した。その顔はいつもの悄然としたものではなく、もっと人間らしさが浮かび上がっていた。

「私に出来るのはここまでです。こんな病み上がりな身体では、足手まといになるだけですから」

「いえ、大助かりです。本当にありがとうございます」

コウサカは深々と頭を下げた。

「・・・ご武運を祈ります」

もう一度一礼をすると、コウサカは山小屋を出て行った。

「・・・マリー」
色褪せた手紙の裏の記号のようなものを見て、タルラークは一人そう呟いた。

魔操獣(まそうじゅう)の一件でしばらく閉鎖されることになった伐採キャンプを馬車が通り過ぎてしばらく経った頃。
コウサカは馬車に揺られながらタルラークとの会話を思い出しながら、道具入れの大きなカバンから小瓶(こびん)を取り出す。その中には黒いバラが入っていた。タルラークからの手紙をティルコネイルの男性司祭、メイブン司祭に渡すと代わりに渡されたものである。クリステル司祭という女性に手紙と一緒に渡してほしいのだという。
「・・・・・」
コウサカは再びカバンの中に小瓶を戻すと馬車の先頭、御者(ぎょしゃ)の隣に身を乗り出す。すでに日は昇り辺りは明るくなっていた。
「何もなくて何よりだ」
「・・・それが返って不気味ですけどね」
手綱(たづな)を握っていた御者にコウサカが声をかけると、不安を隠さずに御者は言った。ティルコネイルでの一件、それと山道の所々真っ赤に染まった地面を通ってきて、精神的に堪(こた)えているのだろう。
「不気味なだけで何もないならそれでいいと思うが」
「まあ、それはそうなんですが・・・」
そう言われて御者は不安そうな顔のまま、困ったように頭を掻いた。不安は不安だが、確かに何も起こっていないため言う言葉が出ないのだろう。
「もうすぐ森も抜ける。あまり気にせずに」
「そう、ですね・・・。そうします」
コウサカは幾分か表情が晴れた御者から離れ、荷台へ戻ると納入箱などで狭っ苦しいが腰を下ろす。
「ん・・んんぅ・・・。あ、おはようございます・・・」
「朝と言うより昼だがな。すでに」

コウサカが腰を下ろすと、ちょうどナユキが寝惚け半分で目を覚ましていた。
「寝心地はどうだった？」
「ちょっとだけ、身体が痛いです・・・」
少し恥ずかしそうにナユキは起き上がる。
「慣れない者には厳しかったか。まあ、夜通し徒歩で来るよりはマシだと思って納得してくれ」
「そうですね。・・・・・歩いてたら大変でした」
ナユキは見るからに体力が無さそうだった。徒歩で来ていたら夜通し歩くどころか途中で野宿しなければならなかっただろう。
ちなみに、馬車が大型で牽く馬も重種だったため車速が遅かった。コウサカだけでダンバートンに向かっていたら半日以上どころか数時間も掛からずに到着していただろう。
「しかし、なかなかに似合っているな。マシな格好を、と言ったがそこまでしっかりしたものを身に着けてくるとは」
「村長さんがわざわざ用意してくれて餞別だって・・・」
ナユキはそう言いながら身に着けている鎧を大事そうに撫でた。
今、ナユキはワンピース姿ではない。らふティオズ・アーマーという胴体を覆う緩やかな形をしたプレートアーマーと黒いショートパンツ、黒いニーハイソックスで包んだ足はニーハイブーツ、腕も深い蒼に金色で紋章のような細工が施されている前腕の中ほどまで覆うエルビングローブという装備に身を包んでいた。
ちなみに、コウサカの装備とは比べるべくもないが普通の少女が身に付けられる重量ではない。だが、ナユキもミレンシアなため平気である。
「ちょっと・・・・、肩がすーすーしますけどね。あはは」
そう言って腕を交差するようにナユキは自分の露出している肩を抱いて、寝るときに使っていた毛布を手繰り寄せた。鎧の関係上、覆われているのは胴体だけで腕や足はほとんどの部分が露出している。他のグローブやブーツなどで補ってはいるが寒いのだろう。

「寒いのか？」
「あ、ちょっとだけですよ。ちょっとだけ・・・」
その言葉とは裏腹に寒いという言葉に反応したのか、明らか寒気が差したようだった。ふと、コウサカは思い至る。
「少し待て」
「？」
ナユキの頭の上に？マークが浮かんだが、コウサカはナユキの手繰り寄せた毛布を断ってから渡してもらう。毛布にはまだナユキの体温が残っていた。
コウサカは毛布を内側から手で支え、テントのような形になったその中にもう片方の手を入れる。
「・・・Ｒｗｙｎ　ｇｏｂｅｉｔｈｉｏ　ｙ　ｆｆｌａｍ（我は火炎を求める）・・・」
そこでファイアボルトの詠唱を行なう。ファイアボルトの詠唱はアイスボルトの詠唱よりも何倍も難しい。マナを操って空気中の水分を集めてそれを氷結させることは案外簡単だが、火を起こすとなると一気に難易度が跳ね上がる。
一般に火が点火するには、可燃物、酸素ガスのような酸化剤、それらの混合物が引火点を越えるための熱が必要である。分かりにくいと思うので摩擦熱を例に説明を。『何かと何か』を摩擦し続けることで発火する温度、つまり引火点に達することで火が起こるのである。
魔法で火を起こす場合この『何かと何か』が問題なのである。それは空気中の微粒子であったり、マナ自体の素粒子であったりと使うのは人それぞれであるが、それをマナを感じて見つけ操り、それを凄まじい勢いで摩擦させ発火させなければならない。そして発火させた火の元、火の粉のようなものをさらに巨大なものにしなければならないため、マナを操り周囲の空気をその火の粉に集中させる。それが火になり炎になり、そうして大きくなって初めて実用化できる『火』という火力を生み出すことが出来る。

「これを被っていろ」
「・・・？　わっ、あったかぁい・・・・・」
暖め終わった毛布をコウサカがナユキに被せてやると、幸せそうな声が聞こえてきた。
「ありがとうございます。あ・・・すみません、ご迷惑かけて・・・・・」
ナユキはお礼を言った後にコウサカが何をしてくれたのかを理解して、顔を赤らめながら謝った。
「いや」
コウサカはふぅ、と一息を吐く。そこで朔絆が実体化して出てきた。かなり不機嫌な顔で。
『・・・まだ着かないの？』
「体感時間的に考えればもうしばらくすれば着くだろう。腹でも空いたのか？」
『・・・フンッ』
そう吐き捨てるように言うと朔絆はコウサカの肩に座った。
「どうかしたのか？」
『べっつにぃ～・・・』
「ふむ」
理由は分からないが朔絆の機嫌が悪いことを察して、コウサカは肩をすくめた。
「？」
コウサカと朔絆のそんな様子にナユキは小首を傾げた。そんな風に話していると、
「ダンバートンが見えたぞー」
御者が後ろを振り返りながら言った。馬車はいつの間にか森を抜けて、ダンバートンに続く見晴らしの良い街道に出ていた。
「これはすごいな・・・」
コウサカは唖然としたようで言葉もないようだった。ナユキも、先ほどまで不機嫌だった朔絆も小さく口を開けながらダンバートン

を見て茫然とした。
　まず目に付いたのはその壮大さだった。まだ何ｋｍかは離れているはずが、巨大さがよくわかる。高さ十ｍはあろうかというほどの城壁が一辺五百ｍは伸び、街を正方形に囲っていた。起伏の少ない平野に立っているため、よく目立つ。中にはもう入らないのか城壁の外にもかなりの数の家が城壁にぴったり寄り添うように数百あるが、普通の家がまるでおもちゃのように小さい。街の周りには広大な田畑が広がり、農業に従事している大勢の人々が見られた。平野はティルコネイルの何十倍もの広さだろう。
　ダンバートンはエイリフ王国の東端に位置する大都市である。交通の要所として北にはトゥガルドアイルを経てティルコネイルへ、南にガイレフを経て鉱山都市バンホールへ、西にオスナサイルを経て湖畔都市イメンハマへ、北西にアブネアを経て城塞都市タルティーンへ向かうことが出来る。そのため、ダンバートンは商業都市としてもウルラ大陸で他に類を見ないほど栄えている。
　この街を守っているのはウルラ大陸最大のギルド『ダンブレテン』である。ギルド構成員約千人を数える巨大ギルドで、様々な依頼をこなしながらもダンバートンの守り手として日々腕を磨いている。
「良い意味で想像を裏切られたな・・・」
「どうだい、すごいだろう？」
　コウサカから溜息が漏れると馬車に同乗している商人が誇らしげに言った。
「ああ、これはさすがに驚いた」
「だろう？　俺達の自慢の街さ」
　商人は嬉しげに笑みを見せながら言う。他の商人達も笑みを浮かべていた。
「誇りたくもなるだろうな。これほどの街なら」
　これだけの規模の城壁と街をどのくらいの年月をかけて建造したのだろうかと思いながら、コウサカは商人の言葉を肯定した。
「今まで魔族の奴等と小競り合いが何度もあったが、全勝だぜ？

怖いもんなしだっ！」
「小競り合い？　魔族が襲撃して来ているのか？」
商人の一人が言い放った言葉に、コウサカは目を細める。
「ああ、最近になって特に多くなってきたんだが、それでも余裕よおっ！」
「なるほど。ということは、あれは歩哨（ほしょう）か」
コウサカは農作業をするわけでも何か作業に取り掛かるわけでもなく、ただウロウロとそこら辺を歩き回っている者達に目を向ける。その眼光は鋭い。
「ダンブレテンのハンターさん達だ。ああやって、農作業している奴等を守ってくれてんだ。一人ひとりが笛を持っていて何か起こったらそれを鳴らして仲間がすぐに駆けつける、ってことらしいぜ」
「なるほどな・・・」
コウサカは関心してまた溜息を漏らす。ティルコネイルの自警団とは規模も個々人の力量も組織力もまさに桁違いである。
馬車は緩やかに曲がった街道を進み、ダンバートンの北門を目指した。

横幅二、三mはある大型馬車が楽々すれ違うことの出来るほどの巨大な門を通り過ぎたところで、コウサカ達は下ろしてもらった。街道から門までの道を家々が、露天が囲むようにあった。まだ門からすぐだというのにすでに多くの人が行き交っており、活気に溢れている。地面には石畳（いしだたみ）が敷かれ、しっかりと舗装（ほそう）された地面はティルコネイルの土がむき出しで当たり前なことに慣れた者には新鮮だった。
商人達に礼を言いながら別れると、コウサカ達は今居る北門からダンバートン領主のいる官庁（かんちょう）を目指すことにした。商人達の話からすれば、中央区にある一番背の高い建物だと、多少曖昧（あいまい）な言い方で意地悪く教えてくれた。

「にぎやかですね～・・・」
ナユキは興味津々といった風で周りをしきりにキョロキョロと見渡している。まだ入ったばかりの位置だというのに露天が至るところに出て食べ物や小物、他にも武器の叩き売りまでやっている露天がある。
『あ。あの剣、おいしそう・・・』
朔絆も違う意味で興味津々といった風だった。朔絆は剣の中だが、何となくコウサカは朔絆の視線が剣の置かれた露天に注がれているとわかった。それも値段が張りそうな剣ばかり並んだ。
「朔絆、さすがに無理だ。というより食い意地を張るな」
『なっ!?　ち、ちがうっ！　あ、あれはその、えっと・・・そ、そう！　いい剣だなってっ！』
「イコール美味そう、ってことだよな。お前にとって」
『うっ・・・バ、バカぁ』
そんなコウサカと朔絆のやり取りを行き交う人々は怪訝(けげん)そうな視線を向けていた。客観的に見れば鎧の男がどこからか聞こえる声と話している。と、コウサカがその視線に気付く。
「ああ。これは精霊武器だ。いまのは精霊と話していた」
そう周りに言いながらコウサカが背中から金色に光り輝くクレイモアを抜いて見せると、人々の視線は物珍しそうなものに変わった。
「そういえば、ナユキはどこだ?」
剣を背中に戻しながら、ふと気付いたようにコウサカは左右を見渡す。と、少し離れたところでナユキが小物を扱っている露天の主人に捕まってしきりに何かを勧められてオロオロといる様子が目に入った。
「やれやれ・・・」
コウサカは小さく溜息を吐きながらナユキの下へと向かった。
「キミにはこれなんてよく似合うよ、どうだい?」
「い、いえっ。あの、わたし・・・」
「なら、こっちは値段も手頃だしよくないかい?」

「あ、あのですから・・・」
「待った」
ナユキと主人の間に溜息を吐きながらコウサカは割り込んだ。
「あ、コウサカさんっ・・・！」
ナユキの顔に安堵の色が浮かんだ。
「おや、彼氏さんも一緒だったか。こっちのペアリングなんて、どうだい？」
「か、かれしっ・・・！？」『ぬわにぃっーー！』
「・・・はぁぁ」
ナユキは『彼氏』という言葉に顔を真っ赤にし、朔絆はものすごい勢いで実体化して飛び出て来た。コウサカは、一人明らかに面倒なことになる予感に深い溜息を吐いた。
「なっ・・・なんだい、このちっこい子はっ！？」
精霊など見たことがないのだろう露天の主人はいきなり目の前に現れた小さな少女に、目を見開いて驚いた。
「・・・朔絆、今後同じことを繰り返しそうだから俺が言うまで入っていてくれ。主人、その子は精霊だ。この剣のな」
コウサカが多少ウンザリと朔絆に言いながら、さっきも行なったように背中の光り輝いているクレイモアを抜いて主人に見せた。
『・・・フンッ』
朔絆は不貞腐(ふてくさ)れたように姿を消した。コウサカは後で何か買ってやろうと思った。
「は、はぁ・・・精霊ねぇ。初めて見たよ。てっきり御伽噺(おとぎばなし)の中だけの存在かと思っていたよ」
主人はまだ信じられない様子で金色の光を放つクレイモアをしげしげと観察している。
「まあ、色々とな。俺の大事な相棒だ。それより官庁への行き方を教えてもらえないか？」
商人達からは北門からただ真っ直ぐ南に歩いていけば見つけられると言われていたが、コウサカは念のため聞いてみた。

「おや、官庁に行きたいのかい？　でも、わざわざ露天で聞くことかねぇ」
　主人の目はちらちらと並んでいる小物を見ていた。
「・・・やれやれ。商魂逞(たくま)しいとはこの事を言うものかな。ナユキ」
「は、はい？」
　まあ別にいいか、と思ってコウサカはナユキに声をかける。
「適当に選べ。ただし高いのはなし、だ」
「え？」
　ナユキは言われた意味が分からずキョトンとした。
「主人から情報を聞くには何か買わないと駄目だそうだ。ちょうど小物だし、何か買ってやろう」
「えっ、えぇっ！？」
　突然ナユキが驚いた声を上げた。
「えっ。い、いいんですか？」
「いいから買ってやると言ったんだが、とりあえず選んでくれ」
「はっ、はい」
　何をそんなに緊張しているのか、遠慮がちだが真剣な表情で選び始めたナユキにコウサカは、女の子にとってはこうものを選ぶことはそれほど大事なのか？と微かに首を傾げた。
「それで官庁はどこだ？」
「ここの通りからずっと南に歩いていくと、デカイ建物と広場がある。その建物が官庁だよ。広い広場だからたぶんすぐに分かると思うよ」
「なるほど。つまり、聞くまでもなかったと、そういうことか」
「こっちだって、生活かかっているからね。少しでも売らないと」
「まあ、そうだな・・・。これをくれ」
「おや、あの子はまだ選んでいるけど？」
「こっちは別件で使う」
　主人の言葉に肩をすくめながら、コウサカは複雑な結び目模様の描かれたペンダントを手に取った。これは朔絆用である。食べ物的

な意味で。
「ありがとうございます。包装はいかがしましょうか?」
「いや、そのままでいい」
代金を払って受け取ったペンダントをコウサカはカバンの中に入れた。今までフランクな話し方をしていた主人が急に丁寧(ていねい)な言葉遣いになったことに苦笑しながら。
「あの、コウサカさん・・・」
「決まったか?」
遠慮がちにナユキがコウサカに声をかけた。その手には青み掛かったアミュレットが握られていた。
「これでいいんだな?」
「はい。・・・お願いします」
少し恥ずかしそうにしているナユキからアミュレットを受け取ると、コウサカはとある違和感を覚えた。アミュレットから微(かす)かだが魔力の気配がするのだ。
アミュレットとは、お守りことである。より厳密に言うと、悪霊や悪魔など霊的な悪い力を「遮断」して身を守ってくれるのがアミュレット(amulet)といい、蛇足となるが霊的な良い力を「与えて」御利益をもたらすのをタリスマン(talisman)と言う。
コウサカは大したものだと思う。たぶん、無意識的にこの効力を持つ‘本物’のアミュレットを選んだのだろう。もしかしたら記憶喪失になる前は魔法について詳しかったのかもしれない。そうでもないと、とても魔力の気配など記憶喪失で無意識的に感じ取れないだろう。そう思いながらコウサカは主人にアミュレットを渡した。
主人はアミュレットの値段からして効力には気付いていないようだった。
「毎度、ありがとうございます」
代金を払う時だけ丁寧な言葉遣いになる主人に多少呆れながらコウサカは支払いを済ませてアミュレットを受け取った。

「ほら」
アミュレットをナユキに渡すと嬉しそうに両手のひらで包んだ。
「君はもしかしたら魔法の心得があるのかもしれない」
「え？」
ご機嫌となった露天の主人と別れ、官庁を目指す道中コウサカはナユキに言う。
「そのアミュレット。それには守護の魔法が染み込まれている、本物、のアミュレットだ。魔力の気配を感じ取って無意識的に選らんだのだと思う」
コウサカは振り返りもせず歩きながら、ナユキに言う。だが、ナユキからは全く見当違いな返答が返ってきた。
「わたし、かわいくて値段も手頃だったからこれに決めただけなんですけど・・・」
「ふむ」
ナユキは恥ずかしそうにそう言いながら、前を歩くコウサカから目を逸らした。
「何にせよ。一度、魔法について教えてみよう。外れたとしても、記憶が戻るきっかけになるかもしれない」
と。ふと、壁際に置かれたベンチがコウサカの目に入った。
「あそこのベンチに座って、少し待っていてくれ」
「？　はい、わかりました」
ナユキは首を傾げながらもベンチへと向かった。コウサカは近くで果物を売っている露天に近づき、リンゴをひとつ買った。
「あ、ありがとうございます」
コウサカは腰のベルトから小さめのナイフを抜くとリンゴを二つに割って、片方をナユキに渡した。コウサカは鎧が重過ぎるので座らず壁に背を預けた。
「朔絆、ちょっと出てきてくれ」
『・・・なにさ』
コウサカが名前を呼ぶと朔絆が実体化をして、ものすごい不機嫌

な顔でコウサカの肩に座った。
「ほら」
『・・・なにこれ？』
コウサカがカバンの中から先ほど買ったペンダントを出して朔絆の目の前に掲げると、朔絆がキョトンとして聞いてきた。
「さっきから扱いが悪かったからな。機嫌を直せ」
『プレゼントってこと、あたしに・・・？』
朔絆が信じられないような表情でポカンとしながら聞いた。
「まあ、安物だがな」
『ふ、フンッ。全然センスないんだから・・・』
「センス？　なんのだ？」
『う、うるさいっ！』
赤くなりながらコウサカが掲げたペンダントに朔絆の手が触れると、ペンダントは光の粒子となって消えた。そして、小さくなったペンダントが朔絆の首から下げられていた。
『えへへ・・・』
「？」
コウサカは朔絆が何を喜んでいるのか分からず、片割れのリンゴを芯ごと噛み砕いてバリバリと咀嚼する。ちなみに、コウサカはただ単に朔絆の食べ物としてペンダントを買ったつもりだったので、朔絆が喜んでいる意味は全くわかっていない。
「あの、・・・ご馳走様でした」
にへら、と表情を緩めている朔絆をしばらくコウサカが観察していると、残った芯をベンチの横に設置されたゴミ箱に捨てながらナユキはコウサカにお礼を言った。
「リンゴひとつで礼を言われてもな」
そう言うとコウサカは壁に背を預けたまま、
「ここは良い街だな」
唐突に呟いた。行き交う人々の顔には笑顔ばかりが見える。さっきの主人も常に笑顔だった。これだけの城壁、ハンターに守られて

いることから不安などないのだろう。
「そうですね・・・。皆さん幸せそうです」
コウサカの呟きが聞こえたナユキは微かに頷きながら肯定した。
「女神様なら、この人達がずっと幸せのまま暮らせる方法を知っているのでしょうか・・・」
「さてな。聞いてみないことには分からない」
そういえば、コウサカはナユキが女神に会いたがっている理由を聞いていないなと思った。だが、まあいいかとその考えをさっさと放棄して壁から背を離した。
「さて、そろそろ行こうか。朔絆、戻ってくれ」
『はーい』
「はい、わかりました」
妙に素直で機嫌がいい朔絆にどこか不気味さを覚えながら、コウサカはナユキが立ち上がったことを確認すると先に歩き出した。
コウサカ達が少し歩くと巨大な建物の壁がすぐ右側に現れ、その壁伝いに歩いていくと鐘塔（しょうとう）と百m以上はあるだろう広場に着いた。
広場には通ってきた通り以上の露天が開かれてさらに活気があった。
コウサカは官庁の入り口を見つけると、その扉に手をかけた。

―第六章―　手紙の想い

「これが官庁か・・・」

コウサカ達は官庁の中に入ると、ダンバートンを見た時のように少しの間、唖然（あぜん）とした。

官庁内はエントランスホールだけでも奥行き五十m以上はあるだろう。階段は受付の右にひとつだけある。二階は吹き抜けになっており、左右から一階を見下ろせられるようになっている。よく見ると二階には手すりではなく銃眼のようなものがあり、官庁というよりは城である。ただ、絵画や装飾品類がほとんど見られない。

コウサカは視線を二階に向ける。さりげなく何人かがクロスボウを手に持って立っていた。

（煌（きら）びやかな装飾より、実用性か・・・）

コウサカは何となくダンバートンを統治している領主の人柄が分かったような気がした。少なくとも私利私欲を肥やす人種ではない。そういう人間ならもっと装飾品を増やして自己顕示（じこけんじ）をするはずである。

「君は座って待っていてくれ」

「はい、わかりました」

ナユキは少し左右を見渡してホールに設置されているソファーを見つけて歩いて行った。コウサカは受付へと向かう。受付には良く言って静かな、悪く言って無愛想な表情で何かの書類仕事をしている長いブロンドの髪に青い瞳の美人がいた。だが、どこか儚さを感じさせた。近づいて来たコウサカに気がつくと顔を上げた。

「何かご用でしょうか」

その女性が発したのはひどく事務的な声色（こわいろ）だった。普通の人なら眉をひそめるだろうが、コウサカは全く気にせず村長より預かった書状を取り出した。

「ティルコネイル村長、ダンカンの紹介状です」

「ダンカン村長の・・・？」
一瞬だったが村長の名を口にした女性の顔には少し驚いたような表情が浮かんだ。ティルコネイルにいた時、村人達が口々に村長の評判はすごいと言っていたが本当にダンバートンでも有名人なのだろうか、とコウサカは女性の反応を見て思った。
「失礼しました。お預かりして拝見させて頂きますので、少しの間お待ちください。終わりましたらお呼び致します」
「わかりました」
そう言って受付を離れようとコウサカが身を翻(ひるがえ)そうしてふと思う。呼ぶと言われたが名前を名乗った覚えはない。
「俺の名前、知っているのですか？」
「はい。ですので、しばらくお待ちください」
そう言うと女性は代わりの者に受付を任すと、書状を持って奥へと姿を消した。コウサカはそれにひとつ首を傾げるとナユキの座っているソファーに向かい、装備が重過ぎるためソファーの隣の壁に背を預けた。
「終わったんですか？」
「いや、待てと言われた。書状に目を通して、たぶん領主に報告をしに行っただけだろうから、またすぐに呼ばれると思うが」
「そうなんですか。あ、そういえば何で首を傾げていたんですか？」
「よく見ていたな・・・。受付が何故か俺の名前を知っていてな。それを不思議に思った」
「村長さんがフクロウ便で先に知らせたのでは？」
「たぶん、そうなのだろが・・・。ふむ」
コウサカは何が引っ掛かるのか分からず、兜を脱いで頭を掻く。だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。
「ところで、君はもう少し体力を付けた方がいいな。本当に最後まで付いてくる気はあるのか？」
「はい・・・・すみません」
ナユキは恥ずかしそうに顔を赤らめる。ちゃんと自覚はあるよう

だ。
「ミレンシアであるなら、そんなに体力がないということ自体がおかしいのだが。ふむ」
「あの・・・そんなにすごいんですか？　ミレンシアって」
ナユキは遠慮がちにコウサカに聞く。どうにかしようと思っているのは目でわかる。
「個人でバラつきはあるのかもしれないが、例えば俺なら数時間全力で走り続けることができる。この装備ままで」
「絶対むりです・・・」
コウサカのあまりにも常軌を逸した返答にナユキが力無く呟いた。コウサカの装備は全て合わせれば五十ｋｇを軽く超える。
「まあ、そうではないとしても・・・そうだな」
コウサカはちらっ、と横目でナユキの身体を見る。腕の細さや線の細さは実に少女らしい。
「その身体の細さでその鎧を着ていられるだけで普通ではない、か。さて」
コウサカは無意識的に顎の部分に手をやりながら考える。一夜漬けの体力トレーニングなど意味がない。
「コウサカ様、受付までお越しください」
少し大きめな声がエントランスホールに響く。コウサカが視線を向けると先ほどの女性が受付の前で佇んでいた。
「さて、行くか」
コウサカが壁から背を離すと、ナユキもすぐに立ち上がった。
「領主様が執務室でお待ちです。ご案内致します」
女性の下へコウサカ達が行くと、女性はそれだけ言ってすぐに階段を上がり始めた。
「愛想の無いことで」
コウサカは小さく肩をすくめるとナユキを促して女性に続いて階段を上った。

ダンバートン官庁三階、領主執務室の中には顔中に傷跡が残る禿頭の大男がいた。何故か椅子に座らずに立ったまま。
「領主様。ダンカン村長より承っていた方達です」
「おう、ご苦労だったなエヴァンちゃん。あとで茶でも」
「それでは失礼します」
エヴァンと呼ばれたブロンド髪の女性は領主の言葉を最後まで聞かずにさっさと退出していった。

エヴァン。ロングストレートのブロンド髪に、青い瞳をした仕事熱心な官庁の職員。業務に関連する話以外はそっけない態度を取ることが多いが、ときおりつかれた様子を見せる。そんな儚さゆえかラブレターをもらうことが多いらしい。領主自身もファンだとか。
スリーサイズは、Ｂ８７・Ｗ５９・Ｈ８５くらい。

「やれやれ・・・。で。てめぇらがダンカンのジイさんがわざわざ紹介状までよこしたミレンシアのガキどもか。オレは領主兼ギルドマスターをやっているバルドラスだ」
領主と呼ばれた褐色肌で初老の大男は扉の前で佇むコウサカ達を青碧色の瞳で見下ろした。身長は約百八十ｃｍあるコウサカよりもずっと高い、二ｍを超えるほどだった。全身を何枚のもプレートを合わせたような鎧ダスティンシルバーアーマー一式に身を包んで仁王立ちしているその姿は領主というよりも、歴戦の戦士か騎士だった。
「領主兼ギルドマスター・・・？　どういうことですか？」
「ダンブレテンのな。わけを聞いてるとなげぇぜ？」
そういって領主兼ギルドマスターのバルドラスは腕を組む。それに対してコウサカは話を聞く姿勢を取った。それを見てバルドラスは話し出す。
「ここぁはよ、昔は武装キャラバン（隊商）の集合キャンプだった

んだ。お前等にゃ分からねぇだろうが、第二次モイトゥラ戦争のすぐ後は野盗やら盗賊団共が結構いたんだぜ？　キャラバンと一緒の方が生活が安定するからって職人やら小さな村の連中が集まってきてな。ダンバートンの前身の町が生まれたってぇわけだ。んでよ、キャラバンの頭(かしら)ぁ張っていたオレがそのまま町長。んでもって、外壁やら地面の整地やらやってどんどんでかくなって町が街になっていった。そぉやってたらよ、王都のタラから通達があってな。オレが領主のエイリフ王国の城郭都市ダンバートンの誕生ってぇわけだ。その頃になっとな、オレのキャラバンの部下共と他の村から集まってきた自警団の連中がかなりの数になっていてな。ダンバートンの自警団としてギルドを創設することになったんだが、オレが頭じゃねぇと嫌だって連中ばかりでな。そんなわけで領主兼ギルドマスターってぇよく分からんもんの誕生ってぇわけだ」

　バルドラスはまるで笑い話でもするような気軽さでそう語った。

だが、話している内容は過酷で陰惨(いんさん)だった。

「・・・」

　コウサカは軽く息を呑み、ナユキは話の内容が意味すること悟り顔を青くした。ダンバートンの前身であるキャラバンキャンプが出来るまでの間、小さな村、武装できない隊商は・・・。

「話が長くなっちまったな。んで、ミレンシアの坊主、用件は？」

　バルドラスはニカリと笑ってコウサカの用件を尋ねた。コウサカは本物の地獄を経験し、それを笑いながら話すことの出来るバルドラスに畏敬(いけい)の念を抱いた。

「用件は村長よりの書状にあった通りです。それともうひとつ・・・ん？」

　いつの間にかナユキはコウサカの後ろに隠れて背中に震える手でしがみ付いていた。コウサカはそれに一息吐いて用件を切り出す。

ちなみに、村長よりの書状にあった用件とは、要はコウサカ達が魔族の本拠地に行けるまでの手助けをしてやってほしい、という内容である。

「ラビダンジョンへ潜ることを許可して頂きたいのです」
「ラビ？　そりゃまた何でだ？」
　ラビダンジョンとはダンバートン北西にあるサキュバスという魔族の住処（すみか）となっているダンジョンである。
　これはコウサカがタルラークから渡された手紙に書かれていたことである。タルラークはラビダンジョンの調査をずっと行なって来て、ラビダンジョンからティルナノイへ向かう方法を見つけたのだと言う。だから、そこに何か糸口があるかもしれない。手紙にはそう綴（つづ）られていた。コウサカはその手紙の内容を要約してバルドラスに伝えると、納得顔になった。
「なるほどなぁ。わかった、許可してやる」
「ありがとうございます」
　コウサカはナユキに離れるように言うと騎士がそうするように兜を右脇に抱え、左膝をたて片膝を床につけ、左手を胸部に当てて頭を下げた。騎士の行なう最敬礼の行為である。
「ほぉ、なかなか礼儀がなってんじゃねぇか坊主」
　コウサカの行なった最敬礼にバルドラスは満足そうに笑みを浮かべた。
「では、失礼します」
「待て待て、坊主」
　コウサカが立ち上がり、退室しようと踵（きびす）を返そうとするとバルドラスが引き止めた。
「今日一日くらいゆっくり腰を据えてみろや。こっちから人員を出してやらぁな」
「わざわざハンターを出してくれるというのですか・・・？」
　バルドラスの思ってもみなかった提案に、コウサカは驚いてバンドラスを見る。
「ああ。にわかにゃ信じられんが、ここんとこの魔族共の動きが活発になってきた説明がつくからな。本当ならオレ達全員に関係がある。喜んで手助けしてやらぁ」

「本当にいいのですか・・・？　こんな与太話と思われても仕方がない話を」

バルドラスのあまりに協力的な態度にコウサカは戸惑う。いくらなんでも話が旨すぎる。

「モイトゥラ戦争でな」

バンドラスは唐突にその言葉を出した。この場合二、三十年前に起こった人間族と魔族との戦争、第二次モイトゥラ戦争のことである。

「モイトゥラ戦争では、数え切れねぇほどの人間が死んだ。人間だけじゃねぇ、魔族もだ。オレも参戦していた。参戦していて死にそうになった。むしろ、生き残ったのが奇跡だったんだよ。そしてな、ダンカンのジイさんも参戦していた。そんなジイさんが嘘でこんな手紙よこすわきゃねぇ。だから、信じることにした。んで、やるなら徹底的にやることたった今した」

「・・・何と言うか、すごい方ですね。領主様は」

コウサカはあまりにもメチャクチャな行動動機に呆れてそう言った。

「だろう？　がははは っ」

コウサカの言葉を聞いて、バルドラスは哄笑した。それにコウサカは呆れたように苦笑を浮かべた。さっきまで怯えていたナユキは状況の変化に付いて行けておらずポカンとしていた。

官庁を後にしたコウサカ達は少し一悶着あって今日の宿を決め、二階に部屋をふたつ取った。ベッドと小さな卓と椅子、それに窓がひとつあるだけの殺風景な部屋だった。バルドラスの下には明日の昼の鐘が鳴る時にまた来るという約束をした。

「・・・ふぅ」

コウサカは宿の自室で一息吐く。朔絆はようやく自由になれる環境になって、今は完全実体化をしてベッドを占領してゴロゴロして

いる。それに苦笑しながら、この宿に決めたきっかけを思い出す。
「・・・はぁ」
そして溜息を吐いた。

「・・・・くそっ、どけよっ！」
それは宿を探してダンバートン内を適当に歩き回って、ちょうど人も疎(まば)らな細い道の脇にあるベンチで一息吐いている時のこと。
人気の薄い路地裏から声がコウサカの耳に届いた。ただの喧嘩の声ではない。
「ナユキ、ここで待っていろ」
「え？」
路肩のベンチに座って露天で買った苺(いちご)を美味しそうに食べていたナユキは状況が分からずキョトンとしていたが、コウサカは構わず兜を被りながら駆け出した。
「大の男が数人がかりなんて、せこいぞっ！」
コウサカが到着すると一人の少女が数人の、明らかに柄の悪そうな男達に囲まれていた。
「あっ、そこの！　男だったら助けろ！」
「・・・」
コウサカを見つけた少女は指を差してそう言った。少女を囲っていた男達が振り向きコウサカを視界におさめると、明らかな敵意を放ってきた。ちなみに、コウサカは少女の物言いがどこかの我がまま娘に似ていたため苦笑していた。
「なんだ、てめぇは!?　取り込み中だ、とっとと失せなっ！」
「おまえ、それでも男かよ！　助けろ！」
「・・・」
コウサカが何も言わず呆れたまま立っているとそれを反抗と取ったのか、馬鹿にされたと取ったのか男達が逆上した。
「いい度胸だ、てめぇっ！」

一人の男が全身フルアーマーのコウサカに殴りかかった。唯一、生身の出ている顔した半分を狙って。だが、ライトニングボルトの軌道すら見切ることの出来るコウサカからすれば止まっているような速度だった。殴り方もデタラメで力任せ。完全に素人だった。

「何も言っていないんだが」

コウサカは無造作に手を伸ばすと、相手の拳の側面を軽く押すようにしてするり、と受け流した。それに驚いて男は慌てて身を引く。その明らかな反抗的な態度にまた別の男が今度はナイフを抜いてきた。

「・・・」

それにコウサカの目の色が少しだけ変わる。仕方がない、という風に溜息を吐きながら左足を引き、右足を前に出して重心を移動する。身体を少し横向きにして左手の甲をナイフの腹に当てするり、と受け流す。そして、おそらく全体重をかけると肋骨が折れてしまうので軽く体重をかけた掌底(しょうてい)を相手の胸部に叩き込んだ。

「ぐぇっ・・・げほ、ごほごふっ・・・!?」

掌底を喰らった男はナイフを取り落として、その場に崩れ落ち激しく咳き込んだ。

「て、てめぇっ!」

残った男達は、それでもまだ数が有利なせいか威勢がいい。

「・・・やれやれ。どういった状況だ?」

コウサカは勝手に勘違いされて、勝手に助けると決められたことに小さく溜息を吐いた。それに囲まれている少女が声を上げた。

「そんなの、こいつらがあたしが可愛いからって、ナンパしてきたからに決まってんだろっ!」

「違ぇ、このガキっ! 俺たちゃ、お前をさらうために・・・」

男がそう言った直後、コウサカの頭の中で軽くカチリと音がする。そして、一瞬だったがその場にいた全員がぞくり、としたひどい寒気に襲われた。

「なるほど。人攫(ひとさら)いか」

全員が声を発した人物を見ると、先ほどと変わらずにただぼんやりとそこに立っているコウサカがいた。たが、寒気の原因はコウサカであることは全員が感じた。全員が底知れぬ恐怖を抱いて顔を青くした。

コウサカが発したのは紛れも無い殺気であった。

「どちらに非があるのかはわかった。お前達どうする？　自首するなら穏便に済むが」

だが、まだ続けるというなら手加減はしない。本気の殺気を受けた男達はそう受け取って、青い顔で大人しくなった。

「さて、警護のハンターを呼んでくるからここで待っていてくれ。ああ、もし逃げたら」

「に、逃げませんっ！　だから、命だけはっ・・・！」

チラリとコウサカが男達を見ながらそう言うと、土下座でもするほどの勢いで男の一人が怯えながら叫ぶ。それを一瞥すると、コウサカは踵を返す。男達はすでに反抗する気が完全に失せて、ただその場に佇んでいた。傍らにいる少女を盾にしようとする者もいなかった。もしそうしたらその瞬間、自分達は殺されると恐怖感からである。

ダンバートンの治安維持もハンターの仕事で、警察のように街中を巡回している。わかり易いようにギルドマークの入った黒い帽子を被っている。

「お、おい！　あたしはどうなるんだよっ！？」

一人、被害に遭っていた少女のことを何も言わずにコウサカが行こうとするから少女は声をあげた。

「ああ、そうか。もう済んだから行っても大丈夫だと思う」

「え？　えぇっ・・・？」

あまりにもコウサカの投げやりな答えに少女は唖然とした。コウサカはそれに構わず路地裏を出て行った。

「あ、コウサカさん。何かあったんですか？」

路地からコウサカが出てくると、ナユキが心配そうに立ち上がっ

て近づいて来た。コウサカはカバンから金貨袋を出していくらかナユキに渡すと、
「すまん。もう少し待っていてくれ」
そう行ってコウサカは警護のハンターを探しに人混みに紛れてしまった。
「え、え？　あれ」
再び一人残されたナユキは目を白黒させて渡された金貨と、コウサカの消えていった人混みを交互に見比べていた。

「真人間になれよ」
ハンターに連れられていく男達の背にそう言葉を投げかけたコウサカは少女に目を向ける。今度はナユキも付いて来てコウサカの少し後ろにいる。
「君も暗くなる前に帰れよ」
「待て待て待てぇいっ！」
そう見当違いな言葉を残して路地裏を後にしようとするコウサカを、少女が全力で引き留めた。
「希望通り、助けただろう」
「そこじゃないっ！　普通なんでまだここに？とか、大丈夫だったか？とか言うでしょっ！」
「そうなのか？」
「あの、わたしに言われても・・・・」
コウサカが首を傾げてナユキに聞くとナユキは恥ずかしそうに俯(うつむ)いた。
「おまえ、何なのっ！？」
「ただ今日泊まる宿屋を探して歩き回っている旅人だ」
コウサカがそう言うと少女は動きを止めて、目を白黒させた。
「宿・・・探してるの？」
「今そう言っただろう」

コウサカは少しウンザリしたように兜を脱ぐと、頭を掻いた。
「あ、カッコイイ・・・」
コウサカの素顔を見て少女は聞こえないほど小さくそう呟いた。
勿論、常人よりも感覚の鋭いコウサカには聞こえたが何のことか分からず眉をひそめた。
コウサカは藍色の髪をオールバックにした髪形で、鼻も高く、だいたいいつも冷静な表情のまま変わらないためキリッ、とした端整で精悍な顔立ちである。俗語で言うとイケメンで、無駄な脂質が身体には全くなく、豹を思わせるガッチリとした身体つきで背も約百八十ｃｍと高いので、アリッシュアシュビンアーマーに身を包んだ姿はかなり様になっているのである。
「なんだ？」
「あ・・・なんでもないっ！　それより、宿ならうちに来なよ！」
「・・・はぁ？」
少女の言った言葉の意味が分からず、コウサカは眉をひそめた。
「何を言っている？」
「うちは宿屋なの！　ちょうど部屋も空いているからおいでよっ！　まだ探していた最中だったんでしょ？」
「まあ、俺はそれでも構わないが・・・。ナユキ、この子の宿でいいか？」
「はい、大丈夫です」
と、そこで少女は初めてナユキの存在に気付いたようだった。少女は訝しげな視線をナユキに向ける。
「えーと・・・誰？」
「旅の同行人だ。わけあって一緒に旅をしている」
「ふぅーん・・・」
少女は意味ありげな表情を浮かべると、とあることを聞いてきた。
「・・・・もしかして、恋人？」
「なっ、ち、違いますよっ！」
コウサカが何か言う前に、ナユキが顔を真っ赤にして少女に答え

た。
「ふーん。ねえ、ホント？」
「ああ、本当だ。旅の目的が一緒なだけだ」
コウサカは興味すら浮かべずさも面倒くさそうに言う。そのあまりにも素っ気無い態度に、少女は本当なんだと納得顔をした。
「・・・」
一方、そういった感情を持っていないとしてもあんまりな態度なコウサカに、ナユキは不機嫌となった。やはり年頃の少女だというのは記憶喪失だとしても変わらないらしい。
「どうかしたか？」
「知りませんっ」
珍しく、というより初めて見せるナユキの態度に、コウサカは軽く目を見張った。ナユキは路地裏から一人、通りへと向かって行った。
「？　まあいいか。ところで君」
「カリン」
「？」
唐突に少女の言った言葉の意味が分からず、コウサカは首を傾げる。少女は不満そうに言う。
「カリン。あたしの名前だよ。君なんて名前じゃない」
カリンは年の頃は一六、七歳で背は百六十ｃｍほど。勝気そうな菖蒲色（あやめいろ）の瞳に、藍色（あいいろ）の髪をポニーテイル風に結わえて首辺りの長さにしてエプロンスカートを着ていた。
スリーサイズはＢ８１・Ｗ６４・Ｈ８８くらい。
「そうか。では、カリン。宿屋へ案内してくれ」
コウサカがそう言うと、少女改めカリンは満足そうに頷いて溌剌（はつらつ）とした笑顔を浮かべた。
「よしっ！　あ、ところでおまえの名前は？」
「コウサカだ。さっきの子はナユキ」
初対面の人間をお前呼ばわりするカリンの態度を全く気にせず、

コウサカはそう教えた。
「コウサカ・・・何か変な名前だねっ」
「放っておけ」
カリンはコウサカの反応が面白かったのか笑いながら、ナユキの後を追った。

酒場兼宿屋『アリアンロッド』の自室で思い出し終えてから、コウサカはもう一度溜息を吐く。探していたため確かにちょうど良いと言えばちょうど良かったが、面倒事が増える予感がしてならない。
『全くあんたって、とことんバカだよねぇ～』
先ほどからベッドでゴロゴロして満足したのか朔絆がコウサカに声をかけた。明らかに呆れて馬鹿にした口調で。
「あの場合、助けないわけにはいかないだろう」
『それが当たり前だと思っているのが、あんたらしいよね～・・・・』
朔絆は関心しているような、呆れているような表情を浮かべて寝転んだままコウサカを見上げた。ちなみに背中の剣の翼は引っ込めてある。
コウサカはベッドを占領されているので壁にもたれ掛かっている。椅子に座らないのは、何かあった時にすぐに動けるようにしている体勢が癖になっているからである。今は上半身は鎧を外し灰色の半袖のアンダーウェア、下半身は脱がずにそのままでいる。念のためバスタードソードだけは腰のベルトに差し、カイトシールドを傍らに立てかけてある。
「そういえば、すまないな。朔絆」
『え、いきなり何?』
唐突にコウサカが詫びたため、朔絆は目を白黒させた。コウサカは静かに目を伏せる。
「ここに来てから、お前を一切自由にさせてやれていないからな」

『それ、あんたのせいじゃ・・・・・』
「ティルコネイルを出て、ここに連れて来たのは俺だ」
『あたしはあんたを信じるって、言ったじゃん・・・・・』
「それでも、すまない」
朔絆は枕に顔を埋めた。コウサカは目を瞑っているが泣きそうな表情を見られたくなかったのだ。単なる武器でしかない自分をこれほど気遣ってくれている。精霊石に入る前の朔絆の記憶は薄ぼんやりとしか思い出せないが、誰もが武器の付録程度の扱いしかしていなかった。だから、本当の人間と同じ、それ以上の気遣いをしてくれる行為が何度されても堪らなく嬉しいのである。
『・・・・なんでいっつもバカなのに、こんな時ばっか・・・』
朔絆の声は枕でくぐもり、とても聞き取れない声量だったためコウサカには届かなかった。と、部屋の扉が遠慮がちにノックされた。
「どうぞ」
ノックの音に剣を抜こうと微かに反応してしまった手に呆れたように一息吐きながら、コウサカはそう言う。
「お、お邪魔します・・・」
扉を開けて入ってきたのは少し俯き気味のナユキだった。何故か緊張している顔で。
「何か用か？」
コウサカが壁にもたれたままそう言うと、ナユキは意を決したように顔を上げた。
「あの・・・さっきはすみませんでしたっ」
そう言ってナユキは肩を小さくして両手を身体の前で重ね、ペコリと頭を下げた。
「また突然、どうした？」
謝られたコウサカは理由が分からず首を傾げた。
「あの、さっきはあんな態度を取ってしまって・・・」
「待て。あんな態度とは、どれのことだ？」
「え、あの、路地裏で・・・」

「路地裏で何か謝らなければならないことをしたのか？」
「・・・え？」
コウサカの言葉を受け、ナユキは驚いて顔を上げてコウサカの顔を見る。コウサカは思案顔になり、しきりに首を捻(ひね)っていた。
「怒って・・・ないんですか？」
「そもそも、俺が怒る原因となる出来事を教えてくれ。記憶にないんだが」
コウサカは真剣に思い出そうとしている。その顔はとても嘘とは考えられなかった。そもそもコウサカは嘘を付けるタイプではない。良い意味でも悪い意味でも馬鹿正直だから。
「ふむ、やはり分からないな。とにかく、君は俺に謝りに来たんだな？」
「え・・・ぁ、はい」
コウサカは指を立てて、ナユキに問いかけた。
「君は俺を怒らせたと思った。しかし、当の俺は怒るどころかその原因すら思い浮かばない。さて、ここから何が導き出せる？」
「え、どう・・・って、言われても・・・。え、っと、わたしの勘違いだった・・・ですか？」
「正解。そういうわけで、全く問題ない。君は部屋に戻ってのんびりするといい」
コウサカは何も無かったように腕を戻してナユキから視線を外した。一方、ナユキは勘違いでとんだ道化(どうけ)を演じてしまったことで真っ赤になっていた。
「あっ、あの・・・お、お邪魔しましたっ！」
真っ赤になったままナユキは部屋を走り出て行った。コウサカはそれを横目で眺めて小さく溜息吐く。そして、扉を閉めることすら忘れて出て行ったナユキに代わり、扉を閉めようと壁から離れた。
「コウサカー、届け物ー」
コウサカが扉に手をかけたところで、階下からカリンの声が聞こえた。そのまま扉を開けて、階下に下りていく。

「はい、これ。官庁のハンターさんが届けてくれたよ」
「官庁・・・？」
階段のところに立っていたカリンから受け取った物は書類だった。一枚目の一番上に「ラビダンジョンについて」と書かれていた。領主バルドラスが気を利かして送ってくれたのだろう。最後を見ると、やはりバルドラスの名前でサインがされていた。
「ふぅーん、領主様からか。コウサカって、ホントになんなの？」
カリンはいつの間にか隣から書類を覗き込んでいた。だが、コウサカとは背が違いすぎるため、精一杯背伸びをしていた。コウサカは少し書類の位置を下げてやる。
「なんでラビダンジョンの事なんかが書かれたのを渡されるの？」
「知りたいなら領主様に直接聞けばいい」
コウサカはそうカリンを煙に巻いて、階段を上っていった。後ろでカリンが何か言うが、すぐにこの店の主人である父親に呼ばれて走って行った。
『なにそれ？』
自室に戻ってきたコウサカが手に持っている物を見て、朔絆がそう聞いた。ゴロゴロすることに飽きたのか今はベッドの上でとんび座りをして両手を太腿（ふともも）の上に置いて座っている。とんび座りとは、正座の状態で両足を外に開いてM字、またはW字のような形にして、お尻を地面にぺたんと付けたままの座り方である。あひる座りとも言う。
「明日、潜る予定のラビダンジョンについての資料だ」
『なぁんだ、つまんない・・・』
すぐに興味を失った朔絆はつまらなそうに窓の外に視線を移した。隣の建物の屋根のせいで、あまり見えないが。
「・・・ふぅ」
コウサカは一息吐くと、再び壁にもたれて書類を読み始めた。コウサカは無意識的に、剣の抜きやすい右手を剣の柄に掛けていた。
朔絆は窓の外にも飽きたのか、真剣に書類を読みふけるコウサカ

に視線を移した。コウサカを見ていてそういえば、と朔絆は思う。プレゼント（朔絆の勘違い）なんてものをもらったのは初めてのことだったと。何となくそう思って考えていると朔絆は自分の顔がだんだんと赤くなっていくのを感じた。そんなタイミングでコウサカが、体勢は微動だにさせず朔絆に声をかけた。

「腹でも空いたのか？　カバンの中から勝手に引っ張り出せ」

視線は素早く書類に通しながら、コウサカはいつも通り落ち着いた声音で言う。

『ぁっ・・・う、うるさいっ！　あんたは大人しくそれでも読んでろっ！！』

「大人しく読んでいるだろうが」

やはり、体勢は全く変えず視線だけは素早く文字を追いながらコウサカは朔絆に言う。

『うるさい、うるさいっ！　あんたは黙って読んでればいいのっ！』

「わかった、そうすることにしよう」

そう言ってコウサカは本当に黙り込んで、時折ページをめくる動作をする以外は何もしなくなった。

『バカ・・・』

朔絆の拗ねたような声を聞きながらコウサカは、ラビダンジョンの資料から得られる情報を頭の中で整理する。

主な敵となるのはダンジョンに潜って死んだ者達、または過去の大戦で死んで逝った者達の亡骸、スケルトン。頭蓋骨（ずがいこつ）の内側に魔符が貼り付けられており、それを剥（は）がすか傷つけるかしないと崩しても骨が集まり永遠に再生してくるのだという。

と、そこまで読んで思い出した。タルラークから聖堂のクリステルという女性に届けてほしいものがあると言っていたことを。コウサカは書類を卓に置くと、装備を付け始めた。

『・・・どっか行くの？』

「ああ。聖堂にタルラークさんに頼まれたものを届けに」

落ち着いたのか普段どおりの顔をした朔絆が装備を着け終わり、

最後に立てかけてあるカイトシールドを持ち上げたコウサカを見て聞く。
『あたしも行く』
「そうか」
朔絆がそう言ってベッドに立てかけてあるクレイモアに戻る。コウサカはクレイモアを手に取ると鞘に繋がったベルトを身体に回して背中に背負った。

仕事中のカリンに聖堂への道を聞き、迷いもせずに到着した。
聖堂前の広場は花壇に色とりどりな花が咲き乱れていた。花壇に水をやっている緋色(ひいろ)の瞳に鴇色(ときいろ)の髪をショートカットにした司祭服の女性を見つけると、コウサカはクリステルという女性のことを聞こうと声をかけた。
「失礼します。少しお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか?」
「え、はい。構いませんよ」
完全装備のコウサカに面食らいながらも女性はすぐに笑みを浮かべて、受け答えた。コウサカは礼儀として兜は外して脇に抱えている。
「クリステル司祭はいますか?」
「え、クリステルは私ですが・・・。何のご用でしょうか?」

クリステル。イメンハマで修行を積み、ダンバートンへと派遣されてきたライミラク教の司祭。かつてはドルイドを目指していたという話もあり、いくつかの魔法も使うことができる。伝承や魔族達にも詳しい。ライミラク教は顔で試験をパスさせているのでは疑いなくなるほどの美人である。知的で美人な彼女に恋焦がれる若者が多いとか。
スリーサイズはＢ８８・Ｗ５９・Ｈ８７くらい。

「タルラークという人物から頼まれた届け物があります」
コウサカがタルラークの名を口にすると、クリステル司祭は目を見開いて驚いた。コウサカはカバンから手紙を取り出して手渡す。それと小瓶に入った黒いバラも一緒に渡す。
「申し訳ないですが、手紙にすぐに目を通して頂きたい。俺・・・私に関する頼み事が書かれているそうです」
「は、はい。わかり、ました・・・」
クリステル司祭はまだ信じられないといった表情のまま、手紙を開いた。そして真剣に読み始める。
「タルラーク・・・」
クリステル司祭はしばらく手紙を読んでいたかと思うと、急に涙を流しながらそう呟いた。そして、読み終えると大事そうに、愛おしそうに手紙と黒いバラの入った小瓶を胸に抱えた。
「・・・あっ。し、失礼しましたっ・・・！　私・・・」
「後日、出直した方がよろしいですか？」
すぐに自分の状況に気付いてクリステル司祭は慌てたように顔を赤らめる。コウサカはカバンから取り出したまだ未使用の真っ白なハンカチを差し出しながら聞いた。
「い、いえ・・・ありがとうございます」
クリステル司祭はコウサカからハンカチを受け取って涙を拭いた。そして、上げた顔には凛（りん）とした表情が浮かんでいた。
「こちらへどうぞ。誰にも聞かれたくないことなので」
そう言ってクリステル司祭は、聖堂へコウサカを招き入れた。そして鍵の掛かる一室へと入り、鍵を閉め、声を潜めた。
「驚くと思いますが、冷静に聞いてくださいね。あの・・・・・・実は私は、元はサキュバスという魔族だったんです」
「なるほど。だからタルラークさんは貴女（あなた）の下を尋ねるように言ったのですか。得心しました」
緊張した面持ちでクリステル司祭はそう言い放った。だが、コウ

サカはそれを聞いても顔色ひとつ変えず、むしろサキュバスの話よりも何故ここを尋ねなければならなかったのか、その理由を知れた事の方に反応した。
「驚か・・・ないんですか？　魔族なんですよ？」
「それがどうかしたのですか？」
「え？」
　クリステル司祭はコウサカの反応に驚き呆気に取られた表情になり、そしてコウサカの問いにまた驚いた。
「それよりも、ティルナノイに行く方法をお教え頂きたいのです。何か糸口だけでも」
「え、・・・え？　ま、魔族なんですよ・・・？　憎かったり怖かったりしないんですか？」
「ふむ。そんなに気になるようならお聞きしますが、貴女は人を殺そうとしているのですか？」
　コウサカは表情を全く変えずにティルナノイのことを聞くが、クリステル司祭はそれに困惑した。そして、コウサカの問いに三度（みたび）驚いた。それに、コウサカは口調をいつもの感じに戻し真っ直ぐにクリステル司祭の目を見ながら問うた。
「い、いえ・・・私はここで平和に暮らしていたいだけです」
「では、元魔族ということを除いてそこに発生する問題を挙げてみてください」
「・・・な、ないと思います」
「ＹＥＳかＮＯだけでお答えください」
「い、イエスですっ」
　コウサカがあまりにも冷静な表情を変えずに淡々と言うため、逆に驚いて困惑しているクリステル司祭はどんどん乗せられていく。
「では、ティルナノイへ行く方法をただ聞きに来た俺にとって、貴女が魔族であると問題があるでしょうか。ＹＥＳかＮＯでお答えください」
「の、ノー・・・です」

「では、問題もなくなったところでティルナノイへ行く方法をお聞かせください」
「い、イエ・・・あっ。・・・〜っ！」
イエスと答えようとしてクリステル司祭は我に返って、恥ずかしさで顔を赤らめた。しかも、コウサカはその光景を見ても表情ひとつ変えずにいて真っ直ぐに目を見続けているため、クリステル司祭は余計に恥ずかしくなって更に顔を赤らめた。
「こ、コホン・・・。ら、ラビダンジョンの最奥（さいおう）にいるサキュバス達が「黒魔族通行証」を持っていると思います。それを持って来て頂ければ何とか出来るかもしれません」
クリステル司祭は顔が赤いまま冷静に戻った振りをしてそう言った。ちなみに、クレイモアの中では朔絆が必死に笑いを堪えている。
「それはちょうど良い。私は明日、ラビダンジョンに潜ることになっています」
「なら、私からサキュバスについての注意点をお話します」
ようやく話が進んだことにコウサカは丁寧な口調に戻した。クリステル司祭が真剣な表情になる。
「私達サキュバスは人間の男性を惑わせる力、魅了（みりょう）させてしまう力があります。戦闘能力は魔法が強力ですが、注意しなければならないのは魅了させる力だけです。目が妖しく光ったらそれが発動したと思ってください。ちょっと待ってくださいね、いま魅了の力を効かなくする封魔のお守りを作りますから」
そう言うとクリステル司祭は自分の首から下げているケルト十字架を外すと、両手のひらに包み目を瞑り、何かの呪文を唱え始めた。すると手の中から淡い光が発せられ、すぐに収まった。
「これを付けて行ってください」
コウサカはクリステル司祭の差し出したケルト十字架を受け取る。すると魔力の気配が感じられた。
「感謝します、クリステル司祭」
「いえ、お気になさらずに」

コウサカは頭を下げた。それにクリステル司祭は少し笑みを浮かべる。
「あと、装備を貸して頂けませんか？　サキュバスの魔法は強力です。なので、魔法耐性を付加します。そうすれば、例え魔法が直撃しても少ないダメージで済みますよ」
「そんなことが可能なのですか？　あ、いや、そんなことまでやってくれると言うのですか？」
コウサカはクリステル司祭の思ってもみなかった提案に初めて表情に驚きの色を浮かべた。
「くすくす・・・はい、勿論ですよ。元々私達サキュバスという種族は魔法に長けた種族なんです。魔法の効果を弱めることなんて簡単です」
自分が魔族だと言っても表情ひとつ変えなかったコウサカが、単なる親切くらいで驚いたのが面白かったのかクリステル司祭は手で口元を隠して笑った。
「出来るならお願い申し上げたい」
「では、そのまま立っていてください」
コウサカがそう言うとクリステル司祭は両手をコウサカの鎧の胸部あたりに手をおいて目を瞑り、また何か聞き取れない呪文を唱えた。上半身の鎧、下半身の鎧、ガントレット、グリーブ、バスタードソード、カイトシールドと順々に魔法をかけられていき、そこでコウサカがストップをかけた。
「少しお待ちを。掛けてもいいかどうか、本人に聞いてみるので」
「本人・・・？」
言葉の意味が分からずクリステル司祭は首を傾げた。
「朔絆、出来ることなら俺は施してもらいたいがお前はどうしたい？」
『・・・やっていいよ。今よりもあんたの力になれるし』
コウサカが声をかけると、実体化した朔絆が不機嫌そうな表情を浮かべてコウサカの肩に座った。

「せ、精霊武器ですか。初めて見ました・・・・・」
クリステル司祭は珍しげにまじまじと朔絆を見つめた。それに朔絆は不機嫌そうな視線をクリステル司祭に向けた。
「俺の大事な相棒ですよ」
コウサカはそう言いながら片手で背中のクレイモアを抜き、もう片方の手で朔絆の頭を撫でた。そうすると朔絆の視線は和らいで目を細めながら小さく溜息を吐いた。コウサカが無意識的にいつも通りの口調で言い放ったことへの呆れと、嬉しさ故である。
「お願いします」
最後に光り輝くクレイモアへの魔法耐性付加を終えたクリステル司祭は少し疲れたように一息吐いた。
「厚意に甘え、ご迷惑を掛けて申し訳ない」
「いえ、タルラークからのお願いですから。・・・それに少しタルラークに似ていますから」
クレイモアを背中に戻したコウサカは深々と頭を下げる。クリステル司祭は最後の部分は懐かしげな響きの声音で呟いた。
「？」
「いえ、何でもありません。あと、これだけは忘れないでください。いま付加した魔法耐性は無効化するわけではなく、減衰（げんすい）させて威力を弱めるだけです。また例えば魔法を切り裂けるようになりましたが、魔法にだけしか効果がないので注意をしてください」
クリステル司祭は噛んで含めるように効果の説明をする。コウサカが勘違いしないように気を遣ったのだろう。
「わかりました。ご厚意に深く感謝を致します。このご恩はいつかお返しします」
「いえ、これを届けてくれたことだけで私は・・・」
クリステル司祭は、部屋にある机の上に置いた手紙と黒いバラの入った小瓶を再び大事そうに腕の中に抱えた。
「それでは失礼します」
「またいつでもいらしてください。あ、このことは誰にも言わない

でくださいね？　魔法耐性のことも含めて」
「無論です。機会があれば、またお伺いします」
そう言ってコウサカは鍵を開けて退室していった。その背を見送りながらクリステル司祭は小さく笑う。ぶっきらぼうなところ、常に冷静なところ、ティルナノイを求めてラビダンジョンに潜りに行こうとしていることなど似ていると、タルラークのことを思い出しながら。
予想以上に準備万端となったコウサカは、静かに目を光らせて明日を待った。

―第六章―　手紙の想い（後書き）

補足

○本章内で出てくる酒場兼宿屋『アリアンロッド』の由来はウェールズ神話のケルトの主神ダヌ（ウェールズの地母神。ドンとも）の娘。月の女神で銀の車輪という意味の名を持つアリアンロッド（Ａｒｉａｎｒｈｏｄ）という言葉から取らせて頂いております。

―第七章―　ラビダンジョンに住まうサキュバス

官庁三階、領主執務室。

そこにはバルドラス、コウサカ、あと二人の女性ハンターがいた。

ちなみにナユキはいない。最初は行くと言っていたが、コウサカが生きた屍の巣窟（そうくつ）だと話すと次第に顔を青くしてガタガタ震えながらベッドに潜ってしまった。

「こいつがリーダーのアルシアだ。んで、横のがルミル」

「ふーん、キミが噂のミレンシア君ね」

バルドラスに紹介されたアルシアという女性は、コウサカを値踏みするようにじろじろと眺めた。ルミルという女性は静かに目を伏せている。

アルシアは、女性にしては百七十ｃｍを越えるほどの長身で、イタズラっぽい瑠璃色（るりいろ）の瞳に、少しウェーブのかかった背中にかかる長い赤い髪をしている。妙に露出の多い軽装に身を包んでおり、豊かな胸を見せ付けている感があった。

スリーサイズはＢ９１・Ｗ６０・Ｈ８８くらい。

ルミルは、百六十ｃｍほどの背で物静かそうな栗色の瞳に、首元で綺麗に切り揃えられた濡羽色（ぬればいろ）のショートカットの髪をして動きやすそうなスポーツウェアに身を包んでいた。また腰に投げナイフを差したナイフベルトを別に回している。

スリーサイズはＢ８３・Ｗ５８・Ｈ８３くらい。

「領主様、本当に大丈夫なのかしら？　私よりもずっと若い子ではありませんか。やっぱり、私のパーティー全員で行かせてくれませんか？」

アルシアと言う女性はコウサカから視線を外すと、不満そうに領主を見上げた。今日のバルドラスは鎧姿ではなく、公務用のスーツに着込んだ楽な格好をしている。ものすごく似合っていない。アルシアの言葉を受け、バルドラスは声を上げて笑った。

「がははははっ。そりゃぁ、そうだろうよ。まだ十九らしいからな。だがよ、実力は本物だぞ？　ダンカンのジイさんからの手紙によりゃぁ、オオカミ百匹を相手にして傷一つ負わなかったそうだ。しかも、その装備でメチャクチャ機敏に動ける上に、全然スタミナも切れねぇんだとよ」

「そう言われても・・・・。ねえ、ルミル？」

「では、試してみればよろしいかと」

目を伏せて話を聞いていたルミルという少女が物静かな口調でそう言った。それを聞いたアルシアはイタズラを思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「いいわね、それ。ミレンシア君もそれでいいかしら？」

「おいおい、待て待て」

「いくら領主様の命令とは言え、無駄に命を捨てる気はありませんわ。このくらいは許して頂きたいですわね」

こう言われてはバルドラスも強くは言えない。実際に危険な目に遭うのはアルシア達なのだから相手を試す資格はある。

「う、むぅ・・・・。よぉ坊主、いいのか？」

「構いません」

コウサカは兜を脇に抱えたまま、表情ひとつ変えずに即答した。その顔には緊張も気負いも何も感じられない。コウサカは視線をアルシアへと向けた。その自信も不安すらも感じられない視線にアルシアは少しひるむ。

「あ、あら。ずいぶんとあっさりしてるのね・・・。じゃあ、何で試そうかしら」

「では、そのナイフを俺に向け全力で投げてください。掴んで見せるので」

ルミルが腰のベルトに差している投げナイフに視線を移しながらコウサカはそう言った。それに、その場にいた背中の剣の中にいる朔絆を除く全員が驚愕した。朔絆はその程度のことは防げると知っている。

「・・・お、おいおい。何をいきなり言いやがる？　失敗したら死ぬぞ？」
「ですが、それがこの場で可能な一番分かり易い方法なので」
バルドラスが驚いた表情のまま言うと、コウサカは眉一つ動かさずにそう返した。
「ほ、本当にいいの・・・？」
「どうぞ」
動揺するアルシアからの問いに、先ほどと同じ言い方でコウサカは返した。そのあまりにも素っ気無い言い方にアルシアは言葉を無くした。コウサカはルミルへと視線を移した。
「やらないのですか？」
「え・・・？」
先ほどまで無表情でいたルミルはコウサカからの視線を受け動揺の色を浮かべた。コウサカは何の力も込めていないが、ルミルはその平然とし過ぎている瞳の光に畏れの念を抱いた。おそらく、本当に何事もなかったように掴んでしまうだろう、と。
「はぁ・・・・アルシア、てめぇの負けだ。素直に付いてってやれや」
「そう、ですね・・・。すごい子なのは、よくわかりました・・・」
バルドラスが溜息を吐き頭に手をやりながらそう言うと、アルシアも諦めたように同意した。
「はぁ、君みたいな子初めてよ・・・・。協力してあげるわよ」
「ありがとうございます」
コウサカは試しが取り止めになったことに首を傾げながらも、アルシアに頭を下げた。
「本当に珍しい子ね・・・。私のこれをチラ見すらしないし」
「・・・そういやぁ、書いてあったな。そういうことに興味を示さねぇ無私な野郎だって」
アルシアは残念そうに自分の豊かな胸に手を当てた。バルドラスは呆れ半分、納得半分といった表情を浮かべた。

「さぁて・・・、馬の用意はしてある。一階の受付に言やぁ案内してくれっから、とっとと行って来やがれ」
「ありがとうございました。それでは失礼します」
コウサカは初め来た時のように、最敬礼をバルドラスにして退出していった。バルドラスはそれを見届けると、ニヤリと笑ってアルシアとルミルを見た。
「どうだ、言った通りすげぇ野郎だろ？」
「ええ、全く・・・。あんなに平然と言っていたから嘘だったのかしら・・・」
バルドラスの言葉を受け、アルシアはそう呟いた。
「おら、お前等もとっとと行きやがれ」
「・・・ふぅ。言って参ります、領主様」
ひとつ溜息を吐いたアルシアはルミルを促して、執務室を後にした。一人残ったバルドラスは改めてコウサカを認めて溜息を吐いた。ダンカンからの手紙に書かれていた通り、とんでもない奴だと思いながら。
そして、机の上に山と置かれた書類を見て再び溜息を吐いた。

コウサカはダンジョン入り口にある女神像に黙礼した。この像、正確には己の身を挺した女神のおかげで魔族はほとんどのダンジョンから出てこられないのだ。礼をすると同時に、全員が無事に出られることを祈った。同行してくれるアルシア達もコウサカを倣って黙礼を女神像へ送った。
「よろしくお願いします」
「りょ～かい、ミレンシア君」
アルシアはからかうようにコウサカにそう言うと、先に歩き出した。
ダンジョンまで来る間に話してコウサカが真面目な性格であること、色気に全く興味を示さない変なところ、初めてダンジョンに潜

るというのに気負いすら感じさせないこと、礼儀を弁えていること等などに気を良くしたのかアルシアはコウサカのことが気に入ったようだ。また精霊武器という珍しい物を持っている事にも興味を引かれたようだった。ルミルはただ黙ってコウサカとアルシアの会話を聞いていた。

「なんで、私達が呼ばれたと思う？」

「サキュバスが相手となる可能性があるからでは？」

振り返って後ろで腕を組み、後ろ歩きしながらアルシアはからかうような笑みを浮かべてコウサカに聞いた。

「半分正解。私のパーティーは主にラビダンジョンの調査が仕事なの。だからかしらね、ご指名されたのは」

「なるほど。だから、こんなに迷いなく道を決められるわけですか」

コウサカ達は女神像が安置されている入り口から古い煉瓦で築かれた通路を進み、すでにいくつかの分かれ道に行き当たっている。だが、アルシア達は何の迷いもなく道を判断して進んでいる。

「そゆこと。道案内はしてあげるから、代わりにモンスターはお願いね？」

「了解しました。出来るところまで潜ってダンジョン探索をしましょう」

コウサカの言葉にアルシアは足を止め一瞬キョトンとしたが、すぐに苦笑を浮かべた。

「あら、気付いてたかしら？」

「ギブアンドテイク、という言葉があります」

バルドラスにして強いと言わせるほどのコウサカに敵は任せて、自分達は仕事である探索を行なう。アルシアのその考えに気付いたコウサカはそれだけ言うと、アルシアを追い越してさっさと先に進んだ。開けた部屋のような場所へとコウサカは踏み入れる。

「ふぅ・・・、本当に真面目な子ね」

コウサカの返答にそう一息吐きながらアルシアもコウサカに続こうとする。そこでふと、ルミルが何かに気付いたようだった。

「部屋・・・」
「っ！　しまったっ・・・！」
ルミルの言葉に気付いたようにアルシアはコウサカを見た。コウサカはすでに部屋に入ってしまっている。
少し開けた小部屋があった。地下要塞ラフ時代では広く作ってあるのはわざとで、わざと野営などを設置し易い広さになっており設置しようとする敵を隠し部屋から強襲したり、大掛かりな罠が仕掛けてあったり、また何かあるのではないかと言う精神面での仕掛けでもあるらしい、とコウサカはアルシアから聞かされた。
「・・・」
コウサカは全身に力を込めた。この部屋だけ人骨が散乱している。今まで通ってきた通路には一切なかった。何かある、とコウサカの本能が告げていた。
「気をつけてっ！」
白骨を見たアルシアが鋭い声を発してコウサカに警告した。それと同時、白骨達が起き上がってきた。その手には赤い跡の残る棍棒が握られていた。次々とスケルトンは増え、十五体のスケルトンがコウサカを認識すると襲い掛かってきた。
ただ、それにコウサカは驚きを浮かべるでも、剣を抜くでもなく心中で亡骸の主達に詫びた。
「危ないのでそこで待っていてください」
「え？」
駆け寄って来るアルシア達にそう言うと、コウサカは振り上げられる棍棒を気にもせず一番近くにいた一体のスケルトンの、内側に魔符の貼られた頭部に凄まじい勢いの拳打を叩き込んで粉砕した。そのままコウサカは頭部を粉砕されて崩れるスケルトンの手から棍棒を取り、何の予備動作もなく投げる。ただ腕だけの力で放たれた棍棒は円を描きながら、愚直にコウサカ目掛けて直進して来る三体のスケルトンの頭部を砕きながら壁にぶつかって落ちる。
「シィッ！」

そのままコウサカは一番多く残っている四体のスケルトンの集団に突撃する。接近したコウサカに棍棒を叩きつけようと腕を振り上げるが、瞬きする間にコウサカの拳がスケルトン四体の頭部を粉砕する。粉砕されるタイムラグはわずかで、重装備にも関わらず四体の頭部が同時に粉砕されたようにも見えるほどの速度だった。中央の集団を攻撃しに行ったコウサカは、残った七体のスケルトンに囲まれる。すでに七体は棍棒を振り上げている。

「帯びるだけだ」

『りょ～かいっ！』

剣の力を解放してはアルシア達まで巻き込むため、ただ刀身に力を帯びさせるに止め、それを叩きつける。この会話にはそんな意味があった。コウサカと朔絆の二人だけにしか理解できない会話だった。

「せぃっ！」

ギリギリまで引き込んだスケルトン達に、一瞬で背中から抜かれたクレイモアを自分を中心にゴォォッ、と凄まじい風切り音を発しながら円周上に奔らせる。光り輝く刀身は振り下ろされた棍棒よりも速く一瞬にして奔り抜け、棍棒ごと触れたスケルトンの頭部を文字通り消滅せしめた。

コウサカはザッ、と音を立てて回転を止めて背中の鞘にクレイモアを納める。それと同時に頭部、というよりは胸部より上が消滅した元スケルトンだった骨がガシャガシャと音を立てて崩れ落ちた。

コウサカは息一つ乱していない。

「これで終わりのようです」

コウサカは回転ついでに四方を確認してもう敵がいないことを確認していた。一方、アルシアは茫然としていた。ほんの十秒足らずである。十秒足らずでスケルトン十五体を文字通り瞬殺した。たった一人でそんなことが出来るのは、ダンブレテンで十人もいない。ダンブレテンの最精鋭に並ぶ、もしかしたらそれ以上のことを難なくこなしたコウサカを信じられない目で見ていた。ルミルも同じく

少し呆けたような表情でコウサカを見ていた。
「アルシアさん？」
コウサカの言葉でアルシアは我に返った。領主バルドラスが、ダンカンのジイさんがここまで手放しで褒める奴ぁ他に見たことがねぇ、と言っていたのを思い出した。
「君って、ホントにすごい子だったのね・・・・・。度胸だけじゃなくて」
「？　それはいいとして、進みませんか？」
そのコウサカの様子にまたアルシアは驚いた。自分がどんなにすごいか理解していないのだ。理解していたとしてもそれを誇ろうともしない。
「スケルトンは俺が処理しますので、ダンジョン調査は存分に」
実際、コウサカは本当に自分だけで次から次へと、どこからか湧き出てくるスケルトンを粉砕していった。数が少ないと素手だけで。ガントレットの手甲で振り下ろされる数ｃｍの厚さはある棍棒を叩き折りもした。剣を使うのはスケルトンが多い場合だけで、朔絆の宿ったクレイモアだけであった。
「ねえ、何で腰の剣は使わないのかしら？」
「骨は硬いので刃こぼれする可能性があるのです」
腰のベルトに差したままのバスタードソードについてアルシアが聞いても、コウサカはそう答えた。だから、素手と手甲を使うと。もうアルシアは苦笑するしかなかった。

そして一行が進んでいると十ｍほど前方にスケルトンではなく人影が現れた。
銀髪を背中を越すくらいまで伸ばして、扇状（せんじょう）のスカートに露出の多い黒い服を着て、金色の瞳をした女性が現れた。それは女性、というよりは少女と言った方がいい顔立ちをして迷惑そうな顔をしていた。アルシアとルミルの顔つきが変わった。

「まったく・・・・あんた達ね？　人ん家の門番、壊しまくっているの」
「・・・サキュバスよ」
アルシアもルミルも武器を抜いて臨戦態勢に入っていた。ただコウサカは構えもせずに前に出る。サキュバスは人間と同じように思考し話すことが出来ることを知ったため、決めていた方法をしに。
「黒魔族通行証、という物を持っているか？」
それはただ頼んで譲って貰おうと言う、馬鹿正直な方法。
「・・・男？　男であたしの下に来るなんて馬鹿ね・・・」
「っ！？　目を見ては駄目っ！」
話がまったく噛みあっていないが、サキュバスの少女は笑うと目を妖しく光らせた。それが何を意味するか知っているアルシアがコウサカに叫ぶ。だが、しっかりとコウサカの目はサキュバスの少女の目を見ていた。
「なるほど。それが魅了する時の目か」
「・・・え？」
平然としているコウサカにサキュバスの少女は唖然とした。アルシアもルミルも驚いてコウサカを見た。コウサカの首にはクリステル司祭よりもらったケルト十字架があった。
「黒魔族通行証というものを譲ってくれ」
「ち、ちょっと待ってっ！　なんで効かないの！？」
アルシアとルミルが聞きたいことをサキュバスの少女が代弁した。
「秘密だ。君は黒魔族通行証を持っていないのか？」
「ふざけ・・・っ！　その十字架・・・、そうかそれのせい・・・っ！」
コウサカの十字架にサキュバスの少女は気付いたようだった。そして魔法を唱え半秒も掛からずに完成させた。ライトニングボルトだった。
「魅了できなくても、こっちにはまだ魔法があるんだからっ・・・！」

そう言ってライトニングボルトをコウサカに向け放った。それをコウサカは剣で斬るつける。コウサカはサキュバスの少女が魔法を唱えた段階でバスタードソードを抜きに掛かっていたため余裕で対応した。

バヂィィィンッ！とライトニングボルトが着弾すると同時に、凄まじい摩擦音のような破裂音のような音が通路に響く。着弾された当のコウサカは、バスタードソードを上から下へ振り抜いた体勢で平然としていた。

「ま、魔法を切った・・・？　うそぉ・・・」

「とりあえず、話を――――」　「・・・くっ！」

コウサカが何か言おうとすると、サキュバスの少女は反転して逃げ始めた。そして、サキュバスの少女と代わるようにスケルトン達が現れた。

「とりあえず、追うのでしっかり付いて来てください」

コウサカが振り返って茫然としているアルシアとルミルの肩を叩くと、二人とも我に返った。魅了が効かないなんて自体になるとは思ってもいなかったのだろう。もう一度コウサカが同じ言葉を言うと、二人は頷いた。

コウサカが振り返るとスケルトン達が迫ってきていた。狭い通路なのでスケルトン達はほとんど一列になっていた。コウサカは走り出すとスケルトン達の頭部を先ほどと同じように拳打で粉砕しながらサキュバスの少女を追った。スケルトン達は棍棒を振り上げた段階で、すでに頭部を粉砕されるため次々と現れては崩れていった。コウサカは頭部を粉砕されて、崩れ途中の骨を自らの身体で弾き飛ばしながら進む。瞬く間に通路は骨で埋まった。

「何なのっ、あの化け物はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ！？」

サキュバスの少女は何十というスケルトンを素手だけで粉砕し跳ね飛ばしながら、後ろから追ってくるコウサカに恐怖し半泣きになっていた。

コウサカがスケルトンを粉砕しながら進んでいると、少し広く行

き止まりの部屋に行き着いた。サキュバスの少女は肩でぜぁはぁ息をしながら、何かを唱えていた。魔法かと思いコウサカがバスターソードを抜くが、違った。

「あたしの切り札、見せてあげるっ！」

サキュバスの少女が叫ぶと同時に、スケルトンが現れた。だが、全身が鉛（なまり）のような光沢（こうたく）を放ち、手にはショートソードを持ち、弓矢を背中に背負っていた。スケルトンを魔法的に強化したメタルスケルトンである。その数五。三体は剣を構え、今までのスケルトンより遥かに人間に近い動きでコウサカに迫る。残り二体は弓矢を構えてコウサカを狙っていた。サキュバスの少女もライトニングボルトを唱えている。コウサカは資料には載っていなかったため、今まで出現したことがない手強いスケルトンか、と分析した。

「二人は逃げてくださいっ！」

追いついたアルシアとルミルにそう叫びながら、コウサカはカイトシールドとバスタードソードを構えた。構え身体をカイトシールドで隠した瞬間、ライトニングボルトが直撃した。クリステル司祭により施された魔法耐性のおかげで衝撃はかなり小さなものだった。

しかし、直撃した衝撃でほんの一瞬コウサカの動きが止まる。それを狙って初速六十m以上の速度で一本の矢が僅（わず）か三、四mの距離から飛んでくる。それをコウサカは難なくバスタードソードで切り落とすと、その隙を狙って次は三体のメタルスケルトンが剣を振り下ろす。

「はぁっ！」

気合ひとつ。コウサカはそれを矢を斬って隙となっていたバスタードソードを半秒で戻すと、力を込めたその横薙（よこな）ぎで三体の剣を軽々と全て弾き上げる。その瞬間にもう一体が矢を放つ。たった数mの距離で放たれたそれは、コウサカの唯一生身が露出している顔へ向かってきた。力を込めて動いてしまったため身体が少し硬直しながらも、それを反射的に首を傾けることで避ける。コウサカの首の薄皮一枚を矢が切り裂いていった。

「っ・・・！？」

まさかそこまで避けるとは思っていなかったのか、サキュバスの少女は魔法の詠唱もせずに目を見開いて固まった。素早くコウサカは屈んで、剣を弾き上げられた衝撃で体勢を崩しているメタルスケルトン三体に足払いを喰らわせ転倒させる。そして、コウサカはバスターソードとカイトシールドを手放しクレイモアを、転倒した三体を飛び越えながら抜く。残り二体のメタルスケルトンは矢を番えている最中だった。

「さっきと同じだ」

『まっかせなさいっ！』

コウサカはそう朔絆に言いと、矢を番えている二体にクレイモアを横に薙いだ。二体の、体が鉄のように硬くなっているはずのメタルスケルトンは易々と切り裂かれ、頭部が消滅した。コウサカは横に薙いだ勢いをそのままに、振り向くようにしてまた横薙ぎをする。その斬撃はちょうど起き上がったメタルスケルトン三体を切り裂いた。コウサカはようやく詠唱して放たれてきたライトニングボルトをクレイモアで易々とかき消すと、その切っ先をサキュバスの少女に向け視線も少女の目に向けた。

そこで、サキュバスの少女が笑みを浮かべる。

「・・・あたしの勝ち。もう十字架はない」

そこでコウサカは気がついた。首に掛けていたケルト十字架がなくなっていることに。おそらく、先ほどの矢が吊るしている鎖に当たったのだろう。そうコウサカが場違いに分析していると、少女の目が妖しい光を放った。

「二人は逃げてくださいっ！」

初めて聞くコウサカの大声を聞いたアルシア達は勿論、逃げなどしない。二人とも武器を構えて援護に入ろうとする。しかし、先ほどのコウサカの動きを見ているため、下手に入っても邪魔になるだ

けと判断して動くに動けない。ルミルは短剣を抜かずに投げナイフを構えて、弓矢を放とうとしているメタルスケルトンに投げつけるが、空しく金属音が響いて弾かれただけであった。しかも、次は弓自体を狙って投げられたナイフをメタルスケルトンはわざと少し動いて自らの体を盾に弾いた。メタルスケルトンは攻撃されたにも関わらず、ルミルには構わずコウサカに向け矢を引き絞っていた。しっかりと優先順位を理解しているのだ。判断力も動きも、本当に人間のようである。

「・・・すごい」

アルシアもルミルも同じことを口にした。コウサカは全ての攻撃を避け切って一瞬で足払いを行ない、次の一瞬にはすでにクレイモアを抜いて弓矢を構えているメタルスケルトンに飛び掛っていた。そしてそのまま切り裂き、起き上がった三体のメタルスケルトンもタイミングを計ったように切り裂かれた。最後に予想したようにサキュバスの少女から放たれたライトニングボルトを弾いて終わりだった。

「・・・あたしの勝ち。もう十字架はない」

そこで二人も気付いた。コウサカが首から下げていたケルト十字架が、足元に落ちていた。

「まずいっ・・・！」

アルシアはコウサカのあまりにも圧倒的過ぎる動きに茫然としているルミルから投げナイフを奪い取り、サキュバスの少女に投げようとした。もしコウサカが魅了されて敵になれば自分達は確実に死ぬことを瞬時に理解したからだ。だが、アルシアの動きは遅すぎサキュバスの少女の目は妖しく光った。それから一瞬遅れてアルシアはナイフをサキュバスの少女に向け投げ放った。

「っ！？」

サキュバスの少女はそれに気付いて避けようと動くが遅かった。ナイフは確実に首を切り裂く軌道だった。だが、そこで横から手甲をはめた腕が伸びて、飛翔しているナイフを掴んでしまった。コウ

サカの手である。それにアルシアは力なくペタン、と地面に崩れ落ちた。もう打つ手が何もない。

「そん・・・・な・・・、こんなところで死ぬの・・・？」

襲い来る恐怖感にアルシアはそう力無く呟いて、涙を浮かべた。ルミルもアルシアを見て状況を理解し、顔を青くして動けなくなった。しかし、そこで魅了されたはずのコウサカが声を発した。

「いや、殺しては駄目ですから」

その言葉に全員が茫然とした。掴んだナイフを捨てると、コウサカは再びクレイモアの切っ先をサキュバスの少女に向けた。

「え・・・まさか、まだどこかにお守りを・・・」

「いや、それひとつだけのはずだが」

コウサカは落ちているケルト十字架をチラリと一瞥（いちべつ）すると、視線をサキュバスの少女に戻して言う。

「・・・あ。ね、ねえひとつ聞いていい？」

「ああ」

「あんた・・・あたしが可愛くない？」

「いや、可愛いと思うが」

「え、えぇ～・・・」

コウサカは大真面目な表情で言ってくるため、場違いだがサキュバスの少女は気恥ずかしくなってしまった。サキュバスの少女は魅了する要因として「可愛さ」というものを使っているので、それが効いているか確認したのだ。

「・・・な、何なのよ。あんたは・・・」

今度はサキュバスの少女がペタン、と崩れ落ちて信じられない表情で言った。と、そこで部屋の至る所で発光現象が起こった。全員が眩しさに、コウサカを除いて目を瞑（つむ）ってから目を開けると、サキュバスの少女と色違いだが似た格好をした数人の女性達が現れていた。

「お、おねぇちゃん・・・！」

サキュバスの少女は喜色を浮かべてそう言った。数人のサキュバ

ス達は、必死な、殺気を放ちながらコウサカを見た。
「・・・うちの可愛い妹に何をしているのかしら?」
そう言って別の二人のサキュバスが腰を抜かして座り込んだままのアルシアと、茫然と立ち尽くしたルミルに剣を向けた。
「・・・とっととその剣、退かさないと殺すよ」
一人のサキュバスが冷たく言い放つ。どこか必死さを感じさせる声色で。
「・・・あ、あはは。こ、これで形勢逆転っ！　よくも散々やってくれたねっ」
突然、味方が増え圧倒的に有利な状況になったことで、サキュバスの少女はよろよろと立ち上がると勝ち誇ったように笑った。
「さあ、とっとと剣を離すんだよっ！」
「痛っ・・・」
サキュバスの一人がアルシアの肩を軽く突き刺した。アルシアは苦痛の表情を浮かべるも傷口を押さえることも出来ない。と、そこで何故か朔絆が三十ｃｍほどの身長で実体化して姿を現した。その表情はサキュバス達を心配そうに見ていた。
『ねえ、あんまそういうの止めた方がいいよ？　こいつキレるから』
それはつい最近、コウサカから朔絆だけに教えられたことだった。どうやら人の生き死、または危ないの場面に遭遇すると頭の中でスイッチが入るらしい、たぶん前にいた世界での記憶が頭では忘れているが身体に染み込んでいるらしいと。その時のコウサカの顔を見て、朔絆は直感的に真実だと悟った。
「あはは、何をいうかと思ったら・・・。この状況でその男に何が出来るのかしら?」
一番上らしいサキュバスがそう言うと、アルシア達に剣を向けている二人にとある一言を言った。だが、やはりどこか必死さを感じさせる声色で。
「そっちには用はないから殺してしまいなさい」
カチリと音が鳴る。それはコウサカの頭の中で。

直後、サキュバス達の全身に鳥肌が立ち、本能的な恐怖で膝が笑い出した。全員が顔を真っ青にして身体を震わせた。その光景を見て朔絆が、あ～あ、という表情を浮かべていた。

『あ～あ・・・知んないかんね』

そう言って姿を消した。立っているのは剣の切っ先をサキュバスの少女に向けたコウサカだけであった。ただ表情は一切変わっていないが、静かで凄まじい殺気を放っていた。それは数人のサキュバスの殺気を易々と飲み込んでしまったほど、何十倍も濃くしたような濃度だった。

一番間近でその殺気を浴びたサキュバスの少女は失神寸前で顔を真っ青にして身体を震えさせ、その場にまたへたり込んだ。コウサカは体勢を変えないまま静かに口を開く。

「よく聞け。これ以上その二人に何かするというなら本気で殺す」

普段のコウサカとは違い、その声は冷酷(こくはく)だった。圧倒的有利だったはずのサキュバス達の戦意は木っ端微塵(こっぱみじん)になっていた。

「何もしないと誓えるなら、こちらも危害を加えない。どうする？」

「わ・・・、わかり、ましたわ・・・」

その言葉に、本能的に逆らってはいけないことを悟った一番上らしいサキュバスの女性が力無くそう言う。恐らく、アルシアとルミルは殺せてもこの男にだけは勝てない。自分達は皆殺しにされるだろう。その心中にはそういう考えが占めていた。

と、全員が身体が軽くなったのを感じた。コウサカはクレイモアを背中に戻し、殺気を消していた。すると、目の前でへたり込んでいるサキュバスの少女に、膝を着いて話しかける。

「黒魔族通行証を持っているか？」

「・・・な、何であたしに聞くのよ」

「目の前にいたからだ」

「・・・ホントあんた、なんなのよ」

殺気から開放された事と、コウサカのあまりにも適当な答えにサキュバスの少女は溜息を吐いた。

アルシアの肩の傷は刺した本人にヒールを唱えさせて手当てさせると、コウサカ達はサキュバス達に連れられてダンジョンの更に奥へと進んだ。そして、最奥部と言えるところに「家」を見つけた。アルシア達はそれに目を見張るが、コウサカは何の興味も示さなかった。

「少しそこで待ってください」

一番上、ミレイナというらしい名前のサキュバスは「家」の中に入っていった。他の者は外で待つ。「家」を背にして四人のサキュバスがコウサカと面をつき合わせて、コウサカの後ろにはアルシアとルミルがいた。

「ねえ、あんたホントに人間？」

一番最初に出てきて、コウサカに追いかけられたサキュバスの少女の名前はエレナというらしい。コウサカを怖々とずっと見ていたが、気になって仕方がないのか、意を決したようにそう聞いた。

「厳密には違う。ミレンシアの人間だ」

「だから、あんなに化け物じみてたんだ・・・。通行証・・・・渡した瞬間に斬りかかって来る気じゃないよね・・・？」

「その気があるなら、さっき囲まれた段階で一人を残して斬っている」

例えでもなく本気でそう言っていることを察すると、エレナは顔を青くした。コウサカはそれを見て溜息を吐くと、害意はないことを示すように兜を外して脇に抱えた。

「そちらが何もしないなら何もしない。少しは信じろ」

「散々追い回したくせに・・・・」

「俺が話そうとすると君が逃げるからだろう」

「ああ、もぉ・・・。何なのあんた・・・」

エレナはそう言って頭痛でもするように頭に手をやった。コウサカはそれに首を傾げただけだった。

「何となく・・・・魅了が効かなかった理由が分かった気がするわ・・・」

アルシアは呆れ顔でそう言って溜息を吐いた。そこでミレイナが「家」の中から出てきた。手には黒いお札のような物を持っている。

「ふむ。なるほど、それか」

「・・・条件があります」

コウサカが手を出すと、ミレイナは通行証の上で両手を重ねて胸に当てた。

「この「家」のことは他言無用、ということだろう。アルシアさんも、ルミルさんもいいですね？」

それに全員が驚いた。勿論、アルシアもルミルもである。

「ま、待ってよ、ミレンシア君っ！　さっきはギブアンドテイクだって自分で・・・・・」

「通行証を渡してもらうこともギブアンドテイクです。このくらいの条件は飲みます」

「私達、さっき殺されかけたのを忘れたの・・・？」

「あれは、俺達を殺そうとしていたわけではなく、ただ妹に危険が迫っていたため攻撃して来ただけかと。殺気に憎しみが感じられなかったので。それに殺すつもりなら出現した瞬間に二人を殺して、即俺にも襲い掛かっていたでしょう。違いますか？」

それに必死すぎた、と心中で付け加えながらコウサカはアルシアに言った。

「そ、それは・・・」

「仕方がなく攻撃してきたのです。そこを勘違いしてはいけないですよ」

ただし、とコウサカは続ける。少し怖い目をしてエレナを見る。

「その子には、もう少し教育をしてほしいがな」

「あ、あんた達が勝手に人ん家に入ってきたから悪いんじゃんかっ！」

「元々、この地下要塞は人間が作った物だ。それに話も聞かずに魔

法を放ってきたのは君だろう。しかも、俺は剣すら抜かずに話しかけたと言うものを」
「ぁっ・・・！　う、うるさいっ！」
「エレナ・・・ちょっと黙っていて」
ミレイナが呆れたように溜息を吐く。子供の喧嘩を仲裁する母親のような顔をしていた。
「分かりました、よく言って聞かせます。なので・・・」
「俺が責任を持って約束は守ろう」
コウサカはアルシア達の意見を聞かずに一方的に決めてしまう。アルシアは当然、反発した。その顔は厳しかった。
「待ちなさい、ミレンシア君。相手は魔族なのよ？　何を言っているの」
「なら、ラビダンジョンのサキュバスが人間を殺したという話を聞いたことがあるのですか？　もしくは、ダンジョンから出て来て襲ったという話でも」
コウサカから逆に問われ、アルシアは反応に困る。
「な、ないけど・・・。だからってっ・・・！」
「私達はポウォールとは違います」
アルシアの話の途中でミレイナが割り込んだ。その目には真摯な光が宿っていた。それに何となく、コウサカは直感的に返した。
「その中に、赤黒いローブを着た男はいるのか？　魔法や魔符を使って操ることが得意な」
「赤黒い・・・？」
コウサカの言葉にミレイナは、はっと何かを思い出したような表情を浮かべた。
「・・・はい。名前は知りませんが、とても酷い男だったので覚えています。確かにその男もポウォールです」
そう言うミレイナの顔は、強い憎しみを浮かべていた。それにコウサカは目を細める。
「なるほど。あの勢力はポウォールというのか」

「ポウォールと関わったことが・・・・・？」
「ああ、その中の一人の男と戦った。・・・・殺し損ねたが」
その場の全員に一瞬だがひどい寒気が走る。コウサカの目に危険な光が宿るがすぐに消えた。そして、アルシアに言った。
「魔族の中にも、平和に暮らそうと思う者もいる。憎しみ、先入観だけでモノを考えてはいけないですよ」
コウサカは上辺（うわべ）ではなく、本当に心からそう言っていることが感じられるように平然と言い放った。
「・・・そう。・・・はぁ、もぉ・・・まったく。本当に変わっているわね。キミは」
コウサカのあまりにも公平で泰然（たいぜん）とした言動を見てアルシアは溜息を吐いて苦笑した。そして笑みを浮かべてコウサカに言った。
「わかったわよ、言わない。絶対にね。ね、ルミル？」
「はい」
清々とした笑みを浮かべるアルシアがルミルにそう言うと、ルミルも微かに笑みを浮かべて同意した。それにコウサカはそれにひとつ頷くと手を出した。
「通行証を」
だが、ミレイナは渡さない。驚いた表情を浮かべたままポカンとしていた。
「どうかしたのか？」
「え、い、いえっ・・・あなたみたいな人がいることに驚いてしまって・・・」
「どういう意味だ？」
『あんたがバカだってこと～。このバカっ！』
朔絆が実体化して出て来てコウサカの肩に座りながら、面白そうにそう言った。今回は存分に使われたためか、かなり機嫌がよかった。
「なるほど」
「ち、違いますっ！」

コウサカが納得するとミレイナが慌てて否定した。それに、ああ、とコウサカは補足を入れる。

「ああ、わかっている。この状況で罵倒する発言をしても自分の首を絞めるだけだろうからな。たぶん違う意味で驚いたのは理解している。朔絆、話の途中で茶々を入れるな」

コウサカがそう言ってやるとミレイナの顔に安堵の色が浮かんだ。朔絆はイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべた。コウサカはやれやれ、と小さく溜息を吐くと再び手を出した。

「通行証を」

緊張した表情を浮かべるミレイナがゆっくりと通行証をコウサカに渡す。コウサカはそれに少し目を向け、すぐにカバンに仕舞う。

「感謝だ」

コウサカは軽く目礼をミレイナに送る。それを見て、ミレイナは疲れたようにゆっくりと息を吐いた。そして、最後にもう一度同じことを確認した。

「あの、ここの存在はくれぐれも・・・」

「信じろ」

ただ一言だけの言葉だが、強い力がこもっていることをミレイナは感じ取る。ミレイナは深く、しっかりと頷いた。それを見て小さく頷いたコウサカはエレナを見た。

「追い返そうとするのもいいが、ほどほどにな」

「ぅ・・・、わ、わかっているよっ！」

痛いところを突かれたエレナは慌てたように言う。コウサカはそんなエレナに構わず、アルシアとルミルを促して元来た道を戻り始めようとする。それを見たエレナは慌てて口を開く。

「あ、待ってっ！　あんたの名前は？」

「コウサカだ」

兜を被り直しながら、コウサカは首を捻ってエレナに視線を向けるとそう言った。そして、今度こそ元来た道を戻って行った。

「コウサカ・・・・・変な人間」

エレナは口を尖らして、遠くなるコウサカの背にそう言い放った。そして、何故そんなことを聞こうと思ったのか分からず、小首を傾げた。

急いで道を戻るコウサカ達の前に、もう一体として襲い掛かってくるスケルトンはおろか、倒してきたはずの白骨のひとつとして転がっていなかった。

あとからコウサカがバルドラスに聞いて知ったことだが、ラビダンジョンにサキュバス目当てに潜った男達はほとんどが無傷で、潜った時の記憶は無くして帰って来たそうだ。ただ犯罪者などが隠れ蓑（みの）にしようと潜った後、二度と出てこなかったそうだ。

ただ平和に。それに嘘偽りは無かった。

―第七章―　ラビダンジョンに住まうサキュバス（後書き）

【おまけ】

サキュバスの『魅了』という能力について（読まれたい方だけどうぞ）

誰かを好きになる、恋愛に強く関連するのは人間の脳の腹側被蓋野という部分です。脳内ホルモンであるドーパミンの分泌にかかわっています。この部分が恋人の写真を見るなどをすると活性化します。

この活性化によって脳内にはドーパミンが大量に放出されることになります。ドーパミンは強力な麻薬に似た作用を持っていて、人に強い「快の感情」を発生させるとともに、学習によってもう一度その快感を味わいたいと思わせて、特定の行動を繰り返させたり物事に強い集中力を発揮させたりする作用があります。つまり、好きな人とまた会いたい、触れたいと思わせるということです。集中力が増すのは飴と鞭のような感じと思ってくれれば。

サキュバスの「魅了」とは、マナの強い操作によって脳を幻惑させ、ドーパミンの放出をさせて自分のことを擬似的に愛していると思いこませることです。これは相手が自分を好きになる要因がないと意味がなく、サキュバスなら綺麗な女性に男性が見惚れる、下心という要因を用いています。

ちなみに、男性なのに男が好きだったり、女性なのに女が好きな人には効きません。幻惑させる要因が根本から違うからです。男性が好きな男ならインキュバス、女性が好きな女ならサキュバスという状況なら効果があります。

強いマナ（魔力）操作ですが、人間には不可能です。出来るとしても精神が焼き切れます。つまり、もし出来たとしても死にます。洗脳魔法とはそれほど高度なものです。

―第八章―　女神の見せた悪夢

夢を見た。それは最後には登場人物達が死ぬか殺されるか、または不幸の道へと向かう悪夢だった。

一行がラビダンジョンから出るとすでに夜になっていた。ラビダンジョンから戻ったコウサカ達は報告のために領主バルドラスの下へ行き、コウサカは当然のようにサキュバス達の「家」のことは口にしなかった。アルシアもルミルもそれに倣った。

無傷で帰ってきたコウサカを、予想してたが本気でやるたぁな、とバルドラスは満足げに笑いながら報告を聞いた。

「失礼します」

「おう、何かあったらまた来やがれ」

アルシア達には特に何も言い残さず、素っ気無くコウサカは最敬礼をして退出していく。その背を見送ったバルドラスは、視線は扉に向けたままアルシアに声をかける。

「どうだったよ、あの坊主は？」

「はい、戦闘能力だけ見てもガーディアンナイツに匹敵するかそれ以上です」

ガーディアンナイツとはダンブレテンの中でも最強の者達を呼ぶ言葉である。その者達はたった十人それだけを持って十倍の百人以上よりも強いとされる。

「人格の方は・・・」

アルシアはコウサカの人格を思い出そうとする。そして、つい笑ってしまう。

「なんだ？」

「ふふ・・・、いえ何でもありません。人格の方も文句なしに素晴

らしいですわ。本当に公平すぎて怖いくらいに・・・」
そう言うアルシアの顔は、困ったような笑みを浮かべていた。
「・・・そうか。わかった。お前等も疲れただろうし、休め」
「では、失礼します。領主様」
アルシアは一礼して退出する。ルミルもアルシアに倣って一礼し、退出していった。
「・・・やれやれ。引き入れんのは無理かなこりゃ」
一人残ったバルドラスは、わかっていたように溜息を吐いた。

『そいえばさ・・・』
コウサカはすっかり暗くなり人気のなくなった道を宿屋に向かって歩いていると、朔絆(さき)が実体化はせずに声を発した。
「何だ？」
『・・・なんで、さっきはあんなに察しがよかったのさ』
その声は不機嫌だった。
「いつのことだ？」
『ダンジョンで「家」のことを向こうが言う前にわかったこと』
「ああ、それか。「家」を見た時のアルシアさん達の反応、サキュバス達の顔色、出来る限り侵入者を殺さずに記憶だけ消して何も無かったとして帰す事。それから考えれば「家」がどのくらいサキュバス達にとって大事なのか簡単に考えが至る」
コウサカは、当然だと言う様に言う。
『・・・』
朔絆はコウサカの目の前に実体化をする。その顔は大変お怒りだった。
『バーカっ！！』
それだけ言うと、朔絆の姿は消えた。
「・・・何だ」
コウサカは訳が分からずひとつ首を傾げると、再び宿屋へと歩き

出した。

次の日。

コウサカは聖堂に向かうと、仕事中だったクリステル司祭に面会をさせてもらった。

「・・・やはり、これは魔族専用ですね。一週間ほどかかってしまいますが、人間にも効果があるように作り変えてみます」

「お願いします」

さらりとすごいことを言うクリステル司祭にコウサカは頭を下げると、聖堂を出て宿屋に帰る。宿屋にはナユキはいない。コウサカがラビダンジョンに向かう前にナユキに学校で魔法ついて教えてやってほしいとバルドラスに頼み、快諾（かいだく）され昼間のうちは学校で魔法について習うことになった。ちなみに授業費はコウサカが出費。

宿屋に戻るとコウサカはカリンに捕まった。

「あ、コウサカっ。暇だろうから一緒に来てよっ」

「・・・まあ、別にいいが」

「じゃ、れっつごーっ！」

そう元気良くカリンが飛び出していくと、コウサカは小さく溜息を吐いて帰ってきてすぐに宿屋を後にした。

「何をしに行く気だ？」

「ちょっと野草を取りに。日々の節約はコツコツとっ」

「それなら、俺が付いていく必要はないと思うが」

「今回はちょっと遠いから念のため、ってとこ」

それにもうひとつ溜息を吐いて、コウサカは何かを言うのを止めた。カリンとコウサカが話しているとよく朔絆が出てくるのだが、もう面倒くさいのか一言すら発しない。

二人はダンバートン西門から出て、南西へと向かった。放牧された羊や牛を見ながら歩いていくと、背の低い林に着いた。常人には色が紛（まぎ）れて見えないだろうが、コウサカの目には林の奥に野生のク

マやオオカミが見える。魔符（まふ）に関係ない普通の野生動物のようだからコウサカは、まあいいか、とカリンには伝えなかった。
「あまり奥まで行くなよ」
「もっちろん。そんなの分かっているよ」
そう言いながらもカリンはどんどん林の中へと入っていく。
「奥まで来ているが」
「そのためのコウサカでしょ？」
カリンは顔だけ振り向いてウインクひとつ、コウサカに笑いかけた。
「・・・ふぅ」
コウサカは一息吐くと、木にもたれ掛かった。だが、感覚だけは鋭く研ぎ澄ます。風に木々が揺れ、木の葉が揺れる音、動物達の気配、それとは別の気配。
そうして気配を探っていると、コウサカは妙な気配が近づいて来ることを感じ取る。だが敵意、害意、殺意などは感じられない。だからそれがおかしい。野生動物が自然と近寄ってくるような雰囲気をコウサカは発していない。むしろ、怯えて遠ざからせて然（しか）りである。
「・・・」
コウサカはそっと、腰のバスタードソードに手をかける。出来るならカリンに悟られないように終わらせたい。
そしてコウサカの目の前には一匹のオオカミが現れる。しかし、怯えるわけでもなく近づいてくるわけでもなく襲ってくるわけでもなく、ただじっとコウサカを見ているだけだった。その目には不思議な光が宿っていた。
「・・・何だ、お前は？」
敵意のないことを感じるとコウサカは剣から手を離す。そして、膝を着いて視線をオオカミと合わせた。直後、コウサカは自分の頭が揺らされたような錯覚を覚えた。
（・・・何だ？）

――夢を・・・私から・・・。

（っ・・・！？）

コウサカは自分の頭を押さえる。確かに今、頭の中に直に声が響いた。気付くとオオカミの姿は消えていた。

「何してんの？　そんなとこで」

コウサカは、はっとして立ち上がる。それをカリンが不思議そうに見ていた。コウサカは軽く頭を振って、冷静に戻す。

「野草取りは終わったのか？」

「ん、ああ。終わったよ」

そう言ってカリンは取った野草を掲げた。

「そうか。なら戻るとしよう。あまり長居しても仕方がない」

「え、え？　わ、わかった」

コウサカがとっとと踵（きびす）を返してしまったので、カリンも慌てて後に続いた。あとで聞いたが、朔絆には声は聞こえていなかったそうで、オオカミも煙のように突然消えたのだという。

「・・・ふぅ」

酒場で夕食を済ましてきたコウサカは、自室に戻ってくると同時に面倒くさそうに一息吐いた。朔絆が気持ち良さそうにベッドの上で寝ていたからである。わざわざ完全実体化をしてベッドを占領していた。

「・・・まあ、いいか」

あどけない表情で寝息を立てている朔絆を見ていると起こすのも気が引けて、コウサカはランプの灯りを消すと床に腰を下ろして壁に背を預けた。格好は相変わらず下半身は鎧のまま兜は脱ぎ、上半身は灰色のアンダーウェアである。バスターソード、カイトシールドを傍（かたわ）らに立て掛けコウサカは目を閉じた。

いつもよりも妙に強い睡魔が襲ってきてコウサカは眠りに落ちる。
そして落ちる直前、ある言葉が頭に響いた。

――――夢を。私からあなたに。
――――。
――。

夢。ただ薄ぼんやりとした情景が流れるだけのそれではない。その場、人、全てが克明に現れ、会話も間近で聞いているような不思議なものだった。

そこはアルビダンジョンで、三人の青年と少女が今まさにダンジョンに潜ろうとしているところだった。
「ここの学校はダンジョンに行く授業もあるのか？　女の子をダンジョンへ一人で行かせる先生がいるとはねぇ・・・」
「もう、レイナルド先生をそんな風に言っちゃダメ！　考えがあってのことなんだから！」
スマートショート風の赤髪に茶色の瞳をした剣を携えてがっちりとした青年がそう言うと、小柄で弓を手に真朱色の髪をポニーテイルにして緋色の瞳をした少女がそう返した。
「まったく・・・女の子は若い男の先生に弱いからなぁ・・・・・」
「・・・。ダンジョンに行かせる目的は、仲間を探す方法を教えるためだと思いますが・・・」
やれやれと赤髪の青年が言うと、ルード風の飴色をした髪に紺碧色の瞳で、ローブに身を包み眼鏡をかけた青年が呆れたように言った。
三人の名前はそれぞれ赤髪の青年がルエリ、ポニーテイルの少女がマリー、ローブ姿の青年がタルラークである。三戦士を呼ばれ各地のダンジョンを巡り、「理想郷」であるティルナノイを探してい

た。ただし、タルラークは世捨て人のそれではなく、泰然(たいぜん)としながらも活力に満ち溢れていた。

「ティルコネイル出身者は、男も女も強いから大丈夫！」

「ハハッ、マリーを見てるとそんな気がするよ。んじゃま、行ってみようか」

そう言うと、ルエリは先頭を切ってダンジョンへと潜った

見知らぬ侵入者に対して襲い掛かってくる人間ほどの白いクモや、凶暴化しているネズミやコウモリを蹴散(けち)らしながら一行が進んでいると、二人の後ろを歩くタルラークが声を発した。

「ここで少し休むことにしましょう・・・」

前を歩くルエリとマリーは互いに一瞬、顔を見合わせ頷いた。

タルラークはその辺に転がっている木片や枯れ草など燃えそうなものを集め、ファイアボルトの要領で火を起こした。三人は火を囲むように座る。

「本当にクモが多いな・・・それに大きすぎないか？」

「あのね、ダンジョンの奥にはもっと大きなクモがいるんだよ」

「げ～・・・マジで？」

ルエリは道中で蹴散らしてきたクモや動物達のことを愚痴(ぐち)ると、マリーはそう答えた。二人の話を聞いたタルラークは考え込む表情になった。

「おかしいですね・・・。動物達が急に凶暴になったことと、何か関係あるのかもしれません」

「ここへ来る途中も、オオカミがたくさんいたよな」

タルラークの言葉にルエリが付け加えると、マリーは意外そうな顔をした。

「え？　元々そうじゃなかったの？」

「何年か前に来たときは、本当に静かな田舎(いなか)だったぞ。おまえ・・・本当にここの出身なのか？」

「なによ～！　マリーは誰が何と言おうとティルコネイル出身なんだから！　ただ・・・記憶がないだけ・・・」
　ルエリが胡散臭(うさんくさ)そうに言うと、マリーは慌てたように言い繕(つくろ)ったあと表情を曇らせた。
「・・・ああ、忘れてたよ・・・そうだった。すまん・・・覚えていないんだったな・・・・・・」
　マリーの言葉に、はっと気付いたルエリは決まり悪げに謝った。
「恐らく、ドルイドの魔法で封印されているのだと思います。私の先生も出来た覚えがありますよ。悪事のために使う魔法ではないので、安心してください」
「わぁ・・・タルラークって、優しい～！　バカのルエリとは本当に違うわぁ～。大好き！」
「なにぃ、バカだと！？」
　タルラークがマリーに起こっている事象について自分の分かる範囲で解説し安心させるように言うと、マリーは笑顔を浮かべた。一方、馬鹿にされたルエリはマリーに食って掛かった。そんな様子を見てタルラークは儚(はかな)げな笑みを浮かべた。
「はは・・・私もたまに記憶を消したいときがありますよ」
「ああ、魔族に殺されたお姉さんのことか？」
「こらっ、ルエリは「デリカシー」ってもんがないよ！」
　ルエリがそう言うとマリーがルエリを指差して声を怒らせながら言う。だが、タルラークは少しだけ寂しげに笑いながらそれを止めた。
「はは、大丈夫ですよ。単なる事実を述べただけですから。それに、ルエリと一緒にティルナノイを探しているのもそのためですし」
「へっ、オレが強くなったら魔族なんぞ全部やっつけるから心配すんな！」
「ルエリ、単純で知恵がない～」
「ハハ・・・」
　ルエリが自信満々に言い放つと、マリーは呆れ顔で返した。それ

を見たタルラークは小さく笑うと立ち上がった。
「頼もしいかぎりですよ、ルエリ。さて・・・そろそろ行きましょうか」
「おう！」
「うん！」
二人も立ち上がり火を消すと、再び奥へと進んだ。

「うらぁっ！」
マリーの放った矢やタルラークの魔法で動きを封じ込められた人間の数倍もある巨大な赤いクモは、ルエリの全身のバネを使って繰り出された一撃を持って体を切り裂かれて絶命した。三人は絶命しながらも、微かに体が痙攣（けいれん）している巨大クモの死骸（しがい）に近づく。タルラークはそんな死骸を見て眼光を鋭くした。
「・・・ルエリ。ここはちゃんと調査してみる必要がありそうです。こんなクモはエリンにはいません。魔族がやったことに違いないでしょう」
「ダンジョンなんだし、元々こんなヤツくらい居そうじゃない？」
「確かにだんだん増えて来ているようだしな。昨日の女神となんか関係あるのか？」
「え、いきなり何のこと？」
突然ルエリが脈絡もないこと言うと、マリーは怪訝（けげん）そうな表情を浮かべた。
「夕（ゆう）べの夢に美しい女神が現れて、『何かが起こっている』って言ったんだ」
「また～、イヤらしい夢じゃなかった？」
「ルエリ。その夢の話、もっと詳しく話してくれませんか？」
ルエリの言葉にマリーは呆れたように笑ってからかっていると、タルラークが真剣な表情を浮かべてルエリに問うた。
「あん？　ええっと・・・黒い羽の付いた女神がどっか暗いとこに

立ってて、『私のところへ来てください』って言ったんだ。世の中が危機に陥る、とか・・・」

「黒い羽の女神が・・・？　まさかティルナノイへ・・・」

ルエリの言葉を受け、タルラークの顔色が変わった。

「タルラーク、何か知っているの・・・？」

「ダンジョンとは、元々は魔族の世界からエリンを保護する装置。ティルナノイにいる女神の力で迷路となっているんです」

マリーが不安そうに聞くと、タルラークは話し出す。

「しかし・・・これほどまで魔族がたくさん現れるようになったということは、やはり女神の力に何かしら問題が発生したようですね。ルエリの夢は、本当に女神のメッセージなのかもしれません・・・」

タルラークが言い終わると、ルエリは驚くどころか喜色を浮かべて笑っていた。

「オレが女神に選ばれた、ってことか？　光栄だな・・・オレにも行く理由ができちまった。ハハッ！」

「マリーも手伝ってあげる！　女神に記憶を取り戻してもらえるかもしれないしね」

一通りの探索を終えた三人は元来た道を、ティルコネイルに向かった。

そこで、夢は一旦プツリと切れる。

情景が暗転したかと思うとラビダンジョンの祭壇にタルラークが一人で立っていた。そして何度も何度も潜っては帰ってきた。すでに数度目になる。タルラークは祈るように女神像に目を伏せ黙礼を送る。

（魔導力を分析してみると、ダンジョン内には女神像によって封印されている場所が存在する・・・そこがティルナノイへ行く道。女神よ。あなたが封印している地へ行き、あなたを助けられる栄光をください。私と同じ道を歩むマリーとルエリを守ってください。女

神の恩恵（おんけい）が私たちを守ってくれるよう、祈りを捧げます・・・）

目を開け、顔を上げたタルラークはダンジョンに潜っていく。また彼女と出会うだろうと思いながら。

最下層の最奥部まで歩みを進めたタルラークの耳に、歌声が届いた。一人のサキュバスが悲しそうで儚げで、そして寂しげな声で歌っていた。

それは、まだ魔族であった頃のクリステルであった。

・・・ララ・・・ララ・・・♪

入ってくるときはその剣を捨てて・・・。

あなたに近づくとき、その剣に映っている私の姿が、私の胸を痛めるの・・・。

・・・ララ・・・ララ・・・♪

あなたが私のベッドルームに初めて入ってきた日、じつは私は驚かなかったの・・・。

私の心にはもう、あなたの愛が住んでいたから・・・。

・・・ララ・・・ララ・・・♪

目を閉じないで・・・。

あなたの瞳に、私を閉じ込めて・・・。

あなたは私の主人・・・。

あなたは私の主人・・・。

黒いバラの永遠なる主人・・・。

歌い終えたサキュバス、クリステルはタルラークを認めると寂しげな笑みを浮かべた。

「・・・聞いてた？　あなたのために作った歌よ」
「あなたの美しさと知恵については聞いていますが、人間を惑わせるために作った歌はそれほど聴きたくありません。道を退いてください」
　タルラークはただ目を伏せたまま無感情にクリステルに返した。
それにクリステルはまた寂しげな笑みをひとつ浮かべた。
「・・・。あら、そう？　あなたがここを訪れるのも、もう五回目ね。他の男達みたいに、私に会いに来たわけじゃなさそうね。一体何をそんなに必死で探しているのかしら・・・？」
　タルラークは感情を押し殺した表情でクリステルを見る。
「私はティルナノイへ行く道を探しています。この迷路のような複雑な空間の中に、必ず本当の道が隠されていると思うのですよ」
「あなたって本当に分からない人・・・。私も魔族。あなたの意思がどうであれ、退いてあげるわけにはいかないわ。今度も負けるかもしれないけど、もう一度挑戦しようかしら？」
「挑戦はあなた目当てに来る者達がやることではなかったのですか？　まあ、あなたの意思がそうでしたら私も避けません」
　タルラークの顔には仕方がない、面倒なといった色はなにひとつ無かった。
「今度が最後よ。今までずっとあなたには負けっぱなしだけど、今度こそ勝って見せるわ。代わりに・・・」
「代わりに・・・？」
　クリステルは言葉を詰まらせた。そして意を決したような真剣な表情を浮かべる。
「・・・。私が・・・私が勝ったら、あなたを愛することを許してもらうわ」
「・・・あなたが決して弱くないことは存じていますが、ドルイドの道を歩んでいる身としては、それを受けるわけにはいきません」
　ドルイドは禁欲である。その高僧であるタルラークが、それを受けるわけはなく。

その言葉に、タルラークは驚きも嬉しがりも何も反応は見せなかった。だが、それにクリステルは予想通りの返答が返ってきたことに笑った。

「ふふ・・・全力でいくわよ」

「・・・」

タルラークはただ黙って、魔導力たるマナを両手の中に集めた。

圧倒的だった。タルラークは手加減をした魔法を素早く詠唱、またマジックシールドを展開して相手の魔法を防いだ。タルラークの詠唱はサキュバスであるクリステルよりも速く、放った魔法の威力も高く、そして狙いも正確だった。

完敗したクリステルは疲れたように地面に座った。タルラークはクリステルを見下ろしてただ淡々と言う。

「もう進んでよろしいでしょうか?」

「・・・」

クリステルは何も答えない。ただ静かに目を伏せた。そんなクリステルを見て、タルラークは小さく息を吐いた。

「すみません。あなたの剣に殺意がないのと同じく、私もあなたを害する気はありません」

「・・・本当に・・・。本当に勝ちたかったの・・・。そうしたら、あなたが私の心を受け入れてくれると思ってた・・・」

「・・・愛は。愛は、人を屈服させて得るものではありません」

その言葉にクリステルはカッ、と目を開いてタルラークに言い募った。

「うそよ! すべての男は、女を屈服させようとするじゃないっ!」

「あなたを探しに来る男達は、あなたを屈服させることで、あなたの愛を求めたのかもしれません。しかし、そういった愛が全てだとは思わないでください」

「・・・」

タルラークは噛んで含めるように、少し優しげな声で言う。それを聞いたクリステルは一瞬、寂しげな表情を浮かべると俯いた。
「・・・私はもう失礼します」
そう言ってタルラークは静かに俯(うつむ)いているクリステルの横を通り過ぎた。

情景が暗転する。映し出されたのは全体的に赤く薄暗い不気味なダンジョンの中だった。
ひとりの、ローブを着て口元と顎(あご)に髭(ひげ)を蓄えた初老の男性がダンジョンの中を歩いていた。そして立ち止まる。
「少し休もう・・・。進んでも進んでも終わりがないな・・・。これほどダンジョンで迷うことになろうとは・・・。」
男性の名はマウラス。タルラークの師匠であり、第二次モイトゥラ戦争で人間側に勝利をもたらした要因を作ったエリン最強と呼ばれるほどの魔導師である。第二次モイトゥラ戦争後、死亡したと「されて」いた。
疲労が濃いのかその顔はやつれていた。マウラスは横になる。そしてその隣には一人の女性がいた。
(あなたと約束したでしょう・・・必ずまた会おうって・・・。だからここに来たのです・・・)
それは声ではなかった。そもそも彼女、マウラスの妻シラは肉体を持っておらずソウルエディット現象と呼ばれる事象により魂だけの存在となっていた。どんなに想いを抱いて言おうと手を伸ばそうと、目の前にいるマウラスには何一つ届かなかった。
(マリーは無事です・・・。会いたかった・・・あなたと話したい・・・。私は見えているのに、あなたには見えないの・・・? お願い・・・私を、見てっ・・・)
幽霊のような存在であるシラは涙すら流すことも出来ない。ただ切実(せつじつ)な想いだけを胸に積もらせて、ただ愛する者に触れたいと想い

続けるだけだった。

しばらくしてマウラスは身を起こした。休んだはずだが、その顔は憔悴(しょうすい)したままだった。

「・・・ずいぶん長い間、意識を失っていたようだ。やつれたな・・・なるべく体力を温存しなければ・・・。出口は向こうなのか・・・？」

それはダンジョンで目を覚ますまでのこと。身体がこれほど憔悴しているのだから相当な期間だろう。マウラスはダンジョンの通路の向こうに目を向ける。その顔はやつれていたが、焦燥感(しょうそうかん)も浮かべていた。

「・・・気力を振り絞ってでも・・・帰らねばならん。・・・シラに・・・このトルクに賭けて誓ったのだ・・・。ここで倒れるわけにはいかない！」

力を込めてマウラスは立ち上がる。

「妻と娘の待つ、我が世界へ・・・必ず帰る！　そして国の仲間達に聞くのだ・・・」

そして上げた顔には強い意志が宿っていた。

「私を裏切った理由を・・何故・・・何故っ！　・・・私を後ろから刺したのかをっ・・・！」

（あなた・・・）

シラはマウラスの身に何が起こったのか知らない。だが、刺したという言葉から何が起こったのかを理解した。歩き出したマウラスの隣に追いつくと隣に並んで歩き出す。その顔には覚悟があった。愛する人と共にどこまでも行こうとする覚悟が。

ダンジョンを進み、とある広い部屋に着いたときマウラスの目の前に魂を空の鎧に憑依(ひょうい)させ動かしている、ゴーストアーマー部隊が出現した。生身は持たないが個々が魂であるため、それぞれ意識がある。

「大魔導師マウラスよ、ここにいましたね。怒りを鎮め、私達と一緒に帰りましょう」

ゴーストアーマー達が見せたのは真摯なまでなマウラスへの敬意だった。

「あなたは生きているが、生きていないのです。あなたの世界では、もう死んでいるとされています。人間の世界へ帰ることはできません」

ゴーストアーマーの言った「されています」というニュアンスが妙だった。だが、マウラスはそんなにことを気にもせず激しい怒りを発した。

「人の格好はしているが、人ではない者達よ・・・。この怒りに満ちた魔導師の意思に、あえて逆らおうと言うのか！」

「・・・気分を害したのなら謝ります。しかし・・・あなたの命はあなたのものではありません。あなたが命を維持しているのは、女神モリアンの意思です。そして・・・あなたのためにザブキエル様が自らの命を捧げたのです」

ザブキエルとは魔族側に付いた堕落した賢者である。月の石を召喚し地面に墜落させるという大魔法によって人間側に苦戦を強いた。最後はマウラスとの戦いにより敗れ去った。

また別のゴーストアーマーが言う。

「マウラスよ、あなたは人間の世界へ行っても命を維持することができません。あなたのために多くの魔族が命を捧げました。あなたの命の価値をお考えください」

ゴーストアーマー達の必死の訴えも、マウラスには届かなかった。瞬時に凄まじい量のマナを操作し詠唱を行なう。一瞬でライトニングボルトを、すぐには放たずに止めて置く形状である光球が五つ出来上がる。

「・・・それ以上、私の邪魔をするな。私は帰る・・・人間の世界へ・・・。・・・私の行く手を遮る者は誰であろうと・・・許さぬっ！！」

憤怒（ふんぬ）の表情を浮かべたマウラスはゴーストアーマー達にライトニングボルトを浴びせる。ゴーストアーマー達はそれぞれが盾で防いで、マウラスを押さえようと剣も抜かずに近寄ってくる。それにマウラスは半秒で完成させた魔法を更にぶつける。

ゴーストアーマー達が息も絶え絶えに地面に膝を着いた頃、新たな人影が現れる。漆黒の鎧に身を包んだ魔族を率いる者、ダークロードである。

「マウラス、やめるのだ！　もういい・・・これ以上意味も無く戦う必要はないっ・・・！」

マウラスはゆっくりと少し離れた背後に現れたダークロードに目を向ける。その目には強い怒りが渦巻いていた。

「退けっ・・・！　さっきも言ったであろう・・・私の行く手を遮る者は誰であろうと許さんっ！！　それがたとえ・・・女神であったとしてもだっ・・・！」

「苦しみ続ける存在よ・・・おまえが帰ろうとする理由は分かる。・・・だが、帰ればおまえは死ぬ。なぜ私達の言うことを聞いてくれないのだ・・・？　私達の言葉を聞かないのならば・・・おまえは更に傷付くだけだぞ」

「何故、私が帰ったら死ぬと言い切れるっ・・・！？」

マウラスはダークロードの懇願（こんがん）に、叫ぶように声を発した。

「苦悩する人間の魔導師、マウラスよ・・・確かめたいか？　おまえは私が見せる真実に・・・耐えられる自信があるか・・・？」

「暗黒の君主よ・・・私をみくびるな」

その強い意志のこもったマウラスの瞳を見て、ダークロードは意を決した。

「ならば・・・これを見るがいい・・・」

ダークロードが上げた手から黒い光が溢れ出る。それをマウラスとシラは見る。光の中に情景が浮かび上がった。一軒の家が火を放たれていた。

（・・・・・・！！！）

シラが息を呑む。それは見覚えのある家であった。
「こ、これはっ・・・私の、家・・・か？　だ・・・だが、何故・・・何故、燃えているのだっ・・・！？」
マウラスはダークロードを睨みつける。
「言えっ、どういうことだ！　おまえ達がやったのかっ・・・！？　こんなことを・・・こんなことをしても私はおまえ等の言いなりにはならんぞっ！！」
「疑い深き人よ、そうではない。もっとよく見るのだ」
そう言われてよく見ると、家の周りにはローブで身を隠した者達がいた。手に手に火を持って。
「あ、あれは・・・まさかっ！？　だが、どうしてだ・・・どうして人間が・・・人間の兵士達が私の家を・・・」
その時、悲鳴が聞こえた。それは燃え上がる家の中からだった。
そしてその声は。
（・・・！！！）
「お、おお・・・シラっ！　ま、待てっ！！　娘は・・・うちの子はどこだっ・・・！？」
そして人の斬られる音と悲鳴、赤子の泣き叫ぶ声が響いた。
（あ・・・ああ・・・・・・）
「や、やめ・・・止めてくれぇえええええええええええええええええええええええええええー・・・！！」
そこで黒い光は消えた。マウラスはその場に崩れ落ちて両手を着く。
「うおおぉぉ・・・！　・・・ぐ・・なぜだ・・・どうして・・・」
そうして崩れ落ちたマウラスを見下ろすダークロードは声を発する。その声は心からマウラスを案じている声色だった。
「そう・・・すべては人間の仕業。おまえの活躍の報を受けた貴族達がやったこと。私達も何とか未然に防ごうとしたが・・・残念だ。おまえがザブキエル様の最終魔法がどういうものなのかを理解したために、おまえ、そしておまえに関連のあるすべての人間が殺され

た。おまえは死んで英雄となったが、おまえの家族はそうではなかったのだ・・・すべてはおまえが気を失ったときに起こったこと・・・」

「ああ・・・ああ・・・シラよ・・・娘よ・・・すまぬ・・・本当にすまぬ。こんな私のせいで・・・」

マウラスは地に伏せると悔恨（かいこん）と自責の念で身体を震わせながら涙した。

（あなた・・・）

シラは両膝を着き、マウラスの前に座りこんだ。触れられはしないがその肩に手をやった。

「マウラス・・・おまえは、人間の世界では英雄だ。ザブキエル様の最終魔法を、自らの命を犠牲（ぎせい）にして防いだ救世主だ」

そこでダークロードの声に気の毒そうなものが混じる。

「しかし・・・死んで英雄となったはずのおまえが再び蘇（よみが）えって人間の地に現れたら、どういうことが起こるか考えたことはあるか・・・？　人間達は自分達の利益のために、おまえをまた殺そうとするだろう。おまえのかつての仲間達は、みな帰還して英雄となった。高い地位と財政を以って、魔導師の一人くらいは簡単に抹消できる権力を持つほどの、な・・・」

そこで一旦言葉を区切る。マウラスを見ると、地に伏せたまま動かなかった。ダークロードはそれに嘆息（たんそく）すると、続けた。

「認めるのだ・・・おまえが今見たもの・・・それこそがまさに人間の本性。奴等に真実は通じん。ただ奴等が認める自分に都合の良い正義があるだけ・・・。私もかつて、あのような人間の姿を捨てた。復讐したいのであれば、女神モリアンの意思に従うのだ。私が女神のいるところへ案内しよう」

「・・・・・・・・・頼む」

マウラスは、ただ一言そう力無く言った。

また暗転する。今度はどこともしれない暗いところだった。そこには黒い羽に黒い髪の女神がただ一人いた。だが、それは。

（き、キホールっ・・・！？　なぜ・・・どうして生き残って・・・あの邪悪な魔神が・・・）

キホール。

第一次モイトゥラ戦争で猛威を振るった魔族の王バロルに代わり、キホールは魔族を統率して人間を滅ぼそうとしていた。クロウクルアフと呼ばれるドラゴンを召喚して王都タラを破壊した記録が残っている。その後は何らかの方法で倒されたと思われたが、それをあざ笑うかのように生き残っていた魔神である。

女神モリアンに化けたキホールが口を開く。

「あなたは・・・あなたの家族を殺した人間達を許せますか・・・？　復讐の剣があなたに与えられても・・・それを振り回さずにいられますか？」

（あなた、その話は聞いちゃダメ・・・すべての人間をう憎む必要はありません・・・。お願い・・・その人はあなたを利用しようとしているのです・・・）

だがシラの想いは何一つマウラスには届かなかった。マウラスの瞳には激しい憎悪（ぞうお）が宿る。

「必ず、復讐する・・・私を殺した奴等、私の家族を殺した奴等・・・。地の果てまで追い詰める・・・許さん・・・絶対に」

（あなた・・・）

マウラスは激しく憎悪しながらも、その顔には家族を守れなかった自分への強い自責も現れていた。

「女神よっ・・・！」

マウラスは憎悪で光る瞳を、偽りの女神へと向ける。

「・・・答えてほしいっ！　私は、あなたのために何をすればいいのですか！？　あなたの復讐のために何をすればいいのですか！？」

また暗転する。今度はルエリ、マリー、タルラークがいた。そこは彼らがティルナノイと信じて来た地。だが、それは残酷なことに間違っていた。今やグラスギブネンと復活させようとする魔族の本拠地である。

「ここが、あのティルナノイ・・・？」

「でも、ちょっと暗すぎなような・・・。ここ本当にティルナノイなの？」

「間違いありません。何回も確認しました」

ルエリの発した疑問にマリーも続く。だが、タルラークはそれを一切否定した。

「おまえの話だと、すべての願いが叶う楽園だったはずだよな？」

「ルエリ、女神を信じましょう。あなたもその夢を見たのでしょう？　女神が、ここへ来る方法を教えてくれたのですから。楽園がこんなに暗いのは、女神が魔族に捕まって魔力を奪われたせいでしょう。・・・女神さえ救出できれば、私達の願いは叶えられるはずです。」

なおも食い下がるルエリにタルラークはそう言う。だが、それはルエリに言うよりも自分でもそうであってほしいと思っていることを思わせる声色だった。

「私、信じてみる。タルラークがそう言うんなら、ね」

「タルラークの話ってか、女神の話だろ？　美人の女神様を救出すりゃぁ、何かお礼がもらえんだろ。じゃ、行こうぜタルラーク。オレが力になってやるからよ！」

マリーとルエリの言葉を受け、タルラークは目を伏せる。

「ありがとう・・・ルエリ・・・。ありがとう・・・マリー・・・」

そして顔を上げる。その顔には気迫が満ち溢れていた。

（もう少し・・・もう少しでティルナノイは私達の手で降臨する・・・そして、楽園が開く・・・）

「行きましょう！」

そこでまたすぐに暗転した。そして次に映ったのはゴーストアーマーとダークロード、そして偽りの女神とその隣にいるマウラスに囲まれた三人の姿だった。

「ま、マリー・・・？　ま、待てっ！　乱暴にするなっ！　傷つけてはならんっ・・・！」

マリーに気付いたマウラスがそう叫ぶが女神が返した答えは残酷なものだった。

「彼らはダークロード。秩序と平和を知らない者達。女神の意思に逆らい、我々の地に足を踏み込んで来た者達・・・なぜ、生け捕りにするのですか？　戦争と復讐の女神、モリアンの名を持って命じます。彼らの首を、私の前に捧げるのです」

「なっ・・・なんだと！？」

女神のその言葉が流れた直後、ダークロード達はタルラーク達に向けて剣を振り下ろした。

「マリー、ルエリっ！！」

タルラークのそんな叫びを最後にプツリとすべてが消え、あとには暗闇だけが残った。

コウサカは目を覚ます。外は薄っすらと明るくなっていた。

（夢・・・？）

だが、それは違うとコウサカはすぐに理解する。

「なんだ、これは・・・？」

コウサカの手には見覚えのないペンダントが握られていた。そして、頭に響くものがあった。

――――このペンダント・・・ここ・・・門・・・鍵・・・早く・・・。

――――ナユキ・・・子・・・渡せば・・・元へ・・・。

それっきり何も聞こえなくなった。

「なるほど・・・あの子には辛い夢だったからな・・・」

そうひとり呟き、何故自分が夢を見たのか容易に思い至る。心優しいナユキではあんな残酷な夢は耐えられないだろう。

そこで気付く。コウサカ自信の記憶に何かが引っ掛かることに。

そして残酷な夢であったが自分は何も堪えていないことに。自分は人が死ぬことに慣れている・・・？

「・・・なるほど」

何となく納得してしまっている自分へ自嘲する。だが、すぐに止める。また朔絆がうるさく言いそうだからである。

コウサカは立ち上がるとベッドの上に目を向ける。そこには幸せそうな顔をしながらベッドを占領して大の字になっている朔絆がいた。

「・・・自分が女だということを忘れてはいないだろうな。この我がまま娘は・・・」

無防備すぎる朔絆を見て、コウサカは溜息を吐いて頭を掻いた。そして悪夢によって悪い方向を向いていた思考が、気楽な考えに変わっていることに気付く。それに、ふっと小さく笑う

「本当に・・・お前でよかったよ。相棒」

小さくそう言ったコウサカは、さてまだ朝早くてすることがないがどうするか、と頭を捻った。

女神の見せたのだろう悪夢は、奇しくもコウサカ自身の何かを気付かせる結果となった。それがコウサカの記憶の何に関係するのかは分からない。

ただ、何となく気付いてしまったコウサカは窓の外を見ながら、一息吐くと静かに目を伏せた。

―第八章―　女神の見せた悪夢（後書き）

余談（「マビノギ」をプレイした方へ。ストーリーのネタについて）

メインストリームＧ１のムービーをゲーム内でＳＳを撮ってきて、それを書いたものですが、文章力が無くてこんな風にしか出来ませんでした。申し訳ありません。ここはＧ１のネタを進める上で外せない部分だったので、恥を承知でこの形として投稿させて頂きました。

―第九章―　ダンバートン北東平原攻防戦

夢を見てから半日、それは昼過ぎコウサカの部屋でのこと。朔絆（さくき）は完全実体化をしてベッドの上に、コウサカは壁に背を預けている。

ただ、コウサカは顔を少し気難しくしかめていた。。

「・・・ねぇ、何かあんた変じゃない？　何か本当に笑わなくなっちゃったし・・・」

「そうか？」

コウサカは首を捻る。だが、一番近くにいつもいる朔絆には分かるのである。村を出て此の方、ふっ、と小さく苦笑のようなものはするが、大きく声を出して笑うことや楽しげにしていると感じることがほとんどないと言ってもいいほど減っていることに。

「・・・何かあったなら言ってよ。あたしに出来ることなら何でもするからさ・・・」

朔絆はベッドの上にとんび座りで座ったまま、切なそうに片手を胸に当てながら言う。

「・・・」

コウサカはそれ見て一瞬、夢のことを話すか？　と思うが馬鹿馬鹿しいかとその考えを打ち消した。

「特に何もないはずだ」

「・・・嘘。ねぇ、あんたにとってあたしって、そんな程度の相棒なの・・・？」

心底心配しているのか朔絆は少し泣きそうな顔をしていた。いつもは我がままばかりだがこういうところはまだまだ純粋な子供だな、とコウサカは思う。子供扱いすると怒るので口には出さないが。

「・・・やれやれ」

コウサカは壁から離れるとベッドの上の朔絆の頭をぽん、と一撫でしてから隣に腰掛けた。本当に夢物語だが、まあいいかと観念をした。

「夢を見た」
「ゆめ・・・？」
コウサカはそれにひとつ首肯する。
「夢・・・という表現が正しいのかは分からない。記憶と言った方が正しいかもしれない。タルラークさんがいた。そして・・・」
コウサカは右手に持った、恐らく女神より授けられたペンダントを見る。朔絆もつられてペンダントを見る。
「そんなペンダント持ってたっけ？」
「女神からもらった。笑わなくなった理由はただ単に面白いと思うことがないだけだと思うが、こっちは本当の夢物語だ」
コウサカは夢で見たことの触りだけを朔絆に話した。だが、朔絆は少しも疑わない。
「よく信じるな。こんな夢物語を」
「当たり前じゃん」
そう言い放つ朔絆を見て、コウサカは一度目を伏せて鼻で小さく息を吐く。
「ふぅ・・・。夢の話だが」
コウサカは自分が見た夢の続きを朔絆に話す。三戦士のこと、マウラスのこと、人間の行なったこと、偽りの女神のこと。
「・・・」
それを聞いた朔絆は次第に顔色を変えていった。それは心底馬鹿らしい、という顔だった。
「何それ・・・結局、人間が最悪じゃん」
「権力、財力、軍事力・・・。手放しがたい強大な力を持った時、大なり小なり人とは醜くなるものだ・・・」
「・・・？」
そう無意識的に呟いたコウサカの顔は、今まで朔絆が一度も見たことがないものだった。すぐに、はっとしてその表情は消えた。
「あ・・・すまない。何か俺言ったか？」
「・・・うぅん。何にも」

「そうか？」
「うん・・・・」
朔絆は目を伏せ俯いた。その顔には寂しげな笑みがあった。
「続けるが。そう言ったことで、タルラークさん達はティルナノイへと行ったがもうその道は使えないだろう。それに、ラビダンジョンにはサキュバス達が・・・」
そこでコウサカは唐突に言葉を途切らせる。思案顔になって無意識的に自分の顎に手をやる。コウサカの何かを考える時の癖である。
（ダンジョンの封印・・・魔族の本拠地へと通じる・・・来れるとはまたその逆も然り？）
コウサカの目は知らず知らずの内に鋭く細まっていく。
「・・・どしたの？　怖い顔して」
「朔絆、剣に戻ってくれ。少し出る」
「・・・わかった」
コウサカの顔付きを見て朔絆は他に何も言わずにクレイモアへと戻った。コウサカはベッドから立ち上がると、装備を付けてダンバートンから出て北西へと向かった。

コウサカはラビダンジョンへと来ていた。今回は私用なので馬はない。ただ、コウサカの足を以ってすれば馬並みの速度で疾走することが可能である。二、三ｋｍは離れているがすぐに辿り着いた。
今回はコウサカを阻む敵は現れなかった。というよりは、出しても無駄なのが分かっているのか。ただ一度しか通らなかった道をコウサカはすべて完璧に覚えていて、すぐにサキュバス達の「家」に辿り着いた。「家」の前にはやはり何らかの方法で侵入者を察知することが出来るのか、ミレイナと何故かエレナが立って待っていた。
ダンバートンからラビンダンジョン、それに複雑怪奇なダンジョンを完全装備のまま全力で走り抜けて来たというのに、コウサカは息一つ乱していなかった。

「・・・何のご用でしょうか」
緊張した面持ちのミレイナがコウサカにそう問いかける。コウサカが答えようとしたところ、エレナがコウサカに食って掛かった。
「そうよっ、何しに来たのよっ！」
「ちょっ・・・エレナっ！？　黙っててっ！　というか何であなたまで出てきているのよっ！」
「何で、って・・・お、お姉ちゃんだけじゃ危ないと思ったからっ！」
「この人が何かするわけがないでしょうっ！　いい加減にしないとネルとリリとアルを呼んでっ・・・あっ」
一度会ったきりだというのにすごい信用のされようだが、コウサカが二人の言い合いを特に気にした風もなく終わるのを待っていることにミレイナが気付いた。
ちなみに、ネルとリリとアルとはエレナの姉である。ミレイナが長女、ネルが次女、リリが三女、アルが四女、エレナが末妹である。
「終わったか？」
コウサカは表情一つ変えずに真っ直ぐに言うので、ミレイナは気恥ずかしくなって顔を赤らめた。
「す、すみませんっ・・・。エレナ、次は許さないわよ？」
「君も大概、懲りないな」
「な、何よ・・・お姉ちゃんまで・・・・・・」
ミレイナとコウサカ両方から睨まれてエレナはたじろいだ。そして今度こそ静かになった。それを確認すると、ミレイナは嘆息しながら再度コウサカに向き直った。
「それで、どんなご用でしょうか？」
「君らが魔族の世界からここに来るために使った「道」があると思うが、どうだ？」
「ええ、確かにあります。それがどうかしたのですか？」
「来れるとはその逆もまた然り」
「・・・え？」

コウサカの言った言葉の意味が分からずミレイナは目を瞬いた。
「ポウォールが進入してくる可能性はあるか？」
「い、いえ。「道」自体はすでに封印してあるのでまず有り得ないですが・・・」
「そうか」
コウサカがそれっきり何も言わなくなったので、ミレイナは恐る恐る聞く。
「あの・・・もしかして、ご用とはそれを聞きに来ただけですか？」
「ああ」
「うっわ、こいつ馬鹿だ・・・」
「エレナっ・・・！！」
キッ、とミレイナが睨むとエレナは気圧されて視線を逸らして黙り込んだ。馬鹿にされた当人は全く関心を示さず、コウサカはせっかく来たのだから他に何か聞くことはないかと思案していた。
『・・・ずいぶん、お優しいじゃん』
姿は現さなかったが朔絆が声を発した。そのすごく険悪そうな。
「黒魔族通行証を素直に渡してくれた恩があるからな」
『思いっきり妨害して来ていた気がするんだけど？』
姿は見えど、朔絆から発されている何かがミレイナ達に向いた。
その妙な気迫にミレイナ達は後ずさりした。
「ふむ・・・。まあ、俺の推論（すいろん）でしかないが」
『「「？」」』
コウサカが唐突に言った言葉の意味が分からず、三人共が疑問に首を傾げた。朔絆は剣の中で。
「恐らくは、君らは一般民くらいではないか？　魔族内では」
『「「？」」』
また一同、首を傾げる。
「軍にも所属せず人も、この場合魔族の人だな。それを殺したこともない。どうだ？」
「は、はい・・・。その通りですが、何故そんなことを・・・？」

ミレイナが首肯して、聞いた。コウサカは答えず、ひとつ首肯した。
「例えばだ、朔絆。普通の少女の家に、人殺しも必要なら無慈悲に行なえるような者が向かっているとする」
『は・・・？』
「そんな時、逃げることも出来ないならどうすると思う？」
『な、なんでそんなことを・・・』
「お前の疑問を解消するためだ」
コウサカがよく分からないのはいつものことだが、それでも無駄なことをせず考えがあって行動することを朔絆はよく知っている。だから、真面目に答えることにした。
『殺られる前に殺る』
「・・・物騒極まりないがそういうことだ。俺達が囲まれた時の殺気・・・」
コウサカはミレイナへと視線を向ける。
「あれは結局、脅しでしかなかったのだろう？　殺すをいう「振り」をすることで、俺の行動を止めることが目的で」
「そこまで、分かるものなんですか・・・？」
ミレイナは信じられないと言った顔をしていた。
「俺は殺気を嗅ぎ分けられる。殺し慣れているならあんなに「必死」にはならない。そして、俺の殺気を受けて膝を着いたりもしないだろう」
そう言ったコウサカの表情はいつも通りだったが、どこか自嘲めいたものが混じっていた。
「まあ、何故分かるかは知らないがな。納得したか、朔絆？」
『・・・フンッ』
それっきり朔絆は黙り込んだ。コウサカはそれにひとつ小さく溜息を吐くと、何か聞くことはないかと考えたいたことを思い出した。だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。
「では、用件も終わった。戻るとする」

それだけ言うと、コウサカはさっさと踵(きびす)を返した。それにミレイナは慌てて引き止めた。
「何か用か？」
「い、いえ・・・。ひとつだけ・・・心配して下さってありがとうございました」
「通行証の恩がある。それに・・・」
「それに・・・？」
「・・・いや、こっちは違う。気にするな」
無闇にポウォールのことを話しても不安がらせるだけか、とコウサカはここへやって来た最初の理由を隠した。そこでまたエレナがコウサカに噛み付いた。
「はっきり言いなさいよ！　本当に変なヤツ」
「君はその喧嘩腰(けんかごし)が直らないのか？　変に相手を挑発すると、逆上して何をされるか分からないが」
「あんたには関係ないでしょうがっ！」
エレナはミレイナが止める間もなくコウサカに詰め寄った。
「だいたい何なのよっ、何様っ！？　助けてやったって感じっ？あたし達はあんた何かに助けられるほど、落ちぶれてないっ！」
「エ～レ～ナ～・・・っ！」
エレナの物言いにミレイナの我慢が限界になろうかと言うところで、コウサカは意外なことをした。
「そうか。それは、すまなかったな」
コウサカがエレナに向けて頭を下げた。
「え・・・ち、ちょっと・・・」
「馬鹿にするつもりも、哀れむつもりもなかったが俺が来ること自体がそれに等しかったか。すまなかった」
頭を下げたままのコウサカに、ミレイナは気の毒なくらいにあたふたとしていた。
「あ、頭を上げてくださいっ・・・！　ほら、エレナもっ・・・」
「何なの・・・」

コウサカが顔を上げると、エレナが俯いていた。そして、キッと顔を上げた。
「何なのよっ、あんたはっ・・・！」
それだけ叫ぶと、「家」の中へと消えてしまった。
「すみません・・・あの子は、その・・・」
「いや、いい。聞くつもりはない。それに、たまにああやって爆発した方が精神的にいい」
罵(ののし)られた当人だというのに、エレナへの気遣いを見せるコウサカにミレイナは恐縮(きょうしゅく)してしまった。
「ひとつ聞いてもいいですか・・・？」
「ああ」
ミレイナは意を決したような表情を覗かせていた。
「あなたにとって、種族とは何ですか・・・？」
「種族？」
「・・・」
ミレイナは多くを語る気はないようで、それ以降は口を閉ざして緊張した面持ちを浮かべていた。コウサカは特に気負った風もなく、自然な口調で答えた。
「どうでもいい」
「え・・・？」
コウサカの言葉に、ミレイナは呆気に取れた。
「そもそもが俺には記憶がない。故に、それを判断する基準を持ち合わせていない。その質問は無意味だ」
「なら、何故どうでもいいと・・・？」
「いま現在、俺がそう思っているからだ。ただ記憶が戻った場合は当てにならない」
「そ、そうですか・・・」
そう言ったミレイナの表情は、ほっとした様な、少しがっかりしたようなものだった。
「聞きたいことはそれだけか？」

「あ、はい」
「何の役に立つかは分からないが、俺はダンバートンのアリアンロッドという宿屋に滞在している。もし万が一、その時は力を貸そう」
それだけ言うと、コウサカは踵(きびす)を返して元来た道を帰って行った。
「アリアンロッド・・・」
一人残ったミレイナはその名前を口に出して反芻(はんすう)していた。その表情は窺(うかが)い知れない。

ダンバートンの学校では、魔法と戦闘についても学ぶことが出来る。勿論、それだけではなく文字の読み書きなどを教える一般学科もある。一般学科の方は子供が小さいうちから通わせられ、戦闘と魔法学科については希望者が申し込んで別枠で受けることになっている。
ナユキはそんな魔法学科の方を受けていた。受講者には、ナユキのような年頃も居れば、大人から子供まで様々がいた。
「では、ナユキさん。実際に詠唱を行なって魔法を発現してみてください」
「はっ、はい。・・え、えーと・・・」
その中でナユキは最優秀生だった。普通は瞑想(めいそう)から入り、エリンに存在する全ての物質の源とされるエルグや、その生物が生まれ持って内在するマナを感じることから始めるのだが、ナユキはマナを感じるどころかいきなりそれを簡単に操り、ただ一日だけでアイスボルトの基礎、空気中の水分の集約を可能とした。さらにそれを氷結させてアイスボルトを形成してしまった。またコウサカの苦手とするファイアボルトすら簡単に発現させてしまった。
いまはライトニングボルトの最終試験を受けていた。
（ま、まずマナの変換を・・・）
ライトニングボルトはマナの素粒子を電子という素粒子へと変換して発現される。実際に敵にぶつかる電撃はマイナス電子、その道

となるプラス電子をマナから変換させることでライトニングボルトという魔法を発現するのである。電子の流れはマイナスからプラス方向へ流れる（実際に「陰極線」と呼ばれるもので実証されている）。マナにより空気中の絶縁（電気を一切流さないモノ）をなくし上記したように発現させるのである。ただ、エリンには電気という概念がまだまだ浸透（しんとう）しておらず、雷でようやく何となく分かるという程度であることから、ライトニングボルトは高難易度の魔法と位置づけられている。ボルト系の中で最も高速で放たれるため威力以外は使い勝手が良く強い。

（行かせたい方向を・・・）

ナユキは腕を伸ばして、その先にライトニングボルトの軌道がはしるようにイメージする。そのイメージ通りにマナの操作によって道ができる。そして最後に発現させる言葉を口にする。

「・・・Ｇｏｆｙｎｎａｆ　ａｍ　ｔａｒａｎａｕ（我は稲妻を求める）・・・」

その言葉と同時に、屋外に設置された練習用の的にライトニングボルトが半秒も掛からず着弾する。

「はぁ～・・・すごいですね。本当に昨日まで魔法について何も知らなかったのですか？」

「知らなかったというより、記憶喪失なので・・・。よく、分かりません・・・」

黄唐茶色（きがらちゃいろ）のソフトミディアムの髪に、紫色の瞳をした目には眼鏡をかけ、細い身体をした男性が感嘆（かんたん）の声をあげた。魔法学科を担当する、ダンバートンで最も魔導学の権威（けんい）であるスチュアート先生である。

スチュアート。魔法学科の先生だが高度な魔法について研究もしている。いろいろと難題を吹っ掛けてくることもあるが彼は実験で目の怪我を負い、視力を弱めてしまった過去がありそんな人を二度と出さないために厳しい課題を言い渡しているらしい。ちなみに、

体力が無い。

「ああ、すみません・・・。ですが、全く驚異的ですよ。この物覚えの早さは。あなたをここ通わせたという方の目は、すごいですね」

「そういえば・・・」

確か、前にコウサカが自分には魔法の心得があるのだろう、と言っていたのをナユキは思い出した。そう思いながらナユキは首から下げている青み掛かったアミュレットを手に取る。

「？　どうかしたのですか？」

「あ、いえ。何でもありません・・・」

ナユキは我に返ってスチュアートに謝った。確かコウサカは魔法が苦手と言っていたが、苦手な人間が素質など見抜けるものだろうか。ナユキはそんな疑問を抱いた。

「さて、あなたはボルト系魔法については問題ないですね。では、次の人・・・」

次の試験者の名前を呼ぼうとしたところ、フィィィィィィ・・・、と言う音がスチュアートの声を遮った。次いでドドンッ！　という音が響く。

「この音はっ・・・！　授業中止っ、全員早く家に戻るか官庁へ避難をっ・・・早くっ！」

学校前に設けられた屋外練習場、また学校内からも慌しい足音が響き渡ってきた。一人状況が分からず、ナユキが残っているとその肩にスチュアートは手を置いた。その表情には焦燥感がにじみ出ていた。

「あなたも早く官庁か自分の宿へ」

「あの一体、何が・・・？」

「ああ、あなたはこの街に来てから日が浅いのでしたね・・・。いいですか？　落ち着いてよく聞いてください。今の警笛の音は、敵と遭遇した時にハンターが上げる警戒音ですが、問題はその後です。ドドン、という音がしましたよね？　あれは花火のようなものを打

ち上げて緊急非常事態にのみ鳴らされるものです。つまり、何かそこまでの事態が起こったということです・・・」

早く避難を、とナユキに言い置くとスチュアート自身も学校で習っている小さな子供達の避難のために、その場を急いで後にした。

「・・・」

一人残されたナユキは、バルドラスが何かあったら来いと言っていたのを思い出しまず官庁へ行こうと思い至る。練習場を後にして学校前の大通りに出た。

「民間人は道の脇(わき)によれっ！　迎撃に向かうの部隊の邪魔だっ！！」

北通りの道を大勢の武装したハンター達が移動をしていた。緊張している顔もあれば、戦の匂いを感じ舌なめずりしながら走っている者、ただ目だけを光らせている者、また迎撃に向かうハンターを心配そうに見つめる民間人達。様々だった。

「・・・」

そんなハンター達の姿が、ナユキにはコウサカとだぶって見える。そして、いまの自分には力がある、何か役立てれば。そう思いナユキは官庁へと足を向けた。

「領主様っ・・・！」

ダンバートンの観測班の隊長を務める一人が、領主執務室へ飛び込んできた。

「大声出さねぇでも聞こえてるよ。どうせ、いつも通りマスからだろ？　敵の規模はどんな感じだ？」

バルドラスはすでに自前の特注した黒を基調としたダスティンシルバーアーマーの鎧一式（バルドラスが身長二ｍ超えと大きすぎるため普通の規格では着れないため特注品）に着替え終わっていた。肩には巨大な戦斧(せんぶ)ブロードアックスを担ぎ、腰にはバスタードソードが一本あった。

マスとは、ダンバートン北東にある古びたダンジョンの名前であ

る。ウルラ大陸において、二番目に魔族出現率の高いダンジョンのひとつである。

「そ、それが・・・目視からの数は三百ほどなのですが、ロックゴーレムと思われる敵影が十数確認できましてっ・・・！」

「ほお、ちったぁ本気出してきやがったか。くそったれの魔族共が」

そう言うバルドラスの顔には不敵な笑みが浮かんでいた。そして、観測隊長を従わせて執務室を後にする。途中で戦闘時に副官を務める男とも合流する。

「確か、結構派遣しちまっているから残ってんのは六百ってとこか？」

「ええ。更に悪いことにガーディアンナイツのほとんどは、タルティーンに取られています。あのミレンシアも外出しているらしく連絡が着きません」

「残ってんのは、お前とガルドーの野郎くらいか？」

「私はあなたのお守りと、全体の指揮に回らないとならないので実質ガルドー一人です」

「へっ、言いやがる。しっかし・・・第二城壁もまだまだ出来てねぇってのに。面倒な時に攻めてきやがったもんだぜ、ったくよぉ」

「その言葉は、無理やり城壁の周りに居付いた連中に言えばいいかと」

副官、レザルドはそう吐き捨てる。バルドラスと同年代で戦友のこの男は、バルドラスのような強靭な肉体を持っているわけではないが知略に長ける。

三人は官庁の外、表広場へ出ると各隊の隊長達が副官を従えて整列していた。レザルドが命令を発する。

「五、六はそれぞれ西門及び南東門へ向かい封鎖。以後、その方角よりの敵を発見した場合、全力を以って迎撃。またダンバートン内すべての警護をせよ。一から四の各隊はマスダンジョンより出現したという敵軍団の迎撃へと向かう。敵は約三百。また、ロックゴーレムと思われる姿を十数視認。コボルト、ゴブリンが多数の模様。

以上。全部隊、行動開始っ！」

ダンブレテンでは、約千人のハンターを一から十の部隊にそれぞれ約百人ずつで分けている。それぞれの編成は個々に癖の強いハンターらしく安定していない。だが、だから接近戦に滅法強かったり、遠距離戦（弓矢や魔法）が強い部隊など偏っているのが強みである。

レザルドの号令一下、各隊長達は弾かれたようにすでに城門の外へと向かっている自分の部隊、また待機している部隊へ行き、部隊を引き連れてそれぞれの城門を目指して行った。

「ハンターさん、頑張れよー！」

避難している一人の民間人からのそんな言葉が黙々と移動しているハンター達に投げかけられた。その後には、次々に声援が続き、その声に片腕をあげて答える者や声を上げて返すハンターもいた。その目は、守るべき人達を再確認して爛爛と光っていた。

「さぁて、オレも行くとすっかな」

バルドラス自らもダスティンシルバーナイトヘルムを被ると、目を光らせる。レザルドはそんなバルドラスを見て嘆息した。

「自分が領主だということを忘れていませんか？」

「へっ、馬鹿言え。領主どころか、元は泣く子も黙る武装キャラバンの頭だぜ？」

バルドラスはニヤリと不敵な笑みを浮かべながらそう言い放った。

「ああ、そうでした・・・。そうでしたね・・・」

レザルドは頭痛でもするようにこめかみに手をやった。

「領主さんっ！」

官庁の前にいた二人に声がかかった。領主を「さん」付けなんかで呼ぶのは一人。ナユキである。

「あん？　坊主といた嬢ちゃんじゃねぇか。そういや、坊主どこ行ったか知らねぇか？」

「え、コウサカさんですか？　わたしが学校に行く前は宿屋さんにいましたけど・・・」

「ってぇこたぁ、本当にどっか行ってまだ帰ってきてねぇんだな・・

・。ったく、本当に間が悪りぃな」
「あの、領主さんっ。わたしも力になりたいです！」
バルドラスが嘆息していると、ナユキが声を上げた。その顔には自信が現れていた。
「いきなり、どうした？　嬢ちゃんじゃ戦闘は無理だろ？　坊主からはそう聞いているぜ」
「コウサカさんのおかげで魔法が使えるようになりましたっ」
そう言うとナユキは瞬く間にアイスボルトを完成させて浮かべた。それにバルドラスは少し目を見張る。
「一瞬でか。こりゃすげぇ」
だが、とバルドラスの目が細まる。
「連れていけねぇな」
「ど、どうしてですか？」
「相手は魔族だが、人殺しが出来るのか？」
「え？」
ナユキはバルドラスの眼光に射竦められる。修羅場を掻い潜った者が持つそれである。
「嬢ちゃんじゃ無理だ。来られても味方を殺すことになる」
味方を殺すことになる。その厳しい言葉にナユキは言葉を失う。
「坊主がどんな顔をしてたかよく思い出してみやがれ」
それだけ言うと、ドカドカとバルドラスはレザルドと観測隊長を従えて北門へと向かって行った。身長二ｍ超えで全身フルアーマーに完全装備、合計体重で百五十ｋｇを超えるほど。初老の半ばという年齢であるにも関わらず、バルドラスは軽々と走って行った。
「コウサカさんの顔・・・？」
そうナユキは呟くと、思い返してみる。出会って一週間も経っていないコウサカを。
――・・・まあ、いま起こっている事態が落ち着いたら手を貸そう。

いる。

――・・・俺は女神を探しに、いや多分助けに行こうと思って

――小競り合い？　魔族が襲撃して来ているのか？

――ちょうど小物だし、何か買ってやる。

そんな何の脈絡もない言葉がナユキの頭を過ぎって行く。よく考えればコウサカは自分の知らないところで、命を懸けている。自分の手を汚しながらもナユキを気遣う。

そして、もし戦うならコウサカが纏うような雰囲気を身につけないといけないなら、自分にはまず不可能だと思う。

「・・・よしっ」

まずはコウサカを探そう、いまの自分なら援護くらいなら出来る。そう思いナユキは北門へと足を向けた。

マスダンジョンからダンバートンまでは数ｋｍ離れている。故に、ハンター達は敵の到着の前に態勢を整えることできる。だが、ダンバートンの城郭の外にも人々の家があるため、最も安全で確実な籠城という手は本当に最終手段としてしか使うことができない。勝手に居付いた者達なのだから別に破壊されても文句は言えないのだが、浮浪者ではなく今では本当のダンバートンの住民であるため、これも危険を承知で守るというレザルドの言葉に誰一人、異を唱える者はいなかった。

レザルドからの作戦概要が終わると、バルドラスが大音声を響かせた。

「ってぇわけだっ！　くそ面倒くせぇぜ、全くよぉっ！　だが、あれもひっくるめてオレ達の街だっ！　久々に死ぬ気の戦だ！　やる

ぞ、てめぇらっ！！！」

――――おおおおおおおおおおおおおおおおっーッ！！

バルドラスの言葉に地響きにも似た蛮声（ばんせい）が上がる。手に手に自らの武器を、それを天に掲げていた。

眼前には、最前列には数ｍはあるロックゴーレムが横一列になり、その少し後ろには約三百からなるポウォールの軍勢が迫っていた。

ナユキは走っていた。

無人だった厩舎（きゅうしゃ）からちょっと一頭の馬を「借りて」、ラビダンジョンへの道を走っていた。何故、自分が馬に乗れたのか、何故ラビダンジョンに当たりを付けたのか。全ては「何となく分かったから」である。

（コウサカさんっ・・・）

何故かと言う疑問はナユキの頭の中にはなかった。それは何かに導かれている様。

そうして走っていると古ぼけて所々が崩れたダンジョンの入り口が見えた。そして、コウサカがちょうど出てくるところだった。

「コウサカさんっ！」

馬に乗りながらナユキは大声を出す。それにコウサカの足が止まり、ナユキを見た。

「君、馬に乗れたのか」

コウサカの前で馬を止めると、そんな言葉がナユキに投げられた。その時、東の方角より地響きに似た蛮声が流れてきた。その方角に顔を向けながらコウサカの目が細まる。何を悟ったようである。

「説明してくれ」

「マスダンジョンから魔族ですっ！　領主さん達はそれを・・・」

「宿に戻って、安全にしていてくれ」

最後まで聞かずにコウサカは東へと駆け出そうとする。それをナユキは慌てて引き止める。その目には光があった。
「わ、わたしも戦います！」
「味方を殺すことになる。止めておけ。恐らくすでに門は閉ざされただろうから、味方の後方で大人しくしていろ。冷静になれ」
噛んで含めるようにコウサカはナユキに言うと駆け出して行き、あっという間に姿が小さくなる。
「・・・味方を」
コウサカからまでもバルドラスと同じ言葉を言われ、ナユキは肩を落とす。そして、ふと我に返る。
「コウサカさんの言う通り・・・わたし、何を言って・・・」
ナユキは呆然としながらも、コウサカの言葉を思い出しダンバートンを目指した。

両軍はすでに衝突していた。距離が縮まるまではお互いに弓矢や魔法による応酬があったが、防盾（ぼうじゅん）で、またはマジックシールドで互いに防ぎ合ってほとんど効果はなかった。
「おわっとっ！？」
振り下ろされたゴーレムからの一撃を、横っ飛びして一人の青年が何とか避ける。
「うっひぇっ・・・あっぶねー」
腕の力を使って一気に飛び起き、とりあえずロックゴーレムから距離を置く。
「隊長ーっ！　いくら何でもキツイですってっ！」
ダンブレテン第一部隊、通称ガルドー隊に身を置くタクト・エーリスは隊長でありガーディアンナイツの一人であるガルドーに向かって弱音を吐いた。
タクトは、百七十一ｃｍの背に薄い朱色（しゅいろ）の瞳、歳は十七と若い。武器も標準的なブロードソードを好んで使う、これと言って特徴の

ない男だった。タンクトップの上から胴体部だけレザーメイルで覆い、皮のグローブにコンバットブーツと言う格好で、ショートの赤み掛かった髪を水色のバンダナでまとめた頭部から冷や汗がだらだらと流れていた。

「はっ！」

ガルドーが腕を振り下ろしたことにより出来た隙を逃さず、ロックゴーレムの横腹に両手で持った巨大な槌（つち）バトルハンマーによる一撃を加えて砕いた。重さ一トンはあるロックゴーレムがぐらりと傾くと横向きに倒れた。その隙に別のハンターがゴーレムの頭頂部に貼られた魔符を剥がす。魔符を剥がされたゴーレムはただの岩石へと戻った。

「やっと二体か」

ガルドーはふぅ、と一息吐くとバトルハンマーを肩に担いだ。

ガルドーはガーディアンナイツの中でも最古参で、バルドラスが武装キャラバンを率い始めた頃からの付き合いである。三十六歳。百九十ｃｍの背でバルドラスにも勝るとも劣らない強靭（きょうじん）な肉体に、刈上げた茶色の短髪をしている。兜はしておらず、所々プレートで覆われたレザーアーマー、灰色のガントレット、薄汚れた銀色のグリーブに身を包んでいた。

「弱音を吐くな、馬鹿者が」

周りでは他の者達が魔族側と斬り合い、または矢の応酬をし合い、それがマジックシールドによって防がれたり、十数人でようやくゴーレムと渡り合ったりと。そんな中、ガルドーは平然とタクトに言葉を返した。その目はただ爛爛（らんらん）と光っていた。

「ぅおらおらおらぁぁぁぁぁぁぁっー！！」

別のところでは、バルドラスが巨大な戦斧を振り回しながら暴れ回っていた。頑強（がんきょう）な鎧により、放たれた矢を易々と弾き、突撃して行った。ちなみに、魔法が付加されて強度が上がっているためまさに鉄壁である。かなり値が張るが。

「次だ。いくぞ」

ガルドーがまた別のロックゴーレムに向かって行く。タクトも息が上がったわけではなく緊張のため、ぜぇはぁ言いながらガルドーに続いた。

ガルドー隊は十六のロックゴーレムの相手を任されていた。理由は他の部隊より打撃力が高いためである。タクトのような標準的な軽装備なのは逆に珍しく、多くはガルドーの持つようなハンマーや戦斧、刃渡り百四十ｃｍほどのトゥハンドソードや刃渡り百五十ｃｍほどのクレイモアと言った重量のある装備をしていた。

「うひえぇ・・・」

情けない声を上げながらもタクトはロックゴーレムの前へと出る。ガルドー達のような攻撃の遅い者のためのオトリである。案の定、ロックゴーレムはただ近い者に攻撃してくるだけのようで、タクトを踏み潰そうと足を上げた。

「せはぁっ！」

ゴーレムが片足立ちになったところで、別のハンターが後ろから、地面に着いている片足に巨大なハンマーを叩き付けた。ゴーレムはそれでバランスを崩すと仰向けに倒れる。

「うおわっ！？」

危うくゴーレムからの倒れついでの踵落（かかと）としを避けると、タクトはゴーレムから魔符を剥がしているハンターに抗議の声を上げた。

「てめえ、危ないだろがっ！　もう少し避けるのが遅かったら、必殺確定踵落としで昇天するところだったわっ！！」

言葉を向けられたハンターはニヤリと笑って、片手を上げるとまた別のゴーレムへと向かって行った。

「ったく・・・」

頭を掻きながらタクトが立ち上がると、一角から悲鳴が上がった。ゴーレムと連携（れんけい）されないように他の部隊が分断していた魔族が、いつの間にかゴーレムの足元を固めていた。そこから弓矢を放ってきていた。

「うおっとっ・・・！？　こりゃ、まずいな・・・。他の奴等は何

やってんだ・・・」

放たれてきた矢を避けると、タクトは小さく愚痴った。よく見ると、他のゴーレムの周りにも魔族が集まっていた。それは突破されたのではなく、ただ単に敵の第二波が合流しただけであった。バルドラスと共に戦っている他隊は善戦してはいるが、ガルドー隊は徐々に押され始めて負傷する者も増えてきた。小回りの利く、または盾として使える武器を持っているものが少ないためである。そして、孤立させられていた。残りのゴーレムは十一体。その周りを固める魔族の数は六十と言ったところ。

「隊長～、どうすんですか？」

「どうするも何も戦え」

「いや～、いやいやいや・・・」

そんなことを言いながらタクトは一体のゴーレムに接近すると、周りの魔族が矢を放ってきた。予め予想していたタクトは横っ飛びで避けると、その後ろからガルドーがバトルハンマーを横薙ぎにするが、ロックゴーレムがそれに合わせて上から叩きつけるように腕を振り下ろした一撃で攻撃は無力化される。

「うりゃっ！」

ガルドーに取り巻きの魔族の注意が向いたのを見計らって、タクトは魔族に斬りかかった。だが弓をわざと盾として斬らせ、斬撃の威力を半減させられ深手を負わせることなくタクトは引いた。

「うわ～・・・マジでやばい・・・」

見れば他のガルドー隊の面々もじりじりと後退して来ていた。バルドラス達も気付いてはいるが、邪魔をされて来られなかった。

「って、何だありゃ？」

ロックゴーレムと魔族の包囲網の外、西の方角から何か人らしきモノが疾走して来ていた。それも常人離れした速度で。背中から金色に光輝くクレイモアと《おぼ》しき剣を抜いたかと思うと、四ｍはあるロックゴーレムより高く跳躍した。

「なんだそりゃぁ・・・？」

そのままロックゴーレムを真っ二つに叩き割った。そして、着地と同時にクレイモアを瞬く間に一周させ十の魔族を一撃で切り裂くと、再び飛び上がりその飛び上がった勢いそのままに、別のロックゴーレムを下からまた真っ二つに砕いた。砕いたロックゴーレムを踏み台に飛び上がると、また別のロックゴーレムを横から切り捨てる。空中で全身のバネを使って回転して体勢を整えると、着地しながらクレイモアを地面に叩きつける。その衝撃波で二十の魔族が吹き飛んで行った。

「た、隊長。なんすか、あのびっくり超人さんは・・・・」

冷や汗だらだらのタクトは唖然としながらも、ガルドーに聞いた。ガルドー自身も珍しく茫然としていた。

「お、恐らく、総隊長が言っていた精霊剣を持つミレンシアだろう・・・」

総隊長とは、武装キャラバン時代のバルドラスのことである。

十秒も掛からず三のロックゴーレムを倒された魔族側は、バルドラス達と戦っている自軍と合流するためじりじりと後退して行った。それだけの動きをしながらも息一つ乱していないその男は、下がる魔族を追いもせずに剣を肩に担ぐとガルドー達に向き直った。

「さて、無事か？」

何の緊張感もなくコウサカはそう言った。

―第九章―　ダンバートン北東平原攻防戦（後書き）

【お詫び】

本章内で説明されているライトニングボルトの発現原理ですが、筆者の知識に若干あやしいところがあるため間違っているかもしれません。申し訳ない。

―第十章―　新たな出会い

「隊長、ミレンシアって全部が全部あんなすか・・・？」
「・・・知るわけないだろう」
タクト、ガルドーも含めゴーレムと戦っていた者全てが茫然としていた。
戦場の、殺し合いの只中で平然と敵に背を向け、何の気負いもしていないかの声。その身に纏う気配は、何百の人間魔族が入り混じるこの場においてなお強烈。バルドラスも歴戦の戦士ゆえに、相対した時には威圧感を感じる。その男はそれ以上の威圧感を放ちながら、だが恐怖感を抱かせない不思議な雰囲気を纏っていた。殺気は希薄で、ロックゴーレムを倒した時にも何の気負いもなくただ斬ったという感じだった。透明に、気負いもなく、淡々と敵を圧倒したその姿に誰もが言葉を失った。この男に敵意を向けられたとしたら心中は如何ほどか。
ガルドー隊の無事を確認するとコウサカは追撃に向かった。バルドラス並みの重装備に関わらず、恐ろしく速い速度で。更に、魔法や飛んでくる矢は全て剣で切り裂くか弾くか避け切りながら。噂に聞くタラ王立騎士団の最精鋭も大層ふざけた強さだと聞くが、この男ほどではないだろう。
半ば唖然と、半ば憧憬の念を抱いていたタクトは、軽く頭を叩かれて我に返った。
「いくぞ。あれにばかりやられてはいい恥さらしだ」
バトルハンマーを肩に担いだガルドーが立っていた。他の者も、体に矢の刺さったまま、魔法に身体を焼かれたの者も居るが致命傷はそれぞれの防具で防いでいたのか、皆手に手に武器を持って立ち上がっていた。
「う、うすっ！」
タクトも立ち上がり後に続く。だが、その目はコウサカに釘付け

だった。
　疾走しながら、驚異的な動体視力と反射神経によってわずかに動くだけで紙一重に、最低限の動きだけで攻撃を避けるか弾き飛ばす。敵にとっては悪夢でも見ているようだろう。それは半ばパニック状態なり一部から全体に伝染していき、明らかに魔族側は及び腰になりマスダンジョンへと全体が下がり始めていた。残った八体のロックゴーレムを無策に時間稼ぎとして突撃させてきた。
「朔絆」
　コウサカがそう呟くように言うと、クレイモアからの光がさらに膨れ上がった。そして横に振り抜く。
「ぜぁぁっ！」
　一閃。それだけで無策に固まったまま突撃して来た八体のロックゴーレムが、クレイモアから放たれた光の波に飲まれて溶け去った。
「・・・」
　人間側も魔族側も、すでに誰一人戦っている者はいなかった。ただコウサカを茫然と見ていた。コウサカは幾分光の弱まったクレイモアを背中に戻し、バスタードソードとカイトシールドを構えた。
「・・・」
　そして、ただ無言に魔族側に向かい始めた。今度は凄まじい殺気をその身に纏いながら。それと同時、西の方角から大量の蹄の音が響き渡ってきた。その旗印に魔族側は勿論、人間側の誰もが驚愕した。
「タラ王立騎士団っ・・・！？」
　銀光煌くフルアーマー騎士団の掲げる旗印は確かに王都タラのもの。新たに迫るその神々しいまでの威容に、いよいよ魔族側は撤退を開始した。
「深追いすんじゃねぇっ！　怪我人の手当てしやがれ、馬鹿どもがぁぁっ！！」
　追撃しようとしたハンター達はバルドラスの怒声に身を縮ませると、怪我人の下へと走って行った。

タクトは何事もなかったかのように剣と盾を引っ込め、歩いてくるコウサカに駆け寄った。
「あ、あんた何モンすか・・・？」
するとコウサカはフェイスガードの中から、感情の読み取れない瞳をタクトに向けて言った。
「それは名前を聞いているのか？」
「え、あ、そ、そうすね・・・」
「コウサカだ」
「・・・」
タクトのコウサカへの第一印象は、凄まじく強くて格好良いが何か変な人、だった。

戦闘が、すぐに敵全てが逃げるという事態になったため、双方の被害は微々たるものだった。人間側には重傷者はいるが死人すらいなかった。
そこから少し離れた場所、バルドラスは怪我人の手当てに走り回るハンター達を見ながら、新たに現れた騎士団の下へと向かう途上、副官のレザルドに声をかけた。
「ありゃ、お前の差し金か？」
「魔族の行なって来ていたのは威力偵察でしたから。そのうち来るのは予想していました。なので、独断ですがタラに要請しておきました」
威力偵察とは、部隊を展開して小規模な攻撃を行うことによって敵情を知る偵察行動のことである。レザルドは襲撃の規模、撤退に移るまでのタイミング、そこから得られる情報だけで威力偵察だと断定してタラへと要請を送ったのである。さらに越権（えっけん）行為の独断であるからバルドラスにも迷惑が掛からない。さすがと言える観察眼である。
「間違っていやがったらどうする気だった？」

「全責任を取って、如何様にも」
その言葉に嘘偽りは微塵も感じられない。間違っていた場合、自分の首だとしても本当に差し出すだろう。
「おいおい・・・お前がいなくなっとオレのやる仕事が増えるじゃねぇか」
「そこですか」
「へっ」
「ふっ」
二人は互いに笑みを浮かべると、いまはマスダンジョンに向かって展開している騎士団の下へと着いた。隊長格だろう者達が兜を脇に抱えながら立っていた。全員が銀色のクラウスナイトアーマーというプレート鎧一式に身を包み、隊長格ゆえか紺色のマントをその背に羽織っていた。
一人だけ黒いマントを羽織った騎士が進み出る。バルドラスよりも年上だろうその顔にはしわが刻まれていて結構な歳であることはわかるが、その肉体はがっしりと引き締まっている。眼光、雰囲気から騎士団長かとバルドラスが声をかける。と、ふと鎧に描かれているエンブレムを見て、目を細めた。
「オグマ騎士団か。てめぇが団長か？」
「レオナルド・フューードです」
無愛想にそう言うとレオナルドは敬礼をした。
オグマ騎士団は、十数万を数えるタラ王立騎士団の中でも最強と呼ばれる騎士団である。一人ひとりが体格の恵まれ精強な肉体を持ち、剣だけではなく弓矢に簡単な魔法までも使いこなす。中でも接近戦に無類の強さを誇る。
エリンの現代戦は接近戦が主流である。それは遠距離から放たれた魔法や弓矢がマジックシールドにより威力のほとんどが殺がれる為である。万が一、マジックシールドが突破できたとしても威力の半減した魔法や弓矢では鎧を貫くことは出来ない。また速度も落ちているので避けられる可能性の方が高いのである。少し値が張るこ

とになるが装備に魔法を付加させ物理耐性・魔法耐性を上げることでさらに頑強にすることが出来、遠距離からの攻撃があまり意味を成さなくなったことも接近戦が主流となった要因のひとつであるが、何故か剣や戦斧、メイス、短剣とそう言った直接手に持って攻撃する物は魔法耐性を無視することが出来るのが最大の要因であろう。直接持ってそれにより攻撃するため、持ち手の霊力だとか魔力だとか、そんなものがより強く乗るためらしい。

「二、三百ぽっちしかいねぇが。これで全部か？」

「より腕利きの者だけを引き抜いて連れてきました。数などそれほど問題にはなりません」

最強の中で更に最強というわけか、とバルドラスは挑戦的な笑みを浮かべた。

「大した自信だなぁ、おい。ひとまず副官連れて官庁へ来な。詰めるとこ詰めようぜ」

「了解しました」

レオナルドは副官らしき男を呼ぶと、残った隊長達に指示を下した。それを見たバルドラスは北門の方向に顎をしゃくると、歩き出す。レオナルドもその後に続いて行った。

一方その頃。

コウサカは未だ戦場となっていた北東の平原でタクトに捕まっていた。

「こ、コウサカ・・・さん・・・やっ・・・やっと見つけ・・・」

そんな時、コウサカの下には何故か息を切らしたナユキが走って来た。北東の平原には数百人が展開しているため探し回っていたのだろう。

「宿に帰ればそのうち会えたと思うが。それとも、今どうしても伝えておきたい用件でもあるのか？」

「・・・あ」

ナユキがポカンしたかと思うと、恥ずかしそうな表情を浮かべた。
「そ、そういえば・・・。あはは・・・」
そして、コウサカと一緒にいるタクトに気付いた。
「そちらの方は？」
「・・・っ！」
タクトは何故か雷に打たれたような表情をしていた。ナユキを凝視したまま瞬きすらしない。
「・・・？」
「どうかしたのか？」
以下、タクトの心中。
こ、これはっ・・・！　やばい・・・やばいぞ・・・これは、やばいっ！　か・・・かわ・・・可愛すぎるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーっ・・・！！　ああ・・・サラサラしていて触り心地の良さそうな絹糸のような金色の髪っ！　露出している華奢な白い肌っ！　ほわっとしたような表情っ！　綺麗な翡翠色の瞳っ！　ああ・・・ああ・・・天使っ！？　天使なのか！　オレは天使と会っているのかっ・・・！？　この子、ストライクだぜっ！　どストライク過ぎるぜぇぇぇぇぇーっ・・・！！　これはも以下略。
「あ、あの・・・大丈夫、ですか？」
目を血ばらせてすごい顔になっているタクトを心配してナユキが声をかけた。身長差があるため上目遣い気味に、しかもタクトの様子が怖いため少しビクビクしながら。トドメである。タクトから阿呆な意味でヤバい気配が溢れ出てきた。
「天使様っ！」
「ひゃっ・・・！」
「お、オレを・・・オレをおおおおおおおーっ・・・！」
今にも掴み掛かりそうな、襲い掛かりそうなそんな気迫。コウサカは一瞬で腰を落とすと、腰に戻したバスタードソードの柄に一秒掛からず手をかけた。だが、その時。
「死ねっ！！」

「げぶはぁっ！？」
いきなり真横から、ものすごい勢いの付いた飛び蹴りを喰らってタクトがぶっ飛んだ。遠くまで転がっていくと倒れたままピクリともしなくなった。
「・・・」
「あ、あぅわぅわぅぅ・・・」
コウサカは状況がさっぱり分からず珍しく呆気に取られたような表情で、ナユキはすっかり怯えて泣きそうな顔をしながらコウサカにしがみ付いていた。と、タクトに必殺の蹴りを見舞った少女がコウサカに目を向けた。
「・・・物騒だから手を退けてくれる？」
「あ、ああ・・・すまない」
思い出してコウサカは剣の柄から手を離した。この少女が飛び込んで来なかったら、もしかしたらタクトは打撲よりももっと酷いことになっていかもしれない。コウサカは条件反射のような速度で動いていたからである。
「君は？」
「・・・カグヤ。カグヤ・エーリス。あそこの馬鹿と同じガルドー隊所属」
「エーリス・・・？」
ついさっきタクトからも聞いた。そこで思い至る。
「タクトの妹か？」
「すっっっごく不愉快だけど、そう」
本当に心底嫌そうにカグヤは吐き捨てた。
カグヤは解けば背中に掛かるだろう蜂蜜色（はちみついろ）の髪をツインテールにして、つり目気味な黄赤色（きあかいろ）の瞳をしている。十六歳で百六十二ｃｍの身体を空色を基調としたノースリーブ・半ズボンのトークハンタースーツという服に、青いグローブ、薄い水色のブーツに身を包んでいた。
スリーサイズはＢ７９・Ｗ５８・Ｈ８０くらい。

「・・・っ！」

その時、タクトがガバァッと起き上がった。それにナユキがビクリとしてコウサカの背に隠れた。

「カァグヤっ！　てめぇ、もう少しでホンモノの天使が迎えに来るところだったわっ！！」

数mはぶっ飛んだという割には、平然とタクトは起き上がって来た。ズンズンと肩を怒らせながら歩いて来るとカグヤに喰って掛かった。

「うっさい、死ねっ！」

「兄に向かって死ねとは何だっ！？」

「このヘタレナンパバカっ！」

「ヘタレなのは認めるが、バカじゃねぇっ！」

論点そこですか。とりあえず、コウサカは面倒事に巻き込まれるだろうから、ナユキを促してその場を離れることにした。

「あ、あっ！　待った、待ったコウサカさんっ！」

「・・・」

ナユキだけは帰してやろうとコウサカはナユキの背を押した。それにナユキは心配そうにコウサカとタクトを交互に見た。

「いいから」

「は、はい・・・すみません」

ナユキは小走りで北門へと向かって行った。コウサカはタクトへと向き直る。タクトが何か言う前にコウサカが先に口を開いた。

「その子に礼を言っておけ」

「え、はい？　な、なんですか？」

ポン、とコウサカは腰のバスタードソードの柄に手を置く。

「もう少しその子が飛び込んで来るのが遅かったら、斬っていたかもしれない」

「・・・っ！」

何を冗談を、とタクトは言おうとしたがコウサカが表情ひとつ変えずに言っていることに、あと先ほどの戦闘の凄まじさを思い出し

て真っ青になった。
「ま、マジか・・・。サンキュ、カグヤ・・・」
「そんなヤバい状況だったんだ・・・」
タクト、カグヤは言葉を失った。それぞれ青い顔でいると、コウサカの声で我に返った。
「ところで。なかなかの蹴りだったが、大丈夫なのか？」
「・・・あ」
それで痛みに気付いてしまったのか、タクトは蹴られたわき腹を押さえて地面を転がり身悶え始めた。
「痛い痛い痛い痛い痛いいいいいいいいいっ！！　し、死ぬっ！？　死ぬ死ぬっ！！　痛ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇーっ！！」
本気で痛がりゴロゴロその辺を転げ回っていた。そんなタクトを見て、コウサカはカグヤに目を向けた。
「やり過ぎだと思うが」
「・・・ふんっ。いいのよ、こんな奴」
何か朔絆に似ているな、と思いながらコウサカは思う。ふと、とあることを思い付いてタクトに声をかけた。
「一瞬で終わる激痛と、じわじわずっと続くそれなりの激痛。どちらがマシだ？」
「一瞬の方がマシに決まって・・・痛ててててててっ！」
「そうか」
そう言うと、コウサカは目にも留まらない速さで転げ回っているタクトの首の後ろ、延髄に狙い済ました手刀で無慈悲な一撃を叩き込んだ。タクトはゼンマイの切れた人形のようにガクリとした。
「・・・」
ぐったりして静かになったタクトを片腕だけで軽々持ち上げると、コウサカは肩に担いだ。
「君は怪我は？」
「な、ないないっ！」
あると答えたらタクトのようになると勘違いしたカグヤは、ブン

ブン首を振って否定した。ツインテールが頭を振るたびに、前後に振れた。
「そうか」
それだけ言うと、コウサカはダンバートンの病院を目指して歩いて行った。
「何なの、あの人・・・」
実はカグヤも先ほどのコウサカの働きは見ていた。タクトと同じようにコウサカの下へ行ったら、タクトが暴走していたので必殺蹴りをかましただけである。
カグヤのコウサカへの第一印象は、凄まじく強くて格好良いが何か怖い人、だった。

官庁、領主執務室。
バルドラスとレザルドの前には、レオナルド団長とその副官が立っていた。
「・・・はあ？　随分（ずいぶん）と気前良く出しやがると思ったが、そんなことかよ」
「バンホールは、ある意味このダンバートンよりも重要なのです」
レオナルドは顔色一つ変えずにそう言い切った。その意味は分かっているが、バルドラスは苦虫を噛み潰したような顔になった。
鉱山都市バンホール。ウルラ大陸で取れる鉱石の実に六割がそこで取れる大鉱山である。だが、地質はとても乾燥しているため植物が育たず、さらに飲み水すら足りないほど水が不足しており、鉱山の坑道からくみ上げた水を再利用して鉄の製錬に使っているほどである。昔に火事があり、学校や教会などが焼失した。
また、この大鉱山はバリダンジョンとも呼ばれている。ウルラ大陸で一番、魔族出現率が高いダンジョンである。それは昔から無数に坑道が掘られ、一度は過去の大戦で地下要塞ラフとして使用されたことに関係がある。無数の坑道はもはや全体の把握が不可能なほ

ど広がっており魔族達の恰好(かっこう)の隠れ家、または拠点とされてしまっている。だが、バンホールの鉱山が使えなくなると王国全体が傾く事態に成りかねない為、王都タラから二個騎士団、約二千人以上の騎士が派遣され常駐(じょうちゅう)している。鉱山労働者と共に鉱山に入り護衛をし、または入り口を監視している。

元々バンホールには鉱石とそれから作られる装備以外は何も無い。だが無くなっては困る。それゆえに、騎士団の他に物資援助の輸送隊を編成して定期的に援助をしているが、ウルラ大陸の南東端という位置にあるせいもあって難しく、手間暇も掛かる。エイリフ王国にとって城塞都市タルティーンと同レベルの重要度と頭痛の種である。

「ダンバートンもバンホールからの鉱石や装備の輸送で、一部利益を上げていますからね」

レザルドは事実を端的に言う。バンホールは鉱石だけではなく装備もすごいのである。バンホールにいるウルラ大陸随一の名工が鍛えた剣や鎧は取引価格が高く、だが需要が高いためその輸送を担っているダンバートンの収入源のひとつとなっている。

「言わねぇでもわかってるよ・・・ったく」

バルドラスは兜を外した頭を掻いた。そして、目を細める。

「だが、しばらくはここにいてもらうぞ。うちの奴等をタルティーンに持って行ったのはタラだからな」

「承知しています」

「とりあえず、詰め終わったからもういいぞ」

レオナルドと副官は、膝を着いて最敬礼をすると退出して行った。

「・・・はあ、やれやれだぜ」

溜息を吐くとバルドラスは鎧を脱ぎ捨ててアンバーウェア姿になると、領主用の特別製の椅子にドカリと座った。

「そういや、あの坊主。やっぱりこっちに引き入れねぇてぇな。お前、何か良い案でもねぇか？」

「顔見知りのハンターを見つけて、当たってみましょう」

「おう、頼むわ」
一礼するとレザルドは退出していく。
「まさかあんなに強ぇたぁなぁ・・・」
残ったバルドラスは改めてコウサカの実力に感服すると、深々と溜息を吐いた。

その日の夜。
アリアンロッドの酒場。コウサカは相変わらず、上半身だけ鎧を脱いで酒場の卓のひとつに着いて夕食を食べていた。装備は朔絆のクレイモアだけを卓に立て掛けてある。
「うおっ!?　そ、それを一気飲みすか・・・」
「ホント、キミってよく分からないわね・・・」
「・・・」
何故かタクトとカグヤ、おまけにアルシアがいた。いまコウサカはアルコール度数四十～五十％と言われる透明な茶色のウィスキーをストレートのままショットグラスを傾け一息で飲み干した。タクトとアルシアはわざと勧めたのだが、平気な顔をして飲むため度肝を抜かれたようである。
コウサカはそれぞれの顔を見渡すと。
「何故ここにいる」
当然の質問をした。
コウサカがいつものように宿に戻って夕食を取っていると、三人が何故か現れたのである。結局、そのまま一緒に食事をすることになった。
「・・・領主様から頼まれたからだよ」
一人面白くも無さそうに料理を食べていたカグヤが、面倒くさそうに答えた。
「ふむ。ところで、君。食べ終わったら帰ると良い」
「え?」

コウサカが唐突に何の脈絡もない言葉を言ったため、カグヤを含めタクトもアルシアも目を瞬いた。
「恐らくは、そこの二人だけで話は事足りるだろう。領主様の命令でここに来たのなら経費で食事代も落ちるだろう。好きなだけ飲み食いして仕事など兄に押し付けてしまえ」
「えっ、ちょっ！」
タクトが慌てて割り込んできた。アルシアは何となく話の流れに気付いて、面白そうな顔になった。
「そりゃないっすよっ！　オレだって遊びたいっ！」
「思うに。君らは仲が悪いのだろう？　しかも主に兄が妹に苦労を掛けている」
「そ、それは・・・」「そうなのっ！」
タクトが言葉を詰まらせたところで、カグヤが目を輝かせて身を乗り出した。
「こいつ、いっつも怠けてばかりでっ！　家事とか全部あたしがやってんのっ！　話が分かるぅっ！」
誰もそんな話は最初からしていないが、積もりに積もっていたのだろう。理解してくれそうなコウサカにカグヤの留め金が外れた。
「ハンターとしては隊長もなかなかって言っているけど、そうやって甘やかすから付け上がってっ！　戦闘頑張るから日常はだらけることにした、ってこの馬鹿っ！」
「ち、ちょっと待て・・・待てカグヤ」
びしりとカグヤから指を突きつけられたタクトは、止めに入る。
「うっさい、この役立たずっ！　あたしの苦労も知らないでっ！！」
「ちょっ、ならお前もオレの苦労知ってんのか!?　今日だって一番前でオトリやってたんだぞっ！」
「なら、いっぺん毎日苦労してみろっ！」
ぎゃーすか、ぎゃーすか。そんな二人の兄妹喧嘩を周りの客もニヤニヤしながら見物していた。
「ところで、アルシアさん。来た理由はなんですか？」

コウサカはと言うと、表情すら変えずにアルシアに声をかけていた。二人の相手は諦めたようである。
「キミって、ホントに色々すごいわね・・・」
アルシアは頬杖を着きながら呆れ顔でコウサカを見た。片手には麦酒の入ったジョッキを持っていた。
「ところで、なんでカグちゃんの肩持ったの？」
「さあ、それがよく分からないのです。何故かあの子の肩を持とうと思ったで」
「あ、もしかして。カグちゃん気に入っちゃったかしら？　ふふふ・・・」
意地悪な笑みを浮かべながらアルシアはコウサカに言う。
「？　気に入るとは？」
「ああ、ごめん・・・。キミ、全然興味出さなかったよね」
「？」
首を捻って思案顔になったコウサカに、アルシアは溜息を吐いた。そして、隣ではまだ口喧嘩をしている兄弟を見てまた溜息を吐いた。その後に、コウサカの問いに答えた。
「領主様に、キミをギルドに引き入れてくれって頼まれたの。まあ、あんな動きを見れば気持ちも分かるけど・・・」
昼のことを思い出し、他人事だがアルシアは少し嬉しそうに言った。
「それに関しては、今のところＮＯです。とりあえず今回の件が終わるまでは、俺はどこにも付きません」
「今回の件・・・？　それって、どういう・・・」
コウサカの言葉に疑問を浮かべたアルシアが何か言おうとしたところで、タクトとカグヤがコウサカの方をものすごい勢いで振り向いた。
「「どっちが悪いっ！？」」
アルシアが引くほどの形相だったが、コウサカは平然と視線を受け止めた。

「タクトだ」
「よっし！」
コウサカがそう言うとカグヤがガッツポーズを取った。コウサカは肩を落としているタクトに声をかけた。
「この子は良い子だ」
「「「？」」」
アルシアも含め、三人とも頭の上に？が浮かんだ。コウサカの顔には珍しく感情が浮かび上がっていた。
「何が不満だ？」
「え、いや・・・」
強い視線をタクトへとコウサカは向けた。
「甘えているだけだ。その子はお前を心底嫌っているわけではないだろう。むしろ、好きだと思う」
「ちょっ！？」
カグヤがコウサカを止めようとするが、強い視線で睨まれて黙った。
「馬鹿をやり合える兄を想っているからこそ、文句は言っても家事をやってくれるのだろう」
「す、ストップ、ストップっ！」
今度こそカグヤがコウサカを止めると、唐突にコウサカがカグヤの頭に手を置いて優しく撫でた。
「へぁ・・え、ちょ・・・」
カグヤは顔を赤くして、しかし気持ち良さそうに目を細めた。
「お前は気付かずに、こんな良い子を悲しませるつもりか？　だとしたら」
次の言葉に、酒場にいた全員が怖気（おぞけ）に身を震わせた。
「殺す」
「・・・っ！」
コウサカの全身から殺気が溢れ出て来て、その場を支配した。そして、ゆっくりと立ち上がる。

「答えられないなら殺す」
「っ・・・！　い、いや何にっ・・・？」
殺気をモロに向けられたタクトは、その場から動けなくなっていた。その時。
『こんの、バカっ！！！』
実体化した朔絆は、コウサカにものすごい勢いで、人体急所のひとつである眉間に滑空(かっくう)ドロップキックを見舞った。
「・・・っ！？　・・・っ！」
コウサカが眉間を押さえて動きが止まると、殺気も消えた。朔絆は完全実体化して腰に手を当ててコウサカの前に仁王立(におうだ)ちした。
『・・・目ぇ覚めた？』
朔絆の声を底冷えするほど冷たかった。またその視線も。
「え、まさか・・・酔ってたの？　・・・あ」
アルシアはそう言うとあの物を見て固まった。ウィスキーのボルトがいつの間にか空になっていたのである。
「痛ぅー、つつつ・・・何をする朔絆」
『バーカっ！　バーカ、バーカっ！！』
軽く頭を振りながらコウサカは朔絆を見ると、ものすごく怒っていた。
「？　何で怒っているんだ？」
その言葉を聞いたその場にいた全員が思ったことはこうである。
（（（こいつ覚えてねぇっ！！））））
とりあえず、コウサカに酒は飲ませないようにしようとアルシア達三人は強く決意した。朔絆から自分が酔っていたことを聞くとコウサカは、なるほど、という顔をした。
「タクト」
「は、はひっ！」
コウサカがタクトに声をかけると、ビクリとタクトが飛び上がった。
「だいぶ途切れ途切れではあるが、一応は覚えている。妹を大事に

してやれ」
いつも通りの感じに戻っているが、それでもコウサカの声には感情がこもっていた。
「は、はいっ・・・！」
タクトは思わずそう答えると、はっとしてカグヤを見た。カグヤは少し恥ずかしそうに俯いていた。
「な、なに言ってんの。・・・ば、馬鹿じゃない」
それを見て、タクトの表情が真剣味を帯びた。
「コウサカさんの言う通りっす。オレ甘えてたんすね・・・」
タクトは一度目を伏せると、カグヤを見た。
「悪かった。オレも意地になってた」
「え、えっと・・・」
カグヤは目を右往左往させると、赤くなって俯いた。それに笑みを浮かべると、タクトはコウサカに目を向けた。
『あんたはバカ！　バカすぎっ！　このバカっ！！』
その場に正座させられ、ものすごいバカバカ言われていた。そこで、あれとタクトは思う。
「あの子誰？」
剣の精霊など一般人が知る由（よし）もない。その疑問に、小さな女の子に正座させられ説教されているという、果てしなく情けないコウサカの姿を笑っていたアルシアが答えた。
「あそこの剣に宿っている精霊。名前は朔絆ちゃん」
「精霊・・・？」
タクトは朔絆をまじまじと見つめた。その視線に気付いた、殺気すらこもってそうな目で朔絆に睨まれたためすぐに目を逸らしたが。
「精霊って、あんなに生き生きしてるんすね・・・」
「他に見たことが無いから知らないけど。朔絆ちゃんの場合、理由があるからかしらね・・・」
「え、なんすかそれ？」
「ひ・み・つ」

悪戯っぽい笑みを浮かべると、アルシアはウインクをした。それにタクトは顔を赤らめて目を逸らす。それを見て、アルシアは溜息を吐いた。
「はぁ・・・」
「どうしたんすか？」
「まあ、ちょっとね・・・。ミレンシア君、私を見ても何の反応もしなかったことを思い出して」
「？　反応って？」
「例えば、これのチラ見とか」
そう言ってアルシアは自分の豊かな胸を示す。タクトはその胸に釘付けとなった。
「痛ててっ！」
すぐにカグヤがタクトの耳を引っ張って視線を逸らしたが。それにアルシアは小さく笑う。
「くす・・。まあ、普通はそういう反応よね」
「何の話ですか？」
声がして振り向くと、コウサカがいつの間にか立っていた。隣にはむすっ、とした顔の朔絆が並んでいた。
「あら、もうお説教は終わったのかしら？」
アルシアがからかうようにそう言うと。
「・・・こいつバカだから」
朔絆が不満な顔で返した。バカというか、無意識的にやっているせいで自覚がないため言っても無駄だということだろう。そこでアルシアは何か思いついて朔絆に声をかけた。
「ね、朔絆ちゃん。ちょっとミレンシア君を試していいかしら？」
「何する気？」
アルシアは朔絆を招き寄せると、何かを耳打ちした。それに朔絆は少し呆れたような顔になった。
「別にいいけど・・・」
「そ。ならよかった」

そう言うとアルシアはコウサカに声をかける。
「ねえ、ミレンシア君。正直に答えてくれる？」
「何ですか？」
「私のこと、どう思う？」
「良い人です」
少し甘えたような声で言ったはずが、コウサカは全く気付かなかった。それにアルシアは肩透かしを喰らった様な顔になった。朔絆がやっぱり、という表情を浮かべている。
「えーと、そうじゃなくて・・・異性としてどう思っているかしら？」
『ちょっ・・・！』
朔絆に言ったこととは違うことを言ったのだろう。途中で朔絆が止めようとしたが、間に合わなかった。
「とても綺麗な女性（ひと）です」
コウサカはコウサカで表情も変えずに大真面目に言う。コウサカの馬鹿正直な性格を知っているアルシアは、本気で言われていると気付くと赤くなった。
「あ、あら・・・えっと、ありがと」
「いえ」
「・・・」
「・・・」
何となく気まずく（コウサカを除く）、誰も声を出せなかった。
そこで朔絆がアルシアに噛み付いた。
『ちょっとっ！　なんてこと聞いてんのっ！！』
「あら、そろそろ帰らないと。じゃ、またね～っ」
アルシアは素早く酒場を出て行った。それを追おうとする朔絆をコウサカが止めた。
『待てぇいっ！』
「何をしている朔絆」
『あんたもあんたっ！　何言っちゃってんのっ！？』

「？　何のことだ？」
『がーっ！』
そう叫ぶと朔絆はコウサカの胸部と腹部の中間あたりをポカポカと殴り始めた。背が百四十四ｃｍ程度しかないため、そこまでしか届かないのである。
「よく見ると可愛い・・・」
タクトは険が消えて悔しそうな顔の朔絆を見て、そう呟いた。そこでカグヤが耳打ちした。
「手を出したらコウサカさんに殺されるかもよ？」
「・・・っ！」
ついさっきの殺気を思い出して、タクトはガタガタ震え始めた。カグヤはそれに苦笑すると、ふとコウサカが手を置いた自分の頭を触った。
「・・・」
「そういえば、コウサカさん」
タクトが姿勢を正してコウサカに声をかけた。
「どうした？」
コウサカは朔絆をなだめながら、顔だけでタクトを振り返った。
「領主様からギルドの勧誘を・・・」
「さっきアルシアさんに伝えた。今のところはＮＯだ」
タクトの言葉の途中でコウサカは答えを言った。タクトは、あれという顔になる。
「いつの間に？」
「君らが兄妹喧嘩をしている時に」
「あ、あ～・・・」
タクトは気まずそうに目を逸らした。コウサカはカグヤを見た。
「さて、あとは適当に飲み食いして帰るといい」
「あ、う、うん・・・」
何故か口ごもるカグヤは気にも留めず、コウサカは朔絆の頭に手を置くとクレイモアを手に取って二階の自室へ向かおうとした。そ

れをタクトが引き止めた。
「あ、ところで。天使・・・じゃなかった、コウサカさんと一緒にいた女の子の名前はなんて言うんすか?」
「ナユキのことか?」
「ナユキ・・・ああ、名前もいい・・・。会えないですかね?」
期待に目を輝かせるタクトだったが。
「怖がられるだけだろうから、止めておけ」
その場にガックリと崩れ落ちた。

―第十章―　新たな出会い（後書き）

【補足】

本章内で登場する『オグマ』騎士団の由来は、ケルト神話の戦いの神、または言語、霊感の神とされるオグマ（Ｏｇｍａ）からです。

―第十一章―　落ち着けた日常

タクトがガックリと崩れ落ちて白くなった翌日の朝。
「ナユキ、起きているか？」
コウサカはいつものアンダーウェアのまま装備は何も持たずにナユキの部屋の扉をノックした。朔絆（さき）はベッドで寝るのが気に入ってしまったのか、いまも大の字でベッドを占領している。迷惑この上ない。ゆえに、クレイモアは持って来られなかった。
「ナユキ？」
もう一度、少し強めにノックする。女神のペンダントを渡し忘れていたのを思い出して、コウサカはナユキに渡しに来たのである。まだ朝六時頃とかなり早い時間だが。ちなみにナユキの行く学校は九時から。
「ふぁ～い・・・」
コウサカが出直すかと思った時、部屋の中から半分寝てそうな声が返ってきた。そして、丸衿（まるえり）に長袖でピンクがかったレディースパジャマを着たナユキが、袖口（そでぐち）で目元を擦りながら出てきた。
「はにゃ～・・・」
「・・・」
意味の分からない擬音（ぎおん）らしいことを口にしながら、半分寝ているようにほわほわしているナユキにコウサカは、どうしたものか、と珍しく言葉を失って困った。
「・・・ナユキ起きろ」
コウサカはとりあえず、ナユキの肩を軽く揺すってみた。
「せかいがぐらぐら～・・・」
「・・・」
こんな子だったか・・・？　とコウサカは本気で困った。朔絆を連れて来なかったことを後悔した。こういう場合の対処法がさっぱり分からないのである。

そういえば、とコウサカは思い出す。昨日、酒に酔った自分は朔絆の蹴りで意識が戻った。ある程度の衝撃、または痛みを与えれば完全に覚醒するのでは？　と考え至った。
「ナユキ、すまん・・・」
「ぁにゃっ・・・」
コウサカはナユキにデコピンした。少し強めに。バチン、という音ともにナユキが自分の額を両手で押さえた。
「痛ったぁ～・・・。あ、あれ？　あ、コウサカさん」
「・・・はぁぁ」
どうにかこうにか完全に起きてくれたナユキに、コウサカは久しぶりに心の底から溜息を吐いた。
「え、なんでコウサカさんが？　あれ、なんでおでこ痛いの？　あれ、あれ・・・」
ナユキは混乱しているようだった。起きていきなり目の前に知った顔があれば、それは誰でも驚くだろう。
「いや、いい・・・。気にするな・・・別に悪いことがあったわけではない」
「？」
しきりに頭の上に？マークを浮かばせているナユキを見て、コウサカは片手で顔を掴むように覆うとまた溜息を吐いた。
「いや、気にしなくていい・・・。はあ、とりあえずだ。手を出してくれ」
「？　こうですか？」
両手を横に並べるようにナユキは手を前に出す。コウサカはその上にペンダントを置いてやる。
「これは？」
「俺もよくわからない。女神から君に渡すように頼まれた」
「っ！？　会ったんですかっ、女神様と！？」
目を丸くして驚いたナユキは、コウサカに詰め寄った。
「夢でだがな。君が見るにはかなり辛い内容だったから、わざわざ

俺に見せたのだと思う」
「辛い内容、ですか・・・？」
「・・・すまない。聞かないでおいてくれ」
珍しく、コウサカが苦渋を浮かべていることを見て取ると、ナユキは申し訳無さそうな表情を浮かべた。
「すみません・・・、行きたいって言ったのはわたしなのに・・・」
「君は気にしなくて良い。それに恐らくは・・・」
「・・・？」
ナユキには一瞬だが、コウサカが自嘲したように見えた。
「いや。それよりも、君は朝弱いのか？」
「え、何でわかるんですか？」
「・・・やっぱりか」
「？」
コウサカが珍しく疲れたような溜息を吐いたことに、ナユキは首を傾げた。知らぬが仏という言葉もある。この場合、少し意味が違うが。
「いや、何でもない。とりあえず、遅れないようにな」
「あ、はい」
「邪魔した」
そう言ってコウサカは自室へと帰って行った。少しだけ疲れた様子で。
「？」
それにもうひとつ首を傾げると、ナユキはペンダントに目を移す。
「・・・」
そして、それを大事そうに両手のひらに包んだ。
その後、自分が薄手のパジャマでコウサカとずっと話していたことに気付いて赤くなった。
「おはようございますっ！」

『帰れ』
「ひどっ！？」
ナユキが学校へ行って少し経った頃、コウサカの自室の扉がノックされた。開いている、とコウサカが言うとタクトが現れた。コウサカが何か言う前に、朔絆が冷たく言い放つ。
「本当に来たか」
いつものように壁に背を預けたままコウサカがそう言う。朔絆は相変わらずベッドを占領していた。その光景にタクトが目を丸くして驚いた。
「・・・え？　い、一緒の部屋で寝てるんすか・・・？」
「？　そうだが」
「へ、へー・・・」
客観的に見ると。一、若い男と女の子が同じ部屋で寝泊りしている。二、乱れたベッドの上で女の子がとんび座りしている。三、コウサカは腕を組んで壁に背を預けているという格好良い体勢。四、朔絆の視線が明らかに邪魔者が来たという容赦ないものである。五、コウサカは格好良い。
「う、羨ま・・・」
『あ〝・・・？』
ビキッ、と音が聞こえて来そうなほど朔絆の顔が変わった。虎どころかドラゴンすら射殺すほどのそんな形相（ぎょうそう）。
「朔絆、お前なんて顔をしている・・・」
思わずコウサカすら引くほどの。
「こ、コウサカさん、ちょっと・・・」
朔絆が怖すぎて動けなくなったタクトがコウサカを呼んだ。コウサカはひとつ溜息を吐くと、わざわざタクトと朔絆の間に入ってやった。
「・・・なんだ？」
「ち、ちょっとお耳を・・・」
珍しく。本当に珍しく面倒くさいという雰囲気を出しているコウ

サカは、タクトに耳を近づけた。朔絆から殺気すら感じられるようになった頃。

「・・・なんで俺がそんなことを」

「お、お願いします・・・、このままじゃオレ殺されかねないっす」

コウサカはひとつ溜息を吐くと、朔絆に向き直り視線の高さを合わした。

『・・・なにさ』

ものすごく不機嫌な朔絆がコウサカを睨む。そして、コウサカがどう間違ったとしてもまず言わないことを口にした。

「そんな顔では、可愛い顔が台無しだ」

『・・・へ？』

「いや、だからそんな顔では・・・」

『えぇえええええええええっ！？』

朔絆が飛び上がった。その顔は茹(ゆだ)ったタコよりも真っ赤だった。

『なっ、ななななにいってんのっ！？　ふぇ、なんでっ！？　なにがあったのっ！？』

ものすごく取り乱していた。頭の上に？を浮かべるコウサカにタクトがまた何かを耳打ちする。首を捻りながらもタクトがうるさいため、コウサカは続ける。

「赤くなると可愛いな」

『あ・・・あう・・・あぅぅ・・・』

朔絆の頭から湯気が立ち上っているのが幻視できるほど、真っ赤になった朔絆は。

『うきゅぅ～っ・・・！』

ポテリッ、と目を回してベッドの上に倒れこんでしまった。それを見たコウサカは、珍しく信じられないという表情を浮かべて驚いた。

「お、おい朔絆っ！」

慌ててコウサカは朔絆を抱え上げる。

『え・・・えへへへ・・・可愛い・・・可愛いって・・・へ、へへ・

・・』

何かそんなことをボソボソ朔絆は言っていた。呆然としたような表情になったコウサカは、朔絆を抱えたままタクトを振り返った。

「な、何が起こった・・・」

「いや、いやいやいや・・・むしろ理解できない方がおかしいっす・・・」

タクトがものすごい顔で呆れていた。そして、どこか羨ましそうにしていた。

「？　どういうことだ？」

「天は二物を与えず、ってことっすね・・・」

どこか自嘲するように、何か悟ったようにタクトは笑った。そして。

「イケメンの馬鹿野郎おおおおおおおおおおっ！」

「うっさいっ！」

「へぶっ！？」

後ろから見事な延髄蹴りを喰らったタクトは、白目を剥いて割とヤバい顔をしながら倒れた。

「ったく・・・」

「カグヤか？　君は来るとは言っていなかったはずだが」

「そこの馬鹿だけじゃ心配だから・・・。その、おはよう・・・コウ」

「ああ、おはよう」

カグヤが何故コウサカを「コウ」と呼んでいるかと言うと。昨日、コウサカの名前を言い辛そうにしていたため好きに呼べば良いと言った所、カグヤはそう呼ぶようにしたからである。ちなみにタメ口なのは元からの性格もあって最初からである。

ふと、カグヤはコウサカに抱えられている朔絆に気付く。

「・・・何したの？」

「いや、それが俺もさっぱりでな・・・」

コウサカは有りのままに出来事をカグヤに話した。聞いたカグヤ

は、心底馬鹿らしいという表情を浮かべた。
「そこの馬鹿も大概だけど・・・。コウはそれ以上だね・・・」
うつ伏せに倒れているタクトを一瞥すると、コウサカを見てカグヤは溜息を吐いた。
『・・・ん・・・あ、あれ？　あたし、どうして・・・』
「起きたか？」
目を覚ました朔絆をコウサカは上から覗き込む。
『っ！　・・・あ、あう・・・わぅわぅ・・・』
コウサカを見た途端、朔絆はボンという音が聞こえるほど真っ赤になると剣の中へと戻った。コウサカは呆気に取れたような表情になると、ベッドに立て掛けてあるクレイモアを見た。剣の光は慌てているように不規則に光っていた。
「何なんだ今日は・・・」
そんなコウサカを見てカグヤは呆れると小さく声を漏らした。
「やっぱり気のせいだったのかなぁ・・・」
「？　どうかしたか」
「あ、あ～・・・うん。なんでもない」
「？」
カグヤはコウサカから目を逸らすと、足元に転がっているタクトに蹴りを入れた。
「起きろ、この馬鹿」
「兄妹と言うモノがどんなものか分からないが、・・・やり過ぎではないか？」
コウサカの言葉を受けて、「多少」手荒くタクトを起こしていたカグヤの動きが止まった。
「？　わからないって、どういうこと？」
「俺には記憶がない。何故かは知らないがな」
「・・・ごめん」
「？　何を謝る」
「何を、って・・・」

カグヤはコウサカを見る。その顔は昨日、初めて戦場で会った時のように泰然(たいぜん)としていた。
「他人がどうかは知らないが、俺に限れば記憶などどうでもいい」
「どうでもって・・・」
「戻るなら戻ればいい。戻らないなら、それはそれで問題はない」
「・・・」
カグヤが表情を曇らせたことにコウサカは気付く。
「すまない。つまらないことを口にした」
コウサカがひとつ詫びる頃、タクトが目を覚ました。
「し、しぬ・・・いい加減、死ぬから・・・」
首を手で押さえながら、ひぃひぃ言いながら起き上がった。
「では、行くとするか」
「う、うん・・・」
「心配なしっすかっ!?」
そこでコウサカの目の色が少し変わる。見た者が悪寒を感じるほどに。
「何がどうなったかは分からないが、朔絆が軽くだが倒れたのはタクト、お前のせいだろう。次は許さん」
「ひっ・・・」
睨まれたわけではないにせよ、その目を見たカグヤも悪寒を覚えた。
『ま、待ったっ!』
コウサカの放つ気配が部屋を支配した。そんな時、朔絆が剣からは出ずに声を上げた。
「朔絆、大丈夫なのか?」
『ふえ、ぇ・・・え、うん・・・・・・』
コウサカが声をかけると、朔絆がものすごく狼狽(うろた)えた声を出した。
『ぁ、あああんたはちょっと黙っててっ・・・!』
「・・・む」
そう言われて、不承不承(ふしょうぶしょう)コウサカは黙った。

『タクトとかいうのっ！』
「は、はいっ」
タクトは覚悟を決めて目を瞑る。
『グッジョブと言うしかないっ！』
「は、え、ええーっ！？」
てっきり殺られると思っていたタクトは、目を丸くして驚きすぎて固まった。カグヤも同じく。
『でも、ああいうのは本心から言われたいものなの！　次やったら許さないかんねっ！！』
「は、はいぃぃっ！」
タクトは思わず直立不動で敬礼した。話の内容がさっぱり分からず、コウサカはこめかみに手をやりながら朔絆に聞く。
「朔絆、つまりは・・・どういうことだ？」
『ぁ・・・しっ、ししし知るかっ！！』
それっきり朔絆は黙ってしまった。コウサカは頭痛でもするように手の平で顔を覆った。
「・・・タクト」
「は、はいっ！」
「朔絆が何を言っていたのかはさっぱり分からなかったが・・・すまない」
「え、い、いえ・・・。オレの方こそ、騒いで申し訳なかったっす・・・」
「・・・」
「・・・」
「と、とにかくっ！」
気まずい空気に耐えかねたようにカグヤが声を上げた。
「そろそろ行こっ」
「ああ」
一瞬で表情が切り替わったコウサカは装備を付け始めた。付けると言っても、上半身の鎧を着て剣やカバンを持つだけだが。

「・・・」

そんなコウサカを見て、また先ほどのコウサカを思い出してカグヤは溜息を吐いた。内心、やっぱり変な人だと思いながら。

コウサカ、タクト、カグヤはダンバートンから出て東へ来ていた。タクトとカグヤの巡回任務に、昨日酒場で暇だからとコウサカも付き合うことになったのである。

ダンバートン東側には森が広がっている。マスダンジョンもその森の中の北に位置する。魔族が隠れるにも、何か仕掛けを施すにも絶好の場所である。そのため、コウサカ達以外にもいくつかのパーティーが監視の目を光らしている。

「・・・」

コウサカはただぼんやりとしていた。朔絆は朔絆でコウサカが呼んでも、クレイモアからの光が不安定になるだけで返事もしない。

「コウサカさん、ずいぶん余裕そうっすね・・・」

タクトは剣を構えてビクビクしながら森の中を進んでいた。カグヤも油断無く姿勢を低くしバトルショートソードを一本はそのままに、片方は逆手に構えていた。コウサカは何も構えもせずにただ適当に先頭を歩いていた。

「敵意や殺意は微塵も感じない。感じるのは動物の気配だけだ」

「え、まさか・・・気配が感じ取れる達人とかそんな特殊能力が？」

タクトが目を丸くして、コウサカには理解し辛い言い方をした。

「よく分からないが・・・気配は感じ取れる」

「ほんと・・・変な人」

カグヤが小さくそう零した。その時、草むらが鳴った。タクトもカグヤもそちらを振り向き、緊張した面持ちで己が武器を向ける。

そして、現れたのは。

「・・・く」

全身毛むくじゃらの三mを軽々超える巨体に四足でのしのしと。

「く、くくくクマだあああああああっ！」
森のクマさんならぬ、凶暴な黒ヒグマだった。
タクトが叫んだことによって強く注意を引いてしまったようで、黒ヒグマはタクトに目を向けてぐるぐると唸った。
「ば、馬鹿っ！」
カグヤがタクトを咎める。だが、すでに黒ヒグマは二本足で立って臨戦態勢に入っていた。
「・・・」
仕方がない、とコウサカは溜息を吐くと前に進み出た。そして、素手のまま黒ヒグマを睨みつける。
「あ、あれ・・・？」
何故か黒ヒグマの全身がビクリとしたかと思うと、クマであるが脱兎の如く逃げていった。
「・・・？」
コウサカ本人は下より、タクトもカグヤも首を捻った。
「な、なにしたの・・・？」
「いや、何も。強いて言うなら睨んだ」
「・・・」
「・・・」
二人とも無言になった。そして、幽霊でも見たかのような表情を浮かべる。
「動物には本能的にわかったみたいっすね・・・。コウサカさんに手を出したらどうなるか」
「ふむ」
コウサカはそう唸ると首を捻った。
「・・・というか」
カグヤが非難がましい視線をコウサカに向けた。
「・・・気配分かるんじゃなかった？」
「いや、別に散歩しているだけのような気配だったのでな。言わなくても大丈夫と」

「「言ってっ！」」
タクトとカグヤから、ズビシと音が聞こえてきそうなツッコミが入った。
「向こうから襲ってくる気配がなくてもか。だが、クマ程度でそれほど・・・」
「「まず、基準がおかしいからっ！」」
息がぴったり合うところは、兄妹ゆえに成せる技かとコウサカは思った。
「はぁ～・・・もぉ、寿命が縮んだかと思ったよ」
カグヤはコウサカが変な人だと再認識した。
「まあ、でも・・・コウサカさんがいれば、まったく危険なしっすね」
タクトはポジティブだった。
とりあえず、三人はそのまま東の森の探索をした。だが、魔族らしき影も、それが施した仕掛けすら何もなかった。
ちなみに、出てくる出てくる森の動物達はコウサカを見た途端、すべて脱兎の如く逃げ去った。あまりにも動物達が露骨（ろこつ）に怯（おび）えて逃げて行ったせいか、コウサカがちょっぴりショックを受けているように見えたのは、タクトとカグヤの気のせいだろうか。

正午。
交代のパーティーと入れ替わり、コウサカ達はダンバートンへと戻って来ていた。収穫はコウサカを連れていれば、野生動物が襲ってこないということだけだった。
南東門から入った三人は、中央区へ向かう大通りを歩いていた。相変わらず、露天が多く人通りが絶えない。
「では、俺は宿へ戻るとする」
「あ、コウサカさんっ！」
宿へと向かおうとしたコウサカを、タクトが引き止めた。

「昼メシ、うちで食べないっすか？」
「ちょっ！？」
「いいなら、行こう」
「よっしゃ、こっちっす」
「ま、待った、待ってよっ！」
勝手に話がまとまったことに、カグヤが抗議の声を上げた。
「嫌なら仕方がない」
そう言ってコウサカは踵（きびす）を返して、人混みに消えようとした。
「まっ、ちょっ！？　だ、誰もイヤなんて言ってないっ！」
「違うのか」
「早合点すぎっ！　ったく、もぉ・・・ほんと変な人」
カグヤは頭痛でもするようにこめかみに手をやった。
「では、世話になる」
「あーもう、はいはい・・・。あっちの馬鹿に付いていって」
カグヤはタクトを指差した。
「君は？」
「ちょっと材料足りないから、買ってくる」
「荷物持ちくらいなら出来るが」
「ん、いいよ。じゃ」
そう言うとカグヤはツインテールを揺らしながら、人混みの中に消えた。
「コウサカさーんっ、まだっすかー？」
あの様子から昼食を作るのはカグヤだろう、と思いながらコウサカは駄目兄タクトのあとに続いた。

タクト達の家は、ダンバートンの南東門近くの城壁内にあり、少し古い感じのする二階建ての木造家屋だった。ちなみに自宅を持たないハンターはハンター宿舎と呼ばれる官舎（かんしゃ）に住むことが出来る。
コウサカとタクトは、ダイニングキッチンの食卓に着いていた。

上半身の鎧と兜、装備は適当に置かせてもらって朔絆のクレイモアだけ食卓に立て掛けてある。

コウサカは何となく室内を見回していた。一階にはダイニングキッチンと四畳程度のリビングがあるだけだった。装飾は特になし。窓に物入れ、引き出しがいくつか。二階はタクトとカグヤの部屋と、もうひとつ小さな部屋があり倉庫となっている。

「え、なら何で昨日はあんな風になってたんすか？」

「酒が飲めないわけではない。恐らくはあの酒が強すぎたからだろう」

タクトからの言葉にコウサカは昨日飲んだウィスキーを思い出す。ティルコネイルでも付き合いで酒は飲むことはあったが、あの酒は別格過ぎた。

ちなみにウィスキーのアルコール度数は四十～五十％、麦酒（ビール）のアルコール度数は五％程度であるから、どれだけ強い酒なのか分かると思う。しかも、それをストレートで一気飲みしたのである。付き合い程度でしか飲まないコウサカが酔払ったのも無理はない。

「まあ、オレもあんなの飲んだら倒れるっすね・・・」

「何故、俺に飲ませた。それなら」

「あ、いや～・・・。出来心というか悪戯（いたずら）心というか・・・」

「何があったかは覚えていないが、そのせいで自分の身に火の粉が降り掛かったそうだな」

「はい、深く反省しています・・・」

そう言ってタクトは食卓の上に頭を着いた。そのままぐでぇ～、と伸びた。

「おい、そこの馬鹿！　テーブル汚すんじゃないっ！」

カグヤが野菜と肉のスープの入った皿を両手に持って、キッチンから出てきた。薄い水色のエプロンに今はツインテールではなく、ポニーテイルにしていた。料理の時、髪が入ってしまうせいだろう。

「手伝おう」

「いいよ、座ってて。そこの馬鹿は手伝え！」

「へいへ〜い・・・」
コウサカが立とうをするのを静止して皿を置くと、カグヤはタクトの頭を叩いた。タクトは嫌々立ち上がる。
「ふむ」
コウサカは椅子に掛け直す。カグヤとタクトは両手に皿やパンを持って戻って来て、テーブルには魚のムニエル、ポトフのようなスープ、サラダにオムレツなどが並べられていく。
「これを作ってくれるのが、カノジョだったら最高なのになぁ・・・」
「文句あるならあんたの分は今度から作らない」
「はい、すみません・・・」
平伏するタクトを一瞥(いちべつ)すると、カグヤ自身もエプロンを外して食卓に着く。タクトもそれに続く。カグヤとタクトは手を合わせる。コウサカも同じようにする。
「いただきます」
「いっただきま〜す！」
「頂きます」
タクトは言うが早いか、ガツガツとものすごい勢いで食べ始めた。それにカグヤがもっと綺麗に食べろだの、ガミガミと。
「朔絆、剣の周りに置いておくから適当に食べろ」
コウサカは立て掛けてあるクレイモアのすぐ近くに、傍らに置いたカバンの中から適当な雑貨類を置いてやる。
『バカぁ・・・』
朔絆は小さく拗ねたような声を返した。コウサカはそれに少しだけ肩をすくめるとスプーンを取って、スープに差し入れる。抄(すく)ったそれを口に含む。
「・・・」
「ん？」
そこでカグヤがこちらを凝視(ぎょうし)していることにコウサカは気付く。コウサカが顔を向けると、カグヤがどことなく緊張している表情を

浮かべていた。
「ど、どう・・・？」
「？　どう、とは？」
「・・・あ、味」
「ああ」
コウサカは野菜や肉と一緒にスープを口に含んで、咀嚼する。
「美味い」
「そ、そう・・・」
カグヤは安堵した表情を浮かべる。やはり、身内はともかく他人に食べさせる時は緊張するものか、とコウサカは思う。
「ほうえあ、ほうははは（そういや、コウサカさん）」
口に食べ物を入れたままタクトが声をかける。カグヤに睨まれてすぐに水で流し込んだが。
「確か旅をしているって、言ってったっすよね？」
「ああ」
そういえば昨日酒場で話したな、とコウサカは首肯した。
「なんの旅っすか？」
「め・・・いや、俺はナユキの付き添いだ。行き先はナユキが知っている」
女神のことを言いそうになって、コウサカは口を噤む。いくら正直馬鹿なコウサカとて、こんな話を二人にしても混乱を招くだけと理解している。
「今、言い直・・・」
「そ、そういえばっ！」
カグヤが何かに気付いて問おうとしたところ、タクトが遮った。
何か興奮しながら。
「コウサカさんと、ナユキちゃんはどんな関係なんすか！？」
「ぶっ・・・！」
カグヤが食べ物を喉に詰まらせてむせた。
「言っただろう。付き添いだ」

「ただの、っすか？」
「？　どういう意味だ？」
「ああ、結構っす。その反応で分かったす」
「？」
コウサカは頭の上に？を浮かべながら、パンを噛み千切る。
「つ、つまり・・・ナユキちゃんはフリーってことっすか？」
何故だか、ゴクリとしながらタクトはコウサカに聞く。
「フリーとはなんだ？」
「誰とも恋人関係じゃない、ってことっす」
「俺の知る限りではいないな」
「よぉっしゃ！」
何故か片手にパンを持ちながら、タクトはガッツポーズを取った。
「カグヤ。タクトはいつもこんな感じなのか？」
「ウザったくしてしょうがないけど、そう」
カグヤは不快そうにタクトを見る。ふと、カグヤが何かを思いついたのかコウサカを見る。
「朔絆ちゃんとはどんな関係？」
「大事な相棒だ」
「ふぅーん・・・」
カグヤはコップの水を一口飲む。そんな様子にタクトが何かを悟ったように捲くし立てた。
「おっ、もしかしてカグヤ。コウサカさんに惚れたなぁ～っ！」
「ほ、れ・・・？」
カグヤは目をパチクリさせながら、キョトンとして動きが止まった。
「・・・っ！？」
次の瞬間、カグヤの顔が真っ赤になった。カグヤは持っていたコップの中身をタクトにぶっかけた。
「し、死ねっ！！」
「？」

コウサカだけは状況がよく分かっておらず、何となくカグヤを見た。
「あ、う・・・ち、違うっ！　いまのはそこの馬鹿が勝手にっ・・・！」
「？」
ところが残念。コウサカは好きだとか惚れたとか、そういったことは何一つ分かっていないため首を捻った。それをどう受け取ったのか、カグヤは余計に慌てて席を立つと二階へ走っていった。
「？」
コウサカはしきりに首を捻っていた。顔をずぶ濡れにされたままタクトは冗談で言ったのに、大慌てしたカグヤを見て大笑いしていた。その後ろにはいつの間にか朔絆が完全実体化をして立っていた。そら恐ろしい顔で。
『あんた・・・』
肩に手を置かれたタクトは、さーっと血の気が引いて青くなった。
「朔絆、だからお前なんて顔を・・・」
朔絆の形相を見てコウサカが呆れた。
「こ、ここコウサカさーんっ・・・・！」
情けない声をタクトが出すとコウサカは溜息を吐いて席を立つ。
「とりあえず、落ち着け」
コウサカは朔絆の頭に手を置くと、撫で始める。すると、朔絆の険がどんどん薄れていった。落ち着いたようだ。
『むぅー・・・でも、こいつ』
「何のことかは分からないが、そんな顔は止めておけ」
そこで朔絆がピクリと反応した。
『か、お・・・？』
「？　顔がどうかしたのか？」
コウサカが朔絆の顔を上から覗き込むように見ると。
『っ！　・・・〜っ！！』
朔絆の顔が一瞬で真っ赤になった。

「今日はよく赤くなるが、もしや・・・精霊も風邪を引くのか？」
『ば、バカぁーっ！』
朔絆はコウサカの腹部あたりを殴ると、消えた。
「罪な人っすね・・・ふ」
何かタクトがムカつく顔をしていた。コウサカは何のことか分からず首を捻っていたが。
「ちょっとカグヤ見に行って来るっす」
そう言って咀嚼していた物を飲み下すと、タクトは二階へ上がっていった。
「・・・っ！　・・・っ！！」
何か二階がうるさかった。
「・・・」
コウサカは自分が食べかけたオムレツを食べる。
そして、ふと思う。
「久しぶりだな・・・」
今までは領主の前だったり、顔も知らない大勢が食べる酒場だったり、聖堂だったり、大通りの露天だったり。親しい（？）顔見知り同士だけで賑やかにするは、ティルコネイルを出て以来初めてのことだった。
「ぎゃあああああっ！」
タクトが二階へ上がる階段から転げ落ちてきた。その後からカグヤが肩を怒らせて降りて来る。
「・・・」
本当に。
「・・・ふっ、はは」
たった数日であるが、本当に久しぶりにコウサカは小さく楽しげに笑った。

ちなみに。
「カグヤ様、お許しをっ・・・！」

「死ねっ！　氏ねっ！　知るかっ！」
勿論、タクトの夕食は抜きにされた。

―第十一章―　落ち着けた日常（後書き）

【お知らせとお詫び】

活動報告にも書かせて頂きましたが、プロットより書き上げてあるものはここまでとなります。

ここからは早くて一、二週間に、遅くて三、四週間に一度のペースで投稿を行なわせて頂きます。リアルのことと同時平行だとこんな速度になってしまいます。

お目を通して頂いている方々、申し訳ありません。

また、読んで頂けている方々に少しでも楽しい時間を過ごせていることを祈ります。

―第十二章―　タクトとカグヤ

タクトが夕食抜きにされたその日の夜。
コウサカは酒場でいつものように夕食を食べていたが、朔絆（さき）は部屋に居る。何でも少し一人にしろ、だとか。コウサカはそれに首を捻って、しかしまあいいかと置いてきた。そう言ったら睨まれたが。
「っか～・・・。ったく、冗談がわかんないやつっすよ・・・」
コウサカが食べている時にまたタクトがやって来ていた。いまは不貞腐（ふてくさ）れて麦酒（ビール）を掻（か）っ喰（く）らっている。
「・・・」
コウサカはコウサカでただ黙々と自分の料理を食べていた。一応、コウサカも付き合って麦酒を飲んでいる。ウィスキーで殺気と放つという暴走をしたコウサカだが、この程度のものなら何の問題もなく飲んでいた。
「まったく妹ってもんは・・・。コウサカさんの方はどうっすか？」
「俺に妹はいないが」
「あ～、そうっすね。朔絆ちゃんは妹じゃないっすもんねぇ～・・・」
「？　ああ、相棒だからな」
それを聞いたタクトは白けたような表情になった。
「コウサカさんて、本当によくわかんないっすねぇ～・・・」
そう言いながらタクトはジョッキに口をつけるが、空になっていることに気付く。
「そこの可愛い子っ、おかわりっ！」
そう言ってタクトは空になったジョッキを勢い良く掲げた。ちなみに、可愛い子とはカリンのことである。
「はいは～いっ！」
こういう客には慣れているのか、カリンは元気良く返す。すぐにジョッキの回収に来た。

「キミ可愛いねぇ、なんて名前？」
「ん？　カリンだよ」
鼻の下を伸ばしながら聞くタクトに、しかしカリンは笑いながら答える。こういう客にも慣れているのだろう。
「今度一緒に・・・」
「イ・ヤ♪」
「けっ・・・いいっすよ、いいっすよ・・・。どうせ、オレは中の下っす・・・う、うぅ・・・」
良い笑顔で断られたタクトは、卓の上に突っ伏して泣き始めた。どうやら、タクトは酔うと泣き上戸になるらしい。大変面倒くさい。
カリンはそういうのにも慣れているのか一瞥しただけで、中の下は普通だと思うが、とタクトに言っているコウサカに視線を向けた。
「コウサカは？」
「見ての通りだ」
コウサカは一度食事の手を止め視線すら向けずに、まだ半分以上残っている麦酒を示す。
「・・・むぅ」
コウサカがカリンを見ずもせずに言ったのが気に障ったのか、カリンは不満そうに目を細めた。
「相変わらず、愛想ないなぁ」
「ああ」
これまた、にべもなく認めるから面白みが無い。
「つまんないの・・・」
カリンはタクトのジョッキを受け取ると来た時より幾分、肩を落として厨房に向かって行った。
「ひっく・・・。駄目っすよ、あんな言い方しちゃぁ」
「なんのことだ？」
酒が回ったタクトは、若干赤い顔でコウサカに言う。泣くのに飽きたのか、すでに何事もなかったかのように料理を突っついている。
「コウサカさんは女の子のことを全然わかってないっすねぇ・・・

ぅいっく。顔くらい見てあげないと～」
「そういうものか？」
「そういうもんっす。・・・ひっく」
そんな時、カリンが戻ってきた。酔っ払いの言うことであるが、とりあえず信じてしまうのがコウサカが損な性分。
「はい、お待ちどー」
どん、と卓の上にジョッキを置く。少し零れるがそんなことは気にしない。タクトはそれを受け取ると、ぐびぐび勢いよく喉に流し込んだ。
「カリン、俺も頼む。すまない」
今度は真っ直ぐにカリンの目を見ながらコウサカは言う。何のこともないが珍しく（カリンとしては）コウサカが、ただの酒場の娘としてではなくカリンという個人にしっかり言葉をかけてきたことに、カリンは少し目を見張ると少しだけ笑みを浮かべた。
「も～、さっき言ってよ。二度手間じゃんかー」
「すまない」
コウサカが謝ると、笑いながらカリンはジョッキを取って再び厨房へと向かった。
「ふむ」
コウサカには何故カリンが少し嬉しそうにしていたのか、それはわからないがそれでもタクトの言う通りにやってみたら良い方向になったことに、コウサカはタクトに感心した。
「よく分からなかったが、なかなかに大したものだな」
「・・・」
見ると、タクトは酔い潰れて卓に伏せっていた。しかし、ジョッキの中身と料理はしっかりと空になっていた。

時間にして二十時過ぎ頃。
コウサカはタクトに肩を貸して、いや一方的に引きずって家まで

運んでいた。カリンは、そんな客はよくいるから放っておきなよ、と言ったがそれでも送ろうするコウサカは案外お人良しである。

この時間になると、すでに人通りは絶えていた。夜間巡回のハンター数人一組が時折(ときおり)ちらほらと見える程度である。巡回のハンターがコウサカを見掛けると、何をしているかと声をかけてきたがタクトを見ると、呆れたような苦笑を浮かべてコウサカの肩を叩いていった。タクトとカグヤはよく、人通りの多い大通りででも喧嘩(けんか)をしているためダンバートンでも有名なのである。不名誉(ふめいよ)な意味でだが。

そんな中、コウサカはアリアンロッドのある西区から、タクトとカグヤの家のある東区を目指して路地裏を歩いていた。ちなみに路地裏なのはアリアンロッドから家までの近道である。昼間、タクトからコウサカは教えられた。

この時間に人がまったくいないのは農作業に従事する者は朝が早いから、単に遅くまで起きている理由がないからだけではない。

「おい、にいちゃん。ちょっと顔貸せや?」

夜陰(やいん)に紛れるよう暗い色の服に身を包んだ柄の悪そうな男が数人、コウサカと酔っ払い一名の前に現れた。夜目(よめ)が利くのかハンターに見つかる危険性を減らすためか、薄い月明かりしかないというのに男達は灯(あか)りの一つすら持っていなかった。

「何か用か?」

コウサカは何の緊張感もなく相手に尋ねる。普段の、完全武装した格好のコウサカだったら相手もまず声などかけないだろうが、今は鎧は下半身だけで、上半身は灰色のアンダーウェア、それにナイフの一本すら持っていなかった。宿の自室にまとめて置いてある。

「命が惜しけりゃ有り金すべて置いていきな」

「ああ、物取りか」

コウサカは見知らぬ男に呼び止められた理由が分かり納得した。その全く気にしていない態度と口調が癪(しゃく)に障ったのか、相手から敵意が溢れ出てきた。

「てめぇ・・・、舐めてんじゃねぇぞ!?」

口調こそ荒いがその声は控えられていた。巡回のハンターに気付かれないためだろう。
「ロクでもないことなど止めておけ。この街でなら、まともな職にも就けるだろう」
コウサカはタクトを壁にもたれかけさせながら言う。
「素直に金出す気はねぇんだな？」
「ああ」
その言葉を聞くと男達はナイフを抜く。
「殺せ」
リーダー格らしい男の号令に周りに男達がコウサカに迫る。狭い路地裏なの二人ずつしかコウサカの前には出られない。
「死っ・・・！」
コウサカは突き出されてきたナイフを、相手の手ごと掴むと軽く捻る。その痛みに一人がナイフを取り落として、手を押さえた。
「てめぇっ・・・！」
それを見た隣の男がコウサカにナイフを振りかざす。
「また、素人か・・・」
コウサカはそう言いながら、思い切り下ろされたナイフを相手の手首を易々と掴んで無力化する。そして、右足で相手の腹に蹴りを入れる。そして、手を押さえている男の顎を左の拳で打つ。蹴りを入れられた男はその場で腹を押さえて声も出せないほど悶絶し、顎を打たれた男は気を失った。
「て、てめぇっ・・・」
リーダー格の男が悔しげな表情を浮かべる。その時、男達の後ろ側から声が響く。
「おい、そこで何をしている！」
「チッ、ハンターかっ・・・！」
残った三人の男は慌てて逃げようとする。しかし、前にはコウサカが後ろからはハンターが。逃げ場を失ったリーダー格の男は、数人の武装したハンターより素手のコウサカの方が突破し易いと考え

たのか向かってきた。
「どけぇえええーっ・・・！！」
そう言いながら自らが先頭に、リーダー格の男が短剣をコウサカに振りかざす。
「素直に捕まって、更生しろ」
振りかざされた短剣の刀身に左手の甲を当て軌道をずらすと、相手の胸部に踏む込んだ重い一撃を右手で喰らわせる。
「がはぁっ・・・！？」
リーダー格の男の身体が浮き、後方に二、三ｍほど飛んだ。それほどの衝撃を受けたというのに、リーダー格の男は気を失わず苦痛を浮かべながらも、身体を起こした。
「く、そが、ぁっ・・・！」
リーダー格の男がやられたことに、残った二人はハンター達の来る反対側へ逃げて行って、簡単に捕まった。
「動くな！」
ランプに照らされた、ただ一人立っているコウサカを見て、ハンター達は警告の声を上げる。
「俺は被害者側だ」
「なにを・・・て、あ。あんたは」
よく見ると先ほどコウサカの肩を叩いていったハンター達だった。
「あんた・・・一人でのしちまったのか？」
先頭のハンターがコウサカの周りに崩れ落ちている三人の男を見て、目を見張る。
「ああ」
壁にもたれ掛からせたタクトに肩を入れて起こしながら、コウサカはどうでも良さそうに言う。
「はー、すげぇな。あんた、名前は？」
「コウサカだ」
それを聞いた途端、ハンター達の動きがピタリと止まる。
「コウ、サカ・・・？」

「ああ」
「「「えぇえええええええええええっ！？」」」
何故か突然、驚いて叫んだ。
「き、昨日あった戦いで魔族を一人で蹴散らしたとかいう、あのっ！？」
「ずいぶんと誇張されているな・・・。俺はゴーレムを倒しただけだ」
コウサカのそれに別のハンターが驚きの声を上げる。
「は、・・・え？　じ、じゃあ、ゴーレム十体くらいを一人で倒したっていうのは・・・」
「ああ、それは本当だ」
「「「十分すげぇよ、あんたっ！！」」」
そうなのか？　と首を捻るコウサカは、はたと気がつく。
「何故、俺のことを知っている。この街に来てまだ数日しか経っていないはずだが」
コウサカの言葉にハンター達は、えぇ、と言う顔をした。
「あんなに堂々と領主様のとこいって、しかもハンターでもないのにすげぇ装備していて目立たない方がおかしいって・・・」
「ふむ」
よく分からずコウサカは首を捻る。
「ま・・・、ま、いいや。悪人どもの捕縛協力、サンキュな」
「ああ」
ハンター達は男達の手首を後ろで縛って立ち上がらせると、連れて行った。
「ふむ」
そうひとつ呟くと、コウサカはタクトに肩を入れ直して引きずりながら歩き始めた。
路地裏ばかり歩いているせいか、またコウサカの前に柄の悪そう

な男達が現れた。ただ、今回は状況が違った。
男達の後ろから女のものと思われる声が聞こえた。
「・・・んぐっ・・・は、はなっ・・・むぐ、離せっ・・・！」
その声はよく聞き覚えのある声だった。現在の状況と、声から読み取れる感情をコウサカは一瞬で理解する。
コウサカの気配が一変する。殺気こそ発していないが、コウサカと相対する男達は見えない手に首を絞められたような錯覚と共に息苦しさを感じる。
「・・・」
コウサカはそっ、と路地の壁にタクトを寄りかからせる。そして、ただ無言に、しかしその目には冷たい光を宿して立ち上がる。
「退け」
その声だけで男達はひどい寒気に襲われる。だが、やはり数に利があるせいか激しい敵意を向ける。
「ふざけっ・・・」
「そうか」
先頭にいた男は気付くことも出来ずにコウサカに殴られていた。だが、コウサカはこんな状況でも相手の一番頑丈な腹に打ち込んでいた。殴られた男は軽々と宙を飛び、壁に激突すると白目を剥いて気絶した。
「・・・次の者は殺す」
「ひっ・・・に、逃げろっ！！」
言葉と同時、コウサカの纏（《と》う気配に殺気が混じる。本能的に感じてはいけない度合いの恐怖を感じ取った男達は、奥の男達共々気絶した仲間を抱えて逃げ去った。殺気を消すと、コウサカは足を進める。
「・・・っ・・・ぅっ・・・」
カグヤが腕を交差させ肩を抱くようにして地面に座り込んで、目を伏せて声を殺して泣いていた。コウサカはその前に膝を着く。
「カグヤ」

「・・・っ！」
ビクリとしてカグヤが顔を上げる。暗いせいか、コウサカと認識し切れていないようだった。
「俺だ。コウサカ。まだ何もなかったようだな」
「こ、う・・・？　・・・っ！」
一瞬、カグヤが呆けたような表情になる。そして、コウサカに抱き着いた。
「・・・ぅあ・・・怖かった・・・怖かっ・・・うぅ・・・ぅぁ・・・っく・・・」
「・・・ふむ」
とりあえず、コウサカはカグヤの頭を優しく撫でた。カグヤが落ち着くまで何度も、何度も。コウサカは慰め方など分からないため、それ以外何も出来なかった。
「・・・ぅっく・・・ぅん、ありがと・・・」
そう言ってカグヤが離れた。今の今まで泣いていたというのに、その表情は穏やかなものだった。コウサカは手を退ける。
「ぁ・・・」
「？　どうかしたか？」
一転してカグヤは、残念そうな不安そうな表情を覗かせた。
「ぁ、えっと・・・その・・・やっぱり気のせいじゃなかったな、って・・・」
「？」
「その・・・」
チラリとコウサカを見て、カグヤは恥ずかしそうに目を逸らした。
「・・・撫でてもらうと、何かすごく安心するっていうか・・・守られているっていうか・・・」
「？」
コウサカは自分の手を見て、首を捻った。だが、まあいいかとカグヤに目を向けた。
「何故、こんな時間に、こんな所に一人でいた」

「・・・」
カグヤは目を逸らすと、黙り込んだ。コウサカは一息吐くと、思い出したようにカグヤの頭をぽん、と一撫ですると立ち上がった。
「言いたくないと言わなくていい」
コウサカがタクトを回収しに行こうと、踵(きびす)を返すとカグヤがコウサカの手を握った。
「？」
「その・・・」
コウサカが半身を捻ってカグヤを見ると、言い難そうに頬を赤めていた。
「・・・腰抜けて立てない」
「・・・はぁ？」
珍しくコウサカが素(す)っ頓狂(とんきょう)な感じの声を上げた。

「へ、変なとこ触ったら許さないんだから・・・」
「？」
「・・・はあ」
カグヤは言葉を向けた相手には、あまりにも無意味すぎることを言ったため、自分に呆れて溜息を吐いた。
「お、重くない・・・？」
「二人も抱えていれば、さすがに少しはな」
結局。
カグヤは腰を抜かして、タクトも酔い潰れたまま起きないため、コウサカは二人を運ぶことになった。タクトは寝ているせいで背中に背負うしかなくそれを片手で支え、カグヤはコウサカの首に手を回してそれをコウサカが残った片手だけで支えながら歩いていた。
「あの、ね・・・」
カグヤが遠慮がちだが、口を開いた。そして、何の脈絡(みゃくらく)もない話を。

「あたし達、両親がもういないんだ・・・」
「・・・」
コウサカはただ黙って足を進める。
「お父さんはハンターの仕事で結構前に・・・、お母さんは元々病弱だったからあたしが小さい頃に・・・」
その光景を思い出してしまったのか、カグヤがコウサカの首に回した片腕を外して目元を拭った。
「あたし、泣いてばかりだった・・・。部屋に閉じこもってばかりで、お父さんとお母さんのこと呼んで泣いてた・・・。そんなあたしを見て、お兄ちゃんも泣きたいはずだったのに、いつも強がって・・・気にしてくれて・・・。でも、小さいあたしが寝付いた後、一人で部屋で泣いていた・・・。」
一旦、カグヤは言葉を切ってコウサカを見た。表情一つ変えずに、ただ歩みを進めるコウサカにカグヤは小さく微笑んだ。
「そのうち、ね・・・あたし笑えるようになったんだ。お兄ちゃんがいつも笑わせようとして色々してくれて・・・・・。そしたらお兄ちゃん、あたしのことなのに大喜びして・・・・二人して笑ったなぁ・・・」
思い出したのか、カグヤは小さく声を出して笑った。懐かしそうに、嬉しそうに、幸せそうに・・・。
「だから、帰りの遅いタクトを心配して迎えに行った。というわけか」
「・・・うん」
気恥ずかしそうに、カグヤはコウサカに捕まりながら俯(うつむ)いた。
「・・・ふむ」
初めてカグヤの口から出た「お兄ちゃん」という言葉からも兄妹としてどれほど信頼しているのか、それも分かろうというもの。素直ではないが、良い兄妹だ。
そこでコウサカは気付く。自分が心中で言った言葉の異常さに。
(待て・・・「兄妹として」、だと・・・？　記憶のない俺に何故

そんなことが分かる？　俺は、兄妹というものが分からないと自分で言ったはずだ・・・）

何か、何かがコウサカの記憶の奥底で蠢く。兄弟、兄妹、兄、妹・・・。

妹・・・？

「っ・・・！？　・・・が、ぁっ」

瞬間、コウサカは激しい頭痛に襲われ膝を着いた。それでもタクトとカグヤを落とさないのは、さすがと言うしかないだろう。

（城・・・？）

何かがコウサカの頭を過ぎる。そして王座には・・・。

「・・・ウ・・・コウっ！」

カグヤの声で、はっとコウサカは我に返る。同時、頭痛も消え去る。

「・・・大丈夫だ」

息を吐くと、身体に力を込め人間二人を抱えながら軽々とコウサカは立ち上がる。ふと目を向けると、抱えているせいで自分の顔のすぐに下にはカグヤの顔があった。その顔は心配そうにしていた。

「ほんとに大丈夫・・・？」

「恐らく。頭痛も消え去った」

すでにコウサカの表情は、いつもののへと戻っていた。初めて見せた苦悶の表情が嘘だったように。ふと、何かを思いついたようにコウサカはカグヤに顔を向ける。

「カグヤ」

「な、なに・・・？」

顔が近いためカグヤは視線を逸らす。コウサカは表情そのままに言う。

「兄妹喧嘩もほどほどにな」

「あ、え・・・わ、わかってる」

何か良い事でも言うのかと思ったら、どうでもいいことをコウサカが言うためカグヤは力が抜けた。
それから、カグヤはちょっとだけ声は出さずに笑った。

翌日。
「し、しぬ・・・頭が・・割れる・・・・・・」
タクトは二日酔いでゾンビのようになっていた。
「・・・はい」
そんなタクトの前に、頭痛薬とコップに入った水が差し出された。
カグヤである。
「お、おう。サンキュ」
タクトは頭痛も忘れ、目を白黒させながら受け取って飲む。
「ど、どうしたよ？　やけに気が利くけど」
「・・・何でもない」
ぷいっ、とカグヤはそっぽを向く。
「熱でもあんのか？　あ、もしかして明日は大雨か？」
背中を向けたカグヤがピクリと反応した。
「お前が優しいなんて、何か怖いぞ。おい」
しだいに、カグヤの肩がぷるぷると震えてきた。
「・・・無理」
「・・・？」
タクトが首を傾げる。そして、カグヤが振り向く。その表情は。
「だあああああっ！　無理っ！　やっぱり無理っ！！　せっかく優しくしてあげてんのに、なにその態度っ！？」
「え、ちょ」
「あんたなんか、そのままぶっ倒れて死ねっ！」
「ちょ、何なんだよっ！？　いきなり気味悪いなほど優しいと思ったら、急にキレやがってっ！？」
「気味悪い、だってぇ～・・・！？　言うに・・・言うに事欠いて・

・・もう、しねえええええっ！！」
「ちょ、頭止めてっ！？　二日酔いで・・・・」
「知るかあああああああっ！！」
「ぎゃあああああああっ！！」
案外、カグヤの表情は本気で怒っていなかった。コウサカに聞いてもらい、言ってもらったことにより前よりもずっと日常が心地良さそうだった。
攻撃はすべて本気だが。主に頭痛で痛む頭部狙いで。

朔絆がベッドの上で大の字で寝ているのを眺めながら、コウサカはいつものように壁に背を預けながら考えていた。
（記憶の無い俺が、無意識に言葉にした「妹」という単語・・・・・・。俺には妹という存在がいたのか？）
不思議と、そのことを思い出してもコウサカを頭痛が襲うことはなかった。
（そして、城の情景・・・。俺の身体能力から察するに・・・騎士でもやっていた？　そして、王座・・・王に直々に目通りが利くほどの階級だった・・・？）
ふと、ハンター達と共にダンバートン北東から北西にかけて展開している騎士団を思い出す。
「騎士団長・・・」
呟いて、コウサカは目を細める。何か違和感を感じる。
（いや、これは違うか。「妹」についてはティルコネイルにも兄弟や兄妹の者達はいた。何故、今になって兄妹に反応する？　カグヤなような子も特に珍しいというわけでもない・・・）
コウサカは自分の顎に手をやる。酒場でカグヤの肩を持ったのは、この記憶が奥底にあったせいかもしれない。
「ふん・・・」
まあいいか、とコウサカは小さく息を吐く。所詮（しょせん）、どうでもいい

ことだ。
（何かが起こるかもしれないな・・・）
それはただの予感である。ただ、コウサカの予感は悪い意味だけで良く当たる。しかも、どこかの誰かではなく確実に自分に近しい者かそれに連なる者、関わった者に降り掛かるのである。
「・・・反吐（ヘド）が出る」
そうコウサカは、顔を苦々しげに歪めながら低く吐き捨てる。降り掛かるなら自分の身に掛かれというものだ。
「・・・ふぅぅ」
コウサカは一度目を伏せると、深く息を吐き出した。そして、チラリと気持ち良さそうに寝ている朔絆を見る。
「・・・まあいいか」
そう呟くと、コウサカは装備を付け、朔絆だけを持たずに部屋を後にした。

―第十三章―　されど世界は進みゆく

「朔絆、起きろ。出るから剣に戻ってくれ」
『ん、んん～・・・ふぁ。わかったぁ・・・』
半分寝ぼけている朔絆が、ふらふらしながら姿を消す。
結局。
黙って置いて行くと朔絆が烈火の如く怒ると考え直して、コウサカは一度部屋に戻って朔絆を起こしていた。
『おやふみぃ・・・』
まだ朝六時前と早いせいか、朔絆は剣の中でまた眠ってしまった。
「・・・」
コウサカはただ黙って宿屋を後にした。

（また嫌な予感がする・・・）
アリアンロッドを出て、中央区を歩いていたコウサカは何度目になるか分からない予感を感じる。
（何だこれは）
コウサカは軽く頭を振る。必ず何かが「ただ何となく」分かる。
それを予感する能力がコウサカ自身のものなのか、それとも別の何かの介入によって知らされるのかはわからない。だが、コウサカが動かなければ確実に誰かが死ぬ。少なくともコウサカの知り合いの誰かが。
それはまるで、ぶっきらぼうだが優しいコウサカの心を見透かしているかのように、ただ悲劇を知らせる。ただ殺戮を知らせる。ただ誰かが泣くことを知らせる。
だからコウサカは動く。それが何なのか探ろうともせずにただ動こうとする。間違いで、徒労であればそれでいいと。

「え・・・な、なぜですか？」
「伝えましたから」
それだけ言ってコウサカは踵を返して、出て行ってしまった。
「・・・」
官庁一階の受付の席に座りながら、エヴァンはただコウサカの背を見送った。呆然としながらも、その背に感じ入るものがあった。それは彼女にとって懐かしく、辛い記憶。
「・・・さん」
それは擦れて、ほとんど呟きにすらなっていない声だった。
「・・・」
いつも感情を表情に出さないでいるエヴァンの瞳に、強い意思が宿る。それはコウサカが「ある人」に投影されていたのか、それとも別の何かのせいなのかは分からない。
エヴァンは領主バルドラスの下へと伝えに席を立つ。本当に珍しく血相を変えたエヴァンに同僚達に驚きの視線を送られても気にはしない。
ラビダンジョンから、魔族の侵攻があるかもしれないということを伝えるために。

ラビダンジョン最奥部にあるサキュバス達の「家」。
その更に奥に「道」が存在する。それは呪術的に、魔術的に魔符で封印してある。元々サキュバスの一族は呪術・魔術に長け、内在するマナ量（魔力）も並外れていて多く、また生まれたその瞬間から魔法を扱うことが出来るほど魔法に特化した種族である。
そのサキュバスの施した封印となれば、「普通」は破ることを諦める。またサキュバス一族だけが分かる魔術文字も用いられているため、まずそれを知らないと解読すらできないのである。
「お姉ちゃ～ん、お姉ちゃん？」

「あ、あら・・・何かしら？」
腕を組み、足を組みながらソファーに座りどこか、ぼーっとした表情をしていたミレイナはエレナの声で我に返る。弾かれたように顔を向けたせいで、絹糸のような腰に届くほどの金色のロングストレートの髪が金と銀のオッドアイの目にかかって顔をしかめた。
「まさか、・・・あの変な人間のこと考えた？」
「えっ！？　ま、まさかっ。そんなわけないわよ、うふふふ」
その分かり易すぎる様子に、エレナはひとつ嘆息（たんそく）すると、ミレイナの対面に座った。
「あんなののどこがいいのさ・・・」
「だ、だから私は・・・」
「バレバレだから隠しても無駄。お姉ちゃん」
そう言われてミレイナは顔を赤らめた。そんなに？　と言ったような顔である。
「ぇ、えっと・・・い、言わなきゃ、だめ・・・？」
「駄目」
はっきり言われてミレイナは肩を落とした。そして、観念（かんねん）したように顔を上げた。
「はぁ・・・分かったわよ。え、っと・・・何て言うのかしらね」
ミレイナは難しそうな表情を浮かべた。
「あの人なら、本当に守ってくれそうだから・・・」
その言葉にエレナは、はっとしたような表情を浮かべる。
「お姉ちゃんも、あの時のこと、まだ・・・・・・」
「・・・うん」
ミレイナが悲しげな笑みを浮かべた。
「きっと・・・そう、きっと・・・。あの人なら、ただいつも隣に居て守ってくれて、ただ何食わない顔で帰ってきてくれそうだから・・・・・・」
「お姉ちゃん・・・」
エレナが苦しげな顔をする。それを見て、ミレイナは優しく微笑

んだ。
「・・・でも。こうして妹達と、ただ退屈な日常を送れるなら、十分幸せかしらね・・・」
ミレイナはどこか儚げな笑みを見せる。
「こんな時間がずっと続けばいいわね・・・。それに・・・」
「それに・・・？」
「ううん。何でも・・・」
ミレイナはエレナに、寂しげな笑みを向けた。エレナはそれがどんな意味を持っているのか分からなかったが、ただ切実な想いがこみ上げて来て自分の胸を押さえた。
そこで、次女のネルが慌てた様子で部屋に駆け込んできた。
姉妹の中で一番背が高く、剣の扱いが上手い子だった。そして、どこか意地っ張り。ふと、ミレイナの中でそんな言葉が浮かんだ。
「どうしたのかしら・・・？」
「封印がっ・・・、「道」の封印が何か変なんだっ！」
その言葉でミレイナとエレナの顔色が変わる。ひどく危機感を抱いたそんな顔。
「なんですってっ・・・！？　そんなことあるはずが・・・」
「でも、何か変なんだってっ・・・！　ああ、もうっ！　とにかく来てくれっ！！」
「わ、わかったわ」
どこか嫌な予感を覚えながら、ミレイナとエレナは立ち上がった。

ミレイナ、ネル、エレナ。それに、三女リリ、四女アルも血相を変えた三人を見て、一緒に出てきていた。
ラビダンジョン最奥部、そこに「道」と呼ばれる高さ四ｍほどの門が存在する。それは女神がダンジョンに隠した、エリンと魔族の世界を繋ぐ異界の門である。ただ、ラビダンジョンの門はサキュバス達が使われている魔術形式を変えてしまったため、もはや門とは

呼べないものではあるが。
しかし。
「な、何なのこれ・・・」
その門から、闇色の電光が迸っていた。
それは徐々に、封印に使われているサキュバス達が作り出した強力な魔符を焼いていく。
「そんなっ・・・あの魔符にはどれだけの魔力が込められて・・・っ！」
ミレイナは気付く。だが、それは違う。気付きたくなかっただけであった。
「隊長っ！」
「ここに」
ミレイナの叫びに、鎧を身に纏ったメタルスケルトン、メタルスケルトンアーマーが十体、姿を現す。
このスケルトンは死体の骨を操っているわけではなく、「本物の」スケルトンである。個々に意思を持ち、古くからのミレイナ達の家令である。この世界へ逃げて来てからも護衛として在る。
ちなみに、コウサカの時に出てこなかったのは、ただ単に転移魔法が使えないことと、すでにコウサカに敵意がなかったこと、それに一番古参の隊長はコウサカとの格が違いすぎることを本能的に察し下手に刺激しないようにするためである。
隊長が進み出る。
「お嬢様、兵達を出してください」
隊長が一切の油断を感じさせない声色で言う。スケルトンに発声器官など当然無いが、マナの操作により発声を補っている。
「・・・ええ、わかったわ。みんな」
それに４人とも頷き、手を前に出し意識を集中させ始める。全員の身体を淡い青い光が包み始める。
「・・・Ｄｉｌｙｎｗｃｈ　ｆｉ（我に従う）・・・Ｗａｓ（しもべ）・・・Ｆｆｙｄｄｌｏｎ（忠実な）・・・Ｗａｓ（しもべ）・・

・Ｙｍｄｄａｎｇｏｓｉａｄ（出でよ）っ・・・Ｄｉｏｇｅｌｕｆｉ（我を守護せよ）っ・・・！」

呪文を唱え終わると同時、巨大な魔法陣が「家」を中心に現れそこから光が溢れ出す。そして、その中から五十を軽く超すほどのメタルスケルトンが現れ、メタルスケルトンアーマー達の前に整然と整列する。

このスケルトン達はただの元死体であるが、メタルスケルトンアーマー達の動きがフィードバックされており、またメタルスケルトンアーマー達の命令にも従うように魔法が込められている。

「みんな、いつでも戦える準備を」

ミレイナ自身、凄まじい量のマナを全身から迸（ほとばし）らせながら言う。

「・・・わかった」

エレナもマナを両手に集め、いつでも魔法を放てるように意識を集中させる。ネルは女性でも扱いやすいショートソードを片手にもう片方にはアイスボルトを発現させ、リリとアルはスケルトン達の前でマジックシールドをいつでも展開できるように手を前に。

バリバリ、という音と共に最後の魔符が燃え尽きる。そして、ゆっくりと「道」である門が開き始める。

そして、そこから現れたのは、人影。

「やはり、あなたね・・・」

現れたのは、魔族の紋章が描かれた赤黒いローブに身を包み、深く被ったフードで顔を隠した男。

「久しぶりだなぁ・・・小娘。今度は逃さん」

ティルコネイルを襲った男と、同じ男。それはニタリと下卑（げび）たる笑みを浮かべる。

「・・・ディーファ」

ディーファ（Ｄｉｆａ）。ウェールズ語で、「破壊」を意味する言葉を名にする男。主に、魔族の実動部隊は率いず、暗殺や破壊活動、誘拐など単身で動く。子供すら笑って殺すほどの男である。

魔族の世界に居た頃のサキュバス達をポウォールで使えるからと、

家を襲って焼いた。そして・・・、その時にミレイナ達の両親は。
「お・・・」
ミレイナ達を逃がすための時間稼ぎとして、その身を犠牲にした。
「お前ぇえええええええええええっ・・・！！」
エレナがその姿を見た瞬間、目を剥いて一瞬でライトニングボルトを放った。
「ふん・・・」
ディーファが軽く顔を隠すように腕を持ち上げる。バシンッ、という音と共にライトニングボルトが着弾するが、ローブの表面には焦げ目すらなかった。
「エレナっ、落ち着いてっ・・・！」
ミレイナが後ろから、エレナを抱くようにして止める。
「離せっ、離してっ・・・！　こいつはっ・・・こいつはァっ！！」
エレナはミレイナの腕の中で暴れる。その目には、激しい憎しみが宿っていた。
「エレナ・・・」
そんなエレナを、ミレイナは辛そうにしながらも抑える。
「ふん・・・相変わらず、躾のなっていないガキだ」
そう言ってディーファは傲然と腕を組む。そして、言う。
「大人しく付いてくれれば、他の奴等も命は助けてやるぞ？　くくくっ・・・」
ミレイナだけを見ながら。他の者は、まるで害虫を見るように。
「・・・答える必要すらないわ」
ミレイナは嫌悪感もあらわに言う。
「ふっ・・・くくく・・・。くははははっ、ははははは、ははははははははははははははっ・・・！」
ディーファは狂ったように嗤う。さも、あまりの馬鹿さ加減に堪えきれなくなったように。
「くくく・・・だろうな。そうだとも。くくくくく・・・、そうでなければ面白みがない」

その目は、生き物を狩ることが何よりも愉(たの)しいという狂った目。
「そこの金髪を残して他は殺せ」
ディーファの言葉と同時、門からゴーストアーマー達が続々と出てくる。ただ、それは一切の生気を感じさせない、本当に動くだけの動力として魂だけが宿った操り人形だった。
「放てぇっ！」
メタルスケルトンアーマーの隊長の号令が響き、五十以上のスケルトン達は一斉に矢を放つ。
だが、ディーファはマジックシールドをして軽々と防ぎ、ゴーストアーマー達には元々生身など無いためほとんど効果がなかった。
空しく、赤錆(あかさ)びた鎧にいくつかの穴を開けただけだった。
「お嬢様。時間は稼ぎますので、お逃げください」
隊長自らも、剣を構えながらミレイナ達に言う。
ディーファが出てきた以上、勝ち目はないことを察したのである。
ミレイナ達よりも強大な力を誇った、その両親ですら敵わなかった男ゆえに。
「・・・ごめんなさい」
「なに。我等は元よりそのために旦那様より今一度、生きることを赦(ゆる)された者。生き恥を晒(さら)して来た我が身が、ようやく背負わされた使命を果たせる時。お気になさいますな」
ミレイナが謝ると、隊長は静かに闘気を膨れ上がらせながら言う。
「だめっ・・・！　ミハエル、一緒にっ・・・！！」
隊長、ミハエルの覚悟を聞きエレナが怒りからではなく、恐らく永遠の別れとなることを察し、顔を青くした。
駆け寄ろうとするエレナを、ミレイナただ黙っては抱いたまま止める。
「イヤっ・・・！　いやだっ・・やだよっ！　もうお別れやだよっ・・・！」
「エレナ様・・・」
エレナの懇願(こんがん)に、ミハエルの気配が優しげなものに変わった。す

でにゴーストアーマーとメタルスケルトンが斬り合っている中で。
「我等は生前、戦場(いくさば)にて数多の命を殺戮(さつりく)してきた罪人。そんな我等が一時期でも、お嬢様達のお世話役として平穏を与えられた。これ以上の幸せはありませぬ」
最後に、ミハエルは優しげに言う。
「どうかご無事で」
「やだっ・・・離してっ・・・！　ミハエルっ！！」
「・・・行きなさい」
ミレイナがそう言うと、ネリを先頭にリリとアルがエレナを抱えて地上へと向かう通路に向かった。
「やだっ・・・やだっ・・・！！　いやだぁあああああああああっ・・・！！」
剣と剣、剣と鎧がぶつかり合う金属音の中で、エレナの声はよく響き、そして遠ざかって行った。
「お嬢様、あの青年の下へ。彼なら、魔族であるお嬢様達を匿(かくま)ってくれるでしょう」
一人残ったミレイナに、ミハエルは言う。
「あなたは話したことはないでしょう・・・？」
「はい。ですが、見て、聞いてはおりました。またその身に纏(まと)う気配も・・・」
ミハエルは思い出して、身震いをした。
「彼は・・・例えるなれば我等がお仕(つか)えしていた「王」に似た雰囲気を纏っておりました。また、あの言動も全て心よりでしょう」
それは生前、数千の部下を率いた騎士団長の言葉。ゆえに、人の本心を見抜く能力も並外れている。
「彼の元へ。我等はそのための礎(いしずえ)となりましょうぞっ！」
ミハエルは、前列を抜いてきた一体のゴーストアーマーを、鎧ごと手に持った刃渡り百四十ｃｍほどのトゥハンドソードで易々と切り裂いた。
「・・・出来ることなら、生き残ってね。武運を祈るわ」

「姉さんっ、早くっ・・・！」
ネルの切迫した叫び声がミレイナの耳へと届く。
「・・・また、会いましょう」
寂しげな笑みを浮かべながら、ミレイナはそう言った。別れの言葉ではなく、再会のための言葉を。
「御意（ぎょい）」
ミハエルのその言葉を聞くと、ミレイナは一度も振り向かずにネル達の下へと走って行った。そこには泣きじゃくって暴れるエレナの姿が見えた。
「ふん、つまらん。三文芝居でももっとマシだろう」
ディーファは、エレナの涙を、ミハエル達の覚悟すら嘲弄（ちょうろう）する。
「では、お相手願おうか。死に損ない共」
「外道風情と話す口など持たん」
改めてミハエルは剣を構え直して、魂だけの人形と化したゴーストアーマー達の後ろにいる男を殺すために、感覚を研ぎ澄ませた。

官庁、領主執務室。
「はぁ？　なんだそりゃ。落ち着けってエヴァンちゃん」
「落ち着いています」
言葉とは裏腹に、その目は必死だった。バルドラスは、珍しく感情をあらわにしているエヴァンに困惑していた。
「つまり・・・何だ？　坊主から聞いたから伝えに来たのはわかった」
「ですから、すぐに部隊を」
「待った、待った・・・」
バルドラスは困ったようにこめかみに手をやる。そこで、ふと思い至る。
「もしかして・・・昔のあれかい？」
「・・・」

ピタリとエヴァンの動きが止まった。それにバルドラスは嘆息した。
「あの坊主なら問題ねぇって。知ってんだろ？　あの坊主の噂。それだけの実力は持ってんよ」
「・・・はい」
もう一度、バルドラスは嘆息する。そして、確かに似ているなと思う。お人好しで、優しかったエヴァンの父親に。
一度、バルドラスは目を伏せる。そして、大きく溜息を吐いた。
「はぁぁ・・・。エヴァンちゃん、ガルドーをエントランスに呼んどいてくれ」
「で、ではっ」
「ああ。ただし、そんなに数は出せねぇからな」
「ありがとうございますっ！」
そう頭を下げながら見せたエヴァンの笑顔は、とても魅惑的で可愛らしかった。
「どういたしまして、だ」
バルドラスは顔を背けて、禿頭の頭を掻いた。
思わずイチコロになりそうな笑顔に、まあこんな笑顔見れんなら安いもんか、と思いながら。

「くっそっ・・・！　こいつら一体どこからっ！？」
ネルは目の前のゴーストアーマーにアイスボルトを喰らわせ倒すと、魂の宿っている胸部を思い切り剣で串刺しにした。
「たぶん、私達が使っていた転送陣が見つかったからでしょうね・・・。何故、使えるかはわからないけど」
ミレイナは、心中ではそれが意味することを悟って、しかしあえて気付かない振りをして、沈痛な面持ちを浮かべながらファイアーボルトをゴーストアーマーに放ち、粉々にする。
ただ、何故かミレイナ達は使えなかった。自分達の作ったモノの

はずが。恐らくはディーファの仕業だろう、とミレイナは必死ながらも考えていた。

「・・・みはえる・・・みはえ、るぅ・・・ぅっ・・・ぅう・・・」

エレナは泣きっぱなしだった。

思えば、エレナにとってミハエル達は親代わりだった。ディーファの襲撃で失ってしまった、大切な両親に代わってよくお世話役として相手をしていた。

「エレちゃん・・・」

リリはマジックシールドを展開させ、周りのゴーストアーマーからの斬撃を止める。

「あたし達の分は、エレナが泣いてくれる・・・。はっ！」

アルは五つの鋭く尖ったアイスボルトをゴーストアーマー達に浴びせ、串刺しにしていく。

「しぶといな。くく、そうでなくてはな」

気付くと、後ろ側の通路からディーファが悠々と歩いてきていた。ディーファが軽く腕を上げると、ゴーストアーマー達の動きが止まる。

「あの死に損ない共のせいで、無駄な時間を食ってしまった。まさか、たった六十程度で四百もやられるとは思ってもいなかったぞ。前もそうだったが、護衛は優秀だな」

ダンジョンの中は狭い。ゆえに、展開できる数も限度がある。一度に戦える数に限りがあるなら、少数でもその者の腕によって、有利不利は逆転する。

だが、ゴーストアーマーは魂が込められただけの人形。換えなどいくらでもある。

「くくく、あの死に損ない共に敬意を称し、もう一度だけチャンスをやろう。捕まれば他の奴等も命だけは助けてやろう」

そんなことはどうせ嘘だと言うのは、全員考えるまでもなく理解した。

だから。

「リリ、アル」

ネルは剣を収めながら言う。

「そう、ね・・・。それがいいと思う」

リリは寂しげな表情を覗かせながら言う。

「ごめんね、ミレ姉」

ネルとリリ、アルはゆっくりとミレイナとエレナを振り返る。ディーファは何かの余興かと、傲然(ごうぜん)と腕を組んで待っている。

「おねえ、ちゃん・・・？」

「まさかっ・・・！」

ネル、リリ、アルの全身から凄まじい量のマナが溢れ出し、エレナとミレイナを包む。それはどう考えても、それぞれが持つマナ量を遥かに超えているものだった。

「っ！？　貴様ら、何をっ・・・！」

異変に気付いたディーファが、慌てて何かをしようとするが遅かった。

「待っ」

ミレイナが、三人が何をしようとしているか理解して叫ぼうとする。だが、それも遅い。三人は寂しげな笑みを浮かべて、最後に一言口にする。

「「「・・・Ｐｏｎｔｉｏ（転移）・・・」」」

そして、ミレイナとエレナの姿は消える。それと同時、三人から溢れ出るマナはさらに増大した。やはり、絶対に足りないほどのマナ量だった。それは混ざり合い、激しく電光を迸(ほとばし)らせる。

三人は光の中からディーファを睨む。

「「「・・・絶対に赦(ゆる)さない」」」

「きさっ」

そして、大爆発が起こった。狭い通路ゆえに、青い爆炎は凄まじい勢いでダンジョンの中を、後続のゴーストアーマーを消し去りな

がら奔って行く。
三人がマナを補うために使っていたモノは、自分の命だった。

地面が揺れた。地震のように定期的な揺れではなく、一瞬だけとても大きく。そして、強い魔力の気配が感じられる。
『ねえ・・・』
「恐らくな」
コウサカがそう答えると、朔絆は黙り込んだ。心なしか背中の剣から漏れる光も小さくなった。
マナ、魔力とは人、魔族すべてが生まれてより内在している力のことである。扱いには、例えば無意識的に動かしている手足を意識的に動かすように、まず無意識の中で使っている意識を認識することから始まる。しかし、扱いこなせれば万能足り得る力である。
そして、マナは「命」とも言える。すべて使い果たせば動けなくなることもあり、最悪体内の魔力喪失でショック死する場合もある。
そんな力であるが、すべてを自由自在に操ることが出来れば、自らの「命」すら力として変換が可能である。そして、それを暴走させれば・・・。
そこで、コウサカは疾走しながら気付く。
(何故、俺にわかる?)
大地の揺れをその身に感じながら、コウサカは不自然に感覚が冴え渡っていくことを感じる。
(・・・そうか。だが、今は好都合だ)
コウサカは鋭く目を細める。
「今度こそ・・・」
『コウ、サカ・・・?』
そのコウサカの発した声色に、朔絆は背筋が冷たくなることを感じた。それは恐怖ではなく、自分の知らないコウサカを感じたゆえに。

「行くぞ。朔絆」
『・・・。うんっ・・・！』
だが、朔絆はただ信じる。
再びこの世界に生まれ出でた自分が唯一（ゆいいつ）、心から信頼するただ一人の・・・だから。

爆音にダンジョン全体が揺れ、女神像の安置されているダンジョンの入り口にもそれは激しく届いた。
「ネル、リリ、アル・・・」
ミレイナは泣きじゃくるエレナの肩に手を置きながら、胸の上に手を当てせめて三人が安らかに眠れることを祈る。
ただ移動させるだけなら、三人が命を掛ける必要などない。だが、ここは女神が魔族を封印したダンジョンである。魔族であるミレイナとエレナが外に出るためには、その封印を破壊せねばならない。
そこで、三人が命まで燃やして捻（ひね）り出した、驚異的な量のマナの暴走である。封印が破壊された証拠に、いつも泰然自若（たいぜんじじゃく）とある女神像は無残に砕けて、破片が地面に散らばっていた。
「・・・おねえ、ちゃぁん・・・ネリ姉達が・・・ミハエルも・・・・・・いな・・いなっ・・ぅっく・・・」
エレナは、ミレイナにしがみ付いて泣き続ける。ただ悲しみを吐き続ける。
「・・・」
そっと、ミレイナはエレナを抱き締めようする。
そこで。
「チッ、コマのほとんどを道連れにしやがって・・・。さすがに少し焦ったな」
ローブに焦げ目を残したディーファが、無慈悲に奥の通路から歩いて来ていた。
「ひっ・・！？」

エレナはディーファを見た途端、ペタリと尻餅を着いて立ち上がれなくなった。大事な、大切なモノを全て奪い去っていくディーファに対して、憎しみよりも恐怖が勝ってしまったようだ。

「エレナっ・・・？！　くっ・・・」

ミレイナはエレナを背に隠すように立ち上がる。その目には明らかに勝ち目はないが、それでも反抗しようとする意思があった。

「くくくっ・・・、いいぞ。その方が狩り甲斐もあると」

そこで、ディーファの言葉が止まる。

ミレイナとエレナの後ろを凝視して固まったディーファは、久しく感じていなかった感覚に総毛だった。今ダンジョンに入ってきた男を見て。

それは、生命の危機から発せられる正しく本当の「恐怖」だった。

ラビダンジョンに到着したコウサカは、ミレイナとエレナ、それに見覚えのある男を見て頭の中が完全に切り替わったことを感じる。その目的は、ただひとつ。

殺さねば。

「なっ！？　き、貴様はっ・・・！！」

男が何か言うが、コウサカには何の意味も成さない。

コウサカの全身から凄まじい勢いで殺気が吹き出し、それと同じくして人間が持ち得るはずがない量のマナが迸る。

「ひっ・・・！」

男が顔を引きつらせる。それは無理もない。

「・・・殺す」

本来、不可視であるはずの殺気が、迸り、立ち上るマナに混じり合うことで見えたのである。

それはゆらゆらと、まるで炎のようにコウサカの全身から立ち上っていた。それは意思でも持っているかのようにディーファだけに向き、じわりじわりとその足元に伸びていく。

ゆっくりと、コウサカは腰のバスタードソードを引き抜く。その刀身にすら、殺気の混じったマナがじわじわと宿っていく。
「あ・・・・あっ・・・・」
異常な殺気に完全に呑まれまともに声すら出せなく、そして動けなくなったディーファに向け、コウサカはゆっくりと剣を握った手を上げていく。
その顔は。

「死ね」

到底、人とは呼べなかった。もはや、コウサカという人間の片鱗（へんりん）すら残っておらず。
それは人というよりは、まるで・・・。
『ダメっ！！』
突然、朔絆が完全実体化をして、コウサカに正面から抱き付いた。
コウサカの動きも止まる。
「で、Ｄｙｃｈｗｅｌｙｄ（帰還）っ！」
動きが止まると同時、殺気も霧散し呪縛から脱したディーファは、すぐに脱出の魔法を唱え姿を消した。
『ダメっ・・・！　ダメ、だよぉっ・・・そんな顔・・ダ・・メ・・・だか、らっ・・・』
「朔絆・・・」
我に返ったコウサカは、剣を手放すとゆっくりと朔絆を見下ろす。
『いつも、みたいにっ・・・いつもみたいにっ・・・！　いつもみたいにバカでいてよっ・・・。そっちにいっちゃダメ・・・ダメぇっ・・・！！』
そっち、とはどんなことなのかコウサカには分からない。ただ、失っているはず記憶の何かが反応して、何となく理解する。
「俺はここにいる。もう二度と無いから安心しろ」
泣きながら止めてくれた朔絆を、コウサカはしゃがみそっと抱き

締めてやる。普段ならまずやらないことであるが、ただ何となく、コウサカはそうしてやった方がいいような気がしたのである。

『うん・・・うん・・・だいじょうぶ、だから・・・』

朔絆は心底安堵したような顔で、ただ泣きながら何度も何度も頷いた。

「・・・」

唖然（あぜん）とするミレイナとエレナを気にせず、コウサカは目を鋭くする。

（今の感覚・・・やはり、そうか。だが、「覚えた」。・・・もう二度とやらせん）

ナユキもそうであるがやはり自分もそうだったか、とコウサカは考え至る。

『・・・コウ、サカ・・・・・・』

泣きながら腕の中にいる朔絆の頭を優しく撫でながら、コウサカは虚空（こくう）を睨む。

そして、思った。

（女神・・・やはり、敵なのかもしれないな）

―第十四章―　護るという意思

場所はアリアンロッドのコウサカの自室前。
「食事は？」
「いえ・・・大丈夫です。私達サキュバスは、大気中のエルグやマナを取り込んで身体機能のエネルギー源を補っていますから。ですけど、ここは「家」の場所よりも魔力濃度が低いですから・・・」
その分腹は空く、というわけかとコウサカは受け取る。
「わかった。その時は言ってくれ」
「ごめんなさい・・・。ご迷惑かけて」
ミレイナは申し訳無さそうに、コウサカから目を逸らすと下を向いた。
「万が一の時は。そう言ったのは俺だ。気にしなくて良い」
「は、はい・・・あの」
視線を戻したミレイナは、言い辛そうにしながら顔を赤らめた。
「お、おやすみなさい」
「ああ。見張りはしておく。安心しろ」
「・・・はい」
ミレイナは安心したのか少し微笑んだかと思うと、静かに扉を閉めた。
「さて」
コウサカはその扉の対面の壁に、灰色のアンダーウェアに、下半身の鎧のみという身軽な格好のまま背を預けながら座る。
その傍らにはカイトシールド、胡坐（あぐら）をかいた足の上にはバスタードソードが置いてある。
ふとコウサカは、ミレイナとエレナのいる隣の部屋、ナユキの部屋を見る。
「・・・問題を起こさないといいが」

ナユキの部屋に相部屋させた朔絆（さき）のことを考えて、コウサカは少し不安を覚える。
「まあいいか」
そうさっさと考えを放棄して、コウサカは感覚を研ぎ澄ませる。
ネズミの走る音すら感じ取れるほどに。
そして。
（・・・二度と、俺の中へ侵入させません）
その目は、断固として、鉄壁なまでの光を湛（たた）えていた。
ミレイナ、それにエレナが何故、アリアンロッドにいるかと言うと、時は戻る。

ラビダンジョンで朔絆が安心して剣の中に戻り、コウサカが立ち上がった頃。
「あ、あなたは・・・なんで・・・」
ミレイナが、信じられないという表情を浮かべながら、コウサカを見た。エレナはミレイナに抱きついていた。
「すまない。間に合わなかった」
コウサカは、ダンジョンへ潜っていく方の通路を警戒しながら、振り返らずに詫びる。
「そんな、あ、えっと・・・」
そんなことはない。
そう言おうとして、ミレイナは言葉を途切らせる。確かにコウサカが間に合っていれば、ネリ達も、ミハエル達も助かったであろうから。
「何で・・・、何で来なかったっ・・・！！」
ミレイナに抱き付いていたエレナが、唐突（とうとつ）に顔を上げたかと思うと、コウサカをキッと睨み付けながら、そう言い放った。
「すまない」
だが、それが八つ当たりでしかないと分かっていても、コウサカ

は詫びる。
「・・・おねぇちゃん・・・みはえるぅ・・・・・・」
しかし、エレナはすぐに顔をくしゃっと崩れさすと、またミレイナの胸に顔を埋もれさせて泣き始めた。
「すまない」
やはり、振り返らず警戒しながら、コウサカは詫びる。
「いえ、気にしないで・・くださ い・・・。あなたが来てくれなかったら、私達も・・・」
ミレイナは静かに目を伏せる。
そして、ふと思い出す。先ほどのコウサカを。ディーファすらも恐れ慄(おのの)かせた、異常なまでの存在感を。
「あなたは、一体・・・」
その時、外からガシャガシャと、金属が擦れ合う音が響いてくる。
「っ・・・！」
そして、ぬっと現れた相手に、ミレイナは声にならない悲鳴を上げた。
二mを超えるほどの身体を黒い鎧で身を包み、冑(かぶと)のひさしの間から見える瞳は爛爛(らんらん)と光っていた。
その目が、ミレイナとエレナを向く。しかし、驚いたように少し見開いた。
「おい、坊主。こりゃぁ、どういうことだ?」
その声に、コウサカはようやく振り返る。そして、兜を脱いで脇に抱える。その顔は、いつも通り冷静そのものだった。
「保護したサキュバス達です」
「んなこたぁ、見りゃ分かる。保護たぁ、どういうこった? 魔族の侵攻だの何だのってのは、どうなった?」
黒い鎧の男、バルドラスは呆れたようにコウサカに言う。
「それなら、もう心配はないでしょう。それより、領主様。お願いしたいことがあります」
「はぁ? まあ、いいがよ。何だ?」

「その二人の保護を認めて頂きたい。また、ダンバートンへ入ることを許可して頂きたい」
その言葉に、バルドラスの目の色が変わる。
「てめぇ・・・、意味分かって言ってんのか？」
コウサカは黙って頷く。
「ふざけんじゃねぇぞ。魔族を街に入れろだと？」
だが、とバルドラスは一旦、言葉を切る。
「理由を聞かせてみろ。てめぇのことだ。操られているとか、そんなオチはねぇだろ」
しかし、バルドラスは油断無く腰を低くした。そして、全身から威圧するような気配を発する。
「・・・」
チラリと、コウサカはミレイナとエレナを見る。そして、今からする話は二人には辛いだろうと思う。
「領主様、申し訳ないですが外でお話願いたい」
「はぁ・・・？」
コウサカは、ミレイナに近づくその肩に軽く手を置く。
「少し、待っていろ」
「・・・はい」
小さく、しかし強くミレイナはエレナを抱き締めながら頷く。
それを確認すると、コウサカは領主と、その護衛達と共に地上へと上がって行った。
「・・・エレナ」
上がって行く様を見ていたミレイナは、静かにエレナを優しく抱き締めた。

「で、どういうわけだ？」
地上へ上がると、百近い人数が整列していた。先頭にはガルドーの姿も見える。

「・・・申し訳ない。人払いを」
「・・・わかったよ」
兜を外し脇に抱えたバルドラスが手を振ると、それだけで伝わったのか部隊は離れて行った。
「ありがとうございます」
コウサカは頭を下げる。そして、上げると今度こそ話し始める。
「俺もまだ詳しく聞いたわけではありません。なので、彼女らより聞いたことを統合してお話します。まず、二日前の戦闘、いやそれ以前のモイトゥラ戦争。それを仕掛けて来たのは、ポウォールという勢力で魔族そのものというわけではありません。先ほどのサキュバス達はポウォールへの従属を嫌い、逃げて来てラビダンジョンに潜んでおりました」
コウサカは自分の知り得る限りの情報を、バルドラスへと話す。
魔族の中にあるポウォールというモノ、その神、同族に何をしてきたか、そしてたった今ラビダンジョンで何があったか。
「・・・くそ共だとは思ってたが、まさかそこまでたぁな。ちっ・・・胸くそ悪ぃ・・・・・・」
バルドラス自身、第二次モイトゥラ戦争の当事者ゆえに、忌々しそうな表情を浮かべた。
「で、女神像が破壊されたってのに、もう大丈夫とはどういうこった？」
バルドラスはサキュバス達のことを保留して、領主として最大の懸念事項を口にする。
「・・・まだ視認して来たわけではありませんが、マナの暴走によるものと思われる魔力波を感じ取りました。地中深い位置より。そして、サキュバス達は五人おりました。魔族であるサキュバスが入り口まで出て来られていること、そこに二人しか姿がないこと。また、あの泣き続けている子から察するに・・・」
「ああ、もういい、もういい・・・。ったく、敵はただの敵であれば簡単だってのによぉ・・・」

バルドラスの脳裏に、地面に座り込んでいた二人のサキュバスの姿が浮かぶ。そして、ギリリと歯を噛み締めたかと思うと、

「だぁあああああっ！　くそったれがぁあああああっ・・・！！」

バルドラスは近くにあった、ダンジョン入り口にある石柱を手甲をはめた手で思い切り殴りつける。バキャリ、という音と共に老朽していた石柱の半分ほどが粉々になる。

「・・・坊主、最後に聞くぞ。あのサキュバス達が人間に害をなさねぇって保障はあるか？」

そう問うてくるバルドラスの顔は、数万の民の命と生活を背負う領主の顔をしていた。

「もし、暴れたとしたら俺が全て責任を取って処理します」

「坊主、てめぇ・・・」

コウサカの目には、バルドラス以上の断固とした意思が宿っていた。初めて会った時の目は、まるで感情を押し殺して、ただ冷徹だったというのに。

「魔族とは言え、女を殺せんのか？」

「それしか手がないと言うなら」

バルドラスは試しの意味を含めて言ってみたのだが、なんの逡巡もなくコウサカは是非を問わずただ行なうと答えた。また、その目も真っ直ぐに。

「・・・本当に、何モンだよ。てめぇは」

バルドラスはそう小さく呟いて、溜息を吐く。

「・・・わかった。許可してやるよ」

「ありがとうございます」

コウサカは膝を着いて最敬礼をバルドラスへ送る。

ふと、コウサカは気付いた。

「領主様、もうひとつお願いしたのですが」

「今度はなんだ？」

「彼女らの衣服を工面して頂きたいのです。あの格好ではサキュバスとすぐに分かりますから」

「ああ、なるほどな・・・」
バルドラスは、コウサカの頼みに溜息を吐く。今、最悪殺すとまで言ったサキュバス達のことをしっかり忘れていないことに。
「わかった。ちょっと待っとけ。その間・・・」
「では、私はダンジョンの奥を見てきておきます。その間の警戒はお願いします」
「・・・ああ、行ってこい」
バルドラスが言おうとしたことを、自分からコウサカは言った。そのあまりにも自分から苦労を背負う姿勢に、バルドラスは呆れて溜息を吐いた。
公平で怖いくらいに。
アルシアの言葉の意味が、バルドラスにもよく分かった。

ミレイナ達はバルドラス達の持ってきた仕切りの中で、ワンピースとロングカーディガンという格好に着替え終わり、ダンジョンの奥を調べに行っていたコウサカも戻って来ていた。
バルドラスがコウサカに聞く。
「どうだったよ？」
「完全に塞がれていると思います。二階層より下は壁の破損がひどく、亀裂が無数に奔り、危険過ぎて進めませんでした。恐らく、あれより下の階層は崩落しているでしょう」
「ふぅむ・・・わかった。ご苦労さん」
気難しげな表情を浮かべながら、バルドラスはコウサカは労った。
そして、チラリとミレイナとエレナを見た。
「そっちは任せたぞ」
「了解しました」
コウサカが最敬礼で答えるとバルドラスは一度頷き、地上への階段を上がって行った。そして、ダンバートンへ戻ることを告げる大声が響き、大群の足音が遠ざかって行った。

コウサカは二人に目を向ける。
「さて、行こうか」
泣き腫らしたエレナを抱え起こしているミレイナが、その言葉に少し目を見開いた。
「あの、どこへ・・・？」
「領主様が君らが街へ入ることを許してくれた。とりあえず、俺の泊まっている宿屋へ行く。しばらくはそこへ居てもらうことになるだろう」
「・・・」
そう伝えると、ミレイナとエレナは不安そうな表情になる。
「安心しろ。俺が守ろう」
「まもれ・・・」
エレナの顔に、怒りが浮かぶ。
「お姉ちゃん達を守れなかったくせにっ・・・！！」
「エレナっ・・・」
「いや、いい」
ミレイナがエレナを、弱々しくも叱ろうとすると、コウサカがそれを止めた。
「実際、その通りだ。俺はただ、あの男を殺し損ねただけだ」
「でも、私達を守るなんて約束は一度も・・・。それに・・・様子見にも来てもらいましたし」
「ああ、そうだな」
何の迷うも無く、コウサカはただ認める。
「いや、だからこそ俺は君らを守ろう」
コウサカは強い瞳を見せる。そして、その全身からも二人を包み込むような気配が溢れ出す。それは例えるなら、父親の腕に抱かれているような、そんな心強い気配。
「ほん、とう・・・？」
その気配に、さっきの威勢は完全に霧散させたエレナが、弱々しく言う。

「お姉ちゃんと、ずっと一緒にいられる・・・？　もう、お別れしなくてもいい・・・？」
その精神的に弱り切ったエレナは、希望に縋りつくように言う。
「ああ、いられる。別れることもない」
虚勢でも、見栄でもなく、コウサカはただそう断言する。まるが、それが当たり前であるかのように。
最後にコウサカは、朔絆にそうするようにエレナの頭の上に優しく手を置く。
「だから、今は俺と一緒に行こう」
「・・うん・・・わか、った・・・・・・」
エレナがゆっくりと目を閉じたかと思うと、気を失い前屈みに倒れそうになった。それをミレイナが慌てて抱えて止めた。
「・・・エレナ」
険が取れ、安らかな顔になり気を失ったエレナを、ミレイナは優しく抱き締める。
「その子は、引き受けよう」
そう行ってコウサカは、膝を着いて背を示す。
「いえ、この子は私が・・・」
そう言ってミレイナは、エレナを自分の背に背負う。
「そうか。では、行くとしよう」
コウサカは立ち上がると、地上への階段を示す。

アリアンロッドにコウサカがミレイナとエレナと連れて帰ってくると、カリンが目を丸くして固まった。
「こ・・・」
「こ？」
下を向いてふるふると震え始めたカリンが言ったことを、コウサカは繰り返した。
「ここは女連れ込む宿じゃないぞぉおおおおおおおおおおーっ・

・・！！」

カリンが突然、大爆発した。

「連れ込む宿？　いや、それはいいか。この二人には俺の部屋に泊まってもらうが、俺はその部屋からは出て休む」

「はぁ・・・？　なにそれ？」

カリンが怪訝な表情を浮かべる。

「事情があってな。悪いが話すことはできない。迷惑と思うなら出て行くから安心しろ」

「だ、誰も出てけ、なんて・・・」

急速にカリンの声が小さくなる。

「すまない。迷惑をかけるつもりはないから、このまま泊まらせてくれると幸いだ」

「だ、だから、別に出てけ、なんて誰も・・・」

視線を泳がせ、何故かあたふたと慌てながらカリンは言い繕うように言う。

「そうか。感謝だ、カリン」

「え、う、ぅん・・・」

軽く頭を下げるコウサカから、カリンは視線を外した。

「行こうか」

コウサカは、エレナを背負ったミレイナを促して二階への階段を上がっていく。

「・・・」

カリンはそれを、どこか呆気に取られたような表情で見つめる。

人は勿論、動物も殺したことのない、完全な素人のカリンにも分かった。コウサカの雰囲気が変わっていることに。

そして、その原因は恐らくあの二人。だが、その二人をコウサカは自分の部屋を空けてまで泊めるという。

「本当に変な奴・・・」

まだ数日の付き合いであるが、厄介事を抱え込んで来たことは、カリンにも分かった。

「この部屋を使え。寝床はあとからもうひとつ用意する」
そう言いながらコウサカは自分の荷物を手に取る。荷物と言っても、カバンひとつに全て収まっているため何の手間もないが。
コウサカが目を向けると、ミレイナがエレナをベッドの上に横たえているところだった。
（・・・目を覚ましたら、辛いだろうな）
そんなことを考えていると、ミレイナがコウサカに振り返った。
その顔には、ようやく一息吐けた安堵感が浮かんでいた。
「・・あの・・・もしかして、このお部屋は」
「ああ、俺の泊まっている部屋だ」
先ほどの話を聞いていればそれは気付くだろう、とコウサカは思いながらミレイナを見る。
何故かその頬は、ほんのり赤かった。
「どうかしたのか？」
「あ、いえ・・、その、何でもありません。・・・あら？」
すん、とミレイナが匂いをかぐ。その中に、明らかに女の匂いが混じっていることに気付いた。それも、ちょっと入って出て行ったくらいのものではなく、最低でも一晩くらい居たくらいの度合い。
「ひとつ聞いてもいいですか・・・？」
「ああ」
ミレイナの表情は、どこか硬かった。
「誰か・・・女性と一緒に泊まっています？」
「ナユキか？　あの子の部屋なら隣だが」
「あ、いえ・・・そうではなく、この部屋に一緒に、という意味で・・・・・」
そこで朔絆が完全実体化して出てきた。ものすごく凶悪な顔をしながら。
「ああ、朔絆と一緒だな」

『何か文句、ある？』
朔絆がギロリとミレイナを睨む。明らかにそうであるミレイナの様子に、朔絆の目はメラメラと燃えていた。サキュバスであるミレイナが、絶世の美女と呼べるほどの容姿ゆえに。
しかし、朔絆はすぐ隣にいるため、その眼光にコウサカは気付かない。
「まあ、ベッドはこいつが占領しているから、俺は床で寝ているがな」
コウサカが少し苦笑を浮かべながら、傍らにいるの朔絆の頭の上にポンと手を置く。それだけで朔絆の表情が緩んだ。
コウサカの言葉に、ミレイナがどこか、ほっとした表情を浮かべた。
「い、一緒に寝ているわけではないのですね・・・」
そんなミレイナの言葉に、朔絆の全ての動きがピクリと止まった。
『い、っしょに・・・？』
朔絆は、よくよくその意味を反芻する。
『っ・・・！？』
瞬間、その顔は真っ赤になった。
『な、なななに言っちゃてんのっ・・・？！　ねっ、ねるってっ・・・！！』
「急にどうした・・・？」
コウサカが不審そうに、朔絆を見下ろした。その声に朔絆はコウサカに見上げてしまう。さらに真っ赤になった。
『え、なっ、何もなくてっ・・・！』
微妙に言葉がおかしくなった朔絆は、目を逸らすとエレナの寝かされているベッドを見てしまった。
『あ、ああぁ・・・、じ、じゃっ！』
ものすごく慌てて朔絆は姿を消した。
「・・・ふぅ。まあ、とにかく」
自分の言葉に、自分で顔を赤らめているミレイナをコウサカが見

る。
「窓は、恐らくそちらで防御魔法でも掛ければ、俺が気付いて入ってくるより先に侵入されるということはないだろう。入り口側は俺が見張っておくから、安心して休むといい」
それだけ伝えると、コウサカは荷物を持って部屋を出ようとする。
「あ、待ってくださいっ」
それを慌ててミレイナが、コウサカを引き止める。
「どうした？」
「ありがとうございます。あと、ごめんなさい、その・・・お部屋を使わせて頂いて」
それに、ああ、とコウサカと頷く。
「気にしなくて良い。それに、俺は元々床で寝ているからな。背中の娘には、ナユキの部屋で相部屋させて我慢してもらう」
不思議と、朔絆は何も言ってこなかった。
しかし、その理由がコウサカに分かるわけは無く、変だなと首を微かに傾げた。
「何にせよ。最低でも後、三日は動けない。その間、俺は君らを守ろう」
「三日・・・？」
「ああ。君らから譲ってもらった黒魔族通行証がな」
コウサカはミレイナに、クリステルのことは伏せて通行証を作り変えていることを話した。当然、あの通行証のことをよく知っているミレイナは同族の存在に勘付いたが。
「そう、だったんですか・・・。すみません、私が渡す時に気付いていれば・・・」
「俺も知らなかった。それに、魔族である君に人間のことを分かれというのが無理な話だ」
コウサカは一度目を伏せると、再び顔を上げる。
「君らは・・・、今は自分のことを考えろ。それだけの時間は俺が作ろう」

コウサカの見せた目は、確固たる光が宿っていた。そしてその身に纏う気配も。

「・・・はい。ありがとう、ございます・・・」

その全身で守るということを現すコウサカに、ミレイナは少し涙目になって礼を言う。

「ああ」

そう一言だけ言うと、コウサカは部屋を出て行った。出て行ったと言っても、扉を開ければすぐそこにいるが。

「・・・」

少しの間、ミレイナはコウサカの出て行った扉を見つめていたが、ふぅと一息吐くとエレナの寝ているベッドに腰掛けた。

「・・・エレナ」

そして、優しくエレナの髪を撫でた。

（やはり、変わったな・・・）

コウサカは廊下の壁に背を預け、自分の手を見つめながら考えていた。

（より意思が強くなった・・・とでも言えるか。そして、相手を殺そうとする時も・・・）

ぐっとコウサカは手を握り締める。

（あれは俺か・・・？　それとも・・・、やはり俺はそのために？・・・いや、現状では断定するには無理があるか。そうだ、今の俺は考えるよりもやらねばならないことがある）

自然と、それは口に出た。

「守らねば・・・今度こそ」

そこで気付く。

（「今度こそ」、だと・・・？　ラビへ行く際にも口に出た言葉・・・）

ビリッ、とコウサカは自分の頭の中で、電流でも走ったかのよう

な痛みを覚える。何かが記憶の中で蠢(うごめ)いた。
（守る・・・護る・・・衛(まも)る・・・）
そう、心中で繰り返していると、無意識的にコウサカの口が動いた。
「・・・イ」
「なに・・・しているんですか？　そんなとこで・・・」
その声に、コウサカは我に返る。
コウサカが目を向けると、ナユキが階段を登り切ったところで立っていた。学校から帰ってきたのだろう。
「ああ、おかえり」
「あ、はい。ただいまです」
自分の部屋の前で、荷物を傍らに置きながら考え事をしていれば、それは不自然だと思われて当然だろう。
「どうしたんですか？　こんなところで」
トタトタと、ナユキは階段のところからコウサカに近づく。
「ふむ。説明すると長いから、結果だけを言おう。俺の部屋はサキュバス達に貸している。荷物と朔絆を君の部屋に置かせてもらえないか？」
「・・・え？」
ナユキは話の内容が全く理解できず、キョトンとしながらコウサカを見た。何の冗談か、という顔である。
「・・ぇっと・・・本当ですか？」
「ああ」
何の逡巡(しゅんじゅん)もなく、コウサカは答える。
「えぇと・・・」
ナユキもコウサカの正直な性格は知っているが、事が事だけに俄(にわ)かには信じられない。
「危険はない。それは断言する」
「あ、あの、それはいいんですけど・・・」
ナユキの顔には、危険とかそういうことではなく何故いるのか、

と書かれていた。
「ラビで知り合ってな。魔族の侵攻だの何だのと物騒だからと、特別にダンバートンに入れてもらった。俺、個人的には恩もあるため、な」
コウサカは事実の半分以上を隠して話した。とてもではないが、辛すぎるだろう。
（この子は、俺のように汚れてはいけない・・・）
それは直感的なものであった。だが、コウサカはそれを何の躊躇(ちゅうちょ)もなくそれを是(ぜ)とした。
こんな子が狂ってはいけない。
「・・さん・・コウサカさん・・・？」
はっとして、コウサカは我に返る。
いつの間にか外を見ていた視線を戻すと、ナユキが心配そうにしていた。
「あ、ああ。すまない」
「いえ、いいんですけど・・・大丈夫、ですか？　なにか、すごく遠くに感じましたけど・・・」
心配そうに見るナユキの言葉に、コウサカはひとつ首を傾げる。だが、まあいいかとさっさと考えを放棄した。
「いや、物思いに深く耽(ふけ)り過ぎた。気にするな。それより、荷物を置くために部屋を貸してほしいのだが」
「ぇ、あ、はい。いいですよ、それくらい」
それにもうひとつ、こちらの方がより問題のことをコウサカは話す。
「朔絆も頼めるか？　最近、剣から出て寝ることを気に入ったようでな」
「精霊さん、ですか？　はい、大丈夫です。ただ床で寝てもらうことになっちゃいますけど・・・」
ナユキの快諾(かいだく)に、コウサカは一息吐く。
「寝床は後で用意する。問題ない。では、荷物を置かせてもらえる

か？」
「はい、どうぞ」
コウサカはナユキの部屋へと入り、カバンを置く。
そんな時、落ち着いたのか朔絆が声を響かせた。
『ちょっと！　わたしのベッドはどうすんのよっ！！』
「だから、それは今から用意すると・・・」
『さっさと用意しなさいっ！！』
朔絆が突然完全実体化をして出てきて、勝手なことを捲くし立てた。
勿論、それはコウサカがミレイナ達に優しくしていることや、朔絆がナユキの部屋に寝させられることになったことへの不満ためであるが、コウサカは相変わらず気付かない。
「・・・ふぅ」
カバンを置いたコウサカは溜息を吐くと、ナユキにひとつ礼を言いながら退出する。クレイモアを置こうとしたら何故か朔絆がうるさかったため、剣は背負ったまま。
コウサカはそのまま一階へ降り、カリンの親父さんに寝具を二つ借りに行った。

それがミレイナとエレナがコウサカの部屋に泊まっている経緯。
壁に背を預けて警戒していたコウサカは、ふと廊下にある窓の外を見る。すでに辺りは暗くなっていた。
（・・・意思だけではなく、感情も強くなってきたな。汚れてはいけない、とは・・・）
一度、コウサカは目を伏せる。
（・・・やはり、きっかけはあれか。そして、殺す時・・・）
ラビダンジョンで、コウサカは他人のように自分を感じていた。
あの時の自分の顔は・・・。
（修羅、か・・・）

どう考えても自分の記憶は戻りかけている。だが、その記憶は、まず間違いなく自分のものである。

しかし、そこには桁外れの狂気が入り乱れている。

だが、とコウサカは思う。

(妹、城、玉座……)

その時だけは、心に温かなモノが流れた。

「俺は、どちらだ・・・」

自然とそんな言葉をコウサカは呟いた。

・・・あの時のコウサカの顔は、命を奪う事に何も感じていない能面のようだった。それはまるで、操られている人形のように。

だが、ナユキを汚れさせたくない、サキュバス達を助けられなかった時に抱いた後悔の念も、全て本心からだった。

――――最も破壊神に最も近くて遠く、最も救世主に最も近くて遠い存在である。

窓の外を、どこか茫然(ぼうぜん)を眺(なが)めるコウサカの頭の中には、前に自分で言ったそんな言葉が再生されていた。

―第十四章―　護るという意思（後書き）

【おまけ】

ミレイナの外見は何となくしか書き表していなかったため、こちらに書かせて頂きます。ついでにエレナも。

ミレイナ

百六十一ほどの背に、金と銀のオッドアイの瞳、腰の届くほど長い金色のロングストレートの髪の女性で、サキュバス姉妹の長女。

性格は厳しくも優しく、姉妹の中心として慕われていた。

過去の事件を長女としてよく受け止め表に出さないが、内心では不安が募っていた。ただ公平で、力をよく理解しているコウサカに惹(ひ)かれた理由は、そういう部分から来ている。

エレナ

一五三ｃｍほどの背に、金色の瞳、背を越すほどのストレートの銀髪の少女で、サキュバス姉妹の末妹(まつまい)。

性格は生意気で、勝手に行動したり、変なことに首を突っ込んだりして、よくミレイナからお説教を喰らっている。

ただ、それは過去にあった悲惨な記憶を少しでも薄めるために新しい記憶を入れようとしていたための行動であった。ミレイナも気付いていたが、あえて普段通りに叱っていた。

―第十五章―　騎士

宿屋アリアンロッド。
「あの……廊下なんかで寝れるんですか？」
「ああ」
朝の八時頃になりナユキが朝食をとりに部屋から出てくると、コウサカが胡坐（あぐら）をかきながら廊下に座っている光景が目に飛び込んできた。
「早く食事を済ましてくるといい。学校に遅れてしまうぞ」
「あ……はい」
ナユキはそう言うと、チラチラとコウサカを振り返りながら階段を下りていった。
何かが、今までと変わってしまったことに不安を抱かせながら。

西端区にある宿屋から、東端区にあるダンバートンの学校への道をナユキは歩いていた。
さすがにプレート部分は外してあるが、らふティオズアーマーにその身を包んでいた。他の服くらいコウサカに言えば二つ返事で買ってくれるだろうが、ナユキはこれ以上迷惑を掛けられないからと頼めないのが性分（しょうぶん）だった。
「お、ナユキちゃん！」
自分の名前を呼ぶ声がした方を見ると、タクトが小走りに近寄ってきていた。
「あ……タクト、さん……」
若干ビクつきながらナユキはタクトの名前を呼んだ。
「……いや……、そんなマジに引かれるとショックで泣いちゃいそうなんですけど……」
しかし、以前にやらかしたことがあるため、タクトはそれしか言

えない。
「あ…その、すみません」
「あ……あ～……いや、気にしないで、ね？」
謝られてしまったタクトは決まり悪げに視線を外すと、頭を掻いた。
「すみません……、あ、ところで、今日は珍しい格好ですね」
「ん？　ああ、これ？」
タクトは意味もなく軽く片手を上げた。
今のタクトはいつもと比べれば重装備だった。所々がプレートで保護されたレザーアーマーに、手甲付きのグローブ、丈夫そうなコンバットブーツという姿だった。武器もいつもの愛用のバスタードソードの他に、いくつかの短剣が腰のベルトに差してあった。
ただ、頭にはいつもと変わらず少し色の落ちた水色のバンダナをしていた。
「……？　頭は守らなくていいんですか？」
「ああ、これね。このままでいいんだよ」
「？」
ナユキは小首を傾げる。それにタクトは苦笑を浮かべた。
「まあ、今度話してあげるよ。前のお詫びに何か奢るからさ」
タクトにしては珍しく、「それじゃ」と言うと話をさっさと切り上げて人混みの中に消えて行った。
（やっぱり、ピリピリしてる……）
宿を出て大通りを歩いているうちに、ナユキもそれには気付いていた。
道行く道には必ずどこかに完全武装したハンター。そして、その目も、纏う雰囲気も切羽詰ったようにピリピリとしていた。
実際に切羽詰っているのだろう、とどこか不安そうにナユキは思う。
よく見れば、街を行き交う人々の表情もどこか硬さが混じっていた。

先日の戦闘は圧勝だったとは言え、あそこまでの大規模な戦闘は恐らくダンバートンが出来て以来始めてのこと。
これで不安にならない人間などいないだろう。少なくとも普通の人なら。
「あ、遅れちゃう……」
いつの間にか立ち止まり考え込んでしまったことに気付き、ナユキは再び歩き出した。

ダンバートン北東マスダンジョン地上入り口近く、オグマ騎士団展開地点。
「斉射ぁっ！！」
レオナルド団長の号令が響くと同時、約百人がアイスボルトを強行突破しようとするロックゴーレムに浴びせ粉砕する。
「……ふん、さすがに出て来なくなったか」
もはや剣すら抜いていないレオナルド団長は、腕を組みながらマスダンジョンの入り口を睨みつけた。
その入り口の周りには強行突破のための捨て駒とされたロックゴーレムの残骸と、ゴーストアーマーだった空の鎧が空(むな)しくその姿を晒(さら)していた。
オグマ騎士団は、約二百名の騎士を半数ずつに分け、休息させながら最前線に展開していた。
「団長。やはり、突入して殲滅(せんめつ)した方が良いと進言しますが」
まだ二十代の副官が進言する。それに対しレオナルド団長は首を横に振る。
「却下する。領主殿も言っていたが、マスダンジョンは危険すぎて調査の手が全く入っていない。もし突入して仕掛けられた大規模魔法でも起動すれば、目も当てられん」
その顔は実に忌々しそうだった。
レオナルド団長自身も第二次モイトゥラ戦争に参加し、またその

影響で家族はおろか血縁者のほとんどを失った過去を持つ。
魔族に対しての憎悪は、騎士団の中でも最も大きいはずの人物である。
しかし、私情ではまず動かない人物でもあった。
「とにかく我々はここに陣取り、ダンバートン防衛を務めていればよい。騎士とは――」
「騎士とは人々の剣であり盾である、ですね。分かっています」
つまり、個人的な感情など無用。ただ斬り防ぐのが騎士である。
レイナルド団長が揮下の騎士団に口癖のように言っていることである。
「…ふん、私は一度領主殿と会い、今後のことを決めて来るとする」
「敬礼ぇっ！」
副官の大声が響くと、条件反射のように総勢約二百名の騎士達がレオナルド団長に敬礼した。

コウサカは空になったナユキの部屋から朔絆の宿っているクレイモアを出して、廊下の壁に立てかけると、貸した部屋の扉をノックした。
「ミレイナ、話せるか？」
すると、扉が開きミレイナが顔を覗かせた。
「なんでしょう……？」
「今後のことを話しておこうと思ってな」
コウサカの言葉に、ミレイナは意味が分からないという表情を浮かべた。
「黒魔族通行証の処理が完了すれば、俺達はこの街を出る」
「……っ！？　そんなっ……」
その言葉に、ミレイナは愕然とした。
「最後まで聞け。君らが狙われる可能性だが、恐らくはないと思う」

「なぜ……ですか？」
不安げに聞いてくるミレイナを一瞥すると、コウサカはほんの少し目を瞑り息を吐いた。
「狙って来るとすれば、十中八九俺だからだ。昨日のこともあり、確実に俺を殺そうとしてくるだろう」
ティルコネイルの時は半殺しにして連れて帰ろうとしていたが、それが無理なら邪魔者として排除の選択をするだろう。
コウサカが、明らかに最大の脅威と成り得るゆえに。

「……俺達と一緒にいる方が、まず間違いなく危険だろう。それに、その格好でこの街に紛れていれば、見つかることもないだろう」
「あなたは、どこへ行こうと……？」
ミレイナが、どこか茫然した風に聞いた。
「どこかにあると言う魔族の本拠地を潰し、ついでに女神を救う」
「……まさか……アルベイ、ですか……？　そんなっ……自殺行為ですっ……！」
どこか悲痛そうな顔でミレイナは言い募った。
「そうだろうな。だが、それが‘ミレンシア’なのだろう。それならば、俺はそれを利用させてもらう」
「……なにを、いって……」
コウサカの目は、何かに気付いて、何かを知っている目をしていた。そして、ただ真っ直ぐに目的に向かおうとしている、そんな目。
ミレイナはただただ、そんなコウサカの言葉が理解できなかった。
そもそも、そんな余裕など彼女らにはなかった。
「それと、先に詫びておく。すまない」
コウサカが頭を下げた。意味が分からず目を白黒させているミレイナに構わず、コウサカは頭を上げると続ける。
「俺は今から領主様の元へ行き、伝えておかなければならないことがある。だから、少しの間ここを離れることを許してほしい」

「……え……ゆ、ゆるすも何も……」
そもそも自分達は何も言っていない、だから好きにしていい。そうミレイナの顔には書いてあった。
「すまない。それと、朔絆。頼みがひとつあるんだが」
『どーせ、離れている間この二人を護ってくれ、とか言うんでしょう？　まったくもぉ……』
音も無く朔絆は完全実体化をして、コウサカの傍らに立った。その顔は心底しょうがない、そんな呆れた表情をしていた。
「すまない」
『……ふん……バーカ』
それだけ言うと、朔絆はさっさと姿を消してしまった。
コウサカはクレイモアを手に取る。
「これを持ってみてくれ」
「え、あ、はい……」
ミレイナは、柄まで含めると自分の背丈と同じほどもある長さのクレイモアを恐る恐る手に取った。
クレイモアの光が強くなった。
「え……な、なんですか、これ……？」
ミレイナが驚いた様子でコウサカを見た。
柄まで含めると、百六十ｃｍほどもあるクレイモアを「片手」だけで持ちながら。
「朔絆の力だ。剣の重さをほとんど無くしている」
それに、ミレイナは目を見張って更に驚く。
「精霊にそんな力が……」
「俺は滅多に使わないがな」
ということは、コウサカは素でこんな大剣を自由自在に振り回していることになる。
『……ホントはすっごくイヤなんだからね。あんた以外に使われるの』
朔絆が剣の中から不機嫌に言う。

「すまない」
コウサカはただ詫びる。朔絆の気持ちには気が付かず、嫌がっているということだけは理解しながら。
『ふん……。ほら、とっとと行って来なさいよ』
「ああ」
コウサカは軽くミレイナに目礼をすると、廊下に置いた装備を付け階段を下りていった。
「あの…すみません」
『……あのバカの頼みなんだから、しょうがないじゃんか。いい？　無駄にベタベタ触ったりしたら許さないから』
朔絆の声には、ひどい苛立ちが感じられた。
「は、はい」
クレイモアを持ち直すと、ミレイナは静かに扉を閉めた。

官庁、領主執務室。
「黒魔族通行証だぁあ……？」
コウサカが首肯すると、バルドラスは頭を掻いた。
「んなもん、どっから持ってきやがった？」
「‘彼女ら’から譲ってもらいました」
‘彼女ら’とそれだけで、バルドラスはサキュバスの事と気付く。
「ったぁく……、てめぇは本気で訳分からねぇ奴だな。んで、それがどうした？」
「魔族の本拠地、アルベイダンジョンと呼ばれる場所に行けるそうです」
瞬間、バルドラスの目の色が変わった。
「ほぅ……。そりゃ確かか？」
「はい。確実に」
その確信は、コウサカの感じ取る‘予感’と同じ感覚がそう教えていた。

「で、それをてめぇはどうする気だ？」
「潰しにいきます」
そうコウサカが逡巡もなく言うと、バルドラスが哄笑を響かせた。
「ガハハハハハ、言うと思ったぜ！」
そして一転、バルドラスの表情を消して問うてくる。
「んで、潰しに行くから人数貸してくれ、とでも頼みに来たのか？」
「いえ、ただ伝えておこうと。私が一人で行きます」
それにバルドラスは驚愕する。
「ば、馬鹿かてめぇはっ……！？　本気で……言ってんだろうな、てめぇなら」
バルドラスは呆れたような表情を浮かべた。
「だったら、何で来やがった？　本当に伝えに来ただけだってんのか？」
「いえ、それと彼女らのことをお願いしようと思いまして」
それにバルドラスは、気難しそうな表情を浮かべた。
「お願い、って言やがるがなぁ……。とっとと帰って来て自分で何とかしやがれ」
その時、執務室の扉が開いた。
「その通行証、渡してもらおう」

「ふぅ……」
タクトは、中央区広場のベンチのひとつに腰掛けて一息吐いた。
（こりゃ、精神的に来るわ……）
街中、特に大門警護のハンター達は殺気立っていた。魔族が人間に化けるなんて話は聞いたことが無いが、それでも監視の目はより厳しくなっていた。
（ま、当然か……）
携帯用水筒から水を一口飲む。タクトはその性格もあってか、上手く気を抜く方法を知っていた。

「……」

タクトは先日あった戦闘の光景を思い出す。そして、己の手を見る。

（……やっている時より、時間が経った頃がキツイか）

その手で、タクトは敵を斬った。コウサカのおかげで殺すに至る前に終わったが、それでも肉を切り裂いた感触は生々しく残っていた。

（……やっぱ、すげぇや。顔色ひとつ変えずに、その日の夜にはオレ達に付き合ってくれていたしな）

あれは殺すことに慣れて何も感じなくなった顔ではなく、自分を完璧に制御していた顔だ、とタクトは思う。

（カグヤは……後方支援組だから多分大丈夫だろ。あの時も、無邪気だったし）

普段のタクトがまず見せないような、真剣な顔をしながら思案する。

タクトは、本当はただの馬鹿ではない。常に妹を想っている優しいお兄ちゃんなのである。女好きなのは素だが。

無意識に、昔カグヤからもらった水色のバンダナを手をやる。

「こら！」

頭に軽い衝撃を受けたタクトは、いつの間にか下を向いていた顔を上げた。

「なにサボってんのさ」

いつも通りの軽装のカグヤがいた。

「サボってんじゃなくて休憩。一時休憩中」

「うっさい、とっとと立つ」

「へイへイ……」

ぇっこらしょ、と実にオヤジ臭いかけ声と共にタクトはベンチから立ち上がった。

「ん、あれ？」

ふと、カグヤがタクトから視線を外すと、どこかを凝視（ぎょうし）した。

「どした？」
タクトもそちら側を見ると、コウサカと外に展開している騎士団の団長とその副官、それにバルドラスが官庁から出てきて、どこかに向かうところだった。
「？　なんだ？」
その時、タクトに好奇心（こうきしん）が生まれる。
「付いてってみよっと」
「ちょ、あんた今仕事中でしょうが！」
すかさず、カグヤからのお叱り言葉がタクトに飛んだ。
「なんだよ、お前は気になんないの？」
その言葉にカグヤが怯（ひる）む。
「う……た、確かに気になるけど」
「まあいいや。オレ一人で行ってくる」
背を向けたタクトに、カグヤは慌てて言う。
「だ、誰も行かないなんて言ってないでしょうが！」
「おやおやぁ？　カグヤさんもオシゴト中じゃないんですかぁ～？」
振り向いたタクトの顔は、非常にムカつく顔をしていた。
「う、うるさい馬鹿！」
赤くなったカグヤを満足そうにニヤニヤしながら見ると、タクトは三人を追って歩き出した。
「あ、ちょっと待ちなさいよ！」

官庁裏、訓練場。
「始めぇ！」
バルドラスの大声が響くと、コウサカと騎士団の副官クラウゼンが互いに鎧は脱いで、木刀を構えて対峙（たいじ）した。
「……たく、面倒なことにしやがって」
「その割には領主殿。面白そうにしてはおりませんか？」
「たりめぇだろうが」

何故、コウサカとクラウゼンが模擬戦などを行なっているかと言うと、ちょうどレイナルド団長がバルドラスの元を来て、通行証についての会話を耳にしたのである。

軍人として、魔族を殲滅し世界の平穏を守ることが至上命題である。当然、黙っていることなど出来なかったのだろう。

「どこの誰とも分からない者に、この世界のことなど任せられるはずがありません。我々が向かい、この命に代えても殲滅します」

レオナルド団長はそう言い放ち、コウサカに通行証を渡すよう求めた。当然コウサカは断り、自分が行くことを伝えると力を示すように求められた。通行証が、イタチごっこにすらなっていない現状を打破する切り札と成り得るほどに有用がために。

また、下手に一人で行かれ失敗すれば、本拠地の場所を変えられる可能性も高い。そういう意味でも任せられないという言い分だった。

「言っておくが、あの坊主はメチャクチャ強ぇぞ？　あの若いので相手になんのか？」

「クラウゼンは、我が騎士団の中でも最も腕が立ちます。あれがもし負ける様ならば、認めましょう」

「ほお、そりゃ楽しみだ」

約一万を数える最大の騎士団の中での最強の一人か、とバルドラスは心中で面白そうに思った。

（この男、とてつもなく強い……）

オグマ騎士団の副官クラウゼンが、コウサカと対峙してまず思ったことはそれだった。

それは、コウサカが何も構えをしていないことから察せられた。隙だらけであるが、コウサカの纏い見え隠れしている気配は間違い

なく一切の油断を許さないものだった。
だからこそ、クラウゼンは木刀を正眼に構えたまま動けなくなっていた。
クラウゼンは歳こそ二十四と若いが、常に最前線に出て、決して少なくない魔族を切り捨ててきた。剣の腕も天性のものがあり、経験としても十分なものを経験してきていた。それでもコウサカと対峙するには不十分であると、騎士としての本能的なものが告げていた。
だが、騎士には沈黙は許されなかった。下を向いて、そして悪戯に時間を費やせば費やすほど、護るべき人々の命は消えていくからだ。
「はぁっ！」
クラウゼンは一度上段にし、そこから一気に木刀を振り下ろす。常人であれば、気が付いた時には首が落ちているほどに研ぎ澄まされた一撃である。
「……」
ガシッ！、と音と共にコウサカがまともに受けた。
軌道を逸らすわけでもなく、それを不可としてコウサカが受けたのは、レイナルド先生以来初めてである。
矢でも魔法でもはっきり目視し弾き飛ばすほどのコウサカでも、逸らすのは危険と判断したほどクラウゼンという男は強かった。常人の基準を軽く四つ、五つほど飛ばしているほどに。
しかし、コウサカは更に常人を超越し、超人と呼べるほどに異常だった。
鍔迫り合いの様相だったのは、ほんのわずかな時間だけだった。
コウサカはすぐに力加減を絶妙なものに変え、押すことも引くことも出来なくした。クラウゼンが下がろうとすれば、まるで何の負荷もかかっていないような力加減のまま木刀を合わせたまま下がる。

押そうとすれば同じだけの、本当に全く同じ力加減で押され、無理に押そうとすればクラウゼンが体勢を崩す状況にした。

「くっ……貴様っ」

コウサカは「片手」だけで、クラウゼンが両手で持った木刀を悠々と完封していた。どう考えてもクラウゼンが不利であり、一度距離を広げなければ勝機は見出せない状況だった。

だから、危険は百も承知でクラウゼンは後ろへ下がる。それ以外手がないために。

「……」

だが、今度はコウサカは追わずにその場に留まった。

そして、また構えもせずに棒立ちをした。侮っているわけでも、馬鹿にしているわけでもなく、ただそれが自然体であるかのように。

「くそっ……！」

クラウゼンは小さく毒づいた。このまま居てもただ時間を浪費するだけ、しかし攻めても不利になる。

コウサカの構えが守り一点である以上、どちらの集中力が切れる時まで待つしかない。そうクラウゼンが考えをまとめていると、コウサカが静かに言った。

「来ないなら、こちらから行こう」

「なっ……！？」

コウサカは何の緊張感もなく、静かに踏み出した。

「くっ……」

クラウゼンは焦る。

たった今、守り一点であると結論付けたことを見抜いていたかのような、突然のコウサカの攻勢宣言。彼我の距離はたった三ｍほど。コウサカの言葉は真か偽か。焦って攻めても先ほどのように簡単に止められてしまわないか。また片手だけで止められ、空いた手で強烈なカウンターは来ないか。

圧倒的だが油断も無く、緊張感も無く、必殺の一撃すら楽々止めるコウサカに、歴戦の騎士であるクラウゼンが混乱させられている。

（どうするっ……！？　どうすれば勝てる！？　どうすれば勝つことが……）

そこで、クラウゼンは冷静を取り戻した。

――騎士とは人々の剣であり盾である。

その通りである。

個人の勝利など意味がなかったことをクラウゼンは思い出した。

勝利とは‘全体’での勝利でなければ意味が無く、守るべき人々が無事でさえあればそれでよいのである。

だから。

「我が身命は守るべき人々のために……！　我らが身命を持って絶対的脅威たるものを打倒し、人々の未来の礎となならんっ……！」

どんなに強いものでも、一人ひとりの命を掛けた一撃で少しずつ弱らせ最終的に斃すことができればいい。

それは、自らの身命を賭して国を護る騎士の心の叫びだった。

「はぁあああああああああっ……！！」

全身全霊を賭した必殺の一撃を、クラウゼンはコウサカに繰り出す。

「……っ」

ここで、コウサカは初めて木刀を両手で持った。そして、その目も相手を射殺すほどに鋭く。

ガンッ！　と音がしてコウサカの手に持つ木刀がいつの間にか、クラウゼンが振り下ろした木刀の横腹に叩きつけられていた。

それは強すぎず、弱すぎず、一切無駄な力は入っておらずただ軌道を逸らした。

それは完璧すぎて、クラウゼンは逸らされたことに一瞬気付かなかった。

「が、はぁっ……！」

ズドン、と言う重い音と共に衝撃がクラウゼンの体を突き抜ける。

いつの間にか、コウサカは木刀を片手持ちにしていて、左拳で強烈な一撃をクラウゼンの腹に見舞っていた。クラウゼンは耐え切れず、後方へ吹っ飛ぶと壁に激突した。

「俺は世界の敵か？」

珍しく、コウサカは少しだけ笑みを浮かべながら冗談がましく、激しく咳き込んでいるクラウゼンに言った。

一方、訓練場の物陰。

「……」

「……」

タクトもカグヤも絶句していた。

「み、見えたか……？」

「う、ううん……全然……」

ひそひそ。

「あ、あれってオレ達だったら間違いなく、気付いたら気絶しているよな……？」

「と、というか……あんなの当たったら死んじゃうんじゃ……？」

クラウゼンが最期（死んでいないが）の放った一撃は、少なくとも目にも‘映らない’ほどの速さだった。

それを見切って軌道を逸らし、また一瞬で人ひとりが吹き飛ぶほどの力をクラウゼンに叩き付けたコウサカのすごさだけは、二人は茫然としながらもよくわかった。

と、その時。

「タクト、カグヤ出て来い」

絶対に見えない位置にいるはずの二人のことを、コウサカが呼んだ。

「「……っ！？」」

二人とも、ビビクっ！　として嫌な汗を掻いた。

「別に何もしないから出て来い」
タクトとカグヤは顔を見合わせると、しぶしぶ物陰から姿を現した。
「……てめぇら、何してやがる？」
バルドラスが、出てきた二人を呆れたように眺めた。
「えっとぉー……その、ですね……何というか……」
タクトが必死になって言い訳の言葉を捜していた。
タクトが視線を上げると、バルドラスの眉間（みけん）あたりがピクピクしていた。
「とっとと仕事に戻りやがれぇえええええええっ！！」
「「はいいいいいいいいいいいっ！」」
タクトとカグヤは二人揃って逃げて行った。

「大丈夫か？」
レオナルド団長が、クラウゼンを助け起こしてやっていた。まだ足がガクガクして立てない様子だった。
「申し訳……ありません……」
クラウゼンは息も荒いまま、レオナルド団長に詫びた。
「いや、いい。あれは違いすぎる」
レオナルド団長は、のんびり装備を付け直しているコウサカに目を向けた。
（……文献（ぶんけん）ではあったが、これがミレンシアというものか）
知らず、レオナルド団長の眼光は鋭くなっていた。
（女神に導かれ、‘星’より来たる絶対的存在……なるほどな）
外見こそ人間であるが、その秘めたる力はもはや人という種を大きく超えすぎていた。
「なにか？」
いつの間にか装備を付け終わったコウサカが、レオナルド団長に声をかけた。

「いや。それより魔族の本拠地に向かう時は我々にも声をかけてくれ。この世界の護り手の一人として、看過できることではない」
それは高圧的でも、命令口調でもなく、私的な頼み事をするような口ぶりだった。
コウサカの実力が計り知れないと分かったことで、レオナルド団長はコウサカにある程度の礼節を払うことにしたようだ。
「恐らく、死ぬことになりますが」
それは比喩でも何でもなく、ただ事実を言っているだけのような口調だった。
「クラウゼンの言葉を聞いただろう。そういうことだ」
あの言葉はクラウゼンの魂の叫びであった。そして、それは騎士団すべての想いでもある。レオナルド団長は言葉少なく、コウサカに伝えた。
「分かりました。二日後には恐らく出立します」
「分かった。その時までには準備を整えて置こう。領主殿の下で会おう」
コウサカは静かに首肯した。

ただ、この時のコウサカは不思議な感覚を覚えていた。初めて会ったというのに、決死の覚悟の騎士団にどこか既視感を覚えていた。
個人個人に会ったことがないのは確実であるが、‘騎士団’というものに対して。

―第十六章―　みちしるべ

それは、クラウゼンとの決闘と呼べるほどの鬼気攻まる模擬戦をした夜。

「こ、こここコウサカさんっ……！」

時刻は二十三時頃。

つい一時間ほど前、ナユキはおやすみの挨拶をして部屋に入って寝たはずが、水玉のパジャマのままとても慌てた様子で部屋から飛び出てきた。

「わ、わわっ！？」

慌てすぎたせいか、上半身が先行し過ぎて下半身が付いていかず、前のめりにナユキは倒れこんだ。

「っと」

コウサカは無造作に腕を伸ばすとナユキの首あたり、細かく言えば左右の肩甲骨の真ん中に手を置くと、徐々に力を込めながら柔らかく止めてやった。

勿論、この時に間違えて胸を触ってしまうということなど、そんなヘマをコウサカがするわけがない。

「今回はどうした？」

ナユキがしっかり体勢を整えて床を踏んだことを確認すると、手を離しながらコウサカは聞いた。

「そ、それが、ペンダントで夢が、女神様が！」

この子はたまに変なことになるな、とコウサカは思った。

「落ち着いて頭の中を整理。それと、まずは深呼吸するといい」

「は、はい。すぅーはぁー……すぅーはぁー……」

知らず、コウサカは頭痛でもするかのように頭に手をやっていた。

「……それで、どうかしたか？」

ナユキが落ち着いたと見て、コウサカは再び聞いた。

「あ！　そ、そうなんです！」

コウサカは何も言っていない。
「女神様のペンダントが、みちしるべ、なんです！」
とりあえず、他にも泊り客が寝ているはずであるから、コウサカはナユキを抑えながら聞く。
「……静かにしろ。つまり、何だ？　ダンバートンからどこへ向かえばいいか、分かったと言う事か？」
「そう、むぐ！」
女神が自分に接触してきてくれたことが嬉しいのか、だいぶテンションが上がりすぎているナユキがまた大声で何か言う前に、コウサカは素早く口を塞いだ。
「分かった。それで、場所はどこだ？」
「……ぷは。すみません……バンホールのバリダンジョンの奥だそうです。行けば、ダンジョンの中をどう行けばいいか、また教えてくれるそうです」
コウサカの呆れ顔を見て我に戻ったか、ナユキは恥ずかしそうに口を手で覆いながら小声で言った。
（……ペンダント、か。なるほど。そういう仕掛けというわけか）
コウサカは一瞬だけ、ナユキが両掌で包んでいるペンダントを睨め付けた。
「さて、用が済んだのなら寝ると良い。明日も学校だろう」
「あ、は、はい。その、お邪魔しました……」
今更恥ずかしがりながら、ナユキは自分の部屋の中へと戻って行った。
コウサカがペンダントを睨んだことは、気付いていない様子だった。

ナユキが部屋に戻って一時間ほど経った頃、コウサカは静かに黙考していたことにある程度の結論を出していた。
（……明日、明後日という時になり、明確な次の目的地が分かっ

た。やはり、そういうことならば、騎士団の方もそうだったか？
思えば、あのタイミングも出来すぎていた。いや、そう考えればティルコネイルのこともそうか……）
コウサカは静かに、長く細く息を吐いた。
（……そのためのミレンシア。そのためのナユキという少女の存在。そのための……圧倒的な強さを持つ俺、か。ここまで来ると、いっそ笑えてくるな……）
少しだけ、コウサカは自嘲気味に笑った。
（となるとあの子も、か……。だが、そこまではさせん）
顔を上げたコウサカの顔は、強い意思が表れていた。
と、目の前の扉が静かに開いた。
「……あの」
ミレイナが顔を覗かせた。
「こんな時間にどうかしたのか？」
「少し、お話でもと……」
意味が分からず、コウサカは少し首を捻るが、断る理由もないため首肯する。
ミレイナは、コウサカの隣に三角座りをして壁に背を預けた。
「どうかしたのか？」
ミレイナはコウサカの方は見ずに、静かに話す。
「あなたのおかげで、最近のエレナは落ち着いています。本当にありがとうございます」
「？　いや、俺は何かした覚えはないが」
コウサカは首を再び捻った。
自分のやっていたことなど、ただ部屋の前にいるか、たまにミレイナに頼まれ話相手になっていたくらいだと。
「ふふ、やっぱりそうでしょうね」
ミレイナは、まだほんの二日程度の付き合いであるが、コウサカの性格がわかっているようだった。
「……ただそこにいてくれるのって、本当はすごくかけがいのな

いものなんですよ？　いつも当たり前のようにあっても」
　ふ、とミレイナは寂しげな表情を浮かべた。
「……本当に」
　ミレイナもエレナも、そのかけがいのなかったものを一瞬で失ってしまった。その言葉には重みがあった。
「……なるほどな」
　その言葉には、コウサカも何か感じ入るものがあった。失われている記憶の何かが。
「……すまないな」
「え？」
　唐突に詫びたコウサカを、ミレイナは見た。
「だとしても、俺はアルベイへ行かねばならない。グラスギブネンという化け物を斃すためのな」
　それにミレイナは違和感を覚えた。斃すため「に」ではなく、「の」とコウサカが表現したゆえに。
「いや、気にしないでくれ。関係のないことだったな」
　ミレイナの疑問に気が付いたのか、コウサカはただ目を伏せながらそう言った。
　ミレイナの言葉は待たず、コウサカが顔を上げる。
「さあ、もう休むといい。あの子も、君が部屋にいないと不安がるだろう」
「あの……」
「話すことはできない。巻き込むことになりかねん」
　ミレイナが言葉を続ける前に、コウサカは切った。
「今はただ、自分達のことだけを考えるといい」
「……はい」
　ミレイナは、これ以上聞こうとしても迷惑になるだけかと判断して、立ち上がった。
「おやすみなさい」
「おやすみ」

コウサカはただ目を瞑り、いつもと同じように座っていた。

次の日の朝。

黒魔族通行証が出来るまで、あと一日となった。

コウサカがただ座して待っている間、ナユキはまた同じように学校へと通っていた。

「……え？　もう、ヒーリングによる治癒と応急手当まで覚えたんですか……？」

ダンバートンの学校の魔法学科の先生、スチュアート先生は眼鏡がズレ落ちるほど驚いていた。

「はい」

ナユキは驚かれている理由が分からず、首を傾げながら首肯した。

「この医学書だけでも、軽く七百頁もあるんですよ……？　それに、他に渡した魔導学書だって二、三冊あったはずですよね……？」

治癒魔法であるヒーリングはただ魔法を使えるだけでは駄目で、人の身体の構造や機能など本当の医師に近い知識量がないと効果的な治癒は出来ず、また細胞の活性化も出来ず、使えるようになるには医学、魔導学の両方を習得しなければならず、それゆえに高等魔法に位置づけられているのである。

スチュアート先生がナユキに渡したのは、平均項六百項の魔導学書二冊、平均項六百五十項の医学専門書三冊である。

「そ、それを……たった二日で暗記したとっ……！？」

スチュアート先生は驚愕しながら言った。

普通、ヒーリングの魔法を使うのならまず医師となることを目指し、一定期間の医療活動に従事しその経験と知識を持って、その次に魔法を覚え始めて、まず早くても半年は使えるまでに掛かるはずが、ナユキはたった二日で使えるようになったのである。

「し、出血時に活性化させる細胞は……？」

「えと、血小板です」
「せ、正解……。その血小板は血液中の何％ありますか？」
「一％です」
「正解……。毒など外部から体内に侵入した有毒物質への対処は……？」
「血清があるならそれを打ち、安静にさせること。ない場合は、ウィルス・毒を排除する血液中の白血球を活性化。少ない場合はそれだけで済み、毒の量が多い場合は容態が安定したとしても、必ず後で医療設備の揃った病院に連れて行くこと……で、合っていますか？」
「正解……。で、では――」
それから三十分ほどスチュアートからの問答は続き、ナユキはほんの一瞬の逡巡は見せたが、全てに完璧に答えた。
「か、完璧です……。あなたは一体何者なんですか……？」
「その、自分でもよくわからないんです……。でも、覚えたいと思ったことはすぐに覚えてしまって……」
そのナユキの言葉にスチュアート先生は、はっとした表情を浮かべた。
「すみません、記憶喪失だったのですね……。何度も申し訳ありません」
「いえ、いいんです……」
少し二人は居心地の悪そうに、互いに視線を逸らしていたが、スチュアート先生が何かを思いついたようにナユキを見た。
「そうだ！　少し待っててください」
「？　はい、わかりました」
スチュアート先生が、教室の奥にある自分の研究室に走って行ったかと思うと、すぐに何かを手に戻ってきた。
「これを」
「？　これは……？」
ナユキは差し出されたものを手に取る。

それは木で出来た杖だった。杖の先には、石のようなものが填め込んであった。

「それはマジックワンドと呼ばれるものです。填め込んであるのは魔石です。使用者の魔力を増幅し、より効果を強いものにしてくれます」

「あの、どうしてこれを……？」

スチュアート先生は、小さく笑みを見せた。

「あなたが卒業だからですよ」

「え？　えぇっ……！？」

今度はナユキが驚く番だった。

「ほ、本当なんですかっ……？」

「ええ、本当ですとも。いや、ははは。まさかたった数日で卒業するとは、思ってもみなかったですよ」

そう笑うスチュアート先生は、さきほどの表情など消え失せ、素直に優秀な教え子の卒業を喜んでいた。

「ところで、何故突然ヒーリングを覚えたいなどと言い出したのか、聞かせてはもらえないでしょうか？　あの時のあなたは、必死な表情をしていたので」

教室には、ナユキとスチュアート先生の二人しか居なかった。他の生徒は、屋外練習場で魔法の試し打ちをしている。

ナユキは、その言葉に俯いた。

「……わたしは、……だから……」

「？」

ナユキの声は小さくてスチュアート先生には届かなかった。

「わたしは……」

そして、顔を上げたナユキの顔は、今にも泣き出しそうだった。

「わたしはっ……、わたしはお荷物なんです……！　コウサカさんは命懸けでっ……！　……でも、いつも平然としていて……気にするなって言うんです……。わたしのことなのに、わたしは何も出来ないんですっ……。　でも、力では何も出来な

いから、せめて他のことで、お役に立て……れば……ぅっく……」

最後の方は涙声になっていて、スチュアート先生は聞き取れなかったが、それでもナユキの胸の内を理解した。

泣きながら手の甲で涙を拭っているナユキの肩に、優しく手が置かれハンカチが差し出された。

「なるほど……そういうことだったんですか」

スチュアート先生は、心中で得心していた。

コウサカの噂は、すでにダンバートンの誰もが知っていることである。そして、ナユキを見れば、噂通りの人物であろうということも。

そういう人物であるからナユキをここに通わせ、そしてナユキという少女はこうなのだろうと。

「人と言うのはですね」

「……ぇ？」

唐突に、スチュアート先生が話し始めた。

「人には、向き不向きというものがあります。もしそれがどんなに納得できないことだとしても、人は人である限り、向かないことがあります。わかりますね？」

「……ぐす……ふぁい……」

涙声のまま、ナユキは頷いた。

「コウサカさんは、恐らく、そういったこと，はあなたには向かないとよく理解しているのでしょう。あなたは、何か行動をしようとしてコウサカさんにきっぱり拒否されたことはないですか？」

「……ありまむ……」

ナユキの脳裏には、ラビダンジョンに馬を飛ばして行った時のことが再生されていた。

「後からよく考えて、その行動は間違っていたと思ったことはないですか？」

「はい……」

そこでスチュアート先生が、ふと笑みを浮かべた。
「コウサカさんは、何もしないことを責めたことは？」
「っ……！　ないですっ、コウサカさんがそんなことするわけない、です……」
「なら、いいではないですか」
「え？」
スチュアート先生は、優しげに目を細めながら続ける。
「だから、あなたは少しでも役に立とうと必死に勉強をしているのですよね？　何もしていなくても、誰が何を言うわけでもない。それでも、それが嫌（いや）だからあなたは、違うことで少し役に立とうとしていたのですよね？　なら、それでいいではないですか。きっとコウサカさんは、ただ褒めてくれると思いますよ」
「はい……」
そこで、ふとスチュアート先生は何かに気付いたような表情を浮かべた。
「……もしかしたら、魔法の才はただの口実で、あなたのその心中をコウサカさんは見抜いていたのかもしれないですね。学校ほど何かを学び、知る方法の多いところも滅多（めった）にありませんから」
「あ……」
そこで、またナユキの表情が、くしゃっと崩れた。
「ははは、ほら泣かない、泣かない」
「……う……うぅ……ひっく……ぇっく……」
泣きながらナユキは思う。
ずっと、ずっと上にいる人なんだなぁ、と。

昼頃。ミレイナとエレナの部屋。
「それでね、お姉ちゃんが調合間違えて、変な煙（けむり）出て大変だったんだよ？」
「ふぅむ、あのミレイナがなぁ……」

ミレイナが、昼食を作りに一階の厨房を借りに行っている間、コウサカはいつもと同じようにエレナの相手をしてやっていた。
ちなみに、朔絆はナユキの部屋で昼寝をしている。
（これが、幼児退行というものか？）
始めて会った時とは違い、今のエレナはひどく素直で無邪気だった。
「その煙は、どんな色をしていた？」
「んー、紫色かな？」
「……それは、まずい色だな」
少し苦笑いを浮かべながらコウサカは、「だよ」と頷いているエレナを見る。
（この子が、俺が出て行くことを知ればどうなるだろうな……）
コウサカがそう思っていると、扉が開いて食事を盆に載せて手に持ったミレイナが戻ってきた。
「あら、何を話しているの？」
「お姉ちゃんが調合失敗しちゃった時の話～」
「ち、ちょっと！　もう何て話をコウサカさんにっ……」
ミレイナは、慌てた様子で顔を赤らめた。
恥ずかしそうな顔のまま、ミレイナはコウサカを見た。
「こ、コホン……、コウサカさんもどうですか？」
ミレイナは、視線で盆の載った食事を示した。
「ああ、頂くとしよう」
いつものように、コウサカは昼食を一緒に食べることになった。

昼食を食べ終わり、ミレイナが食器を下に持って行った頃、エレナが静かに口を開いた。
「明日、行っちゃうんだね……」
「ああ」
ミレイナが話したか、と思いながらコウサカは首肯する。

「何をしに？」
「魔族の本拠地を潰しに行く」
エレナの質問に、少し疑問を感じながらもコウサカは言う。
「そう……あいつらを」
そこで、エレナの気配が一変した。
「あたしも、あいつらを殺したい」
それは、素直で無邪気さがあるゆえに、異様な気配だった。例えるなら小さな子供が面白がって、小虫の足を一本ずつ千切りながら残酷に殺す時のような、そんな気配。
コウサカは、首を横に振る。
「殺すことが目的ではない。それは手段のひとつであって、それ自体がそうではない」
「同じだよ」
「……」
確かに客観的に見ればそうだろう、とコウサカは一度沈思する。
「復讐がしたいのか？」
「復讐……」
コウサカの言葉に、エレナは笑みを浮かべる。
「そう……お姉ちゃん達がされたこと、同じことしてやるんだ。あいつらも……」
そこで何かエレナの頭の中でスイッチが入ったようだった。
それは狂気。
「殺してやる……殺してやるっ……！　許さない……絶対に許さないっ……。あたしは、あいつらを――」
「……」
コウサカは静かに、エレナの顔の上半分を軽く掴むようにして視界を覆った。
「死人のために死んで、それで君を生かすために死んで逝った者が喜ぶのか？　君の姉妹達は、そう願うような者だったのか？」
コウサカは、ミレイナから聞いた事の顛末での、エレナの姉妹の

散り際のことを言う。
エレナの狂気が薄れた。
「でも……でも、やっぱり悔しいっ……」
エレナの目から涙が頬を伝った。
「あたし達何もやってないのにっ……何もしてないのに一方的にされて……悲しいよっ……悔しいよっ……！　何でやり返すのがダメなのっ……？！」
エレナの当然の物言いに、コウサカは一度小さく息を吐いた。
「憎しみから生まれるものは憎しみだ。憎しみが積もってくれば、その者は汚れていく。狂気に支配され、殺すことの意味すら失う。特に、君のような純粋な憎しみは余計にな」
目的がただの「復讐」で終わるなら、それでいい。しかし、目的が「殺す」ことに成り代わってしまった時、その人間は壊れるのである。
それを言ったコウサカは、頭の中に鋭い痛みを覚えていた。
それを知っているということは、自分はそう人間か、それともそういう人間を相手にしたことがあると思いながら。
「だから、俺が殺す」
「え……？」
コウサカが、エレナの顔から手を外しながら言う。
「その穢れのない手を汚すな。その汚れ役は俺が引き受ける。君らは、ただ普通の少女に戻れるように頑張るといい」
ティルコネイルのアルビダンジョンで、コウサカは初めて命を奪うことをしたはずだった。ただ、その時は魔物相手だからと、それで割り切っていたのだと思っていた。
しかし、隊商の馬車がオオカミの大群に襲われて来た時、一瞬の躊躇はあったが、それでも何の迷いもなくオオカミ達を絶命させ続けた。それでコウサカは自分自身に気付いたのである。
自分は殺し慣れている。そして、それを割り切れるだけの場数を

踏み、理解するほどの存在であるということを。

「君は知っているのか？　生き物の殺した時の感触。断末魔。飛び散るその生き物だったものの一部。その光景。殺した相手の目。そして、目の前で消えかけた命の灯火が無造作に、無慈悲に、残酷に消えていく姿。それを消した己の姿を」

失った記憶の中で、確かにそうであった自分と同じにならせてはならないと、コウサカはエレナを止める。

「……っ」

そう言ってくるコウサカの言葉に、目に、態度に、纏う雰囲気にエレナは慄然とした。

「全く分からないというなら、知ろうとするな。踏み込もうともするな」

「…あ……ぅ……」

エレナは小さく震えながら、言葉を失った。

そんなエレナの頭に、コウサカは優しく手を置く。

「だから、ここから先は俺がやる」

その言葉は力強く、そして優しかった。

「でも……でもっ……！　それじゃあんたがっ……」

「何も問題はない。どの道、ミレンシアである俺はそういうものだ」

その言葉に、エレナは何か違和感を覚えた。

「……？」

「いや。ディーファは俺が必ず殺す。だから、復讐など考えず普通の少女として生きる道を考えろ」

違和感の正体は分からなかったが、心から自分達を案じ、優しく頭を撫でてくれるコウサカに、エレナは自分の心が温かくなったことを感じた。

そして、その口調、性格までもが戻る。

「…あんたは……あんたは本当に何なわけ……？　あたしには死ぬなって言って、自分は死ぬ気なの……？　わけわかんな

いよっ……！」

頭に手を置かれたまま、エレナはコウサカを見上げる。

その目からは、また涙が零れ落ちていた。

「死ぬ気などない。それしか手がないというのなら、そうするがな」

自分の命ですら、目的達成のための手段のひとつだと、コウサカは言い切った。

「俺は、‘本当の意味’でのミレンシアだからな」

「……？　どういう、こと……？」

コウサカは、エレナの頭から手を離した。

「世界の……いや、やはり知ろうとするな。もう君らは、血生臭い世界にいる必要はない」

「……なに、それ……。はっきりしてよっ……！？」

コウサカは目を伏せる。

「すまない」

それは、はっきりとした拒絶の意思表示だった。

「……っ」

「すまない」

同じ言葉を、コウサカは繰り返す。

「謝るなっ……！　……あやまる……んじゃ……ない……ぅ……うぅ……何で……何で泣いてんの、あたし……ぅあ……うぁあああっ……」

自分でも、その理由も分からずエレナは涙する。

「……なんで……なんで……」

「……」

そのエレナを、コウサカは静かに佇んだまま見つめた。

「……やっぱり」

ミレイナは、身体を両手で抱くようにしながら扉に背を預け、部屋の中から聞こえる話を聞いていた。

「コウサカさん……」

すでに、コウサカからダンバートンを発つことは聞かされていたが、その覚悟が思っていたものと段違いだった。

「……」

自分達のやらなければならないことは、復讐などではないことをミレイナはよくわかっている。コウサカの作ってくれた時間の意味も、よく理解していた。

ただ、ミレイナは不安で仕方がなかった。

本能的な何かが、コウサカという青年との別れに対して、何かを発信している。

それはまるで、ネル達がいなくなる時に感じた、嫌悪感にも似た強い不安だった。

―第十七章―　キスと朴念仁

黒魔族通行証が完成する日の朝。
装備を全て付けたコウサカは、聖堂にクリステル司祭の下を訪れていた。
「『門』？」
「はい。その通行証を、『門』に当ててください。それで道が開きます」
二人は最初と同じく、聖堂の中で鍵が掛かる部屋の中で話していた。クリステル司祭以外は、朝の清掃活動や屋外での祈りといったことでいなかった。
コウサカは、手渡された通行証に目を向ける。
「その『門』というのは、ダンバートンにもあるような、あのような感じの門ですか？」
「はい。二対の石柱が両脇に立っているので、一目見れば分かると思います」
コウサカの言葉に、クリステル司祭は頷く。
「感謝します、クリステル司祭。こんなことに労力を使わせてしまい、申し訳ない」
コウサカは、頭を下げる。
「こんなことだなんて……。元々は私達魔族が――」
コウサカは、黙ってクリステル司祭の顔の前に指を立て、言葉を途切れさせる。
「今の貴女は、クリステル司祭です。魔族など何の関係もない」
「そう、でしたね……ありがとうございます。本当に何を言っているのかしら」
クリステル司祭は、柔らかく微笑んだ。
そんなクリステル司祭に視線を向けながら、コウサカは訪れたもうひとつの用件を切り出した。

「俺がここを発つに当たって、もうひとつお願いしたいことがあります」

コウサカは、口調こそはいつもよりは丁寧であるが、一人称は変えずまるで友人に話すような口ぶりになっていた。

「なんでしょうか？」

「俺は、二人のサキュバスを匿っています」

「っ！？」

クリステル司祭が、息を呑んだ。

「それは、本当に……？」

「恐らく、耳に入っているでしょう。件のラビダンジョンに住んでいた二人です」

ラビダンジョンの崩落は、街の中でもハンター達の話から噂となって知られていた。

クリステル司祭が、真剣な表情を浮かべた。

「……なるほど。あなたは、通行証の一件でその二人と知り合っていましたね。だからですか？」

「ええ」

本当は五人だったのですがね、などと余計なことはコウサカは口にしないで首肯する。

「その二人のことを、お願いしたいのです。金銭面のことならば、俺が何とかします」

「いえ、それはいいのですけど……その二人のことは、あと誰が？」

「領主様と、その近しい者だけです」

「……」

クリステル司祭は、気難しげにコウサカから視線を逸らした。

「無理は承知で言っています。だが、もしもの場合、領主様ではあの二人のことは手に余ってしまう」

コウサカは、クリステル司祭の立場と心中も理解している。しかし、他に二人を任せられる相手がいないのだ。

「……わかりました。その二人は……？」
「連れて来ます」
覚悟を決めたような表情のクリステル司祭を部屋に残し、コウサカは出て行った。

数分後、ミレイナとエレナに事情を話し、聖堂へと連れて来ていた。
「……」
微かに洩れる、しかしコウサカくらいにしか聞こえないほどの声量を耳にしながら、コウサカは三人がいる部屋の外で扉の横で壁に背を預けていた。
どの道、コウサカは発つ。だから話を聞いても仕方がないため、外で見張りをすると言ったのである。
『……なんで、そんなに構うのさ』
朔絆が、コウサカの肩に実体化をして座った。
「恩がある」
『それがなかったら……？』
コウサカは一度目を瞑り、少しだけ黙考した。
「だとしても、恐らく手を出していたと思う」
『……だよね』
そう言う朔絆の声は、嬉しげでもあり、どこか切なげでもあった。
朔絆は俯いているため、コウサカにはその表情は見えない。
「どうした？」
『なんでもないよ、バーカ』
「むぅ……」
コウサカは、意味が分からず小さく唸った。
『ねぇ……』
「今度はどうした？」
一転、朔絆は不安そうに言った。

『大丈夫なのかな……』
「何がだ？」
主語を付けろ、と心中で言いながらコウサカは聞いた。
『この先、今までよりもずっとヒドイことになるよね……』
「だろうな」
コウサカは、何も気にしてない風に言った。
『だろうなって……今度のは本当に危ないかもなんだよ……？』
「危ないだろうな」
同じような口ぶりで、同じようなことをコウサカは言った。
『死ぬかも……しれないんだよ……？』
朔絆は、それを心底信じたくないという表情を浮かべて、コウサカを見上げた。
「かもしれないな。だが、俺はミレンシアである以上行かねばならん」
『……いやだよ』
また朔絆は俯きながら言う。
『あたしは、あんたが死ぬのいやだよっ……ずっと一緒にいたいよっ……！』
朔絆は肩から消え、コウサカの目の前に完全実体化をして立った。
その目には、大粒の涙を浮かべながら。
「……」
一度、コウサカは目を瞑り、静かに息を吐いた。
そして、その口から出た言葉は何とも気楽そうなものだった。
「そうか。なら、死なないとする」
『ふぇ……？』
涙を浮かべながら、朔絆は意味が分からずキョトンとした。
「俺が死ぬのが嫌（いや）だと言うのなら、死なないようにするとする。それでいいか？」
いつものように、コウサカは朔絆の頭の上に手を、ポンと置きな

がら言う。
朔絆は涙など引っ込み、思わず笑ってしまった。
『……ぷ、あははははっ、な、何それ？　バッカじゃないの？』
「馬鹿とは何だ。真面目に答えてやったものを」
『だから、バカだって言ってんのっ！　あはは、もうっ、真剣に悩んじゃった自分がバカみたいじゃないのさ』
それに、コウサカは少し不満げな顔をした。
「何故お前が悩むと、俺が馬鹿呼ばわりされなければならない」
『ふん、知るかっ！』
コウサカは頭痛でもするのか、額に手をやった。
ただ朔絆の表情は、とても楽しげで活き活きとしていた。

宿屋アリアンロッド。
「はぁっ！？　明日出てくぅっ？！」
ミレイナとエレナの二人は、聖堂に居を移すことになった。
聖堂近くにはハンター宿舎があり、またクリステル司祭は人気なため人気も多いため、安全性はコウサカがいなくなった宿屋にいるよりは高いからである。
ちょっとした事件があり、朔絆が非常に不機嫌になってしまったが、コウサカはとりあえず世話になった、いや逆に世話を焼いたのだが、カリンに発つことを伝えに宿屋へと戻ってきていた。
「ああ」
カリンは素っ頓狂な声を上げながら驚いたが、コウサカは何故そこまで驚いているのか分からず、素っ気無く頷いた。
「何でそんな急っ！？」
「いや、急というわけではない。一週間前には決まっていたことだ」
「言えよっ！」
うがー、とカリンは両手を振りながら怒った。
「？　だから、こうして言いに来ているだろう？」

「一週間前に言えって言ってんのっ！」
コウサカは首を捻る。
「何故、言う必要がある？　君は旅には同行しないだろう」
「う……そ、そうだけど！」
至極当然なことを言われて、カリンが怯む。
「でも、せっかく仲良くなったのに……寂しいじゃんか」
「……俺の覚えが確かなら、買出しの荷物持ちに山菜取りの護衛にと、散々使われた覚えがほとんどなのだが」
「う……」
これまた、カリンが怯む。
それを見て、ふぅとコウサカは軽く息を吐く。
「すまなかった」
「え、え？」
唐突に詫びられ、カリンは目を白黒させる。
「そこまで気にすることだったか。次からは、言うとしよう」
「え、あ、その……えと、ね？」
言葉が見つからず、カリンはあたふたとした。
「まあ、そういうわけで明日発つ。世話になった」
言葉を捜しているカリンに構わず、コウサカはさっさと背を向けて階段を上がろうとした。
「あ！」
何か思いついたのか、カリンが大声を出した。
それにコウサカは振り返った。
「どうかしたか？」
「あ、そのっ」
言ってしまってから後悔したのか、カリンを頬を染めながら、しかし意を決したようにコウサカを見た。
「へ、部屋空けとくから、また来なよっ！」
それにコウサカは、少しだけ驚いたような顔をした。
「ああ、またダンバートンに来れば寄るとしよう」

カリンには、完全武装をしていて兜のせいで顔の半分も見えないが、コウサカが少しだけ笑みを浮かべていたような気がした。
「まあ、何にせよ」
階段に向き直ったコウサカが言う。
「それは、出て行く際に使う言葉だと思うがな。発つのは明日だ」
「あ……～～～っ！」
カリンは顔を真っ赤に染めながら、その場で意味もなくバタバタしていた。
今度は振り返らず、コウサカは階段を上がって行った。

コウサカは久しぶりに自室に入り、いつも通り壁に背を預けて休んでいた。
ただ朔絆がものすごく不機嫌なのを通り越し、険悪そうな顔でコウサカのことをずっとベッドの上で座りながら睨んでいた。
「一体、急にどうした？　まさかさっきの「あれ」のせいか？」
「あれ」はミレイナもお守りと言っていたから大したことでは、とコウサカは首を捻る。コウサカには、何故したのかは全く分かっていないが。
と、廊下の方からドタドタと慌てたような足音が聞こえた。
「コウサカさ……へぶぁっ！？」
扉が開いてタクトが顔を出したかと思ったら、いきなりぶっ飛びながら前に倒れた。
「邪魔！　コウ、明日行くってホントっ！？」
カグヤがタクトの後頭部に、必殺蹴りを炸裂させたようだった。
「おい、タクトが動かなくなったが」
後頭部に必殺蹴り、顔面を床に激突させたタクトは、ピクリともしなくなっていた。
「そんなこと、どうでもいいから！」
いいのか、と心中でコウサカ。

「……い」
コウサカが目を向けると、タクトがプルプルしながら起き上がっていた。
「いってぇえなっ、てめぇ！！　マジで殺す気か?!」
「急いでんのに、あたしの前にいるからでしょうが！」
「は!?　お前メチャクチャだぞ！」
やいのやいの、ぎゃーすかぎゃーすか。
コウサカがふと見ると、険悪だった朔絆がより凶悪な顔付きになっていた。
そして、そら恐ろしい無表情で一言ポツリと呟いた。
『……ぶち殺されたい?』
それは殺気が濃縮されたような、恐ろしい一言だった。
種類と度合いは桁違いだが、以前コウサカがディーファを圧倒した時に出したような殺気に似ていた。
「「……ヒィっ！（ガタガタガタガタガタッ）」」
一瞬で二人は真っ青になって、ガタガタ震え始めた。
「……おい、朔絆」
朔絆を見たコウサカが、ふと何かに気付いたように動きを止めた。
「……タクト、カグヤ。外で話すぞ」
一人だけケロリと、平気な顔をしているコウサカは、頭痛にでも耐えているように手の平で目元を覆った。
「「は、はいぃっ！」」
それは二人のためでもあった。
しかし、朔絆のためでもあった。
「……」
コウサカがチラリと、部屋を後にする時見た朔絆の顔は、まるで大好きな玩具を取り上げられた子供が拗ねたような、それでいて……。
『……ひっぅ……バカぁ……』
切なそうだった。

一同は、宿屋を出て表通りに来ていた。
「ま、マジで走馬燈が見えた……」
部屋を出たタクトの第一声は、それだった。
「……う、うぅぅぅ……（こくこくこくこくっ）」
まだ顔が青いカグヤも、何度も頷いていた。
「……やれやれ」
一人コウサカだけが、呆れたように溜息を吐いていた。
（……またやったか）
そう胸裏で呟きながら。
「はぁ……。あ、そうだった。コウサカさん明日出て行くって本当っすかっ！？」
気を取り直したタクトが、コウサカに掴み掛かる勢いで聞いた。
「ああ」
コウサカは、にべもなく答えた。
「何で教えてくれなかったんすかっ！？」
カリンと同じ質問をされ、コウサカはまた首を捻った。
「明日、出て行く時に一声かけるつもりだったが」
「それじゃ遅いんすよっ！」
ふむ、とコウサカは顎に手をやる。
「だが、君らは旅に同行はしないだろう？」
だから言う必要はない。
それにタクトは顔をしかめた。
「いくら……いくら何でも冷た過ぎるっすよ！　友達にも何にもないんすかっ？！」
「友達？」
それに、コウサカは首を捻った。
「友達とは何だ？」
「んなっ！」

タクトが絶句した。
そして、固まったタクトに代わって、今度はカグヤがコウサカに喰いついた。
「コウッ！　今のはいくら何でも酷すぎるよ！！」
「？　俺は『友達とはどういう意味』か、と聞いただけだが」
ピタリとカグヤの動きが止まった。
「え、まさか……友達って、言葉の意味が分からないってこと……？」
コウサカが頷く。
「うそぉっ？！」
今度はカグヤが喫驚した。
「え、うそ、あれ、え、えぇえええっ？　ほ、本気で言って……て、コウは冗談言うタイプじゃない、よね……」
カグヤが溜息を付いた。
「コウのことだから、友達がいないんじゃなくて、気付いてないだけだと思うけど……ああ、もう！　こんな話しに来たんじゃないのっ！」
と、絶句していたタクトが、はたと何かを思いついた。
「コウサカさん！」
「どうした」
コウサカはタクトの方に目を向ける。
「その旅、コウサカさん達『だけ』しか行っちゃいけないんすか！？」
「ふむ？　いや、レオナルド団長揮下の騎士団も共に行くから、俺達だけで、ということは無いな」
それを聞いたタクトは、目を輝かせた。
「わっかりましたー、どもっす！　行くぞカグヤ！」
「は、え、ち、ちょっと引っ張らないでよ！」
タクトはいきなりにカグヤの腕を掴むと、そのまま一方的に走り出した。

走り遠ざかりながら、タクトはコウサカを見た。
「また明日っすー！」
「ふむ」
何故タクトが急にあんな行動をしたのか分からず、コウサカは首を捻るが分からず、早々に考えを放棄した。

コウサカが部屋に戻ると、朔絆がベッドの上で不貞腐れた様子で、しかし涙の跡が残った顔で寝息を立てていた。
「……俺が何をした」
コウサカは溜息を吐きながら、朔絆の傍らに腰を下ろす。
そして、優しく髪を撫でてやった。
『……ん……ふぁ……んん……ばか……ぁ……ぅん……』
夢の中でまで、コウサカは罵られているようだった。
（……やはり、「あれ」か？　それほどの行為だったのか？）
コウサカは、ミレイナとエレナの残していった残り香を鼻に感じながら、回想した。

コウサカは、ミレイナからキスをされたのである。

時は戻る。
ミレイナとエレナ、クリステル司祭の話し合いが終わり三人が部屋から出てきた。
「終わったのか？」
コウサカは壁から背を離しながら、一番最初に出てきたミレイナに聞いた。
「……はい」
コウサカを見たミレイナの顔は、どこか寂しげだった。
そして、寂しげな笑みを浮かべながら言う。

「本当に……ありがとうございました」
「ああ」
コウサカはそれを鼻にかけるでも、恩を押し付けようとする様子もなく、ただ興味も無さそうに頷いた。
「……ふふ、あなたは本当にそうなのですね」
「何のことだ？」
コウサカは意味が分からず、首を傾げる。
「いえ、何でも。あの……」
突然、ミレイナは恥ずかしそうに頬を染めた。
そして、何故かチラリとエレナとクリステル司祭を見た。
「……はぁ、もう。好きにしなよ」
「……」
エレナは呆れたように溜息を吐き、クリステル司祭は微笑を浮かべながら黙って頷いた。
「？」
アイコンタクトの意味がさっぱり分かっていないコウサカは、首を傾げた。
『……ぅ～』
同じく意味はわからなかったが、何かを察した朔絆は警戒するように唸った。
「……」
一瞬、ミレイナは朔絆を見たが、意を決したようにコウサカを見た。
「あの……、少しお話しませんか？」

「い、いい風が吹いていますね」
「そうだな」
コウサカとミレイナは、聖堂の裏から行くことの出来る城郭の上に来ていた。

ダンバートンを囲む城郭の上には道が作られ、見張りや敵頭上からの迎撃が出来るようになっていた。
そして、見晴らしもよかった。城郭よりも高い建物は官庁くらいなため、視界を遮るものが一切無く、街や景色が一望できる。
ちなみに、今のコウサカは朔絆を持っていない。
ミレイナが大事な話だからと、真剣にコウサカに懇願したためである。しかし、どうしても朔絆はコウサカから離れようとせず、クリステル司祭に預けるもの断固拒否したため、仕方なくコウサカは離れた位置の聖堂の壁にクレイモアを立て掛けてきたのである。
（バカバカバカバカバカバカッ……！）
その胸裏に何を想うか、コウサカが気付くはずはなかった。
「……」
「……」
コウサカとミレイナは、ミレイナの願うとおりに二人きりである。
だが、しかし。
「……あの」
「どうした」
「えと、その……な、何でもっ」
先ほどからずっとこれである。
ミレイナは真っ赤な顔でもじもじして、コウサカを見ようともしない。
だが、その理由をコウサカが気付くわけが無い。
「？　大事な話があると言っていなかったか？」
「え、あ……その……ありますします」
コウサカが隣に並ぶと、ミレイナは俯いてしまった。
「話したくないことなら、無理に話す必要は無い」
「は、ひ、必要あります！」
急に、バッとコウサカをミレイナが見上げた。
「なら、何故話さない？」
「え、あ、そ、それは、その……はぅ……」

また真っ赤な顔で、ミレイナはコウサカから視線を外すと俯いた。
「そんなに深刻なことなのか……」
その様子に、コウサカは見事に勘違いをした。
「まさか魔族には、空間移動の魔法が存在するのか？」
「はい……？」
ミレイナが、目を瞬かせながら顔を上げた。
「それなら確かに深刻だな……。ダンバートンがいくら防備を固めてあるとしても意味が無くなる」
コウサカは顎に手をやりながら、真剣に考え始めてしまった。
「君は、その魔法のことは何か知っているか？　いや、魔法ではないのかもしれないが、何か危惧することがあるのだろう？」
しばしミレイナはポカンとしていた。
「……ふ、ふふ……あは、あははは っ」
そして、急にこれ以上可笑しいことはない、という感じに笑い出した。
「？　どうした」
「あははは っ……ふ、ふふっ……ご、ごめんなさい。……うふふっ……だ、だってっ……んふふふ……」
ミレイナは、目に涙まで浮かべて笑い続けた。
「クスクス……はぁっ、もう久しぶりですよっ？　こんなに笑わされたの」
浮かべた涙を手で拭いながら、ミレイナは実にすっきりした表情を浮かべていた。
「？」
ただ、コウサカだけは何のことか分からず、始終首を捻っていた。
「あはは、分かりませんよね。それでいいんです」
「？　ふむ、わかった」
ミレイナは清々しく穏やかな笑みを浮かべながら、後ろで腕を組みながらコウサカに身体ごと向き直る。
そして、一陣の風が吹き抜けた。

ミレイナの腰に届くほどの長い髪が、風に流されなびいた。金色の髪が宙を舞うその光景は、美しかった。

ミレイナは舞う髪が顔に掛からない様に片手を耳の当たりに持っていき、髪を押さえながらコウサカを真っ直ぐに見る。

「お願いがあります」

「ふむ？　ああ、何だ」

コウサカは先ほどのことがまだ分からず、首を傾げながら頷く。

「兜を取って、目を瞑って少し屈んでもらえないですか？」

「？　ああ」

コウサカは言われた通りに兜を脱ぐと、目を瞑って屈んだ。

それは、ちょうどミレイナと同じくらいの顔の高さだった。

「……」

ミレイナは、今からしようとしている自分の行為を考えて、また顔を真っ赤に染めた。

目の前にはコウサカの顔。

その顔は今していることの意味が分からず、少し怪訝そうな顔をしていた。

「……」

覚悟を決めて、ミレイナは少しずつコウサカに顔を近づける。

横一文字に引き締めてられている、コウサカの唇が近づく。

桜色の唇を小さく震わせながら、ミレイナは目を細めながら近づく。

ゆっくりと。

静かに。

互いの唇が触れ合うまで、あとほんの僅か。

あと、五ｃｍ。

あと、四ｃｍ。

あと、三ｃｍ。

ミレイナは目を閉じる。

あと……。

『あぁあああああああああああああーっ?!』

ビクリと、ミレイナは動きを止めた。

それと同時、コウサカは目を開けるよりも速く顔を声の方に向けた。

「どうした!?」

コウサカは屈んだまま、腰の剣の柄を掴みながら声を発する。

『なっ、ななっ、ななななななっ……!』

その視線の先には、真っ赤な顔で聖堂の隅から顔を出している朔絆が、口をわななかせながら立っていた。

「……？　一体どうした」

コウサカはその姿と、周りに何の異常もないことを確認すると、柄から手を離しながら拍子抜けしたような表情を浮かべた。

「……クス」

少しの間、ミレイナは呆気に取られていたが、口に手を当てて小さく笑った。

そして。

「……チュ」

静かにコウサカの横顔に顔を近づけると、ミレイナはその頬に軽くキスをした。

『あぁあああああああああっ……!』

「……？」

朔絆は目を見張りながら大声を出し、コウサカは意味が分からずミレイナに顔を向けた。

「……お、お守りです。あなたが……、無事にまたここに戻って来れるようにするための……お守り」

ミレイナは赤い顔のまま、コウサカの瞳を真っ直ぐに見ながら言

った。
「あ、ああ。そうなのか」
コウサカはそれで納得してしまった。
「クス……はい、そうなんです」
その時浮かべていたミレイナの笑みは、とても魅惑的で、蠱惑的で……。
そして、切なく寂しげだった。

コウサカが回想を終えた頃、朔絆が目を覚ました。
「起きたか」
『バカ……』
朔絆が起きて第一声が、それだった。
「まだ機嫌が直らないか」
『バカッ、バカッ……バカぁ……』
朔絆は、装備を外してアンバーウェア姿のコウサカの背中をポカポカと、しかし力無く殴った。
「ふむ」
コウサカは顎に手をやる。
「あの行為については、ミレイナはお守りと言っていただけだが、違うのか？」
そのあまりにも馬鹿過ぎるコウサカの問いに、朔絆は勢いよく顔を上げた。
『はぁっ!?　そんな理由だけでキスするわけないでしょっ!!』
「キス？」
それに、何故かコウサカは首を傾げた。
「それがあの行為の名称か？」
そのコウサカの言葉に、朔絆が目をまんまるにして驚いた。
『……は、はぁっ!?　え、ちょ、うそ……え……？　ほ、ホント、なの……？　キスって、ホントにわかんないの……？』

「そう言っているだろう」
そういう言うコウサカの顔は、嘘を言っているようにはとても思えなかった。第一、付き合いの長い朔絆は、コウサカが嘘を言うタイプではないことをよく分かっている。
それでも、あまりの異常さに聞き返せずにはいれなかったのだ。
『いくらなんでも……記憶喪失ってだけじゃ、説明つかないよ……』
「ふむ」
コウサカは最初から、自分の身体能力を最大限生かす動き方は知っていた。また、この世界の言語、文字、魔法体系と言ったものも知っていた。
『普通、身体というか……感覚でわかんない？』
「いや」
ただ、普通の人間としての感覚と言うものが欠落し過ぎていた。
その中でも、好意というものが無さ過ぎた。
誰しもに優しく、強く泰然としたその姿に、羨望と好感を抱く者は多かった。
しかし、その全てに気付かず、ただいつも同じように立ち続けていたのがコウサカという青年である。
と、コウサカがいきなり話を変えた。
「お前が怒っているのは、その‘キス’というもののせいか？」
『え……、あ、うん』
「それは何故だ？」
『そ、それ、は……』
あんたが好きだから、何て朔絆が言えるわけが無く。
『……なんでもない』
しゅん、と気落ちしたようにベッドの上で朔絆は俯いた。
「よくはわからないが」
朔絆の胸裏は分からなくとも、落ち込んだことは分かったコウサカは、朔絆の頭をベッドに腰掛けながらくしゃっと撫でた。

「俺には、それがどんな意味を持つのかは分からないが、お前が気落ちしたのはわかった」
そして、とんでもないことを言い出した。
「俺がお前に‘キス’というものをすればいいのか？」
『……？』
一瞬の沈黙。
『はっ、え、ふぇえええええええええええっ！？』
意味を悟った朔絆が真っ赤になった。
「違ったのか？」
てっきり自分もされてみたいのかと、とコウサカは首を捻る。意味は分かっていないくせに、とんでもない思考回路である。
『ふぇっ？！　あ、ちがっ……！　わ、わな……あ、そのっ！……あぅあぅぅ……』
しかも、下心というものが無いため余計に性質が悪い。
「？」
『何でそこで首を捻んのさっ！』
朔絆は真っ赤な顔のまま、コウサカに食って掛かる。
「ふむ。まあ、とりあえずだ。お前はどうしてほしいというのだ？」
『は、え、ど、どどどうって……？』
腰掛けたまま、コウサカは朔絆を見下ろしその瞳を覗く。
「俺にはお前が怒る理由は分からない。だが、言葉を以って理解することは出来る」
その瞳は、ただただ真っ直ぐに。
そして澄み切り、純粋さを湛えた色をしていた。
「感情でも、それが言葉だとしても。結局は、言わなければ伝わらない事がほとんどだ。だから、言ってみろ」
『……』
朔絆は少しの間、ポカンとしていた。

そして、少し涙目になった。
（ホントに、バカぁ……）
果てしなく鈍いくせに、真っ直ぐ過ぎだよ……このバカは。
言いたくても……言えない事だってあんのっ、気付けバカっ。
ホントに……どこをどうやれば、こんなヘンテコな人間になんのさ……。
『……じゃあ』
心の中で散々悪態をつきながら、赤い顔で朔絆はコウサカの瞳を見つめ返す。
『……そのまま目、閉じて……』
「？　何だそれは？」
『いいからっ、閉じろ！』
「……ふぅむ」
少し前にも同じ事を言われているくせに、また意味が分からないという顔のままコウサカは目を閉じた。
（……よ、よしっ）
朔絆はコウサカとは身長差があり過ぎる為、ベッドの上で膝立ちになる。
『～～～っ』
益々顔を赤くさせながら、朔絆はコウサカの肩に手を置く。
コウサカと朔絆の身長差は、約四十ｃｍ。座っているコウサカとは、ようやく膝立ちで同じ高さだった。
普段とは違う高さにあるコウサカの顔に、朔絆は顔を近づけていく。
それでもようやく同じ高さなため、身体を預けるようにして密着させながら近づけていく。
赤い顔で、とろんと陶酔したような表情のまま、朔絆は目を細めていく。
朔絆の心臓は、コウサカにすら聞こえるのではないかというほど大きく脈打ち続ける。

朔絆は小さな唇をわななかせながら、コウサカの唇に近づけていく。

『あぅっ……』

朔絆は目をキツく瞑った。

あと少し……。

朔絆の身体が、ふるふると震え始めた。

あともう少し……。

朔絆の身体は震えを通り越して、ガタガタし始めた。

あとほんの少し……。

朔絆の全身は茹ダコのように、真っ赤になっていた。

『やっ……やっぱり無理ぃいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！』

「ぐはぁっ……！？」

いきなり顔を離した朔絆が全身のバネをフルに活用して、見惚れる様な見事なアッパーカットをコウサカの顎にクリーンヒットさせた。

『無理無理無理無理っ……！　や、やっぱりこれは早いっ、はにゃすぎぅっ！』

最後の方は意味が分からないことを、朔絆は真っ赤な顔のまま叫んだ。

『こ、こういうのはもっと段階を進めて、ゆ、ゆっくり、あの、後っ、や、ダメっ、やっぱり……ああっ、あたしはのバカッ！　バカバカバカバカッ……！』

段階と言うのなら。コウサカと朔絆の今の段階ならキスくらい普通だと思うのだが。

ふと朔絆が気付いた。
『あ、れ……？　こ、コウサカ？』
顎に強烈なのを喰らって、ベッドに倒れたままのコウサカに。
『えっ、あっ、や、やり過ぎたっ……！　ちょ、コウサカッ、コウサカッ！！』
朔絆が強く揺すっても、コウサカはピクリともしなかった。
『あ、う……や、ヤバイっ！　これはマジヤバイって！　ちょ、起きてっ、起きてよコウサカっ！！』
全て朔絆のせいなのだが、涙目で必死な様子でコウサカをずっと揺すっていた。

ミレンシアであり、恐らくウルラ大陸最強の力を有する青年、その名はコウサカ。
エリンに来てから初めての戦闘不能。
原因。
相棒からのほぼ八つ当たりに近い見事なアッパーカット。

……。

出発はとうとう明日の朝となった。

―第十八章―　発ち往く（前書き）

一ヶ月ぶりとなります。
お目を通して下さっている方々、遅れに遅れ誠に申し訳ございません。
また、もし暇つぶしの楽しみ程度で待ってくれている方がおられましたら、そちらも本当に申し訳ございませんでした。
まだ読んで頂けるのなら、お目を通した方々に少しでも快い時間を過ごされることを祈ります。

―第十八章―　発ち往く

起伏が激しく山道と見間違える街道を、銀光眩い物々しい集団が黙々と進んでいた。

彼らの進んでいるそこは、ガイレフと呼ばれていた。

過去にセンマイ平原と呼ばれる平原――しかし今では大戦の影響で巨大なクレーターと廃墟しかない――で起きた大戦時、人間の軍隊が駐屯した広大な地である。

ダンバートンに近い北側には起伏激しく、緑豊かな森と背の低い草むらの広がるそこは動物やモンスターの蔓延る山々であった。

しかし、そこから南に進むと景色は一変する。

日差しが強く乾燥した気候のせいで乾いた赤い地面が続き、枯れ草、枯れ木、剥き出しとなった岩石しかない。

そして、数十mはあろうかという巨大なドラゴンの石像のような、もしくは遺跡と思われるものが発掘されている。

それが一体何なのか、何故あるのか。その全てが謎のまま、ただ発掘だけが続けられていた。

縦列で進む馬車の周りを、騎兵達が松明を片手に進んでいた。

その馬車の御者台で手綱を握りながら、コウサカは静かに目を伏せていた。

「……」

コウサカ達は、まだ北側に入ったばかりのところを進んでいた。

ダンバートンから出立し、ガイレフの山間に入るだけですっかり日が暮れてしまった。

いい加減馬達も疲れているだろうから、そのうち夜営の準備を始めるだろう。

オグマ騎士団は、五十の騎士をダンバートンに残し百五十でバン

ホールを目指していた。
　騎兵は六十五。他は全て歩兵として二頭立ての馬車に乗っていたが、全ての者は騎兵にも、弓兵にも、魔術兵にも、応急処置の出来る衛生兵にも、どんな兵科にもなることが可能であった。
「……」
　コウサカは目を開け、幌馬車の中を見る。
「……すぅー……すぅ……」
　ナユキがあどけない表情で、毛布に包まり眠っていた。
　そして、その隣を見て小さく溜息を吐く。
「……すぅ……す……んぅん……」
「……すかー……すぴー……」
　カグヤと、タクトが寝息を立てていた。

　時刻は早朝の六時前。
　天候は、雲ひとつなく快晴也。
　ダンバートン南門の外には、騎兵と馬車が隊列を組んでいた。
「……領主様。これはどういうことですか？」
「あ？　見りゃわかんだろ」
「見て理解できないから、聞いているのです……」
　目の前にはバルドラスと、何故か面白そうな顔のアルシアがいた。
　ルミルはアルシアの抜けた分の仕事を担って、忙しいそうだった。
　しかし、コウサカが呆れ顔で目を向けた方にいる二人が問題だった。
「よろしくっす！」
「……」
　何やら遠出用の荷物を持ってやる気満々のタクトと、微妙な感じの表情を浮かべたカグヤが居た。
「何だよ、だったら来なきゃいいだろ？」
「そ、それじゃあたしだけ心配してないヒドい奴みたいじゃない！」

やいのやいの、ぎゃーぎゃー。
しかし、コウサカはそんなにことにツッコミをする人間ではない。
バルドラスに率直に言った。
「この二人を、死なすつもりですか？」
その抑揚の無い言葉に、さすがに二人も口を閉じた。
「なんで、オレがこいつらを行かせるのか分かんねぇのか？」
「だから、聞いているのです」
バルドラスの目の色が変わった。
「お前が、それを分からねぇからだ。それにな、行きたいと言ったのはこいつらだ。だから、オレは命令を出した」
その目は鋭く、人の上に立つ責務を覚悟した者の光を宿していた。
「これはダンバートン領主バルドラスの名において執行される。貴様が嫌かどうか何て何一つ関係ない」
それが恐らくは領主の貌。
「ダンバートンギルドダンブレテンよりタクト、カグヤ両名をバンホール援軍として、また事態把握のための斥候として派遣するもの也」
と、そこまで言ってバルドラスが表情を崩しニヤリと笑った。
「てぇことだ。お前が居る居ないは関係ねぇよ。ま、暇があったら面倒見てやってくれや」
それに、タクトとカグヤが続く。
「邪魔にはなりませんから、お願いしまっす！」
「……その、お願い」
タクトは深々と頭を下げ、カグヤは視線を逸らしながらも同じく頭を下げる。
「……ひとつだけ徹底しろ」
コウサカは、二人に頭を上げさせながら言う。
「戦闘時、絶対に前には出るな。それが出来ないのなら、強硬手段を用いる」
ゴキゴキッ、と珍しくコウサカは脅すように片手の指の関節を鳴

らした。
「「……っ!?（ガクブルガクブルッ）」」
タクトは、手刀で気絶させられた時のことを。
カグヤは、表情一つ変えずにタクトに手刀を叩き込んだコウサカを思い出して、青い顔で頷いた。
まず間違いなくやるからである。
「なんだ？　まあ、いいか」
バルドラスは首を捻っていたが、ひどく真顔になってコウサカに視線を向けた。
「それじゃぁな、坊主。……死ぬんじゃねぇぞ」
バルドラスはそれだけ言うと背を向け、手をヒラヒラさせながらレオナルド団長の下へと歩いて行った。
「君らも挨拶を済まして来るといい。団長にはこれから世話になるだろう」
「あ、はいっす！」
タクトはカグヤを促すと、バルドラスの後を追っていった。
そして、アルシアが残っていた。
「アルシアさんも黙っていないで、説得をお願いしたかったのですが」
「……ふぅ。ねえ？　本当にあの二人が行く理由わからない？」
「分かりません」
そのコウサカの表情を見て、アルシアは珍しく溜息を吐いた。
「ラビダンジョンで、自分がどんなことをしたか思い出してみなさい」
「？」
コウサカは、一人でスケルトンを破砕して、サキュバス達を追い詰めたことしか思い出せない。
「その顔だと、全然分かってないわね……あのね、ミレンシア君。結果としては勿論大成功だったけど、君のとった手段が問題だったの。……まあ、私達が君の力量と違いすぎたのも原因でしょうけ

ども」

アルシアは、一息吐く。それと同時に、チラリと騎士団を見る。

「あの隊長さん達と一緒なら大丈夫だと思うけど……。ミレンシア君、君は強すぎるの。でも、それは弱点でもあるの。もし、全部一人で片付くと思っているならその考えは捨てなさい」

鋭く言い放つアルシアだったが、コウサカが見せたことにナユキ共々目を白黒させた。

「……ふ」

小さく、自嘲気味な笑みを見せたのである。

「……ミレンシア君、君ってもしかして」

「え……？　どういうことですか？」

アルシアは、気まずそうにナユキを見た。そして、コウサカを見る。

「君は……それでいいの……？」

ナユキには答えず、信じられないという顔でアルシアはコウサカを見た。

「……」

コウサカは答える代わりに、静かに目を閉じた。

「そう……」

アルシアは、それに寂しげだが、しかし納得したような表情を見せた。

ふと、コウサカは片手を引っ張られた。そちらに目を向けると、ナユキが見上げていた。

「どういう……ことですか……？」

話の意味自体は分かっていなくとも、ただならぬ雰囲気にナユキは心配そうにコウサカを見ていた。

「……」

コウサカは少し目を瞑り考える。そして、目を開ける。

「今はまだ話せない。但し、事が終わる前には話そう。今はそれで納得してくれ」

「……はい。わかり、ました……」
コウサカの申し訳無さそうな顔を見て、ナユキは心配そうな顔のまま引き下がった。
ふと、コウサカは南門に目を向けて、何かに気付く。
「ナユキ、先に乗っていてくれ」
「え？　あ、はい」
コウサカが乗車する馬車を指で示して促すと、ナユキは首を捻りながらも歩いて行った。
「あら、君も隅に置けないわね～」
一転して、すごく面白そうな顔でアルシアがニヤニヤし出した。
「何のことですか？」
「んー、なんでも～。まったく心配して損しちゃったわよ」
「？」
何のことやら。コウサカが首を捻っていると、アルシアはコウサカの肩をひとつ叩くと、バルドラスの下へと走って行った。
「ふむ」
まあいいかと、それを見送ると、コウサカは南門にいる人物の下へと歩み寄った。
「見送りか？」
「……」
ミレイナとエレナ、それにクリステル司祭がいた。
ただ、ミレイナの表情だけは晴れていない。
「ほら、お姉ちゃん」
「ぇう、その……」
エレナが背を押してミレイナを前に出すが、コウサカと目が合った途端真っ赤になって視線を地面に落とした。
クリステル司祭は、そんな光景を微笑みながら見ていた。だが、話が進まないと思ったのだろう。コウサカに話しかけた。
「ふぅ……仕方ないですね。コウサカさん、旅のご無事を祈っています」

「感謝です、クリステル司祭。わざわざこんな早朝に」
コウサカが頭を下げると、クリステル司祭は微笑んだ。
「いえ、こちらこそ色々とありがとうございました」
クリステル司祭が時間稼ぎをしたため、エレナが何とかミレイナを前に押し出した。
「もういい加減にしなよ……まったく」
「え、エレナが先に言いなさいっ」
「えー」
いつもと違い頼りなさ過ぎる姉に心底呆れたという顔をしながら、エレナはコウサカに視線を向ける。
「えーと……その、さ」
だが、いざ言おうとするとエレナも気恥ずかしそうだった。
「……色々とありがと。感謝してるよ」
「そうか。これから頑張れよ」
「……その、うん」
頬を染めながら、しかし頬を指で掻きながらエレナは目を逸らした。
「はいっ、次はお姉ちゃんっ！」
「え、エレナっ、ちょ、ま、待ってっ」
多少強引ながら、エレナはミレイナをコウサカの真ん前に無理やり突き出した。
「……っ！　～～～っ！」
そして、コウサカを見た途端また真っ赤になった。
「？」
その意味が分からず首を傾げていたコウサカだったが、何かを思い付いて腰のベルトからひとつだけ刃が鞘に収まっている短剣をミレイナの眼前に差し出す。
ミレイナは瞬き一つ、コウサカに聞いた。
「これは……？」
「武器のひとつくらいは、持っておいた方がいいだろう」

「……そう……ですね」
ミレイナの表情には、落胆の色が見て取れた。
予想していた通り、昨日のことを全く気にすらしてない。
「……気をつけて」
「ああ」
それだけ言うと、ミレイナは俯いてしまった。
「どうした？」
いくらコウサカでも、様子がおかしいことに気付く。
「いえ……」
それに、ミレイナは寂しげに笑みを浮かべるだけだった。
「あー、もうっ！」
そんな様子に業を煮やしたのは、エレナだった。
「こんの朴念仁！　いい？　お姉ちゃんはねっ！」
「エレナ！　……いいの」
「でもっ」
「……いいの」
エレナはまだ何か言おうとしたが、ミレイナの浮かべている笑みを見て口を噤んだ。
その様子を見ていたコウサカは、
「すまない」
ただいつものように謝った。自分が原因だということは理解して、しかし何故かは理解できずに。
そして、何の脈絡もないことをいった。
「ミレイナ、もう俺を当てにするな」
「え……？」
意味が分からずミレイナは目を瞬く。
「恐らくだが、俺はここには戻れない」
「それって……」
その言葉に意味を悟って、ミレイナの表情が変わった時、
『何言ってんのっ！』

朔絆（さき）がコウサカの目の前に実体化して出てきた。
『あんたは死なないことにしたんでしょうが！　何バカなこと言ってんのさっ！　ていうか、さっきからイライラすんだけど！』
「もしもの場合だ。何も言わずに行くより、そういう事態になるかもしれないことを伝えて行った方がいいだろう」
イライラする理由は知らん、と言った顔をしながらコウサカは朔絆に答える。
『むぅー、そうかもしんないけどさー』
朔絆の表情を見て、コウサカは溜息を吐いた。
「はぁ……分かった、分かった。必ず生きてここに戻るとしよう。これでいいか？」
『それならよし！』
その言葉に満足したのか、チラリとミレイナを一睨（ひとにら）みして朔絆の姿は消えた。
コウサカはミレイナを見る。
「まあ、そういうことになった。帰って来るまで、自分のことは自分で何とかしてくれ」
「……」
それに呆気（あっけ）に取られたような表情を浮かべていたミレイナだったが、
「……くす」
小さく、口に手を当てながら笑った。楽しげに。
「はい。では、お待ちしていますよ？」
「ああ。事が終わるのはいつになるか分からないが」
何故ミレイナが笑みを浮かべたのか分からず、コウサカは首を傾げながらも頷（うなず）いた。
「ええ。いつまでもお待ちしています」
最後に見せたミレイナの笑みは、心から温かそうな微笑（ほほえ）みだった。

一方、南門の陰。
（せっかく見送りに来てみたけど……こんな状況で、出られるわけないでしょうがっ……！）
カリンが苦悩していた。
カリンが朝起きると、すでにコウサカは宿を引き払った後だった。
急いで追ってきたのだが、ちょうどコウサカとミレイナ達の別れの場に鉢合わせしてしまったのである。
お別れはしたい。しかし、出難い。しかし、しかし。
とうとうカリンが頭を抱えてしまった頃、唐突に声が飛んできた。
「何をしている？」
バッとカリンが顔を上げると、不思議そうな顔をしたコウサカが真横に居た。
「え、え？　な、何でいんの？　あれ、え？」
カリンの姿は絶対に見えない位置にあったはずである。それなのに見つけられたのだから、混乱して当然だろう。
「変な気配を感じたのでな」
だから見に来てみたと。ホント何者だよ、という顔でカリンは呆れた。
「こんなところで、頭などを抱えて何をしていた？」
「え、あ、えーと……」
見っとも無いところを見られていたとわかって、カリンは顔を赤らめた。
「み、見送りに来たに決まってんじゃんか！」
顔を赤くしたまま、カリンは言う。
「なら、何故こんなところにいる？」
ごもっとな意見にカリンは視線を泳がせる。
「あー、えーと、その……と、とにかく！」
カリンは無理やり取り繕うと、
「へ、部屋空けとくから、まひゃ」
思い切り噛んでいた。

「っ！　……っ！！」
「とりあえず、落ち着くと良い」
ひとつ溜息を吐くと、コウサカはカリンにそう言った。
「まあ」
少し呆れたような表情のまま、コウサカは続ける。
「戻って来た時には、また寄ろう」
「ん？」
前の言葉と微妙に、しかし意味はかなり変わっていることにカリンは気付く。
「終わったらこの街に戻って来んの？」
「そうらしい。ただ、事がいつ終わるかは分からないから、いつ戻ってくるかは分からないままだが」
ふぅ、とコウサカは一息吐く。
「まあ何にせよ。戻ってきた時にはまた世話になる」
「あ……うん。ま、任せとけ！」
カリンは拳を握りながら意気込んだ。
「ああ。ではな」
後ろ髪を引かれるわけでもなく、コウサカは素っ気無く踵を返す。
「え、あ、終わり……？　ち、ちょっといくら何でも素っ気無さ過ぎるって！」
慌ててカリンはコウサカを引き止めた。
「しばらく居なくなるだけなのだから、そこまで仰々しいものなど不要だろう」
だが、とコウサカは内心で「確かにな」と思う。
「奇妙な巡り合わせではあったが、色々と世話になった。感謝している」
カリンに向き直ったコウサカは、軽く頭を下げた。
「あ、その……いいって！　色々付き合わせたのはこっちだし……」
「それもそうだな」

コウサカは遠慮なく頭を上げた。
「お前ってさぁ……」
カリンは呆れ顔になった。
しかし、ひとつ溜息を吐くとすぐに笑顔を浮かべた。
「ほら、とっとと行きなよ。部屋は空けておいてあげるからさ」
「ああ」
もう一度軽く頭を下げるとコウサカは踵を返し、今度こそ去っていった。
「……ふぅ」
その背を見送ると、カリンは南門の壁に背を預けた。
「……ま、そのうち帰って来るよね」
一週間程度とは言え、いつも我侭を言ってコウサカを連れ回していた。たまに文句は言っても、それでもいつも付いて来てくれたコウサカは、カリンにとっては大事な「友人」になっていた。
珍しく、カリンの顔は寂しげだった。

コウサカ達に割り振られた止めた馬車の中で、コウサカは伝令に来た騎士から話を聞くと、タクトを起こしに掛かっていた。
但し、コウサカ自身は揮下ではないため、命令というよりは頼み事という感じだった。
「タクト。おい、タクト」
「ん……ふあぁ……はひ？」
タクトはコウサカに肩を揺すられ目を覚ました。
「レオナルド団長達が夜営を設ける。お前も手伝え」
「あ、はいっす」
タクトが身を起こすと、その物音にナユキとカグヤも目を覚ました。ナユキの方は、まだ半分寝ているのか、フラフラしているが。
「ん……どうかした？」
カグヤは目を擦りながら聞いた。

「お前達はいい。力仕事だ」
一応タクトとカグヤも命令で来てはいるが、扱いとしてはコウサカと同じで、その命令権限はコウサカが持っていた。
騎士団側の本音としては、実力的、技術的に比べるべくも無いタクトとカグヤなど組み込みたくないのだろう、とコウサカは推察していた。
「よ、っと」
タクトもコウサカを追って馬車の後ろから降りた。
ドサリ、とコウサカが持っていた荷物が地面に下ろされた。
「お前はこれで、仕掛けを適当に仕掛けておけ。俺は団長と巡回について話してくる」
荷物の中にはロープや罠類が入っており、木々が生い茂る森の中では有効だろう。
「了解っす」
タクトは荷物を抱えると立ち上がり、コウサカが指示していった箇所に罠を仕掛けに行った。

兵員輸送に二頭立ての幌馬車十七、物資運搬に大型重種二頭立ての幌馬車十台がある騎士団の馬車は、御者台を外に向け円形に固まり、一角だけ入り口として空け、馬は馬車から外し円陣の中に入れてあった。
それぞれの騎士は馬車それぞれの御者台に二人ずつ配置（片方は鎧を着たまま）に付き目視で警戒し、二人が休むというローテーションを組んでいた。三十mほど前にトラップを仕掛け、馬車の少し前には油を塗ったいくつかの薪が置かれている。
そして、もしトラップに何かが引っ掛かったら、魔法でも火矢でも使ってすぐに火をつけるのである。襲ってきたのが動物なら火に怯み、賊の類なら近づけば確実に見つかるためまず躊躇う。それでも進んでくる者がいれば、いよいよ騎士が御者台から、場合によっ

ては降車して迎撃する。
　また、警戒する騎士から三、四組は降車して歩哨として動いている。これはタラ王立騎士団の夜営時に設営する基本的陣形である。
「……暇っすね～」
「気を緩めるな」
　コウサカ達もご多分に漏れず、御者台の上から周囲を警戒をしていた。ナユキとカグヤには騎士団の炊事班の方に回ってもらっている。カグヤは言わずもがな、ナユキも実は村にいた時に普通以上の料理の腕であったためである。
「りょかいっす」
　タクトは肩をすくめると、コウサカと同じように前方を見据えた。しかし、やはり暇であったため余計なことが色々思い出されてくる。
（……）
　その中のひとつに、タクトは顔をしかめた。

　それは出立前、ダンバートン官庁の領主執務室に行った時に聞かされたことだった。
「領主様っ、コウサカさん達を行かせてください！」
　タクトは土下座をしながら、領主バルドラスに懇願していた。
「ち、ちょっと、なに馬鹿なこと言ってんの！」
　理由も聞かされずに連れて来られたカグヤは、困惑しながらもタクトを叱る。
「……お前ぇ等の方から来るとはな」
　対してバルドラスは怒るわけでもなく、嘆息した。
「タクト。てめぇは気付いてんのか？」
「……？　なんのことですか？」
　てっきり怒声が飛んでくると思っていたタクトは、土下座の姿勢のまま頭を上げ、首を捻った。
「なるほど。そういう理由で来たってぇわけか」

意味が分かっていない二人とは対照的に、バルドラスは理解し切った顔で溜息を吐く。
「実はな、お前等を呼ぼうとしてたとこなんだよ」
「？　任務ですか？」
タクトは首をかしげ、カグヤは聞いた。
「お前等二人を、あの坊主と一緒にバンホールに行かそうと思っていたんだよ」
バルドラスの言葉に、二人は驚いた。
「え、そりゃ願ったり叶ったりですが、またどうして？」
「お前等、あの坊主を見ていてどう思う？」
問いを問いで返されたが、相手は領主である。二人は一旦自身の疑問は置いて、考える。
「そりゃ、カッコイイですよ。そして、羨ましい！」
タクトは、何故か「羨ましい」の部分だけが妙に強調されていた。
「ど、どうって言われても……その」
一方、カグヤは微かに頬を赤く染めながら、言葉が出て来ないようだった。
「やっぱ、お前等じゃ若すぎるか……」
バルドラスは予想していた通りだという顔をして、嘆息した。
そして、急に真顔になった。
「今回のは命令だが、志願制だ。無理だと思ったら行かなくていい」
それはつまり、それほど危険だと言う事。
「でも、コウサカさんは行くんですよね？」
「ああ。しかも、何があるかどうかもしっかり分かった上でな」
「……」
タクトは沈黙した。カグヤは付いていけずに、ずっと黙ったままである。
「オレは志願します」
「なっ、ちょっと！」
僅かな逡巡だけで決めたタクトに、カグヤは驚く。

「カグヤ、お前は来るな。領主様の言葉通りの危なさだ」
「……タクト」
カグヤは、タクトの表情を見て言葉を無くす。
ずっと昔に一度見た限（きり）のとても強い顔をしていた。
それを見たカグヤは。
「あたしも行く」
とても落ち着いた、そして決意した表情をしていた。
「な、おい！」
今度はタクトが驚く番だった。
「なに？　なんか文句ある？」
「あ、あるに決まってんだろ！　死ぬかもしれないくらい危険なんだぞ！？」
「……もう、待つだけは嫌だよ」
カグヤの呟（つぶや）きに、タクトは言葉をなくした。過去、そうやって待っていたら両親の死が伝えられたからである。
当時、まだ小さかったカグヤにとって、トラウマとなるには十分だったのだろう。
「……はぁ、わかった。いいよ」
「は？　なに偉そうに言ってんのさ。夕食抜きにされたい？」
「はい、ごめんなさい……」
妹に深々と頭を下げる兄。
そんなにいつもの情けない姿を見て、カグヤは小さく微笑んだ。
「じゃ、あたしは家に戻って旅支度（たびじたく）をやって来るから、細かいことはあんたに任せた」
「おう、任せとけ」
カグヤは少し不安に思いながらも、仕方なくタクトに任せて部屋を出て行った。
「本当にいいのか？」
タクトの背にバルドラスの声がかかる。ひどく抑揚の無い、事実の重さをそのまま表したような声だった。

「ええ。コウサカさんには、借りがたくさんありますから。それに命令ですしね」
タクトは頼もしげに、苦笑しながら言った。
「いつもは不真面目な癖に、よく言うぜ」
それに、バルドラスも笑みを持って返す。
命令事項を伝え終わると、バルドラスが急に神妙な顔をした。
「ま、お前には教えておくか」
「ん？　まだ何か？」
次に発せられたバルドラスの言葉は、タクトを驚愕させるものだった。
「あの坊主は……死ぬ気だ」

タクトはコウサカの顔を見る。
「どうした？」
それにコウサカは振り返りもせず気付いた。
「いえ、なんでもないっす」
タクトは笑いながら、何でもないと返した。
コウサカの姿には、とても危うい気配など微塵も無かった。むしろ、御者台の上で真正面を見据えたまま座るその姿は、これ以上ないほど頼もしかった。
（領主様には、何が見えたんだろうな？　こんなにカッコイイのにカッコイイかどうかは問題ではないが、タクトだから仕方がない。）
「ちゃんとやってる？」
その時、後ろから声が飛んできた。
「お、メシか？」
見ると、ナユキとカグヤが食事を持って、馬車の上に上がって来ていた。
「そ。ちゃんと手を合わせて食べなさいよね」

「へいへい」
カグヤから食事を受け取りながら、タクトはコウサカを見る。
「コウサカさん、お食事です」
「ああ。横に置いておいてくれ」
ナユキに食事を持って来てもらうコウサカを羨みながら、タクトはすごいと思った。
コウサカは微動だにしていないのである。視線も真っ直ぐ正面を見据えたまま。
（……どうやったら、あんな風になれるんだろうなぁ）
手を合わせながら、タクトは思った。
食事と聞いてタクトは気を抜き、迷わず後ろを振り返ってしまった。恐らく、それは普通の行為である。
しかし、コウサカは、食事という言葉と匂いに興味すら向けなかった。それだけ、油断もなく徹底しているということ。
常在戦場。まさにそれを体現している姿だった。
（ま、領主様の気のせいだよな。こんだけカッコイイんだから、大丈夫だろ）
この姿を見れば、誰でもそう思うだろう。とタクトは安心した。
「んじゃ、いっただっきまーす」
「いただきます」
「いただきます」
「頂きます」
コウサカだけは、前を見据えたまま皆で食べ始める。
「あ、こら！　もう少し綺麗に食べろ！　ちなみに、おかわりなんて無いからね」
「ま、マジか！？」
街と違って物資には限りがあるため、当たり前である。
「……くす」
その絶望したようなタクトが面白かったのか、ナユキが小さく笑った。

「か……かわぇえええええっ！」
「黙れ」
「うぇ、げぐぁっ」
カグヤが静かに、強烈な肘打ちをタクトの脇腹（わきばら）に見舞った。
「て、てめ……」
「みぞおちに叩き込まなかっただけ、感謝してよね」
「いま喰らったら吐くわ、ボケ！」
やいのやいの、げしげしげしげし。
「あ、あの、その……こ、コウサカさんっ」
ナユキは困ったようにコウサカは振り返るが、微動だにせずカバンから朔絆の食事用に道具を出していた。視線は前を見据えたまま。
その背にはこう書いてあった。
我関（かん）せず。それはもう、きっぱりと。
「あ、あぅ……」
その夜は、山に住む動物が罠に引っ掛かったくらいで何も起こらずに過ぎていった。

―第十九章―　山に住まう人喰い鬼

夜が明けると三、四十人が周囲を警戒しながら自らが仕掛けたトラップを回収し、残りは出立支度を行なった。

馬車は縦列隊形を組むと、騎兵が配置についたことを確認するとバンホールへ向け動き出した。

視界確保のため、コウサカは胄は脱いだまま手綱を握っていた。

「……やはり、来ないか」

御者台の上から、コウサカを周囲を見渡す。その目には、野生のクマやオオカミなどの姿がちらほらと見受けられた。ただ、一切襲っては来なかった。

しかし、それは当然である。

長い列の馬車の大群。

それを護衛する眼光鋭く、歴戦の騎兵達。

動物達には到底、恰好の餌食には見えなかっただろう。襲えば、確実に返り討ちにされる。そんな雰囲気で包まれ、馬車群は進んでいた。

そんな中、朔絆は不貞腐れたように実体化して、コウサカの肩の上で足をブラブラとさせていた。

『ねえ、暇なんだけど』

「後ろに混じって来ればいい」

コウサカは手綱を握ったまま、片手で後ろを示す。

「はい、あがり～」

「なにぃっ!?　カグヤっ、てめぇイカサマしてるんじゃないだろうな!?」

「ふふーん、何?　たった十連敗くらいでイカサマ呼ばわり?　情けないな～。ね、ナユキちゃん?」

「え、あ、……その」

ちなみにカグヤが六勝。ナユキが四勝。タクト〇勝。

後ろの三人は、暇つぶしに持ってきたというカードゲームをやっていた。ただ、カードを使って数字をあわせたり、外れのカードを引かせたりと様々なゲーム方法が確立されているため、飽きもせずにかなり盛り上がっていた。

コウサカのそんな提案に朔絆は。

『ヤダ』

「……」

コウサカが呆れるほどの即答をした。

「……はぁ。俺は手綱を握っていなければならん。出来るのはせいぜい、話し相手くらいだ」

『じゃ、話して』

「……」

『早く』

コウサカは片手で顔の上半分を覆って、嘆息した。

「……何を、そんなに苛立っている？」

『……ふん』

肩に乗っているためコウサカから顔は見えないが、朔絆は顔を背けた。

「未だにお前が分からない」

『あんたがバカ過ぎるだけだよ……』

それは呟くような小さい声であったが、近いためコウサカにだけは届く。

ふと、コウサカは思った。

「お前の言う、その『バカ』の定義とは何だ？　罵倒の言葉だと言う事は理解しているが、使う場所は合っているのか？」

『知るかっ！』

この始末である。どうしろというのだ、とコウサカは溜息を吐く。

朔絆はダンバートンを出てから、ずっとこの調子である。正直、ここまで機嫌が直らないのは初めてなため、コウサカは持て余していた。

勿論、コウサカがダンバートンを出るときにミレイナと、まるで愛する者の下へと帰るようなセリフを吐いたせいなのだが、この筋金入りの朴念仁が気付くわけも無く。

「やれやれ……」

また溜息を吐くと、コウサカは朔絆の相手を諦めて現状持つ情報の整理をすることにした。

レオナルド団長の話によると、バンホールに到着するのはまだ三、四日以上はかかるらしい。何も無くこのまま進めれば、という前提ではあるが。

ただ、そんな言い方をするからには、やはりこの山には問題があった。

この山々のどこかに、オーガという人喰い鬼達がいるのである。

いや、正確にはそれには語弊がある。オーガは、人間も含めて肉となるものなら全て喰うのである。但し、人間をよく好んで喰らうのは確かである。

バンホールへの物資運搬時よく襲撃されるため、騎士団やギルドから少なくない数の護衛が付かなければならないほど危険である。それでも、今までかなりの数の犠牲者が出ているという。タラ王国が一個騎士団（千人規模）で山狩りを行ないそれなりな成果は上げたが、それでも犠牲者を増やしただけで終わったという。

「……」

コウサカは、整理した情報に気難しげな顔をする。

こちらはたった百五十＋αである。王立騎士団最強とは言え、千の騎士でも狩り切れなかった敵をたった百五十程度でどうにかなるものか。

『……急に黙ったと思ったら、なに辛気臭い顔してんのさ』

いつの間にか、朔絆が完全実体化をして御者台の隣に座っていた。

「急に機嫌を悪くしたと思えば、今度は心配か」

『茶化すな、バカ』

珍しくコウサカが冗談めかして言えば、これである。

コウサカは一度目を瞑り、話す。
「お前も聞いていただろう。オーガのことだ」
『なにが問題？』
朔絆は何が問題なのか、本当に分かっていない表情を浮かべていた。
「千の騎士でも倒しきれなかった敵だ。この程度の数で大丈夫なものか、とな」
神妙な顔をしていたコウサカだったが。
『バッカじゃない』
朔絆がバッサリを切り捨てた。
『いつものあんたらしくない。なに珍しく弱気になってんのさ』
朔絆に言われてコウサカは、はっとする。
（……朔絆の言う通り。俺は何を）

――騎士団。軍勢。

「……っ！？」
一瞬、コウサカの頭の中に何かが過ぎった。いつかに感じたような、それ。
『ち、ちょっと、どうしたの……？』
いつの間にか、コウサカは俯いていた。それを朔絆が、コウサカの片腕を掴みながら心配そうにしていた。
「いや、お前の言葉で目が覚めただけだ。相棒」
そう言って、コウサカは掴まれている片腕をそのまま上げ、朔絆の頭の上に手を置いて優しく撫でた。
『……っ！　ま、まあねっ、まったく世話がっ、や、やけ、焼けるんだから！』
急に真っ赤になったかと思うと、朔絆が姿を消した。
「……」
いつものことなので、コウサカはひとつ肩をすくめると、離して

いた片手も手綱を握った。
　一方、そんな光景を見ていたタクト。
「いいな～……、オレも女の子と」
「世界が滅んで、誰もいなくなったら仕方なく、死ぬよりはマシとかいう顔で付き合ってくれるかもね」
「最近、お前のツッコミ酷過ぎやしませんか！？　お兄ちゃんの心はズタズタだよ！」
「事実でしょ？」
「ぐっさぁっ！」
　そんな光景を見ていたナユキは。
「あはは……」
　困ったように笑うしかなかった。
　ちなみにカグヤ十勝。ナユキ七勝。タクト〇勝。

　オーガ。
　赤とピンクの中間くらいの紅梅色の体色をして、酷く肥満体だが凄まじい怪力と生身であっても並みの魔法を弾くほどの頑丈さを誇る三、四ｍほどの背丈の巨人である。元は魔族の世界の住まう化け物であったが、過去の大戦時に各地に放たれたのである。
　何故、兵として使われなかったのかというと、オーガの一族は一部を除いて食欲しか頭にない非常に頭の悪い種族だからである。空腹が過ぎればオーガの同族以外、魔族であろうと喰らうのである。しかし、一個体としての戦闘能力は凄まじいため、苦肉の策として野犬のように放たれたのである。
　ただ、それが予想を裏切り成功したのである。人間の味を占め、積極的に人間側だけを襲うようになったからである。

　山の中腹付近に、オーガ達の住処はある。そこはオーガですら楽々と入れるような、巨大な洞穴であった。

そこには、一際大きく、立ち上がれば六mは超えるであろうかと言う巨大なオーガと人間と同じほどの背丈の人影があった。
「協力　意味ナイ　帰レ」
人影が伝えた内容を聞き、巨大なオーガはそれを無下に断った。
「くくく……、ほお？　人間が喰い放題になるというのに、断るか？」
その言葉に、その場にいたオーガ達はピクリと反応した。
全員を代表するように、巨大なオーガが言う。
「本当　カ　？」
ニヤリと人影は、ローブで隠している口の端を持ち上げる。
「ああ、そうだとも。魔族が勝てば、人間全ては奴隷だ。フッ、ククク……、奴隷の生殺与奪など、どうなっても構うまい？」
ほぼ食欲しか頭にないオーガには、最も有効である口説き文句で人影は駒を手に入れに掛かっていた。
この男も魔族である。しかし、オーガは魔族すら喰らうのである。それが何故この場に居られるのかというと……。
洞窟の入り口に、黒焦げになったオーガの死体が一体あった。それがこの場に居られることの理由。野犬と表現した理由もそれである。
「ワカッタ　ドウスレバ　イイ？」
「今、この山の中を進んでいる人間共のことは知っているか？」
「アア　モウ少シ　近ク来タラ　食ベルツモリ　ダッタ」
それに、人影はまた残忍な笑みを浮かべる。
「それなら話が早い。人間共を正面から誘き出してやるから、私が合図をしたらお前達は山を駆け下り、人間共の後ろから襲撃をするだけでいい。これで挟撃になり、簡単に崩せる」
「ドウイウコトダ？」
人影は心中で舌打ちする。低能共が。
「私が合図をしたら、ただ人間共を襲えばいい」
「ワカッタ」

簡単な、本当に子供ですら理解できるほど簡略化した説明を終えると、人影は洞窟を出た。
（……フン、所詮は低族。この私がこうまで、面倒なことをせねばならないとは。……だが）
人影は、一人の男を思い出して身震いする。思い出すだけでも、膝が笑うほどの。
（あの男は危険だ……あれは人間ではない。あんなものが……あれでは、まるで）
そこで考えを止め、準備をするために人影は魔法陣を起動させると、どこかへと消えた。

唐突に、警笛が鳴り響いた。
騎兵達は馬車からは距離を開け、しかし離れすぎず全体の目となるため展開する。
馬車は全て停止し、御者役の騎士も含め全ての騎士が降車して厳戒態勢をとった。
但し、ほとんど山道と呼べる狭い街道のせいで、車列が長く伸びてしまっているため非常に守り難い状況だった。
伝令役の騎士が、コウサカ達の馬車に駆け寄ってきた。
「我々は待機して、馬車を守ればいいのですね」
「あっ、え、はい、その通りです。馬車の護衛を頼みます」
驚いた顔のまま伝令役の騎士は、別の馬車にも伝えるため駆け去る。
「ナユキ、君は御者台に。周りを見回して、何かあれば知らせてくれ。タクト、カグヤは俺と共に降車。全周警戒をする」
ナユキ達は目を瞬きながらも、コウサカの言われた通りにする。
前後の馬車から指示を受けた騎士達が黙々と動き出す。
「あの、コウサカさん」
コウサカが横目でそれらを眺めていると、タクトが声をかけてき

た。
「どうした」
「さっき、何で伝令の内容わかったんすか？」
カグヤも同じく聞きたそうな顔をしていた。
「二人共、あの騎士団に混ざったとして、どう動けばいいか熟知しているか？」
「え？」
タクトもカグヤも、何の話だという顔をした。
「号令一下、整然とした隊列を自由に組み替え、一人ひとりの性格、得て不得手まで把握し切る程度のことは、あの騎士団なら完璧だろう。個々の技量だけでは、最精鋭とは呼ばれはしない」
「「……？」」
全く話が分からない、二人はそんな顔をしていた。
「噛み砕いて言えば、規格外を嫌うのが軍という組織だ。規格化された戦力であるからこそ、戦力の把握は容易であり、運用がし易い。俺達は騎士団からすれば、完全に規格外であり……ん？　分かり難いか？　ふぅむ……。俺達がどの程度の強さか把握できていないため、どこを任せて良いのか分からない。だから、とりあえずは本当に切羽詰った状況の一歩前まで、使いたくはないのだろう」
「……えーと。扱い辛いから使いたくない、ってのはわかったんですけど。でも、下手に、えーと、戦力を……あれ」
「……なんで、戦力分散をしているのか、でしょ」
呆れ顔でカグヤは、タクトをフォローした。
「周りは馬車の最前列を目指して、しかし一定数の騎士は残して移動している。ということは、敵は前方から。しかし団長は後ろから敵の襲撃があるとした作戦を展開させた。これなら最悪の場合、つまり後ろから奇襲がない限り俺達というイレギュラー要素を使わなくて済む。もし、主力隊だけで敵を壊滅できた場合でも、後ろには十分守れる程度の戦力は配置してあるから、後ろは気にせず主力隊は敵がどこから来たのか探ることも出来、消耗した戦力を後ろと交

代させることも出来る」
　ふと、コウサカが気付くと、タクトがポカーンとしていることに気付いた。それで、説明が分かり辛かったことを理解した。
「簡単に言えば、主力隊は何も気にせずいつも通り全力で戦うことが出来て、最悪の場合にも対処が可能、さらに不安要素も使わずに済む。そういうことだ」
「は、はぁ……」
　タクトは、何とも頼りない顔をしていた。
「いくら何でも分かるでしょ……」
　カグヤは、呆れたような顔してタクトを見ていた。
「あの、コウサカさん？」
　声の方を見ると、ナユキが御者台の上から顔を覗かせていた。
「どうした？」
　コウサカ達は、降りて早々にタクトが話しかけたため、御者台のすぐ横にいたままだった。
「あっちが、何か変なんです」
　ナユキが指差した方向に三人が目を向けると、ただ森が広がっているだけだった。
「「……？」」
　タクトとカグヤは何のことか分からず首を捻るが、コウサカの目には見えた。
（動物が、逃げている……？）
　森の中で、動物達が何かに怯える様に走り回っていた。
（何か、来るっ……）
　瞬間、コウサカは腰のベルトからバスタードソードを抜いていた。
　馬車群の正面には、優に四mはある魔符で操られた巨大な黒ヒグマと、その周りには百は下らないスケルトン兵士が囲み、進んできていた。

スケルトン兵士は、顔は出ている茶色い兜に、同じ色のグリーブを着け、赤錆びたロングソードと血の痕が残る直径五十ｃｍほどの円形の盾、スモールシールドを携えていた。

「全軍、抜刀ォッ！」

レイナルド団長の号令が響くと、一斉に抜刀する音が響き渡る。

「我に続けぇっ！」

騎乗したレオナルド団長は、ヴァンプレイトと呼ばれる大きな笠状の鍔に細長い円錐の形をしたランスを構えると、真正面は歩兵隊に任せ、敵の真横から襲撃するため騎兵を伴って森の中を駆けた。

オグマ騎士団は、騎兵六十五のうち五十五を、歩兵八十五のうち五十五の計百十を主力隊として、敵を向かい討っていた。

（何故、バンホール方面から敵が来るっ……！）

レオナルド団長は森の中を駆けながら、心中で毒づいた。

バンホールは、二千人の精強な騎士が警護しているはずである。

バリダンジョンと呼ばれる魔窟は、バンホールの鉱山として街中にあり騎士達が目を光らせている。まず、ここから来ることは不可能であった。出てきたところを魔法だの弓矢だので、四方八方から攻撃されるからである。それも二千人が交代、交代に絶え間なく。

ラインアルトと呼ばれる、盗賊コボルト達の住処となっている場所はバンホール近くにはあるが、コボルト達の住処である。スケルトンや巨大クマがいるわけがなかった。

なら、こんな数の敵がどこから？

そこから考えられる結論はひとつ……。

（くっ……）

レオナルド団長は軽く頭を振る。今は目の前の敵を優先する時である。

「敵の最後尾を削る！　エルス、アジェンの隊は待機、次の瞬間を見逃すな！　縦突陣形！　続けぇっ！」

二十五人を残し、レオナルド団長は三十人を一列、三隊に分けた。
一気に下の街道へ駆け下りる。第一陣はレオナルド団長自らが率いて、ランスを構え突撃をかける。
すでに、歩兵隊と戦闘を開始していた巨大黒ヒグマとスケルトン兵士は、急に真横から現れた騎兵隊に反応できず、一気に二十のスケルトン兵士が使い物にならなくなった。
所詮は、骸と魔符で操られただけの烏合の衆である。的確な対処など出来ず、一撃離脱して往く団長達を追う者と、正面にいる歩兵隊と戦闘を続ける者とで、バラバラになった。戦力の中核であろう巨大黒ヒグマは、歩兵隊の方を向いたままだった。
次の隊が突撃を開始する。第一陣を追う集団を狙う。
敵は間抜けに背を向けていた。第二陣は大胆にも、背を向けた敵集団の中央に突撃をした。馬の蹄が、ランスがスケルトン兵士を粉々にした。しかし、何故か少しの間粘ってから、離脱した。その答えは、すぐに分かった。
巨大黒ヒグマが、離脱する騎兵隊の方に向き直ったである。
それで終わりだった。
最強と呼ばれる騎士団にスケルトン兵士程度が敵うはずが無く、次々にスケルトン兵士は粉砕されていく。
間抜けにも巨大黒ヒグマは追うでもなく、また歩兵隊の方へ向き直った。
そのタイミングで、残った騎兵隊が全て駆け下りてきた。縦の陣形ではなく、横に広がっている陣形を組んでいた。
「グルゥワッ……！？」
次々に、騎兵達はランスで巨大黒ヒグマを串刺しにしながら、ランスの回収はせずに離脱していく。二十本目のランスが突き刺さった時、巨大黒ヒグマは倒れ、もう起き上がってくることは無かった。
離脱していった騎兵達はいつの間にか歩兵隊の後方に現れ、残りのスケルトン兵士を蹂躙していった。
静寂が戻った街道には、血塗れで倒れる巨大黒ヒグマと、骨の破

片が無数に散らばり、そして無傷の騎士団が泰然として立っていた。
「全隊、馬車へ戻るぞ！　急げぇっ！」
レオナルド団長は、圧倒的な勝利に勝どきを上げるわけでもなく、すぐに自らが一番最初に動き始める。
（簡単すぎる……こいつ等は、ただの捨て駒だっ……）
レオナルド団長は、最初に突撃をかけた時にすでに気付いていた。敵が弱すぎることに。
しかし、団長は中途半端に残して不安要素を作ることを嫌った。だから、全力で、即効で敵を叩き潰したのである。
「続けぇっ！」
主力隊の騎士達は、団長の言葉に疑問を浮かべることも無く、すぐに転進した。

「副長、こいつ等は」
「オーガだ！　ミレンシアの」
クラウゼンはトゥハンドソードを構えながら、叫ぶように言う。
最初に異変に気付いたのはナユキだったが、はっきりと目視して確認したのはコウサカである。
動物達が森の中から逃げて来るのと同時、周期的な地響きのようなものが伝わってきたのである。それはだんだんと近づいて来て、姿を現したである。それと同時に、一台の馬車が粉々にされてしまっていたが、負傷者はいなかった。
クラウゼンは地響きの異変と同時に、騎兵を含め全ての者を集めていた。少数で当たってはいけないと、戦場で培ってきた直感が命じたのである。
「撃てぇっ！」
歩兵三十人がアイスボルトを詠唱し放つ。
一体に集中させた氷塊を、オーガは避けるでもなく顔を隠すように腕を上げるとそのまま直撃させた。だが、少し表皮を破いただけ

で、目立った効果は上げられなかった。
現れたオーガは、全部で十三。
しかも、一撃で馬車を粉砕し、森の木々を軽々と薙ぎ倒すほどの怪力である。もし、その手に捕まりでもすれば、フルアーマーであろうと握り潰され即死するだろう。
「くそっ、化け物めっ……！」
クラウゼンも、その他の騎士も己の武器を、さらに強く握り締める。
「副長」
タクトもカグヤも、ナユキも青い顔をしている中、コウサカだけは何の緊張感もなく声を上げる。
「俺が五、そちらが八でどうだ」
「な……なにを」
言葉の意味することは理解したが、クラウゼンは信じられなかった。
「いくら何でも多すぎる。違うか？」
コウサカはいとも簡単そうに、クラウゼンの心中を当てた。
通常オーガの討伐には、オグマ騎士団の力量を持ってしても一体につき最低五人で相手をすることが義務付けられていた。並みの騎士なら一体を相手にするのに最低二、三十はいないと倒せないほどの化け物なのである。
コウサカは、それを知らないはずである。だが、正確にオーガという個体を分析した。
十三体ものオーガが、じわじわと近づいて来るこんな状況で。
「ふっ、いいだろう。ミレンシアの」
コウサカの落ち着き過ぎた姿を見て、慌てた自分が馬鹿らしくなりクラウゼンは笑みすら浮かべながら言った。
「その大口、信じさせてもらうぞ！」
「了解した」
オーガは騎士団から見て左に五、右に八と道でも悪かったのか少

し離れていた。
「続けぇっ！」
クラウゼンは騎士団を奮い立たせるように叫ぶと、自らが先頭に立ちオーガの集団に突撃した。
「三人はここで待機。怪我人が出たら手当てを頼む」
コウサカがナユキとカグヤの頭の上に、タクトは肩に手をひとつポンと置くと三人は少し落ち着いたようだった。
「徹底して戦闘には参加するな。その分は、俺がやる」
三人が何かを言う前に、コウサカは駆けた。
「グヘヘ　人間ノ女ダァ　女ノ肉ガ喰エル」
ナユキ達を見つけた、一番前にいるオーガにコウサカは近づく。
「邪魔ス」
そこでオーガは絶命した。
駆け寄ったコウサカは、驚異的な瞬発力を以って、一瞬でオーガの眼球をバスタードソードで串刺しにしたのである。
いくら体が頑丈と言っても、眼球までは硬くない。しかし、オーガの体長は最低でも四ｍはあるのである。その高さを、オーガが反応するより速く飛び上がり、尚且つ十ｃｍほどの眼球を正確に串刺しにしたのである。もはや、人間業とは到底言えない。
仲間を一瞬にして殺されて、残りの四体のオーガが緊張したのが分かる。
「ナ　何ダァ　コイツハァ！？」
「殺セェ　殺セェッ」
コウサカが心中で予想していた通り、オーガ達はただ横一列になり真っ直ぐに力任せに走ってきた。
コウサカは全身、特に脚に力を込める。
「ツブレロェ！」
オーガ達は振り上げた腕を、一斉に振り下ろす。その一撃は、地面に深さ三、四十ｃｍ、直径二、三ｍのクレーターを作るほどの力だった。

オーガ達が腕を上げると、クレーターの中心には肉片はおろか、鎧の欠片すらなかった。
「朔絆」
コウサカは上にいた。瞬時に六mほど飛び上がっていたのである。
オーガ達は、声に釣られて顔を上げた。
「間抜けが」
いつの間にか抜いたクレイモアは、光り輝いていた。
「はっ！」
ゴオォ・・・ン、と音を立ててコウサカは、空中でクレイモア一周させた。
トン、と音をさせながらコウサカは降りると、すぐにその場を離れた。鎧が汚れるのを嫌ったためである。
ズリッ、と音がしたかと思うとオーガ達の首が落ち、盛大な血飛沫が上がり、血の雨が降った。
「・・・・・」
コウサカは血で汚れた刀身を一振りし血を飛ばすと、拭い紙を取り出して刀身を拭った。
『うえぇ・・・・気持ち悪ぅ～』
朔絆が実体化をして、心底気持ち悪いという顔をして出てきた。
「なんだ？」
コウサカはクレイモアを背中に戻し、クラウゼン達の方を見ながら聞く。
『あいつ等、アブラべっとりなの！　斬った時の感触は・・・・うえぇ』
どうやら、オーガの脂肪分は凄まじいらしい。そういえば、拭った刀身がやけにテカテカとしていた事をコウサカは思い出す。
「とっとと姿を消せ。クラウゼンの方へ行く」
『う～・・・・、あとでちゃんとキレイにしてよねー』
不満そうな顔をしながら、朔絆は姿を消す。
改めて、コウサカはクラウゼン達を見た。

「ぜあぁぁぁっ！」
クラウゼンが渾身の一撃を以って、オーガの頑丈な片足を斬り飛ばしているところだった。
どうやら、コウサカの人間離れし過ぎた強さを目の当たりにして、オーガ達が目の前の敵に集中し切れていないようだった。騎士団の方も、実はコウサカの動きを見ていて少しの間固まっていたのだが。
「ギャァビャブァ」
片足を飛ばされ、倒れた一体のオーガが止めを刺された。
いよいよ、オーガ達が戦意を喪失し掛けた時、最初の頃よりもずっと重い地響きが近づいていた。
「なっ、なんだこれは……」
クラウゼン達は、目の前の敵も忘れ言葉を失い立ち尽くした。
「オ頭　オ頭ダァ」
逆に、オーガ達は飛び上がるように歓喜した。
森の中から、巨人が来るのである。
歩いているだけで木々を薙ぎ倒し、森の中からでもその姿が分かるほどの巨人。
「生き残りが、いたのか……」
それはジャアントオーガと呼ばれる化け物だった。
第二次モイトゥラ戦争で放たれた、オーガを率いる者である。
大戦が終わり、王国が当時数少ない生き残りの騎士団のじつに七割を投入してまで討伐させたほどの、化け物。
過去の記録によれば、ジャイアントオーガ一体で一個騎士団（約千人）が壊滅したとの記述が残されている。
「騎士団の本隊がいれば……」
クラウゼンは悄然としながらも、オグマ騎士団の本隊を連れて来なかったことを悔やむ。せめて、一個騎士団規模の人数は連れて来ればよかったと。
何より、大袈裟過ぎると、最精鋭ながらも少数での進軍を具申したのはクラウゼンである。だから、余計に後悔の念が強かった。い

くら最精鋭と言えど、たった百五十程度で敵うほどの相手ではないのである。
その時、ガシャリと金属の擦れ合う音がした。
次の瞬間、眼球を貫かれた一体のオーガが崩れ落ちた。
クラウゼン達は、オーガ達でさえその者を見た。
クラウゼン達の眼前に、トンと着地しながらコウサカは言う。
「何を呆けている。あれが来るまでには、まだ時間がある」
オーガ達は、はっとした。
あのジャイアントオーガよりも、この鬼人の方が自分達のすぐ傍にいるということを。
「逃ゲロォ　逃ゲ」
一番最初に正気に戻ったオーガが、また一瞬で殺される。
「ウァアアアアアアアッ」
残った五体のオーガは、競うようにして逃げた。
その時、レオナルド団長が駆け寄ってきた。
「厄介な奇襲だな……」
馬上から周りを見渡して、レオナルド団長は溜息を吐いた。そして、森の中から来る巨人を見て、コウサカを見た。
「任せられるか？」
「問題ありません」
そう言うと、コウサカは血に塗れた剣を振るい血を飛ばし、こびり付いた血を拭って剣を仕舞うとジャイアントオーガが来る方向に駆けて行った。
「だ、団長。そちらは終わったのですか？」
「ただの捨て駒だった。勝負にすらならん」
レオナルド団長は、さもくだらなさげに言う。
「負傷した者は、あっちのお嬢さん達に手当てしてもらえ。残りは逃げたオーガの討伐に向かう。各隊長は集まれ」
「だ、団長！　……ミレンシアはよいのですか？」
クラウゼンの言葉にレオナルド団長は、何を馬鹿なと言う顔をし

ながら言う。
「恐らくは、間近で見ただろう。あの存在は、ジャイアントオーガ程度でどうにかなる存在ではない」
それに、とレオナルド団長は馬から降りてクラウゼンに向き直る。
「実際に剣を交えたお前が、一番よく分かっただろう。ミレンシアというものを」
その言葉に、クラウゼンは言葉を無くした。
対峙した時、あれは全く本気ではなかった。クラウゼンは遊ばれていたに過ぎない。

なら、あれが本気になったのなら……？

クラウゼンは倒れているオーガ達を見る。
自分達は囲んで、苦戦の末にようやく一体仕留めたが、あのミレンシアはたった一人で、ほとんどのオーガを倒してしまった。それも、何一つ気負うことも無く、さも簡単そうに。
「……なるほど」
クラウゼンは、心配していた自分が馬鹿馬鹿しくなってしまった。
そんな存在が負ける相手が居るとすれば、それは神に他ならない。
「死傷なし。負傷は四名。残りは問題なく動けます」
クラウゼンは落ち着き払った表情に戻っていた。
「うむ。六十五の騎兵と、歩兵三十を以って残りのオーガを討伐する」

地響きは近づくにつれ、酷くなっていた。まるで地震である。
コウサカは、森の中で息を潜めていた。
今から戦う相手は目視で六、七mあるほどの相手である。しかも、未知数な。出来るなら一撃で終わりにしたいとコウサカは思っていた。

「……」

朔絆は予め静かに、と言い聞かせておいてあるので静かだった。

コウサカは木の上に登る。鎧の音などは地響きのせいで、全く問題にならなかった。

木の弾性も用いれば、十分ジャイアントオーガの顔まで届く距離に来た。

ドンッ、という音と共にコウサカは飛び上がった。ジャイアントオーガの顔に向け一直線に。

腰のバスタードソードを抜くと、それを真っ直ぐに構える。直進するその先に切っ先を向けた。

そこで、相手が気付いた。だが、コウサカはそのまま飛ぶ。

「くっ……」

しかし、意外にも相手は速かった。すぐに腕を上げて、顔を守ったのである。高速で飛んでいるコウサカに反応するとは、巨体に似合わない瞬発力である。

コウサカは剣を下げ、ジャイアントオーガの腕を蹴るようにして勢いを殺すと、一旦地面に降りる。

「……速い」

だが、降下していくコウサカを薙ぎ払おうと、守った方とは別の腕を伸ばしてきた。

当たる瞬間、コウサカは空中で一回転をし、伸びてきた腕に踵を打突点として叩きつけ、踵を起点としてクルリと一回転して、巨大な腕をやり過ごした。

ザッ、とコウサカは地面に降りると、巨大な相手を見上げた。

「なるほど、強いな」

コウサカが体勢を整えていると、上から声が響いてきた。

「クンクン　臭ウ　臭ウゾォ」

次の瞬間、巨大な片腕を振り上げた。

「ヨク　モ　同胞　ヲ　殺シタナァァァ！」

山中に届き渡るほどの大音声だった。声と同時に、凄まじい速度

で腕が振り下ろされる。
　コウサカはトンッ、と地面を蹴るように後方へ飛んだ。
　すぐ前までコウサカのいた所に巨大な拳が打ち付けられる。打ち付けた衝撃で山自体が大きくグラグラと揺れ、四体のオーガが穿ったクレーターの倍ほどの広いクレーターが出来上がった。
「お前達も、人間を殺して喰うだろう。今回はお前達が殺される番というだけだ」
　コウサカは本気を出すため、全身から殺気を噴出された。それは自分よりも四倍ほど巨大な相手の殺気よりも濃密で、しかし静かに立ち上った。
「オマエラ　エサダァ　黙ッテ　喰ワレロォォォ」
　また、腕が打ちつけられる。しかし、コウサカには当たらない。
「チョコマカ　トォォ」
　ジャイアントオーガはしゃがむような体勢と取ると、右腕を左腕の位置まで持って行き、一気に前方を薙ぎ払った。
「悪食が」
　コウサカは飛び上がって避ける。避けるついでにバスタードソードで斬りつけてみるが、まるで堅固な岩石でも斬りつけたような感触だった。
　コウサカはバスタードソードから手を離すと、クレイモアを抜く。
「ソコ　ダァァァ」
　空中では身動きが取れないと見たか、ジャイアントオーガは無理矢理な体勢で左腕を伸ばしてきた。
　コウサカは空中で身体のバネと使って一回転すると、その遠心力を載せてクレイモアを伸びてきた腕に叩きつける。
　ガギィィンッ！　と酷い音を立てて腕は弾き上げられるが、斬れていなかった。
「痛ェェ　エサ　ノ　分際デェェェ」
　しかしひどい痛みはあったのか、ジャイアントオーガは弾かれた手をさすった。

「……」

コウサカはクレイモアを見ていたが、ひとつ息を吐いた。

「朔絆。全力だ」

『よっしゃ、まかせとけ！　気持ち悪いけど……』

瞬間、クレイモアからの光が激しくなった。光が縦横無尽（じゅうおうむじん）に迸（ほとばし）り、コウサカを中心に光の柱が立ち上った。

「何スル　気ダァァァ」

ジャイアントオーガは構わず、コウサカに巨大な拳を向け殴りつけようとする。

「……Ｙｒ　ｗｙｆ　ａｍ　ｉˈ　ｒ　ｉ？（我は氷塊を求める）……」

それを軽く飛んで避けると、コウサカは瞬時にアイスボルトを詠唱し五つ完成させると、ジャイアントオーガの顔に向け放つ。

ジャイアントオーガは、当然のように他のオーガと同じく片腕で氷塊から顔を守った。

それで終わりだった。

「戦いの最中（さいちゅう）に、敵から目を離すな」

地面を叩き付けたままのジャイアントオーガの拳を踏み台にして高く跳び上がると、コウサカはいつの間にか刀身に光が収斂（しゅうれん）されたクレイモアを空中で大上段に構えた。その隣に、朔絆が完全実体化をして手を前に出した。

「セァッ！」

『いっけぇえええええええっ！』

そのまま、振り下ろす。

クレイモア自体はジャイアントオーガの腕を切り落としただけだったが、振り下ろした軌道そのままの形に刀身から光の刃が飛んだ。

「グェアァァ」

そのまま光の刃は進み、巨大で、恐ろしく堅固だったジャイアントオーガの体をいとも容易く切り裂いて、しかし光の刃は止まらず、そのまま後ろの地面を十ｍほど割（わ）って往き、消えた。

朔絆の精霊としての力を多分に消費し、予想被害も大きいためにコウサカが使って来なかった精霊武器本来の力だった。
「っと」
地面に降りたコウサカはその場にクレイモアを突き刺すと、フラフラと力が抜けて落ちて来た朔絆を抱えた。俗に言う、お姫様抱っこの形で。
「やはり辛いか」
『え、えへへ……なんともないって』
疲れ果てて辛そうであったが、しかし朔絆の表情はとても嬉しそうでもあった。
「どうした？」
『本気で……あたしを使ってくれたなぁ、って。えへへ』
「？　以前、そう言っただろう？」
コウサカの言葉に、朔絆は少し幸せそうな表情を浮かべた。
『くす……バーカ』
「？」
意味が分からず、コウサカは首を傾げる。
そんなコウサカを見て、朔絆はまたひとつ笑みを浮かべた。
『……あっはは。ね～？　疲れたから、このまま抱っこしてって』
「疲れたのなら、剣の中に戻ればいいだろう。回復する度合いは出ていても、中に居ても同じなのだろう？」
朔絆は、言うと思ったという顔をした。
『今はこっちの方が疲れが取れ易いのっ、すべこべ言わずにゴー！』
「……ふぅ、わかった、わかった」
ひとつ溜息を吐くと、コウサカは朔絆に首に手を回させ、右腕を朔絆の膝裏に入れて固定すると、バスタードソードと、地面に刺したクレイモアを回収して、騎士団の下へと歩いて行った。

―第二十話―　ミレンシアの伝承

時刻はもう深夜だった。
そんな中コウサカは月明かりの下、相変わらずの灰色のアンダーウェアに下半身だけは鎧のままという格好(かっこう)でいた。
「眠れないのか」
「えと……はい」
コウサカが御者台に座りながら剣の刀身を磨(みが)いていると、後ろの幌(ほろ)付きの荷台からナユキが起き出してきた。
ナユキは、らふティオズ・アーマーの下に着る白いノースリーブのアンダーウェアに、黒いショートパンツ、ニーハイブーツだけと、ラフ格好をしていた。もう夜間組以外は寝静まる時間帯ゆえに、当たり前であるが。
ナユキの大き過ぎるわけでも小さ過ぎるわけでもない胸の上では、女神のペンダントが月明かりを反射していた。
「隣……いいですか？」
「ああ」
コウサカは御者台の片側に寄る。
「お邪魔します……」
その隣に、ナユキがちょこんと座った。
コウサカがジャイアントオーガを斃(たお)し戻ってくると、レオナルド団長やクラウゼンは討伐隊を率いてまだ戻ってきていなかった。
しかし、残っている警戒組の騎士の一人から団長から預かったという言伝(ことづて)を聞き、コウサカも協力して伸びすぎている馬車群を防御陣形にして固めた。どうやら今日は移動を諦め、徹底して周囲警戒をするようだった。オーガの残党狩りも含め。
「また……お役に立てませんでした」
気落ちした顔で、ナユキはポツリと呟(つぶや)いた。
「負傷した騎士達の手当てをしただろう。君のヒーリングのおかげ

で、苦痛も少なく済んだ。小さなことではあるが、全体的に考えれば助かることだ」

実際それは事実だった。最低限の痛みと最低限の物資だけで手当てが出来たことは、たった数日ではあるが孤立した移動中ではとても助かることである。

「はい……」

ナユキは知らず、首に下げた女神のペンダントを握っていた。

「……」

コウサカは黙って、磨いた刀身を月明かりに照らした。

普段(ふだん)なら、こんな風に話していれば朔絆(さき)が出てくるのだが、昼間に力を使い過ぎたせいでずっと眠っている。だから、コウサカは朔絆の宿(やど)ったクレイモアを荷台の方に置いてあった。

コウサカは、磨き終わったバスタードソードを腰のベルトに差した。

「ナユキ」

「はい？」

コウサカは腰のベルトから短剣を抜くと、ナユキに柄(え)の方を向けて差し出した。

「……？」

ナユキは意味が分からないまま、短剣を受け取った。

「それで、俺の腕を斬りつけてみろ」

「えっ！」

コウサカの言葉の意味が分からず、ナユキは目を瞬(またた)いた。

「えっ、な、何で、ですか……？」

「戦いで役立つということは、そういうことだからだ」

また、ナユキには意味が分からなかった。

「相手を傷つけるか、殺すか。君にはそれが出来ないだろう」

固まったナユキの手から、コウサカは短剣を取る。

「痛(っ)っ……」

受け取った短剣で、コウサカは自分の左腕を軽く裂いた。

「っ！　なにしてるんですかっ」
裂かれた傷口からは血が流れ出し、御者台の床を赤く濡らした。
「君が言う役に立つとは、こういうことだ」
「そんなのことのために、わざわざ自分の腕を……？」
呆気に取られたような表情だったナユキだったが、はっとした。
「と、とにかく手当てしますかっ」
慌ててコウサカに寄り掛かるようにして、ナユキは腕を伸ばしてきた。
「ああ」
コウサカはナユキに届くように、自分も腕を伸ばした。

「もう絶対にしないでくださいね」
「ああ」
コウサカは手当てされ、包帯の巻かれた自分の腕を見つめる。
（……大したものだな）
それを見て、コウサカはそう思った。
ナユキは詠唱すらなしでヒーリングの魔法を使い、発動までのタイムラグもなく、しかも自身が消耗した様子もなかった。ナユキのミレンシアとしての突出した能力は、これだろう。
「少しは、自分が何をしたいと言っているのか分かっただろう」
「……はい」
むしろ、何で分からなかったんだろう、とナユキは思う。
「……」
またナユキが落ち込んでしまった。
「……ふぅ」
コウサカは小さく息を吐くと、無造作に手を伸ばした。
「わぅ」
ナユキの頭を、前を見据えたままコウサカは少し乱暴にクシャクシャと撫でた。

「君が戦わねばならないなら、女神は君を非力な存在とはしなかっただろう」
「ひっ、ひり……」
ガーン、とコウサカの何気ない一言にナユキはショックを受けた。
コウサカは気付かずに続ける。
「しかし、俺にはどこへ行けばいいかは分からないが、君には分かる。何故、役割を分けたかは分からないが、理由はあるのだろう。それとも君は、女神の行ないを信じられないのか？」
コウサカ自身は全く信じないどころか、疑ってすらいるくせに抜け抜けと言う。
「そっ、そんなことありません！　わたしはっ――」
「しー」
コウサカは口に指を当てて、静かにしろというアクションを取る。後ろでは三人が寝ているのだ。
「あ……す、すみません……」
最後に、コウサカはクシャリと優しく一撫でして、ナユキの頭から手を離す。
「なら、戦いは俺の領分（りょうぶん）だ。俺の仕事まで取るな」
珍しくコウサカが冗談めかしく言った。ナユキとしては初めて見たため、少しの間ポカンとしていたが。
「くす……。はい、すみません。わたしは、わたしが出来ることをします」
「そうか」
ふぅ、と一息吐くと、コウサカは自分で汚してしまった短剣を磨き始めた。
二人はもう少しの間話して、ナユキは再び眠った。

早朝。
ガンッガシッ、という木刀が打ち合う音でカグヤは目を覚ました。

「……ん、ん～……何の音……？」
起きて、伸びをしながらカグヤは呟く。
タクトもナユキもまだ寝ていた。朔絆の宿っているクレイモアもある。
「コウ……？」
しかし、コウサカの姿だけはなかった。
カグヤは、ノースリーブのブラウスにショートパンツという姿だった。ニーハイソックスとニーハイブーツを履くと、馬車の外へ出た。
どうやら音は、円形に固まった馬車群の外側の方から聞こえて来るようだった。
「あ……」
それを見たカグヤは、驚いて固まった。
「はっ！」
「うおっ！」
鎧を脱いだコウサカが、同じく鎧を脱いで身軽になった騎士団の騎士達と模擬戦をしていたのである。それも一対四で。
コウサカは木刀を二刀、騎士達は一刀流で構えていた。
「はぁっ！」
一人の騎士が、恐らくは囮として斬りかかる。
「……」
コウサカは後ろの気配を探りながらも、それを軽々と受ける。
そこから次の騎士が真横から、まだ片方の木刀を握っている方から斬りつける。コウサカはそれも受けて、それで両手とも塞がった。
「「はっ！」」
そこで、真後ろから二人の騎士が、わざと微妙にタイミングをずらしながら斬りつける。二つを同時に受けることは出来ない。
そこでコウサカは。
「「！？」」
地面を足で蹴り付け、その力と腕の膂力だけで受けていた二人を

弾き飛ばしながら前に出る。
後ろの二人は、そのコウサカの動きについて行けず空振る。
右手の木刀を手を返して逆手に持ち返ると、コウサカは振り向きながら思い切り木刀を振り抜く。
ゴォ‥‥ン、と木刀を振った音とは思えない風切り音が鳴った。
木刀は、二人の騎士の顔面ギリギリ前を通り過ぎていた。
それはわざと外したのだ。直撃していたら、恐らく頭蓋骨(ずがいこつ)が割れるか、木刀の方が耐え切れずに砕けるか。それほどの威力(いりょく)だったからである。
勝負あった。
「立てるか？」
コウサカは、自分が弾き飛ばした二人に歩み寄る。
「四対一でこれとは‥‥‥‥‥‥、団長と副長が敬意を払えと言った理由が分かりました」
明らかにコウサカよりもずっと年上の騎士は、敬語を交(まじ)えて言った。
その騎士は差し出されたコウサカの手を取ると、苦笑しながら起き上がった。
「‥‥‥」
一方カグヤは、ポカーンとしていた。
「起きたか、カグヤ」
コウサカがカグヤに気付いて、近づく。
「な、なにしてんの‥‥‥？」
「見ての通り、模擬戦だ」
カグヤは、それじゃないと首を振る。
「なんで、模擬戦なんてやってんの‥‥‥？」
「久しぶりに素振りをしていたら、頼まれた」
「‥‥‥？」
カグヤの顔には、「誰から？」と書かれていた。
「我々ですよ、お嬢さん」

声のした方を見ると、先ほどコウサカの手を取った年配の騎士がコウサカの後ろにいた。
「身内褒めはどうかと思いますが、副長は今までほとんど負け無しだったほど強かったのですよ。何年か前に、団長に負けたのが最後でしたでしょうか」
その騎士はとても紳士的に、笑みまで浮かべながらカグヤに説明してくれた。
（うわ、すごい良い人だ……）
カグヤは心中で申し訳ない気持ちになった。何故なら、カグヤはずっと騎士団のことを怖がっていたからである。王国最強だとか、ゴーレムを瞬殺とか、昨日の出撃の時に全体を包んでいた鬼気迫る闘気だとか、そう言った要因からである。
しかし、炊事班と一緒に食事を作ったとき、そして今と、話してみるととても良い人ばかりである。
「ちょうどいい。君も模擬戦をやってみないか？」
カグヤが感慨しく思っていると、コウサカがとんでもないことを言ってきた。
「……え？」
カグヤは固まった。
「どうした？」
どうしたじゃないだろう、とそんな顔のカグヤ。
「出来るわけないでしょうが……あたしやタクトじゃ、クマ相手も難しいんだから」
そのクマはコウサカが睨んだだけで、逃げて行った。
「ふむ、そうか」
別段気にするわけでもなく、コウサカは頷いた。
「では、続けよう」
頷くとコウサカはカグヤに背を向け、他の騎士達に向き直った。
どうやら、体力の続く限り続けるようだった。
四人を圧倒したほどの動きをしたにも関わらず、コウサカは息を

乱してすらいなかった。
「……はぁ、はいはい。頑張ってね。あたしは朝食作りの手伝って来るから」
太陽は東の低い山から頭を出したくらいだから、まだ朝の六時前後と言ったところ。タクトやナユキはともかく、ほとんどの騎士達は起き出して来て、警戒組は除いて面白そうに模擬戦なる見世物を見物している。各隊長達も注意するわけでもなく、混じって見物している。
全体がまるで家族のような、そんな風に見えた。
「……」
ほんの少し、カグヤにはその光景が羨ましげ見えた。
「……はあ」
一息吐くと、カグヤはタクトを叩き起こしに自分達の馬車へと向かう。
「ほら、タクト。朝だよ」
ぐーすか、ぴーすか言っているタクトの肩を揺するが、全く起きる気配がない。それどころか「うへへへ……ナユキちゃん」と気持ち悪い寝言をほざいていた。
イラッ。
「起きろ！」
「ぎゃぁあああああああああっ！」
カグヤはブーツの先端で、寝ているタクトの頭を横からぶっ蹴った。
「ひゃっ！　えっ、なんですっ、なんですかっ？」
タクトの絶叫にナユキが飛び起きた。当然だが。
「あ、ごめん。先にナユキちゃん起こせばよかったけど、この馬鹿が気持ち悪いこと言っていたから」
荷台の床をのたうち回っているタクトのことなど全く気にもかけず、カグヤはナユキを見ると謝った。
「てっ……いつも、いっつもっ……」

「寝言でセクハラ発言しているから悪い」
ピタリとタクトの動きが止まった。
「え、マジで？」
「大マジ」
カグヤの心底侮蔑（ぶべつ）しているような、生ゴミでも見るような見下した視線が、それが真実だと語っている。
「えー……ちなみに、どんな？」
「自分の下心に聞いてみろ」
「あー……」
正直なところ何を言ったのかは分からないが、多分誰のことを言っていたかはすぐに判別（はんべつ）できた。
「そのー……すまん」
「じゃ、食料の荷出し手伝え」
「……はい」
兄の威厳（ゼロ）〇。
「ふぅ。じゃ、ナユキちゃん朝食の用意しに行こうか？」
「はい。ちょっと待ってくださいね」
ナユキはショートパンツから伸びた、細いがしなやかな太腿（ふともも）を黒いニーハイソックスで包むと、脇に置いてあったニーハイブーツを履（は）いた。
勿論（もちろん）その間、タクトはカグヤによって馬車から叩き出されてその魅惑的（みわくてき）な光景を見る事はできなかった。

「うぅむ……これほどとは」
レオナルド団長は、今度は一対八で模擬戦をやっているコウサカを見て、そう唸（うな）った。
レオナルド団長は、部下からオーガについてはもう報告を受けていた。オーガを瞬殺とは、恐れ入る。
「団長」

レオナルド団長が腕を組んで黙考していると、クラウゼンが来た。
「……」
レオナルド団長は呆れ顔になった。クラウゼンの顔に、自分も混ざりたいと書いてあったからである。
「好きにしろ。偵察に向かわしている部隊が帰ってこなければ、どの道動けん」
「はっ」
普段は泰然としている癖に、クラウゼンは妙に子供っぽいところがある。強い剣の使い手と知ると、すぐに勝負を申し込むのである。
それを向上心と呼べば聞こえは良いが若い、というよりは幼い頃から剣の道へと進んだゆえに、模擬戦をゲームのように楽しむ癖がある。勿論、実戦となれば最強の名に相応しい凄まじい戦い振りを発揮するが。
「……ふぅ」
レオナルド団長の目は、我が子を見るような目をしていた。そして、懐かしげに回想をした。
レオナルド団長には、血の繋がった子供はいない。もう亡くなったという意味ではなく、生まれなかったのである。妻の身体が病弱で、とても子供を儲けることなど出来なかったのである。そこで、孤児を引き取るようになったのである。
クラウゼンも、レオナルド団長に引き取られた孤児の一人だった。元は捨て子で、教会の前に置かれていた。その後、孤児院を兼任していた教会に引き取られ、レオナルド団長に引き取られたのである。
クラウゼンが引き取られた頃にはすでに女の子が四人に、男の子が五人もいた。ただ、当時から最強の名を馳せていたオグマ騎士団の団長という階級であったから、それだけの子供を育てられるだけの余力があったのである。
姉や兄と遊びながら笑っていた、幼い頃のクラウゼンは幸せそうだった。
そこまで回想して、レオナルド団長は知らず顔をしかめる。

まだクラウゼンが本当に幼い頃、三歳か四歳の頃に第二次モイトゥラ戦争が始まった。その火の粉は王都タラにまで及び、そしてその時にレオナルド団長の家は焼け落ち、家族やその時に集まっていた親族は……。

レオナルド団長の家族は優先的に避難馬車に乗れたが、それを蹴って子供や年寄りなど弱い者を乗せたのである。クラウゼンは最も幼かったため一番の馬車に、他の子達も比較的早い方の馬車に乗ったがその馬車も襲撃を受けてしまった。そして、クラウゼンは馬車の中で、その光景を見てしまっていた。

幼い日のクラウゼンは最初は分からなかったらしいが、剣の才能と同じく頭の良い子だったせいもあり、理解してしまった。

大戦が終わり、多くの部下を散らしたレオナルド団長が帰って来た時、幼き日のクラウゼンは言った。

――――魔族を殺したい。

「……」

以前よりはずっと狂気も落ち着いて、剣を握る楽しみを知ってくれたクラウゼンが、コウサカと木刀を交えている光景を見つめる。それを面白いものが始まったと、囃し立て始める騎士達を見る。

ここにいる者達のほとんどは、大戦で壊滅した騎士団の生き残りだったり、魔族に家族を殺された者達である。より直接的な行為を経験し、恐らくは各騎士団の中でも最も魔族を憎む者達が集まっている。

最強と呼ばれる所以は、その根本にある憎悪である。だから力に貪欲であり、冷徹になれる。

（……だが）

レオナルド団長は、クラウゼンを圧倒しているコウサカを見る。

（あの存在は、何なのだ）

ミレンシアの伝承は、レオナルド団長も知っている。

――その者、世界に危機迫りし時、守護者たる女神が呼びて、現る者也。

――その者、『星』より来たるる者也。

――その者、破壊神たる存在也。

――その者、救世主たる存在也。

――その者、災厄討ち滅ぼす存在也。

――その者、ミレンシア也。

「……」

正直、レオナルド団長はその伝承を胡散臭く思っていた。破壊神で救世主という時点で、矛盾しているからである。

そして、そんな者がいたのなら何故過去の大戦に現れなかったのか。

しかし、伝承のように破壊神にも、救世主にも成り得るほどの存在が現れた。

（何故いまさら？）

その答えは、今向かっているバンホールにある。少なくともミレンシアが現れたということは、過去の大戦時よりも世界は危機的状況だと言う事。

「くぁっ！」

クラウゼンがまた負けた。これで四敗である。

（なら、あの少女は？）

コウサカの話によると、あの少女もミレンシアであるとのこと。

あの少女しか行き先は分からないのだと言う。

だから、余計にレオナルド団長は分からなくなる。コウサカはともかく、あのナユキという少女からは、コウサカに付いて来たあの兄妹よりも迫力がなく、弱々しい。

「団長」

先ほど、カグヤの相手をしていた騎士がレオナルド団長に声をかけた。

「エルスか。どうした？」

その男は騎士団の次席副長であり、騎兵部隊の隊長を務める者である。

「偵察にやった者達が戻ってきました。問題ありません」

カグヤに見せたものとは違い、別人のように鋭い眼をしながらエルスは報告する。

「そうか。では、進軍を開始する。全隊に通達しろ」

「はっ」

レオナルド団長は、もう一度コウサカとクラウゼンを見る。

「……ふ」

久しぶりに負けて勝とうとして必死になりながらも、しかしクラウゼンの表情は楽しそうだった。

レオナルド団長はひとつ笑うと指揮官の貌になり、予め決めておいた各隊長達の集合場所とした円陣を組む馬車群の中心へと向かった。

―第二十一章―　鉱山都市バンホール

バンホールが近づくにつれ、コウサカは自身の異変に気付いた。
コウサカは御者台に座りながら、片手を強く握る。
（……やはり、力が強くなっている）
握った手を開いて見る。すると、特に意識していないはずなのに、ガントレットを嵌めた手が薄っすらと青白く光っていた。
それはマナシールドと呼ばれる防御魔法の一種だった。魔導皮膜を身体の表面に展開し、内在する魔力量に応じて相手の攻撃を無力化できる。
肉体的にではなく、精神的にぐっと力を込めて魔力を押さえ込む。
（……そして）
コウサカは、自分がより残忍になったことを強く感じる。オーガ達を何の呵責もなく殺した。殺したというよりは、あれは虐殺と言えるだろう。
戦意を失った敵を、わざわざ追ってまで殺したのだから。
ただ、どの道コウサカが殺さなくても、騎士団が殺すことになったのだから、結果は同じである。今まで何十、もしかしたら何百という人間を喰い殺してきたオーガゆえに。
感謝されることはあっても、まず恨まれることはないだろう。少なくとも人間からは。
コウサカは頭を振る。
（……もはや、善悪で判断できる程度の問題ではない）
負ければ、世界が終わるのだ。そこに個人の感情などが、どこに入り込む余地などあるものか。
コウサカは気付いて、考えを消す。そんなことを考えても、今は何の意味もない。
ただ、コウサカはもうひとつのことに気付けてはいなかった。
最近は、力が増すにつれ、感情の起伏が特に乏しくなっているこ

とに。

オーガの襲撃が遭ってから、すでに二日が経った。

あれからもスケルトンや、ガイレフの岩石から生成されたのであろう赤いロックゴーレムなどの襲撃があり、進軍がいちいち止められたため、大幅に遅れてしまっていた。

「はぁっ！」

跳躍したコウサカが、跳び上がった勢いそのままの凄まじい威力の跳び蹴りを以って、ロックゴーレムの片腕を破砕した。

コウサカの脚は、薄っすらと青白い光に包まれていた。マナを集中させ、破砕できるだけの威力とグリーブが壊れないように防護したのである。

腕が砕けた衝撃でゴーレムが横倒しになり、コウサカは素早く頭頂部に貼られた魔符を剥がして、ゴーレムをただの岩石に戻す。

馬車群の方では、骸骨オオカミの処理が終わったようだった。

『ちょっと。なんで、あたしを使わないのさ』

終わったと同時に、朔絆が不満を言いに実体化してきた。

「無駄に力を浪費させるのは、避けたい。あと、確認だな」

『なにそれ？』

ちょこんとコウサカの肩に座ると、朔絆は分からないという顔をしながら聞いた。

「……」

コウサカは、たった今倒したゴーレムを見つめる。そこら辺の岩石を適当に集め、魔符で繋ぎ合わせただけの粗製乱造なゴーレムだった。

「こんな捨て駒を、わざわざぶつけてくる相手のな」

『ふーん……ま、いいけど。ちゃんと使ってよね』

「危なくなったらな」

朔絆はどうでもよさそうにしていたが、コウサカが頭を撫でると

満足したのか、姿を消した。
（……ディーファか）
今まで目の前に現れた敵は、全て魔符によって操られていた。こんな芸当をするのは、あの男だけだろう。
「……Ｒｗｙｎ（我は）　ｇｏｂｅｉｔｈｉｏ（火炎を）　ｙ　ｆｆｌａｍ（求める）……」
コウサカは手に取った魔符をファイアボルトを軽く詠唱し燃やすと、馬車群へと戻って行った。

コウサカ達と騎士団はガイレフの北側、山と森を抜け、南側の乾き切った赤い地面と枯れ木が続く乾燥地帯へと入っていた。何のものなのか分からない骨が至る所に散らばり、さらに厄介な事もあった。
「南側に入るとアイスボルトが使えなくなるから、気をつけろ」
出発前に、レオナルド団長からコウサカはそう教えられた。使ってみると、水分の収束しようとしても、そもそも水が集まらなかった。乾燥した気候のせいで、空気中の水分がほとんどないのだ。
何故、南北でここまで環境の差があるか、原因は全く分かっていない。謎の巨大なドラゴンの遺跡のせいなのか、過去の大戦で人間の軍が駐屯した時に何かあったのか、そもそも過去の大戦のせいなのか……。その調査すら手がついていない。
タラ王国には、ただの一辺境の調査を出すほどの余力は無いのである。約二十年前の大戦の傷痕は、それほど深い。国力はそれなりに回復しているが、過去に消失した軍事力は三分の二程度までしか回復していない。量はともかく質の点からすれば、半分以下か。さらに、無理矢理バンホールに補給線を伸ばして維持させているため、その負担も大きい。
確かに、外を見ても魔族は徘徊していないし、死体が転がっていることは無くなった。しかし、外見上は平穏を保っていても、今でも各地で散発的な戦闘はあるのである。ダンバートンでもあったよ

うに。
　水面上は平和と言えても、この世界はまだ破滅の淵が見える位置にあるのだ。
「タクト、ラインアルトについて何か知っているか？」
「へ？」
　タクトは「オレっすか？」という顔をした。
「うーん、そーっすねー。そこら中穴だらけで、今は盗賊コボルト達の住処になっていることくらいしか」
　コウサカがレオナルド団長から聞いた事と、ほとんど変わりは無かった。
「レオナルド団長はそこを構わず進むというが……ふむ」
　コウサカは手綱を握りながらも、思案する。
「大丈夫じゃない？」
　カグヤが特に気にしていない風に言う。
「どうしてだ？」
「コボルト達ってさ、昔は人と一緒に働いて、生活出来ていたくらいに頭良いんだよ。だから、勝てるかどうかも分からない、この集団相手に仕掛けて来るとは思えないんだよ。人を酷く憎んではいるけど、さ……」
　そうなのである。コボルト達は、以前は人間と共に歩んでいた種族だった。コボルト全体ではなく、人間の世界に来ていた一部ではあるが。

　コボルト。
　百三十ｃｍほどの、人間の子供ほどの背に、胴体に比べて大きい頭、ギョロリと光る目、鉤鼻に、細長い耳、自身の頭二つ分程度しかない小さい胴体に、胴体の一・五倍ほどの長さの脚、そして赤茶色の体色をした亜人種の魔族である。また四足歩行の動物の特徴を持った脚も名前の由来である。
　以前は、主に鉱山などの労働力として働いていたが、過去にあっ

たとある事件のせいで人間を酷く憎むようになってしまった。
武器や防具など、道具の扱いにも長けている種族で、過去の名残で人語も話すことが出来る。

「……なるほど、厄介だな」
「え？」
「いや、独り言だ。気にしなくていい」
コウサカは話を切ると、御者台から周囲を見渡して警戒をした。

巨大なドラゴンの遺跡は、ぽっかり開いた巨大な穴に石化したのか、それとも本当にただの石像なのか、巨大なドラゴンが埋もれている形となっていた。発掘のため縦横無尽に足場は組まれていたが、馬車が通れるほど頑丈な物などあるわけが無く、馬車群は穴に沿って迂回せざるを得なかった。迂回と言っても、穴の直径は二百メートルほどしかないため、大した手間でもないが。
「不気味っすね……」
タクトが御者台の脇に座って遺跡を眺めていたかと思うと、ポツリと呟いた。
「何か噂でもあるのか？」
手綱を握りながらも、コウサカは答える。
「ずっと昔なんすけど……タラに現れたドラゴンに似てるらしいんすよ。あれ」
それは今よりもずっと昔、第一次モイトゥラ戦争の時代の話である。もう神話のようなものであるが、王都タラにドラゴンが召喚され、破壊の限りを尽くしたという話がある。
ポウォール側の召喚したドラゴンの名はクロウクルアフ。神々ですら手に負えない破壊神と畏れられるほどの存在である。その実力は、グラスギブネンなど霞むほどであるという。
神すらも殺せる存在が、何故ポウォールに召喚できたのかは不明。

過去の大戦は謎ばかりが多いのである。
「伝承にクロウクルアフ、って名前のドラゴンがいるね。前の戦争にも出て来たらしいけど……」
カグヤも荷台の方から顔を出した。
「もし……こいつまでいるとしたら」
タクトは考えて、顔を青くしながら身振るいした。
「……」
カグヤも同じ考えに至ったらしく、顔を青くした。
「だとしたら、それも斬るまでだ」
ただ、コウサカだけは泰然としたままだった。強がりでも何でもなく、間違いなくその時の最前線に立つその身でありながら。
「「……」」
それがあまりにも、さも当たり前のように言うものだから二人は意味が分からず一瞬固まった。
「……ふ」
「……くす」
そして、お互いに顔を見合うと小さく笑った。同時に、二人とも一気に肩の力が抜けるのを感じた。
確かにこの人ならやりそうだ、と。

ガイレフ北側から抜けた馬車群は物資の積載された十台の馬車を縦一列に並べ、その最前列に指揮官であるレオナルド団長の馬車、左右を十六台の兵員輸送馬車と六十五の騎兵が固めた、三列縦隊で進んでいた。この遠征は、ついでにバンホールへの補給物資運搬も兼ねられていた。
一行が遺跡を抜け進んでいると、急に馬車群が止まった。
見ると、軽装の騎士が駆け寄って来ていた。
「守備隊の者か？」
レオナルド団長は御者台に出ると、そこから話しかける。

「お待ちしておりました！」
その騎士は、ひどく焦っているようだった。
「一体どうした？　遅れる旨は、すでにフクロウ便で伝えておいたはずだが」
その騎士の焦りようが普通ではないことに、レオナルド団長は嫌な予感を覚えながらも聞いた。
「それが、バリダンジョンから多勢の魔族がっ……！」
「……なに？」

六十五の騎兵と一人の男が駆けていた。
「全く呆れさせるな……」
切迫した状況ながらも、レオナルド団長は苦笑してしまった。
その目は、全力で飛ばしている騎兵に、完全装備のまま走って併走しているコウサカに向けられていた。
「団長。戦況としてはどうなっていますか？」
「こっちが優勢に決まっているだろう。相手は狭い入り口からしか出て来れず、こちらは二千からなる騎士が一斉攻撃をしている」
それは先ほどの騎士から聞いた、少し前までの戦況ではあるが。
（オーガ級の敵が大量に来たのなら、厳しいかもしれないがな……）
一般の騎士はオグマ騎士団のように魔法など使えない。一般兵が使えるのはせいぜい弓までで、魔法は魔術兵が担当している。普通のオーガでも魔法を弾くほど頑丈であるため、もしあれが群れを成して来たのなら危険だろう、とレオナルド団長は考察していた。
「とにかく急ぐぞ」
六十五の騎兵と一人は、全速力でバンホールへと向かっていた。

「全砲撃てぇっ！」

号令が響くと同時、ドギュンと重い発射音を響かせながらバリスタ用の鉄製の極太の矢がそれぞれの砲台から放たれた。

その矢が、軽く五メートルを超える赤い色のゴーレムを粉砕した。ただ、貫通はせず一体を破壊しただけでほとんどの威力が殺がれ、地面に落ちた。それだけで、普通のゴーレムではないことが分かる。

バリスタとは攻城兵器に部類される大型弩砲である。石や金属の弾、極太の矢、複数の小型の矢などを打ち出す。それは人力では不可能な飛距離、威力を誇る。

「絶対死守せよ！　ここを落とされては、王国の戦闘維持力が低下する！」

二つの騎士団の指揮を任されている騎士団長の声が響く。

「何なんだこれはっ……！？」

バリスタの砲兵指揮官が、眼下に広がる光景を目にして誰にともなく怒鳴る。

高さ約十メートル、横幅約四メートルほど鉱山の入り口、バリダンジョンから大量のゴーレムが溢れ出し来ていた。コウサカ達が戦って来たようなレベルではなく、魔符が用いられていない岩石自体に魔力を込めて作り上げられた上級のゴーレムだった。

他に設けられた陣地からも、カタパルト（投石機）が巨大な岩石の雨を降らしている。しかし、それでも敵は止まらなかった。

「くそっ、装填急げ！」

バンホールに設置されているバリスタは、構造的には弓と同じである。ただ弦ではなく、動物性繊維の太縄が用いられている。ゆえにバリスタ専用の大型矢以外を扱うことはできなく連射も利かないが、凄まじい威力の一撃を放つことが出来る。

ただ装填に、つまり太縄を引くのに最低でも屈強な騎士二人分以上の力がいる。何度も撃っていれば、それだけ力も消費して連射力が落ちていくのである。

「撃てぇ！」

再び重い音と共に、バリスタの矢が放たれてゴーレムを粉砕した。

バンホールは山を切り崩し、作った都市である。しかし、都市というよりは村や町と言った規模でしかない。

古くから鉱山としてあり、その安定した産出量から、タラ王国が援助して今ではウルラ大陸一番の産出量を誇る大鉱山となった。

しかし、過去の、第一次モイトゥラ戦争時に地下要塞ラフとして、その後はバリダンジョンとなって、一時期は鉱山として使えなくなっていた。だが、良質の鉱石と産出量は捨てれず、要塞化までしたのである。

バリダンジョンの入り口を、山をさらに削って作った陣地にバリスタやカタパルトを設置し、扇状に展開している。もし敵が出てくれば、前方百二十度方面から一斉攻撃をされる。さらに、それを抜けても約二千からなる騎士が待ち構えている。

それほど防備を固められた都市が、バンホールというところである。

「……これはまずいな」

レオナルド団長は、小さく呟いた。

バンホールに入るには、南北どちらかにある関所を通る必要がある。そこ以外は絶壁で、進入が不可能だからである。その関所には、検閲をするための一定数の騎士がいるはずだが、誰一人としていなかった。

つまりは、それほど事態。

バンホール北側から入ると、少し狭い悪路を進んでから街に入ることになる。悪路を進むと、ちょうど鉱山の入り口の真上に着く。そこはまだ丘という高さで、左側にある坂道から下りて行って、そこから騎士団の陣地や兵舎を抜けて、ようやく街に入ることが出来る。

恐らく砕けたゴーレムを盾に進んで来ていたのだろう、背に矢筒を背負い弓を手にしたゴブリンが丘まで上がって来ていた。

ゴブリン。
緑色の体色に、少し長い耳、百四十ｃｍほどの背をした魔族の下級兵士である。人間側でいう片手剣や盾、弓矢と言ったものを扱って来る亜人種で、一個体あたりの戦闘能力は低いが、外見通り人間のようにズル賢い戦い方、つまり罠なども扱える厄介な相手である。

「っ！」
それは蹄の音にほとんど掻き消された声だった。だが、戦闘体勢をとって感覚を鋭くさせたコウサカには聞こえた。
一瞬だけ、隊列からコウサカは遅れる。そして、全力で地面を蹴る。
「なっ！」
コウサカは全力で走っている馬を追い抜いた。
「ふんっ！」
一瞬で腰からバスタードソードを抜くと、コウサカは思い切りそれをぶん投げた。
それは矢を番えていたゴブリン達の目の前、鉱山入り口を補強するために作られた丘にある建物の柱に突き刺さった。
「！」
有り得ない凄まじい速度で、また戦闘体勢をとったコウサカは鬼気迫る闘気を纏っているため、ゴブリン達は見ただけでたじろぎ、下がって行った。
ズザザ、と地面を浅く削りながら止まると、坂の方を見たままコウサカは突き刺さった剣を引き抜いた。
「ふぅ……」
息を吐いて力を抜くと、コウサカは反対側を見る。
「あ……ああ……」
そこには、つば広帽子に、薄紅色をしたワンピースを着た十一、十二歳ほどの少女が怯えた顔でへたり込んでいた。

コウサカは坂を警戒しながらも、少女に歩み寄る。
「名前は？」
助かったことに少し安堵を浮かべながらも、それでも揺れる瞳で少女はコウサカを捉える。
「い、イビー……」
小さく、呟くようにイビーという少女はコウサカを見上げる。
「事が終わるまで、ここで動くな」
コウサカはひとつ頷くと、追い付いて来たレオナルド団長達を振り返った。
「俺は下を片付けます。ここは頼みます」
「下……？」
レオナルド団長は一瞬の間の後、言葉の意味を理解する。
「馬鹿な！　バリスタや投石が降っているんだぞ！？」
レオナルド団長は叫ぶが、しかしコウサカは静かに背中のクレイモアを抜いた。
「朔絆。帯びるだけだ」
『りょ～かい』
コウサカは構わずクレイモアを肩に担ぐと、十メートル以上はある丘から軽く飛び降りた。
そして、とりあえず新たに出てきたゴーレムの胴体部を真上から踏み砕き倒すと、そのまま特に何もなかったようにスタリと地面に下りた。
「！？」
その姿は戦っている騎士団からも見えたのか、バリスタによる砲撃や長弓の矢が止まった。
背後からヒュンという音がすると同時、コウサカは腰から短剣を抜く。そして、数メートル程度の距離から放たれた数本の矢を、易々と振り返りながら切り落とす。
（試してみるか……）
自分の魔力を、クレイモアの刀身に乗せる。それも多量に。

『えっ、え、なに？』

予告も何も無く行なったため、朔絆が戸惑ったような声を上げる。

「ふっ！」

小さく気合を入れながらコウサカは矢を放ってきたゴブリン達に向かって、片手だけで軽々とクレイモアを振るう。

「！」

振った風圧に魔力が乗りそのまま衝撃波となって、たった二メートルほどであるが数体のゴブリンを吹き飛んだ。

「ふむ……」

まあ、初めてにしては上々か。そう思いながらコウサカはUターンして来た赤いゴーレムを見もせずに、振り返り際の光り輝くクレイモアの一撃で、横に真っ二つにする。

どうやら、ゴーレムはより近い人間を察知して攻撃するらしい。

急に敵陣の真ん中に現れたコウサカを狙ってきた。

その数は軽く十以上。四方八方から。

だが、唐突にゴーレム達がバラバラになって、崩れた。

「……？」

意味が分からず、コウサカはその場で首を傾げた。

「気をつけろ！　ウィンドミルだ！！」

「！」

瞬時に声に反応して、コウサカは後ろへと跳ぶ。すると、ほんの一瞬だけ遅れて、ゴーレムだった岩石が浮かび上がり円を描く様に空中を飛んだ。そして、周囲を薙ぎ払う。

ウィンドミル。

簡単に言うと、回転することである。本来ならブレイクダンスの一種である。ただ、何故そんなもの名称が使われているかと言うと、ゴーレムなどが同じようなそれをするのである。ゴーレムは『中核』を中心に、纏った岩石を浮き上がらせ、周囲を回らせるのである。

ただそれだけであるが、想像してみてほしい。

数十キロ、物によっては百キロを超える岩石が飛んで、周囲を薙ぎ払ってくるのである。当たり所によっては即死も有り得る、厄介で危険な攻撃なのである。

「……」

瞬時に範囲を見切り、コウサカは射程ギリギリに立つ。

さてどうするか。いくらコウサカでも、何十と飛んでくる飛礫を防ぎ切ることなど、さすがに出来ない。

「そこの男ォッ！」

前方。ゴーレムが崩れた岩山の向こう側にある、高台の陣地のひとつからの声だった。

「こちらから『核』を狙う！　どうにかしてそこから逃げろ！」

「『核』……？」

コウサカにはそれが何を指すか分からなかったが、とりあえず自分がいては攻撃が出来ないということだけはわかった。

ドンッ、とコウサカは跳んだ。思わず守備隊が絶句するほどの高さまで。

そのまま、補強され巨大な門のようになっている鉱山の入り口の上部を片手で掴むと、足で門を蹴って門の上へと身軽に着地した。

とにかくコウサカが退避したため、守備隊が動き出した。それを門の上からコウサカは眺める。

（あれか？）

一斉にバリスタやカタパルト、手弓から矢が放たれ、岩山となっている中の赤い石が攻撃されていた。今更ながら組み直し始めたゴーレムは、赤い石が砕けると今度は本当に崩れただの岩石となった。

どうやら上級のゴーレムは、魔符の代わりに岩石の体を繋ぎ合せる魔石を『核』としているらしい。弱点となる『核』は岩石で出来た体の中にあるため、岩石の鎧を砕かなければ倒せない。

（妙だな……）

コウサカはクレイモアを肩に担ぐと、眼下を見た。

せっかく前衛が集中砲火を受けているというのに、その隙に後続が全く出て来ない。
十数のゴーレムの掃討が終わって矢の雨が止むと、コウサカは再び下へと飛び降りる。
「……」
クレイモアを両手で構えて備えたが、鉱山の中からは何もなかった。それどころか、何かがいる気配すら消えていた。
不自然すぎる。いや、不気味とでも言うのか。
守備隊と合流したレオナルド団長達が、コウサカに近づく。
「どう……なった……？」
レオナルド団長が剣を構えながら聞く。
「分かりませんが、一切の気配が消えました。少なくとも、もう近くには何もいません」
「う、む……」
気難しげな表情を浮かべながらもレオナルド団長はすぐに頭を切り替え、次の襲撃があると仮定しそれに備えるために騎士団の司令部へと向かって行った。
『ブキミ……』
剣の中から、朔絆は声を発する。
「……ああ」
コウサカも首肯する。
ただ、結局その日は、もう何も無かった。

何のための襲撃だったのか、また何故引いたのか。それ全てが謎のままバンホールの攻防は短時間で、そして人間側も魔族側も人的被害はほぼ皆無のまま終わった。

世界はゆっくりと、しかし確実に破滅へと近づいてゆく。

―第二十二章―　決戦前夜

その少女は、つば広帽子に、その帽子の下には腰まで届く美しく長いブロンドの髪、襟元がレースに飾られた薄紅色の繊細に裁断されたワンピースに身を包んでいた。

触ると崩れてしまいそうな印象を強く抱かせ、少ししかめたような瞳は深い緑色をしていた。

その白く透き通った優しく光る丸みを持った顔は、しかし儚げだった。

「大丈夫か」

「……」

イビーという少女は、コウサカを見上げながら小さくコクンと頷く。もうかなり落ち着いていたようだった。いきなり下から門をよじ登って来たコウサカに驚いていたが。

「……」

コウサカは街へ入る坂の方を見て、どうするか考える。そこには丘まで上がってきて、逃げ遅れたゴブリン達の死体がそのまま残っていた。

どうやら騎士団の方もこの子はここに残した方が安全と判断し、坂の魔族を蹴散らして守備隊と合流したようだった。

「わ……」

コウサカは背中と膝裏に腕を入れると、異常に軽いイビーを抱え上げた。

「目を閉じろ」

「……うん」

イビーは言われた通りにする。それを確認するとコウサカは踵を返し、歩き出す。

「何故、こんな場所に」

ランスに串刺しにされた死体のすぐ横を通る。

「……お気に入り、なの……？」
イビーは落ち着いたというよりは、元々なのか。消え入りそうな声量で呟く。
その丘は、街を一望できるほどに見晴らしが良い場所だった。
「そうか」
馬の蹄に蹴られ、潰された死体を通り過ぎる。
「……名前……？」
ふと腕の中のイビーが目を瞑りながら、呟くように声を発した。
「……あなたの……お名前は……？」
「コウサカだ」
「……そう……」
そして、しばらく言葉を交わさずに坂を下りて、下りきると。
「イビー！」
騎士の制止を振り切り、一人の男性が駆け寄ってきた。
「……パパ……」
その言葉を聞きコウサカは膝を折り地に着けると、丁寧にイビーを降ろした。
「無事でよかったっ……！」
その男性はしゃがみ込むとイビーを抱き締めた。その目には、涙が浮かんでいた。
「ありがとうございます！　ありがとうございますっ……！」
その男性はコウサカを見上げると、涙ながらに礼を述べた。
「いえ」
コウサカは無感情にひとつ言うと、踵を返し鉱山入り口へと向かおうとする。
「……ありが、とう……」
父親の腕の中で、イビーも小さく礼を言った。
「……」
コウサカは一瞬だけ止まるが、振り返らず歩いて行った。

「ダンバートンを出立する時に、援軍要請をしておいた。それを待ち、総力を以って決戦を挑む」

タクト達後続の部隊も着き、三つの騎士団の指揮を任されたレオナルド団長はそう言い放った。また、ウルラ大陸各地で魔族の出現報告が相次いでいるらしい。

つまりは、もうそこまで事態は悪化していた。

「……」

コウサカは補強された鉱山入り口の柱に、抜き身のクレイモアを肩にかけて背を預けて座っていた。

そこは危険だが、しかしレオナルド団長が許可したのである。下手に自分達に合わせさせても、コウサカの強さを殺してしまうことを理解しているために。

『……ねえ』

その隣には、完全実体化をした朔絆が三角座りで座っていた。

その表情は、不安そうだった。

『ねえ、大丈夫……？』

そっと、朔絆はコウサカの腕に触れる。

「ああ」

コウサカは抑揚のない、感情を押し殺した顔で首肯する。

『それって……』

「そうらしい」

コウサカの全身が光っていた。より正確に言えば、内在された魔力が溢れ出ていた。

（……これは、どちらだ）

ティルコネイルでは、初めて殺気を以って殺した。

ダンバートンでは、殺気が溢れ、飲まれた。

バンホールへの途上では、もはや殺すことに戸惑わなかった。

そして、そろそろ少し力不足だと思った途端にこの魔力。

コウサカは、自分が肉体的にも精神的にも尋常のモノでないことはよく理解している。だからこそ、分からない。その力は、その力が。

ミレンシアとしての、コウサカという存在のモノなのか。

忘却の中にある、この世界のモノではない存在の自分のモノなのか。

――貴様らぁあああああああああああああっ……！！

「ぐっ……」

酷い頭痛がコウサカを襲う。それと同時に、急激に増大し押さえ込んでいた魔力が噴き出す。

「ぐ、がぁっ……！」

『コウサカッ！』

普通の人間であれば逆る魔力に弾き飛ばされるのだが、朔絆も精霊の端くれである。自身も力を解放して、必死にコウサカにしがみ付く。

『コウ……サカッ……！』

額をコウサカの右腕に押し当て、必死に朔絆はしがみ付く。

「……あ……ああ……」

――神より賜りし神剣の下に！

なんだこれは？

――我に続けぇ！

誰だあれは？

――エーディルラムトのためにっ！

エーディル……？

何かがコウサカの頬に触れる。

「……ナユキ」

いつになく強い表情を浮かべ、その手には女神のペンダントが巻き付けられていた。

「よかった、です……」

コウサカが落ち着いたことを確認すると、ナユキはその場にペタンと座り込んだ。

「何をした……？」

コウサカは、まだ鈍痛のする頭を押さえながらもナユキに聞く。

「女神様が……」

ナユキは光るペンダントを掲げる。どうやら、押さえ切れなかった魔力を吸収してくれたようだった。

「そう、か……」

コウサカは朔絆の頭を撫でながら言う。朔絆の目には涙が浮かんでいた。

「む、ぐ……う」

肉体的ではなく精神的に激しく疲労したコウサカは、珍しく、というよりは朔絆もナユキ初めて見る歯を食いしばった苦しげな表情で立ち上がろうとする。

逆っていた魔力は、すっかり消えていた。

「あ、肩を……」

「……背が足らないだろう」

コウサカの身長は百八十四センチ。ナユキは百五十二センチしかないため、全く肩の位置が違うのである。

「え、あの……」

「いい。朔絆、お前は剣を軽くしてくれ」

「……わかった」
目に涙を溜めたままの朔絆はコウサカの言葉に頷くと、姿を消した。それと同時、クレイモアの光が強まった。
いつもは軽々と振舞わしているクレイモアを杖代わりに立ち上がると、一度目を瞑り深く深く息を吸い込む。
「ふぅうううぅぅーー……」
そして、少しずつ上を向きながら細く長く吐き出す。乱れた気を直しているのだ。
「……ふぅ」
最後は完全に上を向いたまま静かに、ゆっくりと目を開く。
「朔絆、もういい」
『ホントに……？』
心配そうな朔絆の声だけが響く。
「ああ。もう大丈夫だ」
『うん……』
クレイモアの光が弱くなる。そして、コウサカはナユキを見る。
「君に助けられたな」
「あ、いえ、わたしは……女神様のおかげです」
「ここには女神はいない。君がいければ、女神は間接的な接触も出来なかった。そういうものも含め、君のおかげだ」
「……はいっ」
そして、とコウサカは思う。
（原因は分からなかったが、おかげで敵の手の内が見えた）
片手で軽々とクレイモアをくるりと回すと、コウサカは背中の厚手の皮で出来た鞘に戻す。そして、司令部へ向かった。

――助けてください……。

――破壊の怪物……グラスギブネンが……もうすぐ復活す

るでしょう……。

――復活に必要なアダマンタイトを集めた始めたのは、ずっと昔のこと……。

――……必要な材料もほぼ集められました。もう猶予(ゆうよ)がありません。

――破壊の巨人に生命が吹き込まれるときが、エリンの最後の日になります……。

――早くグラスギブネンを斃(たお)さないと……。私を助けてください……ここから……。

場所はイビーという少女がいた見晴らしの良い丘の隅(すみ)、時刻は十九時前後と言った所。

最近は、ずっと同じ内容だった。

（女神様……）

膝を抱えて三角座りをしているナユキは、首のペンダントを片手で握り締める。女神とは、もうすでにあちらから何かを一方的に伝えて来るだけで、こちらからの声は聞こえなくなってしまっていた。

ナユキはペンダントを両手で握る。そして、違うことを考えた。

（コウサカさん……大丈夫かな……）

あんなに苦しそうにしていた姿を見たのは、初めてだった。

いつも何事にも動じなく、苦も無く物事を解決し、そして優しい。

女神はナユキに言った。コウサカと言う青年を信じていれば大丈夫だと。

（でも……）

コウサカは、ティルコネイルで幸せそうだったとナユキは思う。

ナユキが目を覚めた後もお世話をしてくれたエンデリオン司祭は、

コウサカのことを話す時は楽しげで、温かそうだった。
生活環境などを整えてくれたダンカン村長は、コウサカを誇らしげに、信頼し切っていた。
他の村人達もそう。
老若男女、全員がコウサカを慕って信頼して……一緒にいて楽しげで……幸せそうで……。
一時期でも、その中にいたからこそナユキは思ってしまう。
「わたしは……」
ああ、奪ってしまったのかもしれない。
「……わたし、は」
抱えた膝の上に、ナユキは額を乗せる。
と、そんなことを考えて目に涙が溜まって来た頃、下の方から何か音がしていた。
「？」
ガシャガチャ。
「ひゃっ！」
いきなり、ぬっと手が出てきた。十メートルはある崖下から。
そして。
「何をしている」
コウサカがひょっこりと顔を覗かした。下からよじ登ってきたのだ。その背中には、朔絆が宿るクレイモアはなかった。
「……」
何をしている、はナユキのセリフである。
「あの……」
「何だ」
登り切り眼下を眺めるコウサカに、とっくに涙が引っ込んだナユキが聞く。
「……何で、わざわざ登ってくるんですか？」
「向こうの道は長い」
言われてナユキは、丘から下へ降りる唯一の月明かりに照らされ

た道を見る。
その道はゆったりとした傾斜で作られているため二、三百メートルはある。
対して崖下から登ってくれば、十メートル程度。
「……」
確かに近い。近いが、普通やらない。というか、馬鹿である。
「ここは危ない。戻るとしよう」
ポカーンとしていたナユキは、その言葉で我に帰る。
「……ごめん……なさい……」
そして、また涙が溢れてくる。
「何を謝る」
コウサカは月を見上げる。
「……わたしがいなければ……コウサカさんはあの村で幸せ、でした……」
「幸せだと？」
コウサカはナユキに目を向ける。
「……わたしが女神様のことを言い出さなければ……コウサカさんはずっとあの村で……」
そのナユキの言葉を、遮るようにコウサカが言う。
「有り得ないな」
「え？」
涙を浮かべたまま、ナユキはコウサカを見上げる。
「俺には力がある」
片腕を上げると、コウサカは拳を強く握った。
「それに女神も俺に、君ほど感受性は高くないが接触は出来た。だから、遅かれ早かれ俺はここへ来ていた」
コウサカは、来ていたはずだ、ではなく来ていたと言った。
「だが、君がいなければ。俺は、ここまで来ることにより時間を掛けてしまっていたはずだ」
だから、とコウサカは続ける。

「ありがとう、ナユキ。君のおかげで俺は、犠牲がほとんどないうちにここに来ることが出来た」
コウサカは珍しく、少し微笑みながら言っていた。
そんな思ってみなかった真摯な言葉にナユキは。
「・・・あ・・・わた、わたしは・・・・・わたしは、ぁ・・・・・・・うくっ・・・・・・・・・・・」
引っ込みかけた涙が前以上に溢れ出し、後はもう言葉にならなかった。

『おっそぉおおおおーい！』
コウサカが受け取りにやって来ると、朔絆がその姿を見た途端叫んだ。
「すまない」
コウサカはとりあえず謝りながら、武具類を預けた鍛冶士に歩み寄る。
「やかましくてかなわん。とっとと持っていけ」
そう言う男の名前は、アイデルン。
首を超えるほどまで伸びた白い髪、同じ色の口元に蓄えられた髭、力強い光を湛える赤い瞳をした、ウルラ大陸随一の名工である。
かなりの高齢のはずが、筋骨隆々した百八十センチを超えるほどの長身に、上半身は裸、下半身は鍛冶用のズボンをいう格好だった。
「だが、まあ・・・・貴様は、随分な人格者らしいな」
アイデルンは、コウサカにベッタリとくっ付く朔絆を見る。
そして、ふっと笑う。
「貴様が見えなくなってからと言うもの、不安そうな子供のように落ち着きなく絶えず周りを気にしていたぞ？」
『なっ・・・・・、おいこらジジイ！』
朔絆が真っ赤になって、アイデルンに食って掛かる。
「失礼だ」

コウサカは朔絆の頭を押さえ付けて、口を塞ぐ。
『むー、むー！　むがー！！』
余計うるさかった。
「申し訳ない」
朔絆を押さえながら、コウサカは頭を下げる。
「ふはははっ、構わん。俺も、久々に精霊武器などと珍しい物を見れたからな」
アイデルンは豪快にひとつ笑うと、コウサカの預けた武具類の中からクレイモアを手に取る。
そうなのである。コウサカはレオナルド団長に助言され、大陸一と名高い名工に剣を鍛え直してもらっていたのである。
コウサカがナユキの所に行った時に朔絆がいなかったのは、そういう理由である。散々ごねられたが。
「まだ、こんなものを使える者がいるとはな」
アイデルンはクレイモアの刀身を見つめる。
『ぷはっ！　こんなものって、なんだこのジジイっ！』
「……朔絆、黙っていろ」
とうとうコウサカが頭痛でもするように、こめかみに手をやる始末。
「ははははっ。すまん」
しかし、アイデルンは気を悪くした様子もなく。
「もう長いこと、精霊と心を通わせられる者など皆無だったのでな」
そのアイデルンの言葉については、何となくコウサカと朔絆を見ていれば分かるだろう。精霊武器とはそれほどの信頼関係、もしくはそれ以上であらねば使えない。
例えば、落ち込んだり、ストレスが溜まっていると仕事の効率が下がったり、やる気が無くなったりすると思う。
精霊もそれと同じなのである。精神状態だけで力が百になる時もあれば、〇になってしまう時もある。
「いや、通わせるではなく、真っ直ぐな馬鹿と言った方がいいか」

アイデルンは笑みを一つ浮かべながら言う。
朔絆が純情なのも、実はパートナーであるコウサカの影響である。
精霊石から目を覚ました精霊は言うなら‘‘白紙の紙’’。
知識などは自然と吸収していくが、心がどう染まるかはパートナー次第というのが精霊武器というものである。無論、精霊には個々とした意思があるから悪事などを行なおうとすれば、全く反応しなくなるが。
「俺は、二つのものを同時に見れるほど、器用ではないですから」
コウサカはアイデルンの言葉に怒るわけでも、否定もしなかった。
「ふっ、そうか。武器の修理は終わっている。持っていけ」
コウサカは朔絆を押さえながら、装備を受け取る。
受け取り終わり、コウサカはアイデルンに頭を下げる。
それを見てアイデルンは真顔になると、言った。
「この世界を、頼むぞ」

場所は移り、ナユキが座っていた見晴らしの良い丘の上。そこは月明かりに照らされているだけで、下は松明が焚かれ明るかった。
『……ギュッてして』
「ああ」
胄と上半身の鎧は外してあるコウサカは片膝を着くと、手を広げている朔絆の小さい身体を抱き締めた。
それだけ、朔絆の目にはじわりと涙が滲んだ。
「もういいか？」
『……いいって言うまで』
「ああ」
何故こんなことになっているかというと。
装備を受け取った後、コウサカが唐突に言ったのである。
「何か、俺にしてほしいことはあるか？」
だから、朔絆は言ったのである。場所を変えるから付いて来いと。

そして、今コウサカが朔絆を抱き締めているということになっている。

『ねえ……』

だがそれは、どう考えても普段のコウサカの行動ではなく。

『やっぱり……あんたって、死んじゃうの……？』

未練を残さないように、自分が出来ることはやっておきたいと。

そんな死へ向かう者のようで。

「ああ」

膝を着いて背を合わせているため顔の位置が同じ高さで、コウサカの声は朔絆の顔のすぐ隣から聞こえてくる。

『…死なないって、約束したじゃんか……』

「……」

朔絆は、抱き締める力を少し強める。

『……あたしは……あんただけいれば、それでいいのに……』

小さく、朔絆は呟く。

『……でも……そう、なんだよね……』

朔絆も、コウサカのパートナーである。それだけにその想いは、強く繋がっている。

『…あんたは、この世界を護るためにあたしと契約したんだよね……』

朔絆の目には、大粒の涙が溜まっていた。

『…うん……あたしは、武器……だから……あんたが、思いっきり…使ってくれれば……』

「それは違う」

コウサカが遮った。

『え……？』

「俺は、お前にも幸せであってほしい」

ビクリとして、朔絆の目から涙が溢れ、滴り落ちる。

「本当なら、俺はお前を最後まで使う気はなかった。確かに、最初

は単なる強力な武器と思って契約をした。だが、現れたのは」
コウサカは身体を離し、間近から、鼻が触れ合うほどの距離から朔絆の深緋色(こきひいろ)の瞳を覗(のぞ)く。
「お前のような少女だった」
そっと朔絆の頬(ほお)に手をやり、流れ続ける涙を拭(ぬぐ)ってやりながらコウサカは言う。
「俺には、お前を俺と言う枷(かせ)から解き放つ手がある。恐らくそれなら、お前は武器ではなく、精霊の少女としての存在となることができる。寄り代(しろ)など必要なく、俺やナユキのように自分で歩いて、どこへでも行けるように」
絶え間なく涙を溢れさせ続ける朔絆は、静かにコウサカの言葉を聞いていた。
それにな、とコウサカは続けた。
「少しだけ思い出した。俺は、前にも同じようなことをしていた。どれが始まりかは分からないが、俺とはそういう存在だったらしい」
だから、と続ける。
「それだけだ」
コウサカは、優しく朔絆の頬を撫でた。
『……う、あ……あたしは……あ゛たし、は……』
そんなコウサカの告白(こくはく)を聞き、朔絆は。
『う……うう……ぅううううう～～～っ！』
ただ、泣いた。
泣いて泣いて、泣き疲れた頃。
「どれだけ泣くつもりだ」
『うさい……バカぁ……』
胡坐(あぐら)をかいたコウサカの上に、目元を拭いながら朔絆は座っていた。
『ねえ……』

コウサカに背を預けながら朔絆は聞く。
『あたしの幸せ、って言ったよね……』
「ああ」
朔絆は素直で、真っ直ぐな気持ちで言う。
『……あたしは……あんたがいれば、それだけで幸せだよ……』
それは消え入りそうなほどの小さい声。
『ねえ、ホントに無理なの……？』
朔絆は身体を反転させると、コウサカの胸に手を置きながらすぐ間近からその顔を見上げる。
すると、コウサカがとんでもないことをほざいた。
「分からん。まあ、前にした約束通り出来るだけ死なないことにする」
『えっ』
朔絆は目を見張る。
「何が出てくるかは、グラスギブネンすらその力量はあやふやだ。どれだけ長く、どれほど広大で。だから可能性としては、死ぬ方が高いというだけで」
『ざっけんなぁあああああああああああああああっー！！』
「がふっ」
久々に見事なアッパーカットがコウサカの顎に、クリーンヒットした。
『だったら！　な・ん・で！　絶対死ぬような風に言いやがったぁあああああああああ！』
ギリギリギリッ。
そのままコウサカの首を絞めにかかる。
「待て待て」
絞められている割には、平然としながらコウサカは言う。
「確かに死なないかもしれないが、だが死ぬかもしれない。それなら、最悪の事態を想定するだろう」

最悪の事態を想定をするのはいいが、本当にそれが起こると思わせるほどの振る舞いをしていたことが問題であって。
『だったら、絶対に死ぬなっ！！』
「いや、それが無理か出来るか分からないからであって」
『やっかましいいいいいいいいいーっ！！』
ギリギリギリギリギリギリギリギリギリッ……。
朔絆はもう最後だからと想いを告白してしまったことで、真っ赤になり、恥ずかし過ぎて訳が分からなくなり錯乱（さくらん）していることなど、コウサカが気付くわけがなく。
「おい、そろそろ苦しいんだが」
『や・か・ま・し・いいいいいいいいいーっ！！』
ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ……。
「……明日は、少し無理をさせるかもしれないが。頼むぞ」
首を絞められながら、コウサカは目を伏せると真摯（しんし）に朔絆に言った。
「相棒（あいぼう）」
コウサカは頭ではなく、朔絆の頬を優しく撫でた。
朔絆はより真っ赤になると、頭が混乱し過ぎてショートしてきた。
『はぅわぅあぁ～……』
そして、また目を回して倒れてしまった。
「お、おい！」
当然、この馬鹿が何でか気付くわけがなく。
『あぅあ～……』
ただ、朔絆は心の中でひとつだけ安心していた。
コウサカは、別に死ぬ気はないのだ。本人としては死ぬ方の確率が強いと考えているだけで。
だから、朔絆はとても安心して。
そのまま、コウサカの腕の中で眠りに落ちた。

もう日は昇り、正午だった。

「我々は、これより魔族の本拠地アルベイへと向かう！」

一段高く木の箱で作られた壇上から、レオナルド団長は腹の底から出した大音声を響かせる。

その眼前には人、人、人。

オグマ騎士団とバンホール守備隊を合わせた、二千余名。

増援としてきたオグマ騎士団本隊の半数以上、五千余名。

合わせて約八千人の大部隊。

そして、それを家々の中、または外に出て見つめるバンホールの人々。

「本来なら、増援組は一日休ませてやりたかったが時間がない！」

それはナユキが言ったことである。女神の力も弱まり、伝えてくる内容も逼迫していることから、もう時間がないことを。

「知っての通り、また魔族共が大陸中で動き出している！　これが何を意味するのか、分かるだろう！」

レオナルド団長の声を聞く騎士達は、一言一句聞き逃さないように真剣に耳を傾ける。

「だが、我々は幸運である！」

レオナルド団長は、壇上の隣に立つ二人を手で示す。

「伝承のミレンシアがここにいる！」

何千人という視線が、二人に注がれる。

「そこの男の名は、コウサカ！　オーガですら束になっても勝てないほどの存在である！」

それに、ほとんどの者が目を見張る。レオナルド団長は誇張して何かを言う事はない。なら、その口にすることが本当であることを騎士団の者は知っているからである。

「そこの少女の名はナユキ！　女神の声を聞き、我々を導いてくれる存在である！」

コウサカはともかく、ナユキは恥ずかしそうにモジモジと下を向

いていた。
それに、ほとんどの者が失笑する。
だが。
「「「っ……」」」
コウサカはナユキを背に隠すように前に出る。そして、その眼に気迫を込めて失笑した者達を睨みつけた。
それを見た者全て、背筋が寒くなる。実際見たわけではないが、すぐ隣にいたレオナルド団長ですら軽く寒気を覚えたほどである。
それだけの気配。存在感。畏怖を抱かずにはいられないほどの。
「先陣はこの二人が行き、道案内をしてくれる！」
レオナルド団長の声にコウサカに呑まれていた者達は、はっとする。
「我々の世界は、残念ながら我々の力だけでは護り切れないっ……！」
それを言うレオナルド団長が悔しげに見えたのは、見間違いではないだろう。
「だがっ！　第一次モイトゥラ戦争では、女神様その御方が！　第二次モイトゥラ戦争では女神の祝福を受けた光の騎士ルーと大魔導師マウラスが現れ、この世界を護る力を貸してくれた！」
そして、とレオナルド団長は二人をまた示す。
「今度はミレンシアという存在が現れてくれた！　さらに囚われの身である女神様は、それでも尚ナユキ君を通して世界を救おうとしてくれている！」
すぅ、とレオナルド団長は深く息をする。
「これが幸運と言わずして何と言うのものかっ！　我々はこの世界を救うための、より直接的に救うための礎と成れる機会に巡り会っている！」
レオナルド団長を見つめる騎士達の顔が、より強い力を帯びていく。
「この世界を救う者達よ！　剣を掲げろっ！」

幾千と抜刀する音が響き渡る。
そして、幾千の剣が掲げられる。
「これより世界を救うための決戦を挑むっ！」
レオナルド団長自身も剣を掲げる。
「我等が屍が上に、我等が子、孫達が恒久な平和な世で生きられるためにっ！」
一番強く、大きくレオナルド団長は叫ぶ。
「我々は世界を護る剣となるっ！！」

――――おぉおおお

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5784s/

―また別のマビノギ―

2011年10月3日03時26分発行